魔法少女まどか☆マギカ
シナリオ 決定稿

第一話「夢の中で逢った、ような……」

【Aパート】

□夢の中

燃えさかる市街地。

巨大な怪物『ワルプルギスの夜』が、暴虐の限りを尽くしている。

そんな怪物と、単身、必死に戦っている少女の姿。変身したほむらである。

満身創痍で、今にも倒れそうなほむら。

その様子を、炎の中から見守っているまどか。傍らにはキュゥべえの姿がある。

まどか「ひどい……」

キュゥべえ「仕方ないよ。彼女一人では荷が重すぎた。でも、彼女も覚悟の上だろう」

痛めつけられるほむらの姿。見るに堪えないまどか。

まどか「そんな……あんまりだよ！　こんなのってないよ！」

ほむら、戦いながらもまどかに向かって何かを叫ぶ。だがその声は聞こえない。

キュゥべえ「諦めたら、それまでだ。でも君なら運命を変えられる」

まどかの脳裏をよぎる、見るも無惨な遺体のイメージ。

巴マミと佐倉杏子のものである。

キュゥべえ「避けようのない滅びも、嘆きも、すべて君が覆せばいい。そのための力が、君には備わってるんだから」

あまりの惨劇の光景に、頭の中が真っ白に。かすれた声でキュゥべえに問う。

まどか「……本当なの？」

既に血まみれで虫の息のほむら。それでも彼女は最後の力で、まどかに向かって叫ぶ……が、声は聞こえない。

まどか「私なんかでも、本当に何かできるの？　こんな結末を変えられるの？」

キュゥべえ「もちろんさ」

胡散臭いほどに愛らしいキュゥべえの笑顔。

キュゥべえ「だから僕と契約して、魔法少女になってよ！」

□まどかの部屋

目覚まし時計の騒音。はっとして目覚めるまどか。ベッドの中にいる。

カーテンの隙間から朝の光。見慣れた自分の部屋の中を、ぼんやりと見渡すまどか。

まどか「……はうぅ……夢オチ……？」

□鹿目家の庭

自室の窓のカーテンを開けるまどか。二階の東側である。窓から見下ろす庭では、父の知久がガーデニングに励んでいる。
朝食のためのプチトマトを摘んで、満足げな知久。
まどか「おはよ〜、パパ」
知久「おはよう。まどか」
まどか「ママは〜?」
知久「タツヤが行ってる。手伝ってやって」
まどか「はーい」

□両親の寝室
ベッドの中で布団にくるまり亀になっている母、詢子。そこに三歳児の長男、タツヤがぽかぽかと殴る蹴るの応酬を浴びせている。
タツヤ「ま〜まッ！　あ〜さッ！　あ〜さッ！」
タツヤの懸命な攻撃にも、詢子、まったく動じず惰眠。
そこに颯爽とドアを開けて登場するまどか。
一気にカーテンを開き、詢子の布団をひっぺがす。
まどか「起きろーッ！」
詢子「ひゃあああああッ!?」
光の眩しさに七転八倒する詢子。

□洗面所
鏡の前で並んで歯を磨いているまどかと詢子。詢子はまだ寝起きの冴えない顔。
詢子「最近、どんなよ?」
まどか「仁美ちゃんがまたラブレターもらったよ。下駄箱に今月二通目」
詢子「ふん、手渡しする根性ねぇようじゃ駄目だな」
詢子はあっさり歯磨きを終えて洗顔開始。まどかはまだもたついている。
詢子「和子はどう?」
まどか「センセーはまだ続いてるみたい。ホームルームで惚気まくりだよー。今週で三ヶ月目だから、記録更新だよね」
まどかがノンビリ顔を洗い、手探りでタオルを探している間に、詢子は神業的なスピードでメイクを進めていく。
詢子「さあどうだか。今が一番危なっかしい頃合いだよ」
まどか「そうなの?」
髪をまとめるのに手間取るまどか。なかなか寝癖をごまかしきれない。
詢子「本物じゃなかったら、大体この辺でボロが出るもんさ。まぁ乗り切ったら一年はもつだろうけど」
まどか「ふーん」
詢子はメイクの仕上げ。つい数分前までの寝惚け顔とは一転した、凛然たるキャリアウーマンに大変身。一方で

まどかは、髪をまとめるリボンを決めかねて迷っている。
地味な色と、派手な色。
まどか「……リボン、どっちかなぁ？」
詢子「こっち」
即答で派手な方を選ぶ詢子。
まどか「えー？　……派手すぎない？」
詢子「それぐらいでいいのさ。女は外見で舐められたら終わりだよ？」
おっかなびっくり、慣れないリボンをつけてみるまどか。
やや緊張気味。
詢子「……うん、いいじゃん。これならまどかの隠れファンもメロメロだ」
まどか「いないよぉ、そんなの」
詢子「いる、と思っておくんだよ。それが美人の秘訣」

□ダイニングキッチン
食卓で朝食を囲んでいる鹿目家一同。詢子はリクルートスーツ。まどかは制服。知久はエプロン姿で甲斐甲斐しく配膳している。
乳児用の椅子で、まだ慣れぬフォークとスプーンで悪戦苦闘しているタツヤ。その隣で詢子は、右手一本でトーストを噛りつつコーヒーを飲みつつ、さらにタツヤの食事の補助までするというマルチタスクをこなしながら、左手で持った新聞の紙面にずっと目を走らせている。
知久「コーヒー、おかわりは？」
詢子「ん、いいや」
詢子、時計を確認し、飲み残しのコーヒーを一気に呷る。
詢子「おっし、じゃあ行ってくる！」
知久、まどか「いってらっしゃい」
タツヤ「いーてらさーい！」
詢子は知久とタツヤの額にキスし、まどかとハイタッチを交わしてから颯爽と出て行く。
知久「さ、まどかも急がないと」
まどか「う、うん」
まだ食べかけの朝食を慌ててペースアップするまどか。
知久はタツヤに幼稚園の制服を着せ始める。

□鹿目家玄関
まどか、トーストの最後の一口を頬張りながら、玄関から爽やかな陽射しの中へと飛び出していく。
まどか「いってきまーす！」

□通学路
通学途中の生徒の群れ。
その中に、並んで談笑している美樹さやかと志筑仁美。
後から小走りにやってきたまどかが、二人の間に合流す

る。
まどか「おっはよー」
仁美「おはようございます」
さやか「まどか、遅ーい」
やや息を切らせているまどか。その髪の真新しいリボンに気付くさやか。
さやか「おっ、可愛いリボン」
まどか「そ、そうかな……派手すぎない？」
仁美「とても素敵ですわ」
× × ×
雑談しながら、通学路を行く三人。
まどか「――でね、ラブレターは下駄箱じゃなくて手渡しでなきゃ駄目だって」
さやか「相変わらずまどかのママはかっこいいなぁ。美人だし、バリキャリだし」
仁美「そんな風にきっぱり割り切れたらいいんだけど……はぁ、返事、どうしようかしら……」
さやか「羨ましい悩みだねぇ」
まどか「いいなぁ。私も一通ぐらいもらってみたいなぁ。ラブレター」
うっとりと呟くまどかに、さやかが悪戯っぽい視線を向ける。
さやか「ほぉー、まどかも仁美みたいなモテモテな美少女に変身したいと？　そこでまずはリボンからイメチェンですかな？」
まどか「ち、違うよぉ、これはママが……」
さやか「さてはママからモテる秘訣を教わったな!?　けしからん！　そんな破廉恥な子はこうだ！」
さやか、まどかに抱きついてくすぐりにかかる。必死に抵抗するまどか。
まどか「や、やッ、ちょっと！　やめてぇ」
さやか「わはははっ。可愛いやつめ。でも男子にモテようなんて許さんぞー。まどかはあたしの嫁になるのだ！」
まどか「いやーッ」
仁美「……こほん」
慎ましやかに咳払いする仁美。はっとして我に返るさやかとまどか。周囲を歩く学生たちからの奇異の視線に気付く。
赤面してたじたじになる二人。

□教室
チャイムが鳴る。朝のホームルーム。
教壇に立って荒々しく出席簿を叩きつける担任教師、早乙女和子。
和子「……今日は皆さんに大事なお話があります。心して聞くように」

ただならぬ和子の剣幕に、やや息を呑むクラスの生徒たち。
和子「目玉焼きとはッ、固焼きですかッ？　それとも半熟ですか⁉　はい中沢くん⁉」
いきなり指名され、ややビビりつつも強張った愛想笑いをつくろう男子生徒、中沢くん。
中沢「えと……どっちでもいいんじゃないか、と……」
和子「その通り！　どっちでも宜しい！　たかが卵の焼き加減なんかで女の魅力が決まると思ったら大間違いです！」
ますます気炎を上げる和子、ちなみに婚期テンパイのお年頃。
和子「女子の皆さんはくれぐれも！　半熟じゃなきゃ食べられないとか抜かす男とは交際しないように！　そして男子の皆さんは絶対に、卵の焼き加減にケチをつけるような大人にならないこと！」
誰からともなくクラス中に湧き起こる溜息の数々。
さやかM『――駄目だったか――』
まどかM『――駄目だったんだねぇ――』
言いたいことを言った和子はクールダウンして次の話題に。
和子「はい、あとそれから。今日は皆さんに転校生を紹介しまーす」
あまりの唐突さに脱力する生徒たち。
さやかM『――そっちが後回しかよッ⁉――』
和子「じゃあ、暁美さーん、いらっしゃーい」
和子の呼びかけで、教室に入り教卓の脇に立つほむら。
まさかのクールな美貌に驚いて、クラスにどよめきが沸き起こる。
まどかM『……えっ⁉』
そんな中、ただ一人、別の驚きに見舞われるまどか。転校生は夢の中で見た美少女と瓜二つの容貌だった。
さやか「うわッ……すげー美人！」
和子「はーい、それじゃ自己紹介いってみよー」
騒然たるクラスの皆をものともせずに、冷たい声で自己紹介するほむら。
ほむら「暁美ほむらです。よろしくお願いします」
和子は黒板に『暁美ほ』まで書いたところで、ほむらがそれ以上何も言わないことに気付き、笑顔で小首を傾げながら（続きは？）と目線で促す。だがそんな無言の催促をほむらは意に介さず、黒板に向き直って和子の代わりに「む」と「ら」を書き足し、それからクラスの全員に深々とお辞儀をする。
えもいわれぬ凄味に気圧されて、おずおずと拍手を返す生徒たち。
ぽかーんと取り残されている和子。

まどかM『……ウソ……まさか……』
まどかは周囲にあわせて拍手することも忘れて、ほむらの姿に見入る。
脳裏を過ぎる昨夜の夢の光景のフラッシュバック。
ほむら、黙礼を終えて顔を上げる。その途端、ほむらの視線は迷うことなくまどかを直撃。
その視線のあまりの鋭さに、ぎょっとして顔を伏せるまどか。
まどかM『えっ？　ええッ⁉』
偶然目があっただけかと考え直し、恐る恐る様子を窺うまどか。やはりほむらはまどかのことをじっと凝視している。

□教室（一時間目前の休み時間）
さっそくクラスの女子たちがほむらの席の周囲に集まり、親睦のために次から次へと話しかけている。
女子A「暁美さんって、前はどこの学校だったの？」
女子B「前は部活とかやってた？　運動系？　文化系？」
女子C「すごい綺麗な髪だよね～。リンスは何使ってるの？」
周囲ではしゃぐ女子たちに、ほむらは悪印象を与えない程度に最低限の簡素さで、適当に受け答えを返していく。
他人の詮索をかわすことに慣れきった、落ち着き払った大人の貫禄。

そんなほむらの様子を、まどかは自分の席から遠巻きに、やや不安げに眺めている。まどかの側には仁美とさやか。
仁美「不思議な雰囲気の人ですよね。暁美さん……」
さやか「ねぇまどか、あの子、知り合い？　なんかさっき思い切りガン飛ばされてなかった？」
まどか「いや……えぇと……」
返答に窮するまどか。
一方でほむらは、急に周囲の女子たちの言葉を手で遮る。
ほむら「ごめんなさい、なんだか緊張しすぎたみたいで、ちょっと気分が……保健室に行かせてもらえるかしら？」
女子A「えッ？　あ、じゃあアタシが案内してあげる！」
女子B「私も行く、行くッ」
ほむら「いえ、お構いなく。係の人にお願いしますから」
穏やかながらも、有無を言わせぬ迫力で席を立つほむら。
思わず道を開けてしまう女子たち。
ほむらはそのまま、ずかずかとまどかの席までやって来る。
面食らって身を強張らせる仁美とさやか。完全にビビってしまうまどか。
ほむら「鹿目まどかさん、あなたがこのクラスの保健委員よね？」
まどか「え？　え、と、あの……」
笑顔一つ見せないほむらの冷たい凄味に、しどろもどろ

になるまどか。
ほむら「連れて行ってもらえる？　保健室」

□廊下

先に立って足早に歩くほむら。後からおっかなびっくりついてくるまどか。
見慣れぬ転校生の美貌に、通りすがる生徒たちはみな一様に足を止めて目を見張る。囁き声で噂をする者たちも。
まどかはほむらに気圧されつつ、また周囲からの奇異の眼差しにも晒されて、内心では半泣きである。
まどか「あ、あの、その……わたしが保健の係って、どうして……」
ほむら「……」
冷たい間。うわ無視されたか、と思った途端に――
ほむら「早乙女先生から聞いたの」
虚を衝くタイミングの返答で、ますます萎縮するまどか。
まどか「あ、そうなんだ……そうだよね。あは……」
愛想笑いすら不発に終わるまどか。構わず、ずんずん先に進むほむら。
まどか「……えっと、さ。保健室は……」
ほむら「こっちよね」
まどか「や、うん、そ、そうなんだけど……いやだから、その、もしかして……場所、知ってるのかな、って」
ほむら「……」
まどか「……」
無視されてしょげるまどかだが、それでもなお沈黙は耐えがたい。何でもいいから話しかけたくなる。
まどか「あ――暁美、さん？」
ほむら「……ほむらでいいわ」
いいと言われてもその呼び方には勇気がいる。まどか、思わず生唾を呑み込んでから、
まどか「……ほむら……ちゃん？」
微妙な間。
ほむら「……なにかしら」
まどか「あ、う、えっと、その――」
どう話題を繋げればいいかパニックに陥るまどか。もはややけっぱちになり、
まどか「あの、か――変わった名前だよねっ」
ほむら「……」
ほむらの沈黙に、失言だったかとますます慌てるまどか。
まどか「い、いや、だから、あのねっ、変な意味じゃなくてねッ、その――か、かっこいいな、なんて思ったりしたり――」
ほむら、足を止める。ほんの僅かに唇を噛む。
振り向いて真正面からまどかを見据えるほむら。
たまたま場所は別棟に繋がる渡り廊下の途中である。周

囲に他の生徒の姿はない。完全にまどかとほむらの二人きり。
今度こそただならぬ気配のほむらに、まどかは蛇に睨まれたカエルのように硬直する。
ほむら「鹿目まどか。あなたは――」
まどか「……」
ほむら「――自分の人生が、貴いと思う？　家族や友達を、大切にしてる？」
まどか「……え……？」
あまりに唐突すぎる質問に、面食らうまどか。だがほむらの剣幕は真剣そのもので、何となく、この質問には真摯に答えなければならないのだと察する。
まどか「わ、私は――大切、だよ。家族も、友達のみんなも、大好きで、とっても大事な人たちだよ」
ほむら「本当に？」
まどか「本当だよっ、ウソなわけないよ！」
まどかの返事に、無表情のまま、頷くほむら。
ほむら「そう。……もしそれが本当なら、今とは違う自分になろうだなんて、絶対に思わないことね。さもなければ全てを失うことになる」
まどか「……え？」
まったく話についていけないまどか。だがほむらは構わず踵を返し、一人で先に進んでいく。去り際に、さらに一言。
ほむら「あなたは、鹿目まどかのままでいればいい。今まで通りに、これからも」
まどか「……」
ほむらの言葉の意味を測りかねて、立ち尽くすまどか。そのまま取り残される。

【Bパート】

□数学の授業
黒板に書かれた問題に対し、機械じみた正確さで、きびきびと解答を埋めていくほむら。
あまりのスピードに呆気に取られる数学教諭と生徒たち。

□体育の授業
走り高跳び。完璧すぎるフォームで易々と170をクリア。
クラスメイトたちの大喝采。
体育教諭「……け、県内記録じゃないの？　これ……」
俄ファンになった女子たちが、マットから立ち上がるほむらの周りに集まって黄色い声を上げている。
その様子を、やや距離を開けて、おっかなびっくり見守っているまどか。

ほむらもそれに気付いて、取り巻きの子たちには目もくれず、まどかに鋭い視線を投げ返す。
慌てて目を逸らし、縮こまるまどか。

□校庭の片隅の植木
まどかたちの体育の授業を、梢の中から密かに監視している謎の小動物の影。（キュゥべえ）

□大型ショッピングモール（ららぽーと風）
……の、全景。
一部の棟が改装中で、イントレとパネルに覆われ、閉鎖されている。

□モール内のファーストフード店
放課後、帰宅途中に寄り道しているまどか、さやか、仁美。バリューセットでおやつの時間。
まどかは二人に、ほむらとの会話について話し終えたところ。
さやか「えーっ⁉　何それ？」
まどか「わけ分かんない、よね……」
しょげるまどか。腕組みして考え込むさやか。
さやか「文武両道にて才色兼備、かと思いきや実はサイコな電波さん――かーッ、どこまでキャラ立てすりゃあ気が済むんだあの転校生は⁉　萌えかッ？　そこが萌えなのかッ⁉」
仁美「まどかさん、本当に暁美さんとは初対面ですの？」
まどか「う～ん、常識的にはそうなんだけど……」
さやか「なにそれ？　非常識なトコで心当たりがあると？」
まどか「あの、ね……」
まどかの脳裏を去来する朝の夢のイメージ、カットバック。
まどか「ゆうべ、あの子と夢の中で逢った、ような……」
さやか&仁美「……」
しばし呆気に取られた後、大爆笑する二人。
さやか「ぎゃはははっ！　すげーッ、まどかまでキャラが立ちはじめたよッ」
言わなきゃ良かった、と後悔で赤面するまどか。
まどか「ひどいよぉ……私、真面目に悩んでるのに……」
さやか「あー、もぉ決まりだ！　それ前世の因果だわ。あんたたち時空を越えて巡り会った運命の二人なんだわ！」
仁美「夢って、どんな夢でしたの？」
まどか「それが……なんだか良く思い出せないんだけど……とにかく変な夢だったってだけで……」
仁美「もしかしたら、本当は暁美さんと会ったことがあるのに、それをまどかさんが忘れてしまっただけかもしれませんわ」

まどか「えっ？」
仁美「まどかさん自身は憶えていないつもりでも、深層心理には彼女の印象が残っていて、それが夢に出てきたのかもしれません。たまたま彼女と再会する前日に」
さやか「たまたま、って……それ出来過ぎてない？　どんな偶然よ」
仁美「前世の因果よりは筋の通った説明ですわ」
さやか「まーねー」
話をまとめられてしまったものの、依然、まどかだけは釈然としない。
ふと腕時計を見て、眉を顰める仁美。
仁美「あら、もうこんな時間？　ごめんなさい、お先に失礼しますわ」
さやか「今日はピアノ？　日本舞踊？」
仁美「お茶のお稽古ですの。もうすぐ受験だっていうのに、いつまで続けさせられるのか……」
さやか「うはぁ……小市民に生まれて良かったわぁ」
まどか「私たちも、行こうか」
さやか「まどか、帰りにCD屋寄ってもいい？」
まどか「いいよ。また上条くんの？」
少々照れるさやか。
さやか「へへ、まあね」
ファーストフード店を出る3人。仁美だけが手を振って別方向に別れる。まどかとさやかは引き続きモールの奥に。

□モールの地下通路
必死に逃げる小動物の影。（キュゥべえ）
その足下を掠めて、次々と銃弾が床を抉る。
じわじわと距離を詰めてくる追跡者――魔法少女のシルエット。（ほむら）

□CDショップ
真剣な面持ちで、ヴァイオリン演奏のCDを物色しているさやか。
まどかは別の棚で、ポップスの新譜を試聴している。
そんなまどかの耳に届く、キュゥべえからのテレパシー。
キュゥべえ『助けて……』
まどか、驚いて視聴用のヘッドホンを外す。今度はさらにはっきりと、思念の声が頭に響く。
キュゥべえ『助けて……まどか……』
まどか「え？　えッ？」
慌てて周囲を見渡すまどかだが、不思議な声はまどか以外の誰にも聞こえていないらしい。
まどか「……誰？　誰なの？」
声の主を捜して店舗を出て行くまどか。

その様子を見咎めたさやかが、怪訝な顔をする。

□非常階段

キュゥべえ『僕を……助けて……』

呼びかける声に導かれて、まどかは非常口から階段を上っていく。

とある防火扉を開けて覗き込むと、そこは改装中の無人の空間。

まるで廃墟のように不気味に静まりかえっている。

まどか「……どこに、いるの？　あなた誰？」

キュゥべえ『助けて……』

迷路のような通路を、ふらふらと進んでいくまどか。

ふと、何かが動く気配を察して立ち止まる。

身を竦ませているまどかの眼前に、ふらふらと現れて、倒れ込むキュゥべえ。

明らかに大怪我を負っている。

まどか「……ッ!?」

思わず駆け寄って抱き上げるまどか。

薄目を開けるキュゥべえ。まどかと目が合う。運命的なものを感じるまどか。

まどか「……あなた、なの？」

キュゥべえ「……助け、て……」

不意の靴音。はっとして目を上げるまどか。

眼前に、不吉な威圧感をまとって立ちはだかる人影。魔法少女スタイルのほむらである。

相手が誰だか理解して、ますます驚きに目を見張るまどか。

まどか「ほむら……ちゃん!?」

ほむら「そいつから離れて」

まどか「だ、だって、この子、怪我してる……」

怯えたようにまどかの腕にしがみつくキュゥべえ。

その仕草と、ほむらの冷酷な眼差しで、状況をすべて察するまどか。

まどか「だ、駄目だよ！　酷いことしないで！」

ほむら「あなたには関係ない」

キュゥべえを庇うように抱きしめたまま、後退るまどか。

まどか「だって、この子、私を呼んでた！　聞こえたんだもん、『助けて』って」

苛立ちに眉をひそめるほむら。

ほむら「そう……」

冷たい殺気を放ちながら詰め寄るほむら。

怯えて目を閉じながらも、固くキュゥべえを抱きしめるまどか。

だが両者の間に、いきなり消火器の白煙が吹き付けられる。視界を奪われ、一瞬怯むほむら。

さやか「まどかッ、こっち！」

傍らの通路から、消火器を手に呼びかけるさやか。
まどか「さやかちゃん⁉」
驚きつつも、ともかくさやかの元へと逃げるまどか。
さやかは残りの消火薬をありったけ通路にぶちまけ、煙幕にしてから、まどかとともにその場を逃げ出す。
ほむら「……ちッ」
ほむら、腕を一薙ぎ。魔力の風で消火薬の煙は一掃される。だが既にまどかとさやかの姿はない。
すぐに追おうとするほむらだが、咄嗟に立ち止まり、身構えて周囲を警戒。
辺りの暗闇に怪しい気配。やがて続々と姿を現しはじめる、魔女の使い魔たち。
ほむら「こんな時に……ッ」
歯噛みするほむら。

□モール改装中エリア、通路

息せき切って逃げるまどかとさやか。
さやか「なッ……何なんだよあいつ⁉　今度はコスプレで通り魔かよ⁉」
さやか、さらにまどかが抱いているキュゥべえを見て、
さやか「っつーか、何ソレ？　ヌイグルミ……じゃないよね、生きてる⁉」
まどか「わかんない……わかんないけど、この子を、助けなきゃ！」
非常口があった筈の場所まで戻る二人。だが通路の様子が、来たときとは全く異なる形に変形している。
既に魔女の結界に呑み込まれ、異界と化している通路。
さやか「あ、あれ⁉　非常口は……どこよ、ここ⁉」
さらに走る二人。ますます迷路化する通路。さすがに二人とも異常を察しはじめる。
まどか「変だよ、ここ……どんどん道が変わってく！」
さやか「ああもうッ、どーなってんのさ⁉」
やや開けた場所に出て、立ち止まる二人。そこかしこから伝わってくる怪しい気配。
まどか「やだ……何か、いる？」
闇の奥から、ゆっくりと姿を現す使い魔たち。怯える二人。
さやか「じょ……冗談だよね？　あたし、悪い夢でも見てるんだよね？　ねっ、まどかッ」
絶体絶命の危機。それでもまどかはキュゥべえを庇いたい一心で抱きしめる。
じわじわと詰め寄ってくる使い魔たち。
だがその頭上に、ふいに輝く投網が覆い被さる。
魔法の網に絡め捕られ、狼狽えて身悶えする使い魔たち。
だが網はがっちりと彼らを捕らえて放さない。
マミ「——危なかったわね。でも、もう大丈夫」

いつの間にか、まどかとさやかの背後に、別の少女が立っている。まどかたちと同じ学校の制服。巴マミである。
さやか「あ、あれ……!?」
まどか「これは――」
マミ、優しく微笑んで、まどかの腕の中のキュゥべえを見る。
マミ「キュゥべえを助けてくれたのね。ありがとう。この子は私の大切な友達なの」
まどか「私――呼ばれたんです。頭の中に直接、この子の声が」
マミ「ふぅん……成る程ね」
委細納得した風な面持ちで、まどかとさやかを観察するマミ。
マミ「その制服、あなたたちも見滝原の生徒みたいね。二年生?」
さやか「あなたは――」
マミ「そうそう、自己紹介しないとね。でも、その前に」
マミ、前へと進み出て、使い魔たちの前に立ちはだかる。
戦いに臨む凛々しい横顔。
マミ「ちょっと一仕事、片付けちゃっていいかしら」
マミ、魔法少女へと変身。その輝きに圧倒されるまどかとさやか。
マミ、マジカルマスケット銃を構え、機関銃のように連射する。身動き取れない使い魔たちはあっという間に一掃される。
まどか「す、凄い……」
使い魔たちよりさらに背後の闇の奥に、うっすらと浮かび上がる魔女のシルエット。身構えるマミ。
だが魔女は何もせず闇の中へと姿を消し、逃亡する。
結界が解けて、周囲は通常の空間に戻る。もとの静まりかえった無人の工事現場。非常口の電光表示が見える。
さやか「も、戻った……?」
安堵しかかるまどかとさやか。だがマミは険しい表情のまま、背後を振り向く。
マミの視線の先には、ほむらの姿。遅れて気付いて、やや怯えるまどかたち。
マミ「魔女は逃げたわ。仕留めたいならすぐ追いかけなさい。今回はあなたに譲ってあげる」
ほむら「私が用があるのは――」
マミ「呑み込みが悪いのね。見逃してあげるって言ってるの」
皆まで言わせず、威嚇を込めた声でほむらを遮るマミ。
張り詰めた表情で、状況を読むほむら。葛藤するものの、この場でキュゥべえを抹殺することは不可能と判断する。
マミ「お互い、余計なトラブルとは無縁でいたいと思わない?」
ほむら「……後悔するわよ」

マミ、にっこりと笑顔を返す。
マミ「次はお友達になれそうなタイミングで会いたいわ。お互いのためにも」
ほむら「……」
無言のまま、踵を返すほむら。そのまま姿を消す。
× × ×
一息ついて、傷ついたキュゥべえの身体に治癒の魔力をかけるマミ。
見る見るうちに傷が癒え、キュゥべえが意識を取り戻す。
キュゥべえ「――ありがとうマミ。助かったよ」
マミ「お礼はこの子たちに。私は通りがかっただけだから」
キュゥべえの視線に、ややどぎまぎするまどか。
さやかも、ヌイグルミと思った不思議生物が人語を喋るのを見て、驚きにやや退いている。
キュゥべえ「どうもありがとう。僕の名前はキュゥべえ」
まどか「あなたが……私を呼んだの」
キュゥべえ「そうだよ。鹿目まどか、それと美樹さやか」
まどかのみならず、名前を呼ばれたさやかも怯む。
さやか「何で私たちの名前を……?」
キュゥべえ「僕、君たちにお願いがあって来たんだ」
まどか「……お、お願い?」
頷くキュゥべえ。愛らしい笑顔で、
キュゥべえ「僕と契約して、魔法少女になってほしいんだ」

第二話「それはとっても嬉しいなって」

【Aパート】

□一話より
逃げるキュゥべえを追うほむら。
キュゥべえを庇うまどかに襲いかかるほむら。
逃げるまどかとさやかに、襲いかかってくる魔女の使い魔。
変身するマミ。使い魔達を薙ぎ払う魔法の攻撃。

□一話の直後
キュゥべえの治療を終えて、自己紹介するマミ。
マミ「私は巴マミ。あなたたちと同じ見滝原中の3年生。そして――キュゥべえと契約した魔法少女よ」

□まどかの部屋
目覚まし時計の騒音。はっとして目覚めるまどか。ベッドの中にいる。
カーテンの隙間から朝の光。見慣れた自分の部屋の中を、ぼんやりと見渡すまどか。
まどか「……はうぅ……また変な夢……?」
幾つもあるぬいぐるみ達に混じって、ちょこんと座っているキュゥべえ。まどかと目があった途端、瞬きして、ひょいと手を挙げる。
キュゥべえ「おはよう、まどか」

□洗面所
鏡の前で並んで歯を磨いているまどかと詢子。詢子はまだ寝起きの冴えない顔。
詢子「まどか、ゆうべは帰りが遅かったんだって?」
まどか「先輩の家にお呼ばれしちゃって……」
詢子「まー門限とかうるさいことは言わないけどさ、晩飯の前には一報入れなよ。親を心配させすぎるとロクなことになんねーぞ」
まどか「うん……ごめんね」
まどか、ちらりと背後の風呂場を覗う。
洗面器に湯を張って、朝風呂を堪能しているキュゥべえ。
まどかM『本当に人には見えないんだ……』

□マミの部屋（回想）
マミが住むマンションへと上げられるまどかとさやか。
ワンルームにしては広めの空間。上品でおしゃれに演出された内装。
さやか「うわ……」

まどか「素敵な部屋……」
マミ「一人暮らしだから、遠慮しないで。ろくにおもてなしの準備もないんだけど……」

× × ×

ローテーブルを囲んで座る三人と一匹。
各々にハーブティとシフォンケーキが振る舞われている。
わりと遠慮なく美味しそうに食べているさやかと、やや緊張気味にちょんちょんとつついているまどか。
マミ「……キュゥべえに選ばれた以上、あなたたちにとっても他人事じゃないものね。ある程度の説明は必要かと思って」
さやか「うんうん、何でも訊いてくれたまえ」
まどか「さやかちゃん、それ逆……」
マミは笑って、ペンダントのソウルジェムを取り出し、見せる。
マミ「これが、ソウルジェム」
まどか「わあ、綺麗……」
マミ「キュゥべえに選ばれた女の子が、契約によって生み出す宝石よ。魔力の源であり、魔法少女であることの証でもあるの」
さやか「契約って？」
キュゥべえ「僕は君たちの願い事を、なんでもひとつ叶えてあげる」
さやか「えッ？　本当？」
まどか「願い事って……」
キュゥべえ「何だって構わない。どんな奇跡だって起こしてあげられるよ」
さやか「うお……金銀財宝とか、不老不死とか、満漢全席とか!?」
まどか「いや、最後のはちょっと……」
キュゥべえ「でも、それと引き換えに出来上がるのがソウルジェム。この石を手にした者は、魔女と戦う使命を課されるんだ」
まどか「……魔女？」

□洗面所
再び、鏡の前で身支度中のまどかと詢子。
まどか「ね～、ママ？」
詢子「んん？」
まどか「もしも――もしも、だよ？　魔法でどんな願い事でも叶えてもらえる、って言われたら、どうする？」
詢子「専務を二人ばかり余所に飛ばしてもらうわ」
まどか「わ～」(困ったヒトだなぁ、もう)
詢子「後はそーねー、社長もさー、もう無理が利く歳じゃねーんだからそろそろ隠居考えてほしいんだけど、代わりがいないってのがねぇ……あのドラ息子は二代目の器

じゃねぇしなぁ……」
まどか「いっそママが社長さんになっちゃったら？」
メイクの手を止め、はっとなる詢子。
詢子「その手があったか」
まどか「……ママ？」
まどかを余所に、腕組みして、真顔で考え込む詢子。
詢子「営業部にさえしっかり根回ししとけば、企画部と総務は言いなりだし……そうなると問題は経理のハゲかぁ。ふむ……」
まどか「ママ、目が恐いよ……」

□マミの部屋（回想）
さやか「魔女って何なの？　魔法少女とは違うの？」
キュゥべえ「願いから生まれるのが魔法少女だとすれば、魔女は呪いから生まれた存在だ。魔法少女が希望を振りまくように、魔女は絶望を撒き散らす。しかもその姿は普通の人間には見えないからタチが悪い。不安や猜疑心、過剰な怒りや憎しみといった負の衝動……そういう禍の種を世界にもたらしているんだ」
マミ「理由のはっきりしない自殺や殺人事件は、かなりの確率で魔女の呪いが原因なのよ。形のない悪意となって、人間を内側から蝕んでいくの」
さやか「そんなヤバイ奴らがいるのに、どうして誰も気付かないの？」
キュゥべえ「魔女は常に結界の奥に隠れ潜んで、決して人前には姿を現さないからね。さっき君たちが迷い込んだ迷路のような場所がそうだよ」
マミ「結構、危ないところだったのよ。あれに呑み込まれた人間は、普通は生きて帰れないから」
思い出して、身震いするまどか。
まどか「マミさんは、そんな恐いものと戦ってるの？」
マミ「そう、命懸けよ。だからあなたたちも慎重に選んだほうがいい」
やや真顔になるマミ。
マミ「キュゥべえに選ばれたあなたたちには、どんな願いでも叶えられるチャンスがある。でもそれは死と隣り合わせなの」
まどか「ううう……」
さやか「うわぁ、悩むなぁ……」
ややビビるまどかと、考え込むさやか。
さやか「でも美味しい話だよね～。どんな望みでも叶えてもらえるんだもんねぇ……」
マミ「そこで提案なんだけど、二人とも、しばらく私の魔女退治に付き合ってみない？」
まどか、さやか「ええッ!?」
マミ「魔女との戦いがどういうものか、その目で見て確かめ

てみればいいわ。その上で、危険を冒してまで叶えたい願いがあるのかどうか、じっくり考えてみるべきだと思うの」

□通学路

通学途中の生徒の群れ。

昨日と同じく、さやかと仁美のところに後から合流するまどか。

ただし今朝のまどかの肩にはキュゥべえが鎮座している。

まどか「おっはよー」

仁美「おはようございます」

キュゥべえ「おはよう、さやか」

さやか「う……あ……」

さやかは、仁美ほか周囲の誰もがキュゥべえの存在に気付いてないと知り、言葉に詰まる。

仁美「……？　どうかしましたか？　さやかさん」

さやか「(まどかに)やっぱソイツ……見えないんだ。人には」

まどか「(やや困った笑い)そうみたい」

仁美「……？」

まどか、口を噤んだままさやかに思念を送る。

まどか『頭で考えるだけで、会話とかできるみたいだよ』

いきなりテレパシーを送られて、動揺するさやか。

さやか『ええッ!?　あたしたち、もう既にそんなマジカルな力が？』

キュゥべえ『いやいや、今はまだ僕が間で中継してるだけ。でも内緒話には便利でしょ？』

さやか『な～んか……変なカンジ』

さやかとまどかの不可解な態度に、小首を傾げる仁美。

仁美「お二人とも、さっきからどうしたんです？　しきりに目配せしてますけど」

まどか「えッ？　いや、これはッ、あの、その……」

仁美「まさか二人とも、既に目と目で分かり合う間柄ですの？　まぁッ、たった一日でそこまで急接近だなんて！　昨日はあのあと一体何が!?」

一人で妄想に赤面して身もだえする仁美。やや白けるまどかとさやか。

さやか「いや、そりゃねぇわ流石に」

まどか「確かに色々あったんだけどさ……」

仁美「でもいけませんわ、お二方、女同士で……それは禁断の恋の形ですのよ！」

まどか「……今日の仁美ちゃん、なんだかさやかちゃんみたいだよ？」

さやか「どーゆー意味だよぅ？　それはッ！」

□教室

ホームルーム前のひととき。雑談に興じるクラスメイト

たちをよそに、念話で会話するまどか、さやか、キュゥべえ。
さやか『つーかさ、あんた、のこのこ学校までついて来ちゃって良かったの？』
キュゥべえ『どうして？』
さやか『言ったでしょ。昨日のあいつ、このクラスの転校生だって。あんた、命狙われてるんじゃないの？』
キュゥべえ『むしろ学校の方が安全だと思うな。マミもいるし』
まどか『マミさんは三年生だから、クラス、ちょっと遠いよ？』
マミ『ご心配なく。話はちゃんと聞こえてるわ』
さやか『わっ』
まどか『あっ、えっと……お、おはようございます』

× × ×

三年生の教室。席について、頬杖をついて目を閉じているマミ。一見居眠りしている風に見えるが、ソウルジェムを耳に当てている。

× × ×

マミ『ちゃんと見守ってるから安心して。それにあの子だって、人前で襲ってくるような真似はしないはずよ』
さやか『ならいいんだけど……』
そこへ、教室に入ってくるほむら。
さやか「げ、噂をすれば影」
ほむらは真っ先にまどかと、その傍らにいるキュゥべえを凝視する。
やや怯えた風にまどかの陰に隠れるキュゥべえ。
ほむらの険しい視線に気圧されるまどか。ぎゅっとキュゥべえを抱きしめる。

□マミの部屋（回想）

さやか「あの転校生も、えっと、その、魔法少女なの？　マミさんと同じ？」
マミ「そうね。間違いないわ。かなり強い魔力を持ってるみたい」
さやか「でも、それなら、マミさんみたいに魔女をやっつける正義の味方なんだよね？　それがなんで、急にまどかを襲ったりしたわけ？」
キュゥべえ「彼女が狙ってたのは僕だよ。新しい魔法少女が生まれることを阻止しようとしてたんだろうね」
まどか「え……」
さやか「なんで？　同じ敵と戦っているなら、仲間は多い方がいいんじゃないの？」
マミ「それが、そうでもないの。むしろお互いをライバル視して競争になることの方が多いのよね」
まどか「そんな……どうして……」
マミ「魔女を倒せば、それなりの見返りがあるの。だから時

と場合によっては、手柄の取り合いになってぶつかることもあるのよね」
眉根に皺を寄せて考え込むさやか。
さやか「つまりあいつは、キュゥべえがまどかに声をかけって最初から目星をつけてて、それで朝からあんなに絡んできたってわけ？」
マミ「多分、そういうことでしょうね」

□教室
——引き続き、ほむらの視線に射竦められているまどか。
さやか『気にすんな、まどか』
きっぱりと強い意志を込めて、思念を送ってくるさやか。
さやか『あいつが何かちょっかい出してきたら、あたしがぶっとばしてやるからさ。マミさんだってついてるんだし』
マミ『そうよ。美樹さんはともかくとして、私がついてるんだから大丈夫。安心して』
さやか『ともかくってゆーなーッ』
マミとさやかの遣り取りに、やや緊張を解されて表情を和ませるまどか。
ほむらは何事もなかったかのようにまどかから視線を外し、話しかけてくるクラスメイトたちの輪の中に紛れていく。

□授業中の教室
長閑な空気の退屈な授業。
まどか、まずほむらの席を覗う。ほむらはまどかなど眼中なしに真っ直ぐ正面を向いている。
続いてさやかの様子を窺うまどか。気疲れしたのか、こっくりこっくりと船をこいでいる。
まどか、ひとまず危機はないと安堵するものの、それはそれで手持ち無沙汰。ノートが次第に落書きで埋まっていく。
まず変身したマミの絵、続いてほむらの絵。『リボンは？』『フリルとか』と変なコメントもつきはじめる。——無意識のうちに、自分の変身姿について一人デザインコンペを始めているまどか。

□屋上
昼休みの校舎屋上。弁当を食べたり、談笑したりしている生徒たちが、ぽつぽつと疎らにいる。
その中で、フェンスに凭れ、漫然と空を眺めているまどか、さやか、キュゥべえ。
さやか「ねー、まどかぁ。——願い事、何か考えた？」
まどか「ううん。さやかちゃんは？」
さやか「あたしも全然。何だかなー。いくらでも思いつくと

思ったんだけどなー」
溜息をついて、伸びをするさやか。
さやか「欲しいモノもやりたいことも、いっぱいあるけどさ。命懸け、ってところで、やっぱ引っかかっちゃうよね。そうまでする程のモンじゃねーよなーって」
まどか「うん……」
キュゥべえ「意外だなぁ。大抵の子は二つ返事なんだけど」
さやか「まーきっと、あたしたちがバカなんだよ」
まどか「え～？　そうかな……」
さやか「そう。幸せバカ」
冗談めかした言葉とは裏腹に、真顔でやや憂い顔のさやか。
さやか「別に珍しくなんかないはずだよ。命と引き換えにしてでも叶えたい望みって。そういうの抱えてる人は、世の中に大勢いるんじゃないのかな」
まどか「……」
さやかの真面目な語りに、言葉を返せないまどか。
さやか「だから、それが見つからない私たちって、その程度の不幸しか知らないってことじゃん。恵まれすぎてバカになっちゃってるんだよ」

×　×　×

さやかの回想。恭介の病室。ベッドの上で、窓の外を見つめている恭介の背中。

×　×　×

さやか「……なんで、あたしたちなのかな？」
さやかの声音に滲む影。戸惑うまどか。
さやか「不公平だと思わない？　こういうチャンス、本当に欲しいと思ってる人は他にいるはずなのにね……」
まどか「さやかちゃん……」
そのとき、屋上に姿を現すほむら。はっと緊張するまどかとさやか。ほむらはまどかを見つけるや否や、真っ直ぐに歩み寄ってくる。
まどかを庇うかのように前に出るさやか。だが二人の脳裏に、マミからの思念が届く。
マミ『大丈夫……』
ほむら、隣の校舎を見遣る。その屋上にはソウルジェムを手にしたマミの姿。相手方の警戒ぶりを認識して、足を止めるほむら。
さやか「……昨日の続きかよ？」
ほむら「いいえ、そのつもりはないわ」
冷ややかな眼差しでキュゥべえを見るほむら。
ほむら「そいつが鹿目まどかと接触する前にケリをつけたかったけれど……今更それも手遅れだし」
あらためて、まどかを見据えるほむら。
ほむら「で、どうするの？　そいつの言葉を鵜呑みにして、あなたも魔法少女になるつもり？」

キュゥべえ「僕は強制はしてないよ。まどかたちも今、迷ってるところだ」
さやか「どっちにしろ、あんたにとやかく言われる筋合いはないわよ」
ほむら、さやかを一瞥。やや気圧されるものの怯まないさやか。だがすぐにほむらの視線は再びまどかへ。
ほむら「昨日の話、憶えてる？」
まどか「うん……」
ほむら「ならいいわ。忠告が無駄にならないよう、祈ってる」
言い残して踵を返し、屋上を去っていこうとするほむら。
まどか「ほ――ほむらちゃん？」
呼び止められ、立ち止まるほむら。
まどか「あの……あなたは、どんな願い事をして魔法少女になったの？」
じろりと肩越しにまどかを睨むほむら。その表情には、怒りとも悲しみともつかない激しい感情が覗く。驚きに言葉を失うまどか。
だがそれも一瞬で、ほむらはすぐに普段の無表情に戻り、屋上を去っていく。

【Bパート】

□放課後の教室
談笑しながら帰り支度をしている生徒たち。
マイペースに鞄を整理している仁美のところに、既に身支度を終えたまどかとさやかがやってくる。
さやか「仁美ごめん、今日はあたしら、ちょっと野暮用があって……先に行ってるね」
仁美「あら、内緒ごとですの？」
まどか「えっと……」
口ごもるまどか。仁美は勝手に勘違いして頬を赤らめる。
仁美「羨ましいですわ。もうお二人の間に割り込む余地なんてないんですのね……」
さやか「いやだから違うって。それ」
教室を出て行くまどかとさやかを、じっと目で追っているほむら。その背中に、女子Aが声をかける。
女子A「暁美さん、今日こそ帰りに喫茶店寄ってこ」
振り向いて、さも残念そうに微笑むほむら。
ほむら「ごめんなさいね。今日もちょっと急ぐ用事があって……」

□ショッピングモールのファーストフード店
昨日と同じ店に集合しているまどか、さやか、マミ。さやかの手荷物の中には、何やら布で包んだ細長い物体がある。
がっつりバリューセット一人前を食べているさやか。ジュースだけしか頼んでいないマミ。まどかは自分のポテトをキュゥべえに食べさせている。
マミ「さて、それじゃあ魔法少女体験コース第一弾。張り切って行ってみましょうか。準備はいい？」
さやか「準備になってるかどうか分からないけど……」
さやか、持参した包みの端を解いて中身を見せる。やや年季の入った金属バット。
さやか「こっそり体育倉庫からガメてきたよ。何もないよりはマシかと思って」
マミ、呆れ半分、感心半分の微笑。
マミ「まあ、そういう覚悟でいてくれるのは助かるわ」
さやか「まどかは何か、持ってきた？」
まどか「え？　えっと、私は……」
素直に手ぶらで来たとは言えず、慌てるまどか。
あまり深い考えもなく、鞄からノートを取り出して中身を見せる。
見開きにびっしりと書かれた魔法少女ルックの三面図と細部と決めポーズ草案。
まどか「と、とりあえず、衣装だけでも考えておこうかと思って……」
しばし呆気にとられるさやかとマミ。それから堪えきれずに笑い出す。
そこでようやく、自分のずれっぷりを自覚して、顔を真っ赤にするまどか。
マミ「うん、意気込みとしては充分ね」
さやか「こりゃあ参った。あんたにゃ負けるわ」
まどか「うう……」

□モール改装中エリア、通路
昨日の結界が消えた場所に来ている一行。マミが、手の中で鈍い光を脈打たせているソウルジェムを二人に見せる。
マミ「これが、昨日の魔女が残していった魔力の痕跡。基本的に、魔女捜しは足頼みよ。こうしてソウルジェムが捉える魔力の気配を辿っていくわけ」
さやか「意外と地味……」

□住宅街
ソウルジェムの光の強弱を頼りに、近辺の町並みをそぞろ歩くマミ。その後についていくまどかとさやか。キュゥべえはまどかの肩に。

さやか、マミの手元を覗き込んで溜息をつく。
さやか「光、ぜんぜん変わらないね」
マミ「取り逃がしてから一晩経っちゃったからね。足跡も薄くなってるわ」
まどか「あのとき、すぐに追いかけてたら……」
マミ「仕留められたかもしれないけれど、あなたたちを放っておいてまで優先することじゃなかったわ」
まどか「……ごめんなさい」
マミ「いいのよ」
さやか「うん、やっぱりマミさんは正義の味方だ！　――それに引き換え、あの転校生、ホントにむかつくな～」
まどか、屋上を去り際のほむらの痛ましい表情を思い出して、やや複雑な気持ちになる。
まどかM『本当に悪い子なのかな……』

× × ×

とある廃ビルの玄関、夢遊病者のような足取りで中に入っていくOLの姿。

× × ×

引き続き、マミの探索は続く。
周囲の景色は段々と寂れて人気のない場所に。
さやか「ねぇマミさん、魔女のいそうな場所、せめて目星ぐらいはつけられないの？」
マミ「魔女の呪いの影響で、わりと多いのは交通事故や傷害事件よね。だから大きな道路や、喧嘩が起きそうな歓楽街は優先的にチェックしないと。あとは自殺に向いてそうな人気のない場所……それから、病院とかに取り憑かれると最悪よ。ただでさえ弱っている人たちから生命力が吸い上げられるから、目も当てられないことになる」

× × ×

廃ビル内部、ふらふらと階段を上がっていくOL。

× × ×

さやか「それだけ分かってたら、けっこう限られてくるんじゃないの？」
マミ「同じ場所で繰り返し犠牲が出たら、不吉な場所として注目されちゃうでしょう？　だから魔女は私たちの裏をかこうとして、何度も場所を移動するの」
ふと立ち止まり、ソウルジェムの反応に見入るマミ。光の脈動が明らかに早くなっている。険しい顔で周囲を見回すマミ。
マミ「……かなり強い魔力の波動だわ。近いかも」

× × ×

廃ビル屋上、靴を脱ぎ、手摺りを乗り越えるOL。縁に立って地面を見下ろし、虚ろな笑顔を見せる。

× × ×

ソウルジェムの誘導で、ついにマミたちは廃ビルの前へ。

ソウルジェムの輝きは激しく明滅している。
マミ「間違いない、ここだ……」
頭上を見上げ、屋上の縁に立っているＯＬの姿を見つけるさやか。
さやか「マミさん、あれ！」
だが時すでに遅く、ＯＬは宙に身を躍らせる。恐怖に口元を押さえるまどか。
マミ、瞬時に変身。魔力を放ってＯＬの身体を受け止める。
地面にふわりと着地するＯＬ。意識を失って、身じろぎもしない。
マミ、駆け寄って素早く彼女の様態をチェックする。首筋には、魔女に魅入られた犠牲者であることを示す刻印がある。
まどか「そ、その人は……」
マミ「大丈夫。気を失ってるだけ。――行くわよ！」
廃ビルのエントランスへと駆け込むマミ。慌てて続くまどかとさやか。
マミはソウルジェムを一閃させ、隠されていた結界への入口を暴き出す。
マミ「今日こそ逃がさないわよ……」
緊張に生唾を呑み込むまどか。さやかも、いよいよ荒事と覚悟を決めて、バットから包み紙を剥がす。そのバットにマミが手を触れると、魔力が充填され、ほのかな輝きを帯びはじめる。
さやか「わ……」
マミ「気休め程度だけど、これで身を守る程度の役には立つわ。絶対に私の側を離れないでね」
まどか、さやか「はい！」
マミを先頭に、結界の中へと踏み込んでいく一行。
その後で、廃ビルのエントランスへと姿を現すほむら。
鋭い眼差しで結界の入口を見つめる。
ほむら「……」

□結界内部
攻め寄せる使い魔たちを蹴散らしながら先へと進むマミ。後に続くまどか、さやか、キュゥべえ。
さやか「わわッ、く、来んな。来んな！」
弱りながらも追い縋ってくる使い魔たちを、必死にバットで叩き伏せるさやか。
キュゥべえ「頑張って！　もうすぐ結界の最深部だ！」
マミ「――どう？　恐い？　二人とも」
さやか「なっなっなっ何のことねーッて！」
半ば自棄になってバットを振り回しているさやか。
一方でまどかは、怯えてキュゥべえを固く抱きしめながらも、戦うマミの後ろ姿に陶然と見入っている。

まどかM『恐いけど、でも……』
颯爽と戦う魔法少女の姿に、いつしか憧れを懐いている自分を自覚するまどか。

□結界最深部
ついに使い魔たちの防壁を突破するマミたち。
その眼前に、いよいよ魔女の本体が姿を現す。一話でショッピングモールに現れたのと同じ個体である。
マミ「見て。――あれが、魔女」
さやか「うわっ、グロい……」
まどか「あんなのと……戦うんですか?」
マミ「大丈夫。負けるもんですか」
自信たっぷりに魔女の前へと進み出るマミ。
マミ「未来の後輩に、あんまり格好悪いとこ見せられないものね!」
魔銃を構えるマミ。威嚇するかのように奇声を上げる魔女。
魔女「キシャァァァッ!!」
マミ、魔銃を連射。魔女は機敏に身をかわす。
マミの銃撃は狙いが甘く、一発として当たらない。外れた弾は次々と床にめり込んで止まる。
さやか「な、なにやってんのさマミさぁん!」
マミ「まぁ、見てなさい」
ふいに銃撃を止めるマミ。魔女は回避から反撃に転じんとして、まっしぐらにマミへと肉薄する。
だがマミが床一面に撒き散らした魔銃の弾丸から、一斉に魔力の糸が噴き出し、網のように絡まって魔女の上に降りかかる。
マミ「これが、私の――」
魔女「ギィッ!?」
魔力の網でがんじがらめになり、身動きできなくなる魔女。
すかさずマミは武器をマスケット銃から大筒形態へと変形させる。
マミ「アルティマ・シュート!!」
大魔力を放つ魔砲。避けられず直撃をくらった魔女は悲鳴とともに消滅していく。
魔女「ギャァァァッ!!」
魔女消滅と同時に周囲の結界も崩壊し、もとの廃ビルの内装へと戻っていく。
さやか「か、勝った……の?」
まどか「凄い……」
後には、一欠片の黒い宝石が残される。マミはそれを拾い上げて、二人に見せる。
マミ「これが、グリーフシード。魔女の卵よ」
さやか「た、卵……」

マミ「運が良ければ、ときどき魔女が何個か持ち歩いてることがあるの」
恐ろしげに観察するまどかとさやか。
キュゥべえ「大丈夫。その状態では安全だよ。むしろ役に立つ貴重なモノだ」
マミはソウルジェムを取り出して、まどかたちに間近に観察させる。
マミ「私のソウルジェム、ゆうべよりちょっと色が濁ってるでしょ？」
まどか「そういえば……」
マミ「でもグリーフシードを使えば、ほら――」
ソウルジェムとグリーフシードを近づけるマミ。するとソウルジェムの濁りはグリーフシードへと吸い取られ、もとの透き通った輝きを取り戻す。
さやか「あっ、綺麗になった」
マミ「ね？　これで消耗した私の魔力も元通り。前に話した魔女退治の見返りっていうのが、これ」
説明してから、マミはやおらグリーフシードを部屋の一画の暗がりへと放り投げる。
飛んできたグリーフシードをキャッチするほむら。そこでようやく、まどかとさやかも、暗がりに潜んでいたほむらの存在に気付く。
さやか「あ、あいつッ⁉」
マミ「あと一度ぐらいは使えるはずよ。あなたにあげるわ。暁美ほむらさん」
ほむら「……」
マミ「――それとも、人と分け合うんじゃ不服かしら？　丸ごと自分のものにしたかった？」
ほむらは表情を一切変えず、グリーフシードをマミへと投げ返す。
ほむら「あなたの獲物よ。あなただけのものにすればいい」
マミ「そう……それがあなたの答えね」
マミ、決してほむらとは相容れないと感じて、表情を陰らせる。
無言のまま立ち去っていくほむら。
さやか「く～っ、やっぱ感じ悪いやつ！」
去っていくほむらを、いたたまれない想いで見送るまどか。
まどか「仲良くできればいいのに……」
マミ「お互いにそう思えれば、ね……」

□廃ビルの外
意識を失っていたＯＬを介抱するマミ。首筋にあった魔女の刻印は消えている。
やがてＯＬは意識を取り戻し、不思議そうに辺りを見回す。

ＯＬ「ここは……あれ？　私は……」
しばし戸惑うＯＬだが、自分が自殺しようとしていた記憶を取り戻し、恐怖に震え上がる。
ＯＬ「や、やだっ、私、なんで……そんな！　どうしてあんなこと……ッ!?」
パニックに陥るＯＬを、優しく抱きしめて落ち着かせるマミ。
マミ「大丈夫、もう大丈夫です。ちょっと悪い夢を見てただけですよ」
その様子を、やや離れて見守るまどかとさやか。
さやか「一件落着、って感じかな」
まどか「うん……」
ＯＬを慰めるマミの横顔を、憧憬の眼差しで見守るまどか。
まどかＭ『叶えたい願い事とか、私には難しすぎて、すぐには決められないけれど――でも、人助けのために頑張るマミさんの姿は、とても素敵で――』

□まどかの寝室
夜、就寝前のまどか。
勉強机にスタンドを点し、ノートに落書きした魔法少女のコスチューム案に、色鉛筆で仕上げをしている。
まどかＭ『こんな私でも、あんな風に誰かの役に立てるとしたら、それはとっても嬉しいなって――思ってしまうのでした』

第三話「もう何も恐くない」

【Aパート】

□恭介の病室

ベッドをリクライニングさせて座っている恭介と、介添用の椅子に腰掛けているさやか。

さやか「はい、これ」

見舞いに来たさやかから、ヴァイオリンのCDを手渡される恭介。驚きに目を見開く。

恭介「うわ、凄い……これネットでも手に入らない廃盤だよ！」

さやか「そ、そうなんだ……たまたま寄ったお店で見かけたんで、買ってみたんだけど」

ベッドサイドのテーブルには、他にもCDのケースが積み上げられている。すべてさやかが買ってきたものである。

恭介「いつも、本当にありがとう。さやかはレアなCDを見つける天才だね」

さやか「はは、そんな……う、運がいいだけだよ。きっと」

照れてはにかむさやか。

恭介はさっそくケースを開けて、CDをポータブルプレーヤーにセットする。

恭介「この人の演奏は、本当に凄いんだ。さやかも聴いてみる？」

ヘッドホンの片方だけを嵌めて、もう一方をさやかに差し出す恭介。

さやか「い、いいのかな……」

恭介「本当はスピーカーで聴かせたいんだけど、病院だしね」

コードの長さの都合で、やや身を寄せ合う姿勢になる二人。内心で照れまくるさやか。

だが曲が始まると、優しい旋律に心が和まされる。

優しい旋律に浸るさやか。

× × ×

さやか幼少期の記憶。

ヴァイオリンの発表会で颯爽と演奏をしている恭介と、その姿に目を奪われているさやか。

× × ×

ふと目を開けるさやか。隣で恭介が静かに泣いているのに気付く。

ベッドの上で力なく投げ出された恭介の左腕。無惨な手術跡。もう二度と演奏のできなくなった指が、演奏の記憶を辿って震えている。

やるせない想いに、胸が痛くなるさやか。

□夜の公園（異界化中）
魔砲からアルティマシュートを放つマミ。
直撃をくらい、悲鳴を上げて消滅していく使い魔。
それを固唾を呑んで見守るまどかとさやか。
結界は解かれ、周囲はもとの公園の景色に戻る。マミも変身を解除。ほっと安堵するギャラリー二人。
さやか「やっぱマミさんってカッコいいね～」
マミ「もう。見せ物じゃないのよ。危ないことしてる、って意識は忘れないでおいてほしいわ」
さやか「いえーす」
手にした護身用バットを掲げ上げるさやか。
まどか「グリーフシード、落とさなかったね」
キュゥべえ「今のは魔女から分裂した使い魔でしかないからね。グリーフシードは持ってないよ」
まどか「魔女じゃなかったんだ……」
さやか「なんか、ここんとこずっとハズレだよねぇ」
マミ「使い魔だって放っておけないのよ。成長すれば分裂元と同じ魔女になるから。――さ、行きましょ」
× × ×
静寂を取り戻した夜の公園を、並んで歩くマミ、さやか、まどかとキュゥべえ。
マミ「二人とも、何か願い事は見つかった？」
さやか「う～ん、まどかは？」
まどか「う～ん……」
困り果てる二人に、苦笑するマミ。
マミ「まぁ、そういうものよね。いざ考えろって言われたら」
まどか「マミさんは、どんな願い事をしたんですか？」
まどかが訊いた途端、マミの表情が陰る。やや慌てるまどか。
まどか「いや、あの、どうしても聞きたいってわけじゃなくて、ちょっと気になった、っていうか、その……」
マミ「ううん、いいの。別に隠すほどのことでもないし」
遠い眼差しで追憶するマミ。
マミ「私の場合は――」
× × ×
マミの回想。高速道路での大規模な事故。
潰れた車に閉じ込められて瀕死のマミが、手を差し伸べたその先に、キュゥべえの姿がある。
マミoff「――考えている余裕さえ、なかったってだけ」
× × ×
再び現代。夜の公園。マミが語った過去に、ややショックを受けている二人。
マミ「――後悔してるわけじゃないのよ。今の生き方も、あそこで死んじゃうよりは余程良かったと思ってる」
マミ「でもね、ちゃんと選択の余地がある子には、きちんと考えた上で決めてほしいの。私にできなかったことだ

からこそ、ね」
意を決して、質問をぶつける気になるさやか。
さやか「ねぇ、ママさん……願い事って、自分のための事柄でなきゃ駄目なのかな？」
ママ「え？」
さやか「たとえば――たとえばの話なんだけどさ。あたしなんかより、よほど困ってる人がいて、その人のために願い事をするのは――」
まどか「それって……上条くんのこと？」
さやか「た、例え話だって言ってるじゃんか！」
慌てるさやかを余所に、冷静に頷くキュゥべえ。
キュゥべえ「べつに契約者自身が願い事の対象になる必然性はないんだけどね。前例もないわけじゃないし」
ママ「……でも、あまり感心できた話じゃないわ」
やや険しい声で異論を挿むママ。
ママ「他の人の願いを叶えるのなら、なおのこと自分の望みをはっきりさせておかないと。――美樹さん、あなたは彼に夢を叶えてほしいの？　それとも彼の夢を叶えた恩人になりたいの？」
さやか「……」
ママの言い様に、さすがに憮然と押し黙るさやか。狼狽えるまどか。
まどか「ママさん――」
ママ「同じようでも全然違うことよ。これ」
さやか「……その言い方は、ちょっと酷いと思う」
ママ「ごめんね。でも今のうちに言っておかないと。そこを履き違えたまま先に進んだら、あなた、きっと後悔するから」
さやか「……」
さやか、しばし押し黙って考え込んでから、深呼吸し、頷く。
さやか「……そうだね。あたしの考えが甘かった。ごめん」
さっぱりと謝罪するさやかに、安堵するまどか。マミも笑顔を返す。
ママ「やっぱり、難しい事柄よね。焦って決めるべきじゃないわ」
キュゥべえ「僕としては、早ければ早いほどいいんだけど」
ぼやくキュゥべえの頭を小突くマミ。
ママ「駄目よ。女の子を急かす男は嫌われるぞ」
笑うマミとさやか。まどかも釣られて笑うものの、その胸の内はやや複雑。

□まどかの部屋
就寝間際、パジャマに着替えてベッドの上でごろごろしているまどか。傍らにはキュゥべえ。
公園でのさやかとマミの問答を思い出し、溜息をつくま

どか。
まどか「……やっぱり、簡単なことじゃないんだよね……」
キュゥべえ「僕の立場で急かすわけにはいかないしね。助言するのもルール違反だし」
まどか「ただ、なりたいってだけじゃ、駄目なのかな……」
ノートの落書きの変身プランを眺めるまどか。華麗に戦うマミを思い出し、その姿に自分を重ねて妄想する。
キュゥべえ「まどかは力そのものに憧れているのかい？」
まどか「や、そんなんじゃなくて……う～ん、そうなのかな？私ってどんくさいし、何の取り柄もないし、だからマミさんみたいに格好良くて素敵な人になれたら、それだけでもう充分に幸せなんだけど……」
キュゥべえ「まどかが魔法少女になれば、マミよりずっと強くなれるよ」
まどか「へ？」
思わぬ言葉に、狐につままれたかのようなまどか。
キュゥべえ「もちろん、どんな願い事で契約をするかにもよるけれど……まどかが生み出すかもしれないソウルジェムの大きさは、僕にも測定しきれない。これだけの素質を持つ子と出会ったのは初めてだ」
まどか「はは……何言ってるのよ、もう。嘘でしょ」
キュゥべえ「いや――」
そこに扉をノックする音。

知久「まどか、起きてるか？」
まどか「うん？　どしたの？」
知久「ママが帰ってきたんだが……ちょっと手伝ってくれないかな」

□鹿目家玄関
上がり框で、泥酔した詢子が潰れている。
まどか「あー、またか……まったくもう」
やや呆れ気味に苦笑いするまどか。
詢子「み、水……」
既に用意してあったコップの水を詢子に飲ませる知久。
知久「ともかくベッドまで運んで、着替えさせないと。ほら、そっち持ってくれ」
まどかと知久、二人がかりで詢子を肩に担いで、寝室まで引っ張っていく。
詢子「ぐえぇぇ……このスダレハゲ……呑みたきゃ手酌でやってろっつうの……」
譫言のように愚痴を漏らす詢子。

□両親の寝室
布団にくるまり、安らかな寝息を立てている詢子。
一仕事終えた知久とまどか、ほっと一息。
知久「ココアでも入れようか？」

まどか「うん、お願い」

□ダイニングキッチン

寝間着姿にガウンを羽織り、テーブルで差し向かいに座ってホットココアを啜る二人。

まどか「なんでママは、あんなに仕事が好きなのかな。昔からあの会社で働くのが夢だった——なんて、ないよね？」

知久「ママは仕事が好きなんじゃなくて、頑張るのが好きなのさ」

まどか「……？」

知久「嫌なことも辛いこともいっぱいあるだろうけど、それを乗り越えたときの満足感が、ママにとっては最高の宝物なのさ。そういう意味で、今の難しくて大変な仕事は、とてもやり甲斐があるんだろうね」

まどか「ママは……満足なのかな、それで」

知久「そりゃ、会社勤めが夢だったわけじゃないだろうけどさ。それでもママは、理想と思っていた生き方を通してる。そんな風にして叶える夢もあるんだよ」

まどか「……生き方そのものを、夢にするの？」

知久「どう思うかは人それぞれだろうけど——僕はね、ママのそういうところが大好きだ。尊敬できるし、自慢できる。素晴らしい人だってね」

まどか「……うん」

父の笑顔に、表情を和ませるまどか。

□夜道

まどか、さやかと別れて帰路を歩くマミ。ふと背後についてくる気配を感じ、足を止める。

街灯の光を避けるように、闇の中に佇んでいるほむら。

ほむら「分かっているの？　あなたは無関係な一般人を危険に巻き込んでいる」

マミ「彼女たちはキュゥべえに選ばれたのよ。もう無関係じゃないわ」

ほむら「あなたは二人を魔法少女に誘導している」

マミ「それが面白くないわけ？」

ほむら「ええ。迷惑よ。……特に鹿目まどか」

マミ、ほむらの真意を見透かし（たと勘違いして）目を細める。

マミ「ふうん……そう、あなたも気付いてたのね、あの子の素質に」

ほむらの眼差しがさらに険しくなる。

ほむら「彼女だけは、契約させるわけにはいかない」

マミ「自分より強い相手は邪魔者ってわけ？　いじめられっ子の発想ね」

内心でかっとなるほむらだが、一旦目を閉じて気持ちを

静める。
ほむら「あなたとは戦いたくないのだけれど」
マミ「なら二度と会うことがないよう努力して」
ほむらの側にこの場で仕掛けてくる意図がないと判断したマミは、踵を返す。
マミ「話し合いだけで事が済むのは、きっと今夜で最後だろうから」
捨て台詞を残して去っていくマミ。ほむらは事態が思うように進まないことに苛立ち、歯噛みする。
ほむら「……」

□病院ロビー（翌日、放課後）
恭介が入院している病院。さやかの見舞いに付き添って来たまどかが、ベンチでさやかの戻りを待っている。隣にはキュゥべえ。
そこへ、溜息をつきつつエレベーターから降りてくるさやか。
さやか「よ、お待たせ」
まどか「あれ？　……上条くん、逢えなかったの？」
さやか「なんか今日は都合悪いみたいでさ。わざわざ来てやったのに、失礼しちゃうわよね～」

□病院裏の駐輪場
連れ立って、病院の中庭を横切るまどかとさやか。
ふと気になって、駐輪場の奥にある物置のスペースに目をやるまどか。
そこで何かが怪しく光っている。
まどか「……？」
さやか「ん？　どしたの？」
まどか「あそこ、何か……」
胸騒ぎを感じて、近寄って調べる二人。
そこには、壁に突き刺さるようにして埋まっているグリーフシード。まるで呼吸するかのように光を脈動させている。
キュゥべえ「グリーフシードだ……孵化しかかってる！」
まどか「嘘、なんでこんな所に……」
キュゥべえ「まずいよ。早く逃げないと。この辺りはもうこいつの魔力に侵食されはじめてる。もうすぐ結界が出来上がる」
さやか「またあの迷路が……」
さやかの脳裏を、かつてマミから聞いた言葉が過ぎる。
×　×　×
マミ「……それから、病院とかに取り憑かれると最悪よ。ただでさえ弱っている人たちから生命力が吸い上げられるから、目も当てられないことになる」
×　×　×

これは断じて見過ごせないと、意を決するさやか。
さやか「まどか、先に行って。マミさんを呼んできて。あたしはこいつを見張ってる」
まどか「そんな！」
キュゥべえ「無茶だよ。中の魔女が出てくるまでにはまだ時間があるけど、結界が閉じたら君は外に出られなくなる。マミの助けが間に合うかどうか――」
さやか「あの迷路が出来上がったら、こいつの居所も分からなくなっちゃうんでしょ？」
さやかの脳裏を過ぎる、衰弱した恭介のイメージ。
さやか「放っておけないよ。こんな場所で……」
さやかの決意を察して、頷くキュゥべえ。まどかの肩から降りる。
キュゥべえ「まどか、先に行ってくれ。さやかには僕がついてる」
まどか「キュゥべえ……」
キュゥべえ「マミならテレパシーで僕の位置が解る。ここでさやかと一緒にグリーフシードを見張っていれば、最短距離で結界を抜けられるよう、マミを誘導できるから」
さやか「ありがとう。キュゥべえ」
まどか「……あたし、すぐにマミさんを連れてくるから！」
走り去るまどか。さやかとキュゥべえの周囲は徐々に異界化し、現実世界と隔てられていく。
駐輪場を出る前に、振り返ってさやかたちがいた辺りを見るまどか。そこは既に不気味な静寂に包まれて、誰もいない。

× × ×

病院の屋上に立っているほむら。
駐輪場から駆け出ていくまどかを、無言で見守っている。

【Bパート】

□結界内部
脈動するグリーフシードを前にして、キュゥべえを抱きかかえているさやか。
キュゥべえ「恐いかい？　さやか」
さやか「そりゃあまあ……当然でしょ」
キュゥべえ「願い事さえ決めてくれれば、今この場で君を魔法少女にしてあげることもできるんだけど」
さやか「うん、いざとなったら頼むかも。……でも、今はやめとく。マミさんを待つよ」
弱気になりそうな自分を奮い立たせようと、深呼吸するさやか。
さやか「あたしにとっても、大事なことだから。……できる

ことなら、いい加減な気持ちで決めたくない」

□病院裏の駐輪場

マミを連れて再び戻ってくるまどか。

マミ「ここね……」

マミ、魔力で結界の入口を開く。二人の前に晒される異界の迷路。マミはキュゥべえにテレパシーで呼びかける。

マミ『キュゥべえ、状況は?』

キュゥべえ『まだ大丈夫。すぐに孵化する様子はないよ』

まどか『さやかちゃん、大丈夫?』

さやか『へーきへーき。退屈で居眠りしちゃいそう』

キュゥべえ『むしろ迂闊に大きな魔力を使って卵を刺激する方がまずい。急がなくていいから、なるべく静かに来てくれるかい?』

マミ『わかったわ』

マミ、変身することなく結界の中へと踏み込む。後に続くまどか。

まどか「間に合って良かった……」

マミ「無茶しすぎ、って怒りたいところだけれど。今回に限っては冴えた手だったわ。これなら魔女を取り逃がす心配は――」

言いかけて立ち止まり、振り向くマミ。まどかもまた背後を見て息を呑む。

二人の後から、ほむらが結界に踏み込んでくる。

マミ「……言ったはずよね。二度と会いたくないって」

ほむら「今回の獲物は私が狩る。あなたたちは手を退いて」

マミ「そうもいかないわ。美樹さんとキュゥべえを迎えに行かないと」

ほむら「その二人の安全は保証するわ」

マミ「信用すると思って?」

マミ、予め床に仕掛けておいた魔力の網を発動。

不意を突かれ、網に捕らわれて動けなくなるほむら。

ほむら「馬鹿ッ……こんなことやってる場合じゃ!」

マミ「もちろん怪我させるつもりはないけど、あんまり暴れたら保証しかねるわ」

忠告をよそに抵抗するほむら。だが魔力の拘束はますます固く彼女を締め上げる。

ほむら「今度の魔女は、これまでの奴らとはワケが違う!」

マミ「大人しくしていれば、帰りにちゃんと解放してあげる。――行きましょう、鹿目さん」

まどか「は、はい……」

ほむら「待て……ぐッ!」

ますますマミの魔力が絞まり、声も出せなくなるほむら。

まどかはその様子を心配げに眺めつつ、マミに促されるままついていく。

□結界迷路の途中

迷路を徘徊する使い魔たちの背後を、そっと忍び足で通り抜けるマミとまどか。

何となく沈黙が重くて、マミに声をかけるまどか。

まどか「あの……マミさん？」

マミ「なに？」

まどか「願い事、私なりに、色々と考えてみたんですけど……」

マミ「決まりそうなの？」

まどか「はい。でも、あの、もしかしたらマミさんには、考え方が甘いって、怒られそうで……」

マミ「どんな夢を叶えるつもり？」

まどか、自分なりに思考を整理しようと努めつつ、たどたどしく語りはじめる。

まどか「私って、昔から、得意な学科とか、人に自慢できる才能とか、何にもなくて……きっとこれから先ずっと、誰の役にも立てないまま、迷惑ばかりかけていくのかなって……それが嫌でしょうがなかったんです」

マミ「……」

まどか「でも、マミさんと会って……誰かを助けるために戦ってるの、見せてもらって……同じことが、私にもできるかもしれないって言われて……何よりも嬉しかったのは、そのことで……」

黙って聞いているマミに、勇気を出して告白するまどか。

まどか「だから私、魔法少女になれたなら、それで願い事は叶っちゃうんです。こんな自分でも、誰かの役に立てるんだって、胸を張って生きていけたら……それが一番の夢だから……」

先を行くマミは、振り向くことなく問い返す。

マミ「……大変だよ？　怪我もするし、恋したり遊んだりしてる暇もなくなっちゃうよ？」

まどか「でも、それでも頑張ってるマミさんに……私、憧れてるんです」

立ち止まるマミ。

マミ「憧れるほどのもんじゃないわよ。私」

まどか「……？」

マミの背中を見守るまどか。その肩が震えているのに気付く。

マミ「無理してカッコつけてるだけで、恐くても、辛くても、誰にも相談できないし、独りぼっちで泣いてばっかり。いいものじゃないわよ。魔法少女なんて」

まどか「マミさんはもう独りぼっちなんかじゃないです」

マミ「そうね、そうなんだよね」

振り向いて、まどかの手を握るマミ。その目に光る涙を見て、やや驚くまどか。

マミ「本当に、これから……私と一緒に、戦ってくれるの？

側にいてくれるの？」
擦れた声で問うマミに、やや気後れしつつ、それでもきっぱりと頷くまどか。
まどか「はい。……私なんかで、良かったら」
マミは涙を堪えようとして、無理に照れ笑いを浮かべようとする。
マミ「まいったなぁ……まだまだちゃんと先輩ぶってなきゃいけないのになぁ……やっぱり私、駄目な子だ……」
まどか「マミさん……」
ようやく涙を引っ込めて、笑うマミ。
マミ「……でもさ、折角なんだし、願い事は何か考えておきなよ」
まどか「折角――ですかね、やっぱり」
冗談めかしたマミの声に、釣られて笑うまどか。
マミ「契約は契約なんだから、ものはついでと思っておこうよ。億万長者とか、素敵な彼氏とか、何だっていいじゃない」
まどか「いやあ、その……」
マミ「じゃあ、こうしましょ。この魔女をやっつけるまでに願い事が決まらなかったら、そのときはキュゥべえに、ごちそうとケーキを頼みましょ」
まどか「け、ケーキ？」
マミ「そう、最高におっきくて贅沢な、お祝いのケーキ。それでみんなでパーティーするの。私と鹿目さんの、魔法少女コンビ結成記念よ」
まどか「わ、私、ケーキで魔法少女に？」
マミ「嫌なら、ちゃんと自分で考える！」
まどか「ふえぇ……」

□結界最深部
さやかとキュゥべえが見守る眼前で、やおら変形しはじめるグリーフシード。そのおぞましさに息を呑むさやか。
キュゥべえ「マミ！　グリーフシードが動き始めた！　孵化が始まる――急いで！」

□結界迷路の途中
キュゥべえからのテレパシーを受けて、頷くマミ。
マミ「オッケー、わかったわ。今日という今日は速攻で片付けるわよ！」
まどか「わわ、そんな――」
魔力を抑える理由のなくなったマミは、魔法少女スタイルに変身。
まどかの手を引いて、疾風のように結界の迷路を駆け抜ける。
今更ながらマミたちの存在に気付く使い魔たちだが、勢いづいたマミの魔力で片っ端から吹き飛ばされていく。
マミM『身体が軽い――こんな幸せな気持ちで戦うなんて、

初めて』
切迫した状況にも拘わらず、微笑みを浮かべているマミ。
その笑みに勇気づけられたまどかも、マミの視線に微笑を返す。
マミM『もう何も恐くない。私――独りぼっちじゃないもの！』

□結界最深部
孵化直前のグリーフシードから後退るさやかとキュゥべえの前に、使い魔たちを蹴散らしながら駆け込んでくるマミとまどか。
マミ「お待たせ！」
さやか「ふぅ……間に合ったぁ」
キュゥべえ「気をつけて――出てくるよ！」
グリーフシード、孵化。現れ出る異形の魔女。
だがマミはまどかたちを庇いつつ、いつにない気迫で身構える。
マミ「せっかくのとこ悪いけど、一気に決めさせてもらうわよ！」
マミ、魔力の投網を発動。先手を打たれていきなり縛り上げられる魔女。
そのままマミは魔銃を魔砲へと変形させ、発射態勢に。
さやか「やった――」
だが今回の魔女は身体が伸縮自在な構造だった。いきなり伸び上がった首から先が、ちょうどマミの頭を丸呑みするほどに顎を拡げて、覆い被さってくる。
マミ「――え？」
信じられない、といった表情で硬直するマミ。
恐怖に目を見開くまどかとさやか。

□結界入口付近
マミの緊縛魔術に縛られていたほむら。
だがふいにマミの魔力が消失し、拘束から解放される。
ほむら「まさか……ッ！」
痛恨の面持ちで舌打ちするほむら。

□結界最深部
糸が切れた人形のように倒れ伏すマミの身体。（実は頭が無くなっているのだがアングルで誤魔化す方向で）
その上に、自由になった魔女の巨体が覆い被さり、隠す。
肉と骨を噛み砕き、呑み込む音。
まどかとさやかは恐怖のあまり固まって、目を逸らすことも、悲鳴を上げることもできない。
キュゥべえ「二人とも――今すぐ僕と契約を！」
叱咤するキュゥべえ。聞こえていても反応できない二人。
キュゥべえ「願い事を決めるんだ！　早く！」

マミの骸を食べ終えて、顔（？）を上げる魔女。その眼がまどかとさやかを見据える。
まどか「あ……」
死を覚悟する二人。
キュゥべえ「まどか！　さやか！」
ほむら「――その必要はないわ」
竦み上がった二人を背に庇って、魔女の前に立ちはだかるほむら。
ほむら「こいつを仕留めるのは、私――」
ほむら、変身シークエンス。魔法少女スタイルに。
予想だにしなかった救援に、呆然となるまどかとさやか。
魔女はマミのときと同様に、一瞬で伸縮する身体でほむらを捕らえようとする。
だがほむらは瞬間移動したかのように別の位置に。代わりに魔女が捕まえたのは起爆寸前の爆弾である。触手を吹き飛ばされ、絶叫する魔女。
ほむらは次々と瞬間移動を繰り返し、そのたびに次から次へと出現する置き土産の罠にひっかかり、一方的に翻弄される魔女。（ほむらは得意の時間静止魔術を駆使しているのだが、見守っているまどかやさやかには理解できない）
華麗だったマミの戦闘スタイルとは違い、冷酷かつ無駄のない戦略。全く違う次元の魔法戦闘を見せつけられるまどか。
ほむら「……ふん」
最後に何事もなかったかのように鼻を鳴らして、いきなり変身を解除するほむら。まどかたちの方に向き直る。
ほむら「命拾いしたわね、あなたたち」
さやか「な――」
ここぞとばかりに襲いかかる魔女。だがその周囲は、既に必殺の罠で完全に包囲されている。
背を向けたほむらの背後で、とどめを刺され、絶叫とともに消滅する魔女。
ほむら「目に焼きつけておきなさい。魔法少女になるって、そういうことよ」
半泣きになりながら、地面の一画（マミの死体がある辺り）を見つめているまどかとさやか。
魔女が消滅したことで、結界もまた消えていく。周囲は再び、もとの駐輪場の光景に。
後に残されたグリーフシードを、ほむらが拾い上げる。
それを見て、遣り場のない怒りに駆られるさやか。
さやか「……返してよ」
ほむら「……」
無言で見つめ返すほむらに、掴みかかるさやか。
さやか「返せよッ！　それは――それはマミさんのものだ！」
逆上するさやかを振り払い、そのまま冷ややかな眼差し

で見下ろすほむら。
ほむら「そうよ。これは魔法少女のためのもの。――あなたたちには触る資格なんて、ない」
言い放ち、そのまま去っていくほむら。
後には泣き崩れるさやかと、虚ろな目で立ち尽くすまどかが取り残される。
そしてキュゥべえは、絶望する二人ではなく、去っていくほむらの背中を、何やら物思いに耽りながら見送る。

第四話「奇跡も、魔法も、あるんだよ」

【Aパート】

□恭介の病室（過去）
　見舞いに訪れるさやか。だがベッドは空。
　その様子を、廊下を通りがかった看護師Aが見咎める。
看護師A「上条くんのお見舞い？」
さやか「ええ……」
看護師A「ああ、ごめんなさいね。診察の予定が繰り上がって、今ちょうどリハビリ室なの」
さやか「あ、そうでしたか。……どうも」
　ややしょんぼりしながら、会釈して去るさやか。
　そこへさらに通りかかる看護師B。Aと二人でさやかの背中を見送る。
看護師B「良く来てくれるわよね。あの子」
看護師A「助かるわ。難しい患者さんだしね。……励ましになってくれてるといいんだけど」

□リハビリ室（過去）
　歩行訓練をしている恭介。だが表情は暗く、渋々やらされている様子でいる。
看護師B off「事故に遭う前は、天才少年だったんでしょ？バイオリンの」
看護師A off「歩けるようになったとしても、指の方はねぇ……もう二度と楽器を弾くなんて、無理でしょうね」

□病院、エレベーター内（過去）
　一階ロビーへと戻るエレベーターの中。一人きりで乗っているさやか。
さやかM『……なんで、恭介なのよ？』
　ふと自分の左手を見下ろす。自在に動く5本の指を、悔しそうに握りしめる。
さやかM『あたしの指なんて、いくら動いたって何の役にも立たないのに……なんであたしじゃなくて、恭介なの？』
　だがそこで、気持ちを静めて考え直すさやか。
さやかM『もしもあたしの願い事で、恭介の身体が治ったとして……それを恭介は、どう思うの？』
　病室での恭介の笑顔と、彼のために買い集めてきたCDの山を思い出す。
さやかM『ありがとうって言われて、それだけ？　それとも、それ以上のことを言ってほしいの？』
　考えを巡らすうちに、自己嫌悪に駆られるさやか。
さやか「……あたしって、嫌な女だ」

□病院裏の駐輪場
三話ラスト直後。
グリーフシードを手に立ち去っていくほむら。
それを悔し泣きしながら見送るさやかと、放心しているまどか。
さやかM『思えば――そのときのあたしは、まだ何も分かっていなかった。奇跡を望む意味も、その代償も……』

□鹿目家ダイニングキッチン
一話と同じ鹿目家の朝食の風景。
タツヤの面倒を見つつ新聞を読みつつコーヒーを飲んでいる詢子と、甲斐甲斐しく配膳している知久。
だがまどかはぼんやりと目玉焼きを見つめるだけで、心ここにあらずの状態。
まどかの脳裏を過ぎるのは、昨日までマミと共に過ごした日々の記憶。
そして、マミを見舞った壮絶な最期。
詢子「――まどか。さっさと食べないと遅刻だぞ」
詢子の声に、はたと我に返るまどか。
まどか「う、うん……」
相変わらずぼんやりしたまま、目玉焼きに箸をつけるまどか。
だが一口食べた途端に、ぽろりと涙がこぼれる。
知久、詢子「……?」
さすがに様子がおかしいと気付く両親。
まどか、こらえきれずに、身を震わせてボロボロと泣き始める。
姉の様子にきょとんとするタツヤ。
タツヤ「ねーちゃ、どったの?」
知久「ま、不味かったかな……」
まどか「……ううん、おいしいの。すごく、おいしい……」
返事しながらも、まどかの涙は止まらない。
まどか「……生きてると……パパのごはんが、こんなに美味しい……」

□通学路
普段と変わらない平和な通学の風景。
並んで歩きながら談笑するまどか、さやか、仁美。
今日のキュゥべえはまどかの肩には乗らず、すぐ後ろをついて歩いている。
さやかはいつも通り活発に話題を振り、仁美を笑わせている。
さやか「でもってユウカったらさあ、それだけ言ってもまだ気付かないのよ。『え? 何? ワタシまた変なこと言った?』とか半ベソになっちゃって、こっちはもう笑い堪えるのに必死でさー」

まどか「……」
まどか、うすぼんやりした愛想笑いを浮かべたまま、話を聞き流しつつ、キュゥべえ経由のテレパシーで、さやかに呼びかける。
まどか『……さやかちゃん、昨日のこと……』
さやか『……ごめん。今はやめよ。また後で』
口調ばかりは明るさを保ったまま、思念では沈鬱に答えるさやか。
まどか「……」
上手く表面を取り繕えているさやかと、それができない自分との差に、ますます悲しくなるまどか。

□授業風景
英語の授業。担当は早乙女和子先生。
黒板に書かれた英文法のテキストを解説しているかに見えて、実はまったく関係ないことを喋っている。
和子「えー、確かに出産適齢期というのは医学的根拠に基づくものですが、そこからの逆算で婚期を見積もることは大きな間違いなんですねー。つまり30歳を越えた女性にも恋愛結婚のチャンスがあるのは当然のことですから、したがってここは過去完了形でなく現在進行形を使うのが正解で――」
授業に集中できないまどか。そっと横目にさやかを見遣る。
あえてまどかと視線を合わそうとしないさやか。切なくなるまどか。
そんなまどかの様子を、ほむらもまた見守っている。

□屋上
昼休み。フェンス際に並んで腰を下ろし、よりかかっている二人。ぼんやりと空を見上げているまどか。思い詰めた表情のさやか。
空気を読んで、ほんの少しだけ間をおいて座っているキュゥべえ。
まどか「なんか、違う国に来ちゃったみたいだね」
さやか「……」
まどか「学校も、仁美ちゃんも、昨日までとぜんぜん変わってない筈なのに……なんだかまるで、知らない人たちの中にいるみたい」
さやか「知らないんだよ。誰も」
冷めた声で言い捨てるさやか。普段と違うその口調に、やや怯むまどか。
さやか「魔女のこと、マミさんのこと。あたしたちは知ってて、他のみんなは何も知らない。それってもう、違う世界で、違うものを見て暮らしてるようなもんじゃない」
まどか「……さやかちゃん?」

さやか「とっくの昔に、変わっちゃってたんだ。もっと早くに気付くべきだったんだよ。あたしたちも」
まどか「……」
遠い眼差しで空を見つめるさやか。返す言葉もないまどか。
さやか「……まどかはさ、今でもまだ、魔法少女になりたいって思ってる？」
キュゥべえ「……」
さやかの問いに、キュゥべえもまどかに注目する。
まどか「……」
素直に『嫌だ』と言う勇気を出せないまどか。重い沈黙。察するさやか。
さやか「……そうだよね。うん、仕方ないよ」
まどか「……ずるいって、分かってるの。今さら虫が良すぎるよね……」
まどか、悔しさと情けなさで涙を溢す。
まどか「でも……無理。……わたし、あんな死に方……今でも思い出しただけで、息ができなくなっちゃうの……恐いよ……嫌だよぉ……」
さやか、隣にいるまどかの頭を抱き寄せ、肩を寄せあう。
キュゥべえも何も言えず、俯いている。
さやか「マミさん、本当に優しい人だったんだ。戦うためにどういう覚悟がいるのか、あたしたちに思い知らせるために、あの人は……」
マミへの追想に浸るさやかとまどか。
さやか、ややあってからキュゥべえを見る。
さやか「――ねぇキュゥべえ。この街、どうなっちゃうのかな？　マミさんの代わりに、これから誰がみんなを魔女から守ってくれるの？」
キュゥべえ「水らくここはマミの縄張りだったけど、空席になれば他の魔法少女が黙ってないよ。すぐにも他の子が魔女狩りのためにやって来る」
さやか「でもそれって、グリーフシードだけが目当ての奴なんでしょ？　あの転校生みたいに」
キュゥべえ「……確かに、マミみたいなタイプは珍しかった。普通はちゃんと損得を考えるよ。だれだって報酬は欲しいさ」
さらに何か言おうとするさやかに対し、機先を制して言い足すキュゥべえ。
キュゥべえ「でもそれを批難できるとしたら、それは同じ魔法少女としての運命を背負った子だけじゃないかな」
さやか「……」
それを言われては返す言葉もないさやか。
キュゥべえは溜息をついて、立ち上がる。
キュゥべえ「君たちの気持ちは分かった。残念だけど、僕だって無理強いはできない。お別れだね。僕はまた、僕

との契約を必要としてる子を探しに行かないと」
まどか「……ごめんね、キュゥべえ」
キュゥべえ「こっちこそ、巻き込んで済まなかった。短い間だったけど、ありがとう。一緒にいて楽しかったよ、まどか」
手を振って、姿を消すキュゥべえ。俯いたまま、繰り返すまどか。
まどか「ごめんね……」

□マミの住むマンション
夕方。学校帰りのまどか。マミの部屋の前に立ち、チャイムを押す。だがもちろん反応はない。
遠慮がちにドアノブに触れるまどか。鍵はかかっておらず、ドアは開いてしまう。

□マミの部屋
夕陽が差し込む無人の室内。帰る者がいなくなっても、生活臭は色濃く残っている。テーブルには飲みかけの紅茶と読みかけの本が放置されていたりする。
まどかは、自分の魔法少女変身妄想を書き綴ったノートを、そっとテーブルの上に置いて、背を向ける。
この部屋で談笑したマミの面影が蘇り、また涙を流すまどか。

まどか「……ごめんなさい……あたし、弱い子で……ごめんなさい……」
一人、孤独に泣き続けるまどか。

□マミの住むマンション
エントランス。泣き腫らした目で出てくるまどか。
すると道端に、ほむらが待ち構えている。やや面食らうまどか。泣いた痕跡を見咎められないかと慌てる。
まどか「ぁ……ほむら、ちゃん……」
ほむら「あなたは自分を責めすぎてるわ。鹿目まどか」
まどか「……え」
ほむら「あなたを批難できる者なんて誰もいない。いたら私が許さない」
ほむらは相変わらずの無表情だが、口調はむしろ優しい。
その意外さにますます呆然となるまどか。
ほむら「忠告、聞き入れてくれたのね」
まどか「……うん」

□住宅街
帰り道。夕陽の中を並んで歩く二人。
まどか「……私が、もっと早くにほむらちゃんの言うことを聞いてたら……」
ほむら「それで巴マミの運命が変わったわけじゃないわ」

まどか「……」
ほむら「でも、あなたの運命は変えられた。一人が救われただけでも、私は嬉しい」
ほむらの、思いもよらない感情的な言葉に、驚きつつも、ほだされるまどか。
まどか「ほむらちゃんは、さ……なんだか、マミさんとは別の意味で、ベテラン、って感じだよね」
ほむら「そうかもね。否定はしない」
やや訊きづらい問いを口にする前に、少しだけ緊張するまどか。
まどか「……昨日みたいに、誰かが死ぬとこ、何度も見てきたの？」
ほむら「そうよ」
まどか「……何人、ぐらい」
ほむら、わずかに間をおいて遠い眼差しになる。
ほむら「数えるのを諦めるほどに」
まどか「……」
素っ気ない、だが重すぎる返事に、しばし言葉を失うまどか。
ふと、抜け殻のようだったマミの部屋に思いを馳せる。
まどか「あの部屋、ずっと、あのままなのかな……」
ほむら「巴マミには遠い親戚しか身寄りがいないわ。失踪届が出るのは、まだ当分先でしょうね」
まどか「……誰も、マミさんが死んだこと、気付かないの？」
ほむら「仕方ないわ。向こう側で死ねば、死体だって残らない。こちらの世界では、彼女は永久に行方不明者のまま。
――魔法少女の最期なんて、そういうものよ」
俯くまどか。再び涙が溢れてくる。
まどか「……ひどいよ」
ほむら「……」
嗚咽するまどかを、無言で見守るほむら。
まどか「みんなのために、ずっと独りぼっちで、戦ってきた人なのに……誰にも気付いてもらえないなんて、そんなの……寂しすぎるよ……」
ほむら「そういう契約で、私たちはこの力を手に入れたの。誰のためでもない、自分自身の祈りのために戦い続けるのよ。誰にも気付かれなくても、忘れ去られても、それは仕方のないことだわ」
まどか「わたしは……覚えてる」
涙を拭いて、きっぱりと言うまどか。
まどか「マミさんのこと、忘れない……絶対に」
ほむら「そう……」
虚ろに、やや自嘲的に呟くほむら。
ほむら「そう言ってもらえるだけ、巴マミは幸せよ。羨ましいほどだわ」
まどか「……ほむらちゃんだって！」

ほむらの空虚な語調に、なぜか無性に切なくなり、まどかは強く断言する。
まどか「ほむらちゃんのことだって、わたしは、忘れないもん！　昨日、助けてくれたこと……ぜったい忘れたりしないもん！」
立ち止まるほむら。湧き上がる悲しみを堪えきれなくなり、俯いて表情を隠す。（別の時間軸を記憶していないまどかにしてみれば、それは何の悪意もない言葉だが、ほむらにとっては胸を抉られる発言である）
ほむらの様子の異変に気付き、立ち止まって振り向くまどか。
まどか「……ほむらちゃん？」
ほむら「……あなたは、優しすぎる」
まどか「え？」
ほむら、敢えて硬い表情を繕って顔を上げ、まどかを見据える。
ほむら「忘れないで。……その優しさが、もっと大きな悲しみを呼び寄せることもあるのよ」
まどか「……？」
まどか、何のことやら皆目見当もつかない。
ほむらはそのまま踵を返し、違う道へと去っていく。
かける言葉もなく、見送るしかないまどか。

【Bパート】

□恭介の病室
ベッドの上で、ヘッドホンを嵌め、窓の外の夕陽を眺めている恭介。ベッドサイドの椅子にはさやか。手には、今日も土産に買ってきたクラシックのCD。
さやか「……何を聴いてるの？」
恭介「亜麻色の髪の乙女」
さやか「……ああ、ドビュッシー？　素敵な曲だよね……」
返事はない。やや重い沈黙。戸惑いながらも言葉を続けるさやか。
さやか「あ、あたしって、ほら、こんなだからさぁ、クラシックなんて聴く柄じゃないだろって、みんなが思うみたいでさ。たまに曲名とか言い当てたら、すっごい驚かれるんだよね。意外すぎて尊敬されたりして、さ……」
恭介「……」
さやか「……恭介が、教えてくれたから……でなきゃあたし、こういう音楽ちゃんと聴こうと思うきっかけなんて、たぶん一生なかっただろうし……」
恭介「……さやかは、さ」
固い声で割り込んでくる恭介。さやか、思わず黙る。
さやか「……なぁに？」

恭介「さやかは、僕をいじめてるのかい？」
さやか「……」
さやか、いったい何を言われたのかすぐには理解できず、硬直する。
振り向いてさやかを見る恭介。冷たい怒りの眼差し。
恭介「なんで今でもまだ僕に音楽なんか聴かせるんだ？　嫌がらせのつもりなのか？」
訳も解らず、うろたえるさやか。
さやか「だって恭介、音楽が好きだから……」
恭介は、まるで自分の気持ちが通じていないことに、とうとう癇癪を起こす。
恭介「もう聴きたくなんかないんだよ！　自分で弾けもしない曲、ただ聴いてるだけなんて……僕は、僕は……」
怒りに任せて、左手をCDプレーヤーに叩きつける恭介。
皮膚が裂けて血が流れ、プレーヤーは粉々に。
さやか「や、やめてッ！」
慌てて恭介の左腕を掴み、制止するさやか。
恭介、悔しさの余り泣き崩れる。
恭介「……動かないんだ……もう、痛みさえ感じない……こんな手なんて……」
さやか「大丈夫だよ。きっと何とかなるよ」
さやか、恭介を励ましたい一心で、無理と知りつつ虚しい激励を続ける。

さやか「諦めなければ、きっといつか――」
恭介「諦めろって、言われたのさ」
泣きながら鼻を鳴らして自嘲する恭介。
恭介「もう演奏は諦めろってさ。先生から直々に言われたよ。今の医学じゃ無理だって」
さやか「……」
恭介「僕の手は、もう二度と動かない。奇跡か魔法でもない限り、治らない……」
やるせない想いに囚われていたさやかの眼差しに、ついに決意の光が灯る。
さやか「……あるよ」
恭介「……？」
さやか「奇跡も、魔法も、あるんだよ」
窓の外を見遣るさやか。
ベランダの手摺りに腰掛けてこちらを覗っているキュゥべえの姿が、さやかの目にだけは見える。

□駅前商店街、夜
雑踏の中、帰路を急ぐまどか。
頭の中では、先刻のほむらとの会話がリフレインしている。
まどか「ほむらちゃん……ちゃんと話せば、お友達になれそうなのに……どうしてマミさんとはケンカになっちゃ

ったのかな……」
ふと、少し先の人混みの中に、クラスメイトの仁美の姿があるのに気付くまどか。
まどか「あれ？　……仁美、ちゃん？」
小走りに追いついて、声をかけようとするまどか。
まどか「仁美ちゃん、今日はお稽古事は――」
仁美「……」
仁美、まどかの声など聞こえていないかのように無視。
様子が変だと気付くまどか。そして仁美の首筋に、二話のOLと同じ魔女の刻印を見咎める。
まどかM『！　あれ……あのときの人と同じ⁉』
慌てて仁美の前に回り込み、制止しようとするまどか。
まどか「仁美ちゃん！　ねえ、仁美ちゃんってば！」
ぼんやりしていた仁美の眼差しが、ようやく焦点を結ぶ。
仁美「――あら、鹿目さん、ごきげんよう」
まどか「ど、どうしちゃったの？　ねえ、どこに行こうとしてたの？」
仁美「どこって、それは――」
何かに魅入られた眼差しで、艶然と微笑む仁美。
仁美「ここよりも、ずっと良い場所、ですわ」
まどか「仁美ちゃん……」
仁美「――ああ、そうだ。鹿目さんも、ぜひご一緒に。ええ、そうですわ。それが素晴らしいですわ」
にこやかに呟いて、再び歩き出す仁美。まどかも放ってはおけず、仕方なくついていく。
まどかM『どうしよう……これって、まさか……』

□街外れ
次第に繁華街を外れていく仁美。
気がつくと仁美の他にも、一人、また一人と同じ方向へ歩いている人々がいるのに気付くまどか。
皆、首筋には魔女の刻印が刻まれている。
まどかM『ほむらちゃんに連絡できたら……あぁ、駄目だぁ、携帯の番号、わかんない……』
やがて一行は、郊外のうらぶれた小さな町工場へ。

□小さな町工場
作業場では、寂れた工場長とその家族が座り込み、ブツブツと譫言を呟いている。
工場長「そうだよ……俺ァ駄目なんだ……こんな小さな工場ひとつ、満足に切り盛りできなかった……今みたいな時代にさぁ……俺の居場所なんて、あるわけねえんだよなぁ……」
街から工場までやってきた人々、総勢15人余り。全員が作業場に入ったところで、シャッターが下ろされ、部屋が密閉される。

工場長の奥さんがバケツを用意し、そこにトイレ用の洗剤を注ぎ始める。
さらに別の一人が、持ち寄った塩素系漂白剤を手にして進み出る。

× × ×

まどかの回想。洗面所で危険な洗剤についてレクチャーする詢子。
詢子「いいか、まどか？　こういう塩素系の漂白剤はな、他の洗剤と混ぜるととんでもなくヤバいことになる。あたしら家族全員、猛毒のガスであの世行きだ。絶対に間違えるなよ」

× × ×

ようやく、彼らが何をしようとしているのか理解するまどか。
まどか「だ、駄目……それは駄目ッ！」
駆け寄って阻止しようとするまどかの手を、仁美が掴む。
仁美「邪魔してはいけません。あれは神聖な儀式ですのよ」
まどか「だって！　あ、あれ危ないんだよッ。ここにいる人たちみんな死んじゃうよ！」
仁美「そう、私たちはこれからみんなで素晴らしい世界へ旅に出ますの。それがどんなに素敵なことか分かりませんか？　生きてる身体なんて邪魔なだけですわ。鹿目さん、あなたもすぐに分かりますから」
仁美の言葉に、周囲の人々が気怠げな拍手を送る。
まどか「は――な、してッ！」
まどか、力ずくで仁美の手を振り払い、洗剤を入れたバケツを奥さんから奪い取る。
そしてそのまま窓へと駆け寄り、ガラスを割って、バケツを中身ごと外へと投げ捨てる。
ボトリ、と漂白剤のボトルを取り落とす自殺志願者。
まどか「――ふぅ」
安堵の吐息をつくまどか。だがすぐさま、猛烈な憎しみの気配に身を竦ませ、振り向く。
工場に集まった人々が、みな一様に目を殺意で滾らせ、まどかを包囲している。
まどか「う……ッ」
怯えながらも、退路を探すまどか。幸いにもすぐ隣にドアが。
考える暇もなくドアの中へと逃げ込むまどか。間一髪、殺到してくる暴徒たち。

□町工場の物置

咀嚼にドアの鍵をかけるまどか。外から大勢がドアを殴る音。
だがようやく周囲を見渡すことができたまどかは、逃げ込んだのが、窓一つない小さな物置だと気付く。絶体

絶命。
まどか「ど、どうしよう……どうしよう……」
狼狽するまどかの目の前で、部屋の片隅の空間が、妖しく歪む。
結界が開き、魔女が現れる前兆だと気付いて、こんどこそ恐怖に囚われるまどか。
まどか「や、やだ……そんなッ」
部屋の反対側の隅まで追い詰められ、腰を抜かすまどか。
だが異界化はじわじわと進行し、まどかの周囲の空間を侵食していく。
まどか「――いやだ……助けて……誰か……」
ついに周囲は完全に異界化。結界に取り込まれたまどかの前に、魔女が姿を現す。
まどか「……ッ!!」
悲鳴を噛み殺すまどか。
だがその脳裏には、諦観に冷めきった声が湧く。
まどかM『罰なのかな……これって』
記憶を掠めるマミのイメージ。
マミと交わした誓いの言葉と、その直後に訪れた無惨な離別。
まどかM『きっと、わたしが弱虫で、嘘つきだったから……バチが当たっちゃったんだ』
観念するまどか。泣きべそをかいたまま放心し、目を閉じる。
迫る魔女――だがそこに、闇を切り裂く光。
魔女「ギャァァァッ!!」
魔女の絶叫に、驚いて目を見開くまどか。
目の前には、たった今、魔女に会心の一撃を叩き込んだばかりの魔法少女が剣を構えている。
変身したさやかである。
まどか「……え?」
さやか、立て続けに剣で斬りつける。荒削りで力任せのファイティングスタイル。だがその勢いに圧倒され、魔女は手も足も出ない。
さやか「これで――トドメだぁッ!」
さやかの必殺技が炸裂。
絶叫とともに消滅していく魔女。

□街外れ
魔女の気配を察知して、夜道を駆けているほむら。
だが、目指す町工場の前まで来たところで、魔力が一気に散逸していくのを感知し、眉をひそめる。
ほむら「結界が……消えた?」

□町工場の物置
結界は解け、普通の空間に。物置の壁には大穴が開き、

外の街路が見えている。(さやかが乱入するため破壊した)
またドアを隔てた作業場では、仁美や工場長ほか、魔女に呼び寄せられた人々が全員、気を失って倒れている。
目の前の出来事がまだ信じられないでいるまどか。
まどか「さやか……ちゃん?」
さやか「やー、ごめんごめん。危機一髪ってとこだったね」
魔法少女スタイルのまま、普段の快活さで、まどかにニッコリと笑いかけるさやか。
まどか「その格好……」
さやか「ん? あー、アハハ、まぁ、何? 心境の変化、っていうのかな」
まどか「……」
不安げなまどか。それを励ますように、優しく微笑むさやか。
さやか「——大丈夫だって。初めてにしちゃ、上手くやったでしょ? あたし」
まどか「でも……」
そこへ、壁の大穴から、用心深い足取りでほむらが中に踏み込んでくる。
さやかの格好を見た途端、しまった、という顔で歯噛みするほむら。
ほむら「あなたは……」
さやかもほむらに対し、挑発的な笑みを投げかける。
さやか「ふん、遅かったじゃない。転校生」
まどか「ぁ……」
さっそく敵意剥き出しの二人を見比べて、ますます不安に苛まれるまどか。

□恭介の病室
消灯時間を過ぎた、闇の中。
ふと違和感に目を覚ます恭介。
恭介「……ん……?」
月明かりの中で、掲げた左手の指が、確かな手応えとともに動く。
寝惚け眼のまま、ぼんやりとその奇跡を眺める恭介。

□郊外・送電塔
繁華街の灯を遠くから見下ろす送電塔の頂上。
突風に煽られながら、平然と腰掛けて、クレープをむしゃむしゃ食べている魔法少女——佐倉杏子。
その隣には並んでキュゥべえが座っている。
キュゥべえ「まさか、キミが来るとはね……」
杏子「マミの奴がくたばったって聞いたからさァ、わざわざ出向いてやったってのに……何なのよ、ちょっと話が違うんじゃない?」

キュゥべえ「悪いけど、この土地にはもう新しい魔法少女がいるんだ。ついさっき契約したばかりなんだけどね」
杏子「何ソレ？　ちょぉムカツク……」
鼻を鳴らして、遠くの街を眺める杏子。
杏子「でもさー、こんな絶好の縄張り、みすみすルーキーのヒヨッコにくれてやるってのも癪だよねぇ」
キュゥべえ「どうするつもりだい？　杏子」
杏子「決まってんじゃん」
キュゥべえに向けて、邪な笑顔を投げかける杏子。
杏子「要するに、ブッ潰しちゃえばいいんでしょ？　その子」

第五話「後悔なんて、あるわけない」

【Aパート】

□病院屋上

夕陽の中、キュゥべえと向き合って対峙するさやか。

さやか「本当に、どんな願いでも叶うんだね……」

キュゥべえ「大丈夫。君の祈りは間違いなく遂げられる。じゃあ、いいんだね？」

さやか「うん。やって」

キュゥべえ、手を差し伸べてさやかの胸に触れる。

さやか「……ッ！」

痛みに似た衝撃に身を震わせるさやか。

キュゥべえが手を離すと、さやかの心臓の位置から、ゆっくりと光る球が浮かび上がり、空中に浮遊する。さやかのソウルジェム。

出現した宝石を、恐る恐る、両手で掴み取るさやか。

キュゥべえ「さあ、受け入れるといい。それが君の運命だ」

さやか「……」

決意に表情を引き締め、頷くさやか。

□朝の教室

朝のHR前、漫然と談笑している生徒たち。

仁美の机に、さやかとまどかが屯している。

ふわ、と欠伸をする仁美。

仁美「ああ、はしたない……ごめんあそばせ」

さやか「どうしたのよ仁美？　寝不足？」

仁美「ええ。ゆうべは病院やら警察やらで夜遅くまで……」

まどか「……」

息を呑みそうになるまどか。だがさやかは素知らぬ顔で続ける。

さやか「え～？　何かあったの？」

仁美「なんだか私、夢遊病っていうのか……それも同じような症状の人が大勢いて、気がついたらみんなで同じ場所に倒れていたんですの」

さやか「はぁ？　何ソレ？」

仁美「お医者様は集団幻覚だとか何とか……今日も放課後に精密検査に行かなくてはなりませんの。ああ、面倒臭いわ……」

さやか「そんなことなら学校休んじゃえば良かったのに」

仁美「駄目ですわ。それではまるで本当に病気みたいで、家の者がますます心配してしまいますもの」

さやか「さっすが優等生。偉いわぁ」

まどか「……」

からからと笑うさやか。まどかはそこまで厚顔に上辺を繕えず、決まり悪く沈黙する。
ほむら「……」
そんな二人を、やや離れた席から、無表情に観察しているほむら。

□河原の土手
放課後（土曜なので半ドンです）、土手の芝生に寝転がって青空を見上げているさやか。隣に座っているまどか。
さやか「んーッ、久々に気分いいわぁ。爽快爽快ッ！」
まどか「さやかちゃんはさ、……恐くは、ないの？」
さやか「ん？　そりゃ、ちょっとは恐いけど。まぁ昨日のヤツにはあっさり勝てたし」
あくまで笑顔のさやか。が、やや真面目な声で続ける。
さやか「もしかしたらまどかと仁美と――友達二人も同時に亡くしたかもしれないって、そっちの方がよっぽど恐いよね」
まどか「……」
さやか「だ・か・らッ」
身体を起こし、ビシッ、と格好つけてソウルジェムを構えて見せるさやか。
さやか「何つうかな。自信？　安心感？　ちょっと自分を褒めちゃいたい気分つうかね。まー舞い上がっちゃってますねーあたし。これからも見滝原市の平和は、この魔法少女さやかちゃんがガンガン護りまくっちゃいますからねー」
さやかが一人でテンションを上げまくる一方で、まどかはいまいち素直に笑えない。
まどか「後悔とか、ぜんぜんないの？」
さやか「そーねぇ……後悔っていえば、迷ってたことが後悔かな」
苦笑いしつつ、ややシリアスに過去を顧みてしまうさやか。
さやか「どうせだったら、もうちょっと早く、心を決めるべきだったな、って」
まどか「……」
まどかとさやか、共に思い出すのは、三話でのマミの最期。
さやか「あのときの魔女、あたしと二人がかりで戦ってたら、マミさんも死なないで済んだかもしれない」
まどか「わたし……」
まどか、マミの最後の戦いの前に、魔法少女になることを誓ったことを思い出す。魔法少女への道を志したのは、実はさやかよりまどかの方が先だったのだ。
まどか「……」
責められるべきは自分だ、と悔恨に泣きそうになるまど

か。
　そんなまどかの肩を、励ましの笑顔でこづくさやか。
さやか「さては、なんか変なこと考えてるな？」
まどか「……わたし……わたしだって……」
さやか「なっちゃった後だから言えるの。こーゆーことは」
　まどかの葛藤を和らげるために、あえて気安い口調で言い放つさやか。
さやか「『どうせなら』っていうのがミソなのよ。あたしはさ、なるべくして魔法少女になったわけ」
まどか「さやかちゃん……」
さやか「願い事、見つけたんだもの。命懸けで戦う羽目になったって構わないって、そう思えるだけの理由があったの。そう気付くのが遅すぎた、っていうのが、ちょっと悔しいだけでさ……」
　まどかに、にっこりと微笑みかけるさやか。
さやか「だから、引け目なんて感じなくていいんだよ。まどかは魔法少女にならずにすんだっていう、ただそれだけのことなんだから」
まどか「……」
　素直に納得はできないものの、ともかく頷くまどか。
　さやかは立ち上がり、気持ちよさそうに伸びをする。
さやか「ん～っ、さて、と。じゃぁそろそろ、あたしは行かないと」
まどか「？　何か用事があるの？」
さやか「まぁ。ちょっと、ね」
　何やら浮かれた表情のさやか。

□恭介の病室
　見舞いに来ているさやか。恭介は以前より明らかに血色がいい。
さやか「そっか。退院はまだなんだ……」
恭介「足のリハビリがまだ済んでないしね。ちゃんと歩けるようになってからでないと」
　不思議そうに、全治した左手をしげしげと眺める恭介。
恭介「手の方も、いったいどうして急に治ったのか、まったく理由が分からないんだってさ。だからもうしばらく、精密検査がいるんだって」
さやか「恭介自身は、どうなの？　どっか身体におかしなとこ、ある？」
恭介「いや、なさすぎて恐いっていうか……事故に遭ったのさえ悪い夢だったみたいに思えてくる。なんで僕、こんなベッドに寝てるのかな、って。……さやかが言った通り、奇跡だよね、これ」
　気まずげに目を伏せる恭介。
さやか「ん？　どしたの？」
恭介「さやかには……酷いこと、言っちゃったよね。いくら

気が滅入ってたとはいえ……」
にこやかに笑い飛ばすさやか。
さやか「変なこと思い出さなくていーの。今の恭介は大喜びしてて当然なんだから。そんな顔してちゃ駄目だよ」
恭介「うん。……なんか、実感なくてさ」
さやか「まあ、無理もないよね」
ちらり、と腕時計を確かめるさやか。
さやか「うん、そろそろかな」
恭介「？」
さやか「恭介、ちょっと外の空気、吸いに行こ」

□病院エレベーター
車椅子に乗せた恭介を押して、エレベーターに乗り込むさやか。
屋上の行き先ボタンを押す。やや不思議そうな恭介。
恭介「……屋上なんかに、何の用？」
さやか「いいから、いいから」

□病院屋上
屋上に出た恭介とさやかを出迎える人々——恭介の両親、主治医、そして手の空いていた病院のスタッフたち一同。
晴れやかな拍手。
恭介、初めは驚き戸惑うものの、やがて皆の祝福に照れはじめる。
恭介「みんな——」
さやか「本当のお祝いは、退院してからなんだけど……足より先に手が治っちゃったしね」
恭介の父親が進み出る。手にはバイオリンのケース。
やや狼狽える恭介。
恭介「それは——」
恭介の父「お前からは処分しろと言われていたが……どうしても捨てられなかったんだ。私は」
感極まりつつも、努めて平静を装っている恭介の父。（ちなみに恭介の師でもあります）
差し出されたバイオリンを、恐る恐る受け取る恭介。
恭介の父、目線で主治医の顔色を窺う。
まぁ大丈夫でしょう、と笑顔で頷く主治医。
恭介の父「さあ、試してごらん。怖がらなくていい」
恭介「……」
やや躊躇する恭介だが、やがて覚悟を決め、バイオリンを構えて弓を弦に当てる。
ゆっくりと演奏が始まるラフマニノフのヴォカリーズ。
初めは恐る恐る、だが次第に情熱的に。
まったく衰えていない天賦の才能。その場にいる全員が陶然と聞き惚れる。
諦めていた演奏の喜びに、涙を流しながら弾き続ける恭

介。
さやかM『マミさん……あたしの願い、叶ったよ』
その様子に、さやかは至福を噛み締めて、青い空を見上げる。
さやかM『後悔なんて、あるわけない……あたし、今、最高に幸せだよ……』
演奏が終わる。車椅子の上で精根尽きて、だが清々しく脱力する恭介。聴衆からはやんやの拍手喝采。
感激の涙に喉を詰まらせながら、苦笑いする恭介。
恭介「……駄目だなぁ……レッスン、サボりすぎちゃったから……全然、なってない……」
恭介の父「また、やり直せばいい。いくらでも練習すればいい」
恭介の父も、もはや涙を抑えきれない。
見守るさやかは、満ち足りた想いで、自分のソウルジェムを握りしめる。

□街のランドマークタワー、展望台
コイン式双眼鏡で、病院の屋上のさやかを観察している杏子。
双眼鏡は杏子のソウルジェムがめり込み、即製の魔道具と化している。
杏子「ふーん、あれがこの街の新しい魔法少女ね……」
手にしたワッフルをむしゃむしゃ食べながら、冷笑する杏子。
その隣にはキュゥべえ。
キュゥべえ「本当に彼女と事を構える気かい？」
杏子「だってチョロそうじゃん。瞬殺っしょ。あんなやつ」
双眼鏡から顔を上げ、ソウルジェムを引っこ抜く杏子。
途端に双眼鏡は魔力を失ってもとの姿に。
杏子「それとも何？　文句あるっての？　あんた」
キュゥべえ「……すべて君の思い通りにいくとは限らないよ。この街にはもう一人、魔法少女がいるからね」
杏子「へぇ？　何者なの、そいつ」
キュゥべえ「僕にもよく分からない」
杏子「ハァ？」
キュゥべえを恫喝するかのように眼差しを険しくする杏子。
杏子「どういうことさ。そいつだってあんたと契約して魔法少女になったんでしょ？」
キュゥべえ「そうとも言えるし、違うとも言える」
意味深にはぐらかすキュゥべえ。はったりではなく厄介な事情があるらしいと察して、眉を顰める杏子。
キュゥべえ「あの子は極めつきのイレギュラーだ。どういう行動に出るか、僕にも予想しきれない」
杏子「ハン……上等じゃないの」

不敵に笑って、残りのワッフルを口に放り込む杏子。
杏子「退屈すぎても何だしさ。ちったぁ面白味もないとねぇ」

【Bパート】

□ファーストフード店
まどか達の行きつけの店。今日はまどかとほむらが差し向かいに座っている。まどかは定番のバリューセットだが、ほむらはコーヒー単品の注文。
明らかに緊張してガチガチになっているまどか。
ほむら「話って、何?」
昨日と違ってあからさまに拒絶の雰囲気を放っているほむら。まどかは萎縮してしまい、話しづらい。
まどか「あのね、さやかちゃんの事、なんだけど……」
ほむら「……」
さやかの名前を聞いた途端、ますます冷淡な雰囲気を漂わせはじめるほむら。さらに慌てるまどか。
まどか「あ、あの子はね、思い込みが激しくて意地っ張りで、けっこうすぐに人とケンカしちゃったり……でもね、すっごくいい子なの。優しくて勇気があって、誰かのためと思ったら頑張りすぎちゃって……」
ほむら「魔法少女としては致命的ね」
まどか「そう……なの?」
ほむら、コーヒーを口に運んでから、あくまで冷淡に続ける。
ほむら「度を超した優しさは甘さに繋がるし、蛮勇は油断になる。そしてどんな献身にも見返りなんてない……それを弁えていなければ魔法少女は務まらない。だから巴マミも命を落とした」
まどか「そんな言い方やめてよ!」
思わずかっとなって反駁してから、口論しに来たのではないと思い直し、しゅんとなるまどか。
まどか「……そう。さやかちゃん、自分では平気だって言ってるけど……でももしマミさんのときと同じようなことになったら、って思うと……わたし、どうすればいいのか……」
ほむら「美樹さやかのことが、心配なのね」
こくん、と頷くまどか。
まどか「わたしじゃあ、もう、さやかちゃんの力になってあげられないから……だから、ほむらちゃんにお願いしたいの」
まどか、勇気を出して、真正面からほむらを見つめて頼み込む。
まどか「さやかちゃんと仲良くしてあげて。マミさんのときみたいに、ケンカしないで。魔女をやっつけるときも、

みんなで協力して戦えば、ずっと安全なはずだよね？」
ほむら「……」
無言のままコーヒーを啜るほむら。辛抱強く返事を待つまどか。
やがて、根負けしたほむらが口を開く。
ほむら「私は嘘をつきたくないし、できもしない約束をしたくもない」
まどか「……」
ほむら「だから、美樹さやかのことは諦めて」
きっぱり言い切るほむらに、悲しくなって目を潤ませるまどか。
まどか「……どうして、なの？」
ほむら「あの子は契約なんてするべきじゃなかった。たしかに私のミスよ。あなただけでなく彼女もきちんと監視しておくべきだった」
まどか「なら――」
ほむら「でも、責任を認めた上で言わせてもらうわ。今となっては、どうやっても償いきれないミスなの。死んでしまった人が帰ってこないのと同じこと」
淡々と、だが有無を言わせぬほむらの語調。まどかは納得できず、さりとて言い返すこともできず、ただ項垂れるしかない。
ほむら「一度魔法少女になってしまったら、もう救われる望みなんて、ない。……あの契約は、たったひとつの希望と引き換えに、すべてを諦めるってことだから」
まどか「……だから、ほむらちゃんも諦めちゃってるの？自分のことも、他の子のことも、全部？」
ほむら「ええ」
さも当然のように頷くほむら。
ほむら「罪滅ぼし、なんて言い訳はしないわ。私はどんな罪を背負おうと、私の戦いを続けなきゃならない」
ほむら、飲みかけのコーヒーの横に千円札を一枚置き、席を立つ。
ほむら「時間を無駄にさせたわね。ごめんなさい」
立ち去るほむら。まどかは遣り場のない悔しさに涙して、その場を動けない。

□さやかの私室
外出の準備を整えるさやか。いよいよ単独で初の魔女探し。
鏡の前で、両手で顔をひっぱたいて気合いを入れる。
その様子を見守っているキュゥべえ。
キュゥべえ「緊張しているのかい？」
さやか「まーねー。一つ間違えたら御陀仏なわけだし」

□美樹家のアパートの前

アパートを出たところで、さやかは、すぐ側の街灯の下で待っていたまどかの姿に気付く。
さやか「……まどか？」
まどか「さやかちゃん、これから、その……」
さやか「そ。悪い魔女を捜してパトロール。これも正義の味方の務めだからねー」
茶化して言うさやかだが、まどかは笑う気になれない。
まどか「一人で――平気なの？」
さやか「へーきへーき。マミさんだってそうしてたんだし。弟子としてそのぐらいはねー」
それを言われた途端、まどかは、孤独に耐えかねていたマミの本音を思い出す。
まどか「あ、あのねっ、わたし、何にもできないし、足手まといにしかならないって分かってるんだけど、でも……邪魔にならない所までいいの。行ける所まで、一緒に……連れてってもらえたら、って……」
さやか「……」
さやか、一旦きょとんとなってから、まどかの気持ちを理解して優しく微笑む。
さやか「頑張りすぎじゃない？」
まどか「ご、ごめん……駄目だよね。迷惑だってのは分かってたの……」
さやか「ううん。すっごく嬉しい」
さやか、まどかの手を握る。
はっとなるまどか。
さやか「ね……分かる？　手が震えちゃってさ。さっきから、止まらないの。情けないよね。もう魔法少女だってのに、一人だと心細いなんてさ……」
まどか「さやかちゃん……」
さやか「邪魔なんかじゃない。凄く嬉しい。誰かが一緒にいてくれるってだけで、あたし、すっごく心強いよ。それこそ百人力って感じ」
まどか「わたし……」
さやか「必ず守るよ。だから安心して、あたしの後についてきて。今までみたいに、一緒に魔女をやっつけよ」
まどか「……うん」
はにかみながら頷くまどか。
だがキュゥべえはあくまで冷静に、さやかに問う。
キュゥべえ「危険は承知の上なんだね？」
自信を込めて微笑むさやか。
さやか「あたしバカだから、一人だと無茶な出鱈目やらかしかねないし。まどかもいるんだって肝に銘じてれば、それだけ慎重になれると思う」
キュゥべえ「そうか……うん。考えがあっての事なら、いいんだ」
まどか「キュゥべえ……」

声をかけるまどか。キュゥべえはさやかの肩に乗ったまま振り向き、視線だけをまどかに向けて、思念を送ってくる。
キュゥべえ『君にも君の考えがあるんだろう？　まどか』
まどか「……」
さやか抜きの密談に、ぎょっとなるまどか。
キュゥべえ『さやかを守りたい君の気持ちは解る。実際、君が隣にいてくれるだけで、最悪の事態に備えた切り札を、ひとつだけ用意できるしね』
× × ×
無人のマミの部屋。テーブルの上に置き去りにされたまどかの変身構想ノート。
闇の中で、どこからともなく風が吹き、数々の空想図が描かれたページがぱらぱらと捲れ上がる。
× × ×
ごくり、と生唾を呑むまどか。
まどか『わたしは……』
キュゥべえ『今は何も言わなくていい。さやかもきっと反対するだろうし』
テレパシーで交わされるまどかとキュゥべえの会話に、さやかは全く気付かない。
含みを込めた微笑をまどかに送るキュゥべえ。
キュゥべえ『ただ――もし君が心を決めるときが来たら、僕の準備はいつでも整ってるからね』
まどか『……うん』

□結界内部
いつもの魔女の結界よりも狭くて不安定な異空間を進む
さやか、まどか、キュゥべえ。
キュゥべえ「この結界は、たぶん魔女じゃなくて使い魔のものだね」
さやか「楽に越したことないよ。こちとらまだ初心者なんだし」
まどか「あッ、あそこ！」
物陰に潜んでいる使い魔の姿を見つける一行。
使い魔「ギィッ、ギギッ！」
使い魔は侵入者を攻撃することすらせず、そのまま逃げに入る。
まどか「逃げるよ！」
さやか「任せて！」
さやか変身。
光弾を放ち、逃げる使い魔に追い打ち。
だがその攻撃が、不意に張られたバリアによって阻まれる。
まどか、さやか「えっ!?」
驚くまどかとさやか。唯一、状況を察したキュゥべえは

苦い顔。
逃げる使い魔とさやかとの間に割り込んできたのは、魔法少女スタイルの杏子。右肩に槍を担ぎつつ、左手では鯛焼きを食べている。
杏子「ちょっとちょっと、何やってんのさアンタ達」
小馬鹿にした呆れ顔の杏子。
その間に使い魔は逃げて、姿を消す。
さやか「な……逃がしちゃう！」
追おうとするさやかを、杏子の槍の切っ先が阻む。
その間に結界は解除され、周囲は人気のない裏路地の景色に。
杏子「見て分かんないの？　あれ魔女じゃなくて使い魔だよ。グリーフシードを持ってるわけないじゃん」
さやか「だって、あれ放っといたら、誰かが殺されるのよ！」
怒るさやかの剣幕に、ますます面倒臭そうに眉を顰める杏子。
杏子「だぁからさ、4、5人ばかり喰って魔女になるまで待ってての。そうすりゃちゃんとグリーフシードも孕むんだからさ。アンタ、タマゴ産む前のニワトリ絞めてどーすんのさ」
さやか「な……」
杏子の言葉に愕然となるさやか。その驚きはすぐさま怒りに。
さやか「魔女に襲われる人たちを……あんた、見殺しにするっていうの⁉」
呑気に鯛焼きを食べながら、呆れた風に歎息する杏子。
杏子「アンタさ、なんか大本から勘違いしてんじゃない？食物連鎖って知ってる？　ガッコーで習ったよねぇ？」
微笑みに邪悪さを覗かせる杏子。
杏子「弱い人間を魔女が喰う。その魔女をアタシたちが喰う。これが当たり前のルールでしょ。そういう強さの順番なんだから」
まどか「そんな……」
想像だにしなかった邪悪な思考に、震え上がるまどか。
さやか「あんたは……」
怒りのあまり言葉に詰まるさやか。
杏子「まさかとは思うけど――」
杏子は冷ややかな侮蔑の眼差しで、さやかとまどかを見据えながら、キュゥべえを顎で指す。
キュゥべえ、さりげなく、さやかから離れてまどかに身を寄せている。
杏子「やれ人助けだの正義だの……その手のおちゃらけた冗談かますために、ソイツと契約したわけじゃないよね？アンタ」
さやか「だったら何だってのよ！」
叫ぶと同時に剣で杏子に斬りかかるさやか。

だが杏子はさやかの動きを完全に見越して、右手一本で
揮った槍でガードする。
杏子「……ちょっとさぁ、やめてくれない？」
相変わらず鯛焼きを食べながら、余裕の笑顔でさやかの
剣を受け止めている杏子。さやかが渾身の力で押し込
もうとも、びくともしない。
杏子は笑顔を引っ込め、冷淡な殺意の無表情に。
杏子「遊び半分で首突っ込まれるのってさぁ……ほんとムカ
ックんだわ」
杏子はさやかの剣を振り払い、返す槍でさやかを一撃。
盛大に吹っ飛ばされるさやか。
さやか「あぐ……ッ！」
まどか「さやかちゃん！」
鼻で笑って踵を返す杏子。
杏子「フン、トーシロが。ちったぁ頭冷やせっての」
そのまま立ち去ろうとした杏子だが、ふと背後の気配に
眉を顰め、立ち止まって振り返る。
苦しそうに呻きながらも、立ち上がるさやか。
杏子「……おっかしいなぁ。全治三ヶ月、ってぐらいにはか
ましてやった筈なんだけど」
心配して戸惑うまどか。
まどか「さやかちゃん、平気なの……」
キュゥべえ「彼女は癒しの祈りを契約にして魔法少女になっ
たからね。ダメージからの回復力は人一倍だ」
さやか「誰が……あんたなんかに……」
杏子を睨み、怒りを込めて剣を構えるさやか。
さやか「あんたみたいなヤツがいるから、マミさんは……」
杏子「……うぜー、チョーうぜー」
鯛焼きの最後の一口を頬張って片付ける杏子。
さも鬱陶しそうに舌打ちしながら、両手で槍を構え直す。
杏子「つーか何？　そもそも口の利き方がなってないよねぇ。
先輩に向かってさぁ」
さやか「黙れぇッ！」
斬りかかるさやか。応戦する杏子。
撃ち合う剣と槍。だが両手で槍を繰るようになった杏子
は、ますます圧倒的である。
杏子「チャラチャラ踊ってんじゃねーよ、ウスノロ！」
一矢報いるのも叶わぬどころか、たちまち追い詰められ
るさやか。
まどか「さやかちゃん……ッ！」
キュゥべえ「まどか、近づいたら危険だ！」
容赦ない杏子の槍を何発も受けて、膝をつくさやか。
さやか「ぐッ……うッ……！」
杏子「言って聞かせて分からねー、殴っても分からねーバカ
となりゃ……あとは殺しちゃうしかないよねぇ！」
杏子が繰り出すとどめの一撃。すんでのところで避ける

さやか。
痛みに歯を食いしばっているものの、槍で受けた傷は、治癒魔術によってどんどん塞がっていく。
さやか「負けない……負けるもんかッ！」
再び愚直にも斬りかかっていくさやか。
痛ましいその姿が、まどかは正視に堪えない。
まどか「どうして……ねぇ、どうして？　魔女じゃないのに……どうして味方同士で戦わなきゃならないの⁉」
キュゥべえ「どうしようもない……お互い、譲る気なんてまるでないよ」
激しい剣戟。余裕の笑みの杏子。ますます傷つくさやか。
まどか「お願い、キュゥべえ、止めさせて……こんなのってないよ！」
キュゥべえ「僕にはどうしようもない。でも——」
言葉に含みを込めて、まどかを見つめるキュゥべえ。
キュゥべえ「どうしても、力ずくでも止めさせたいのなら、方法がないわけじゃないよ。まどか——どうする？」
まどか「……ッ！」
胸を押さえるまどか。怯えて足が震える。
キュゥべえ「あの戦いに割り込むには、同じ魔法少女でなきゃ駄目だ。でも君にならその資格がある。本当にそれを望むなら、ね」
まどかM『そうだ……わたしが、契約すれば……』

追い詰められていくさやか。
それを救いたいと思いつつ、最後の勇気を固められず、躊躇するまどか。
さやか、ついに両足を砕かれて倒れ伏す。治癒して立ち上がるよりも、杏子の次の攻撃が早い。
杏子「終わりだよ！」
さやか「く——」
まどか、自棄になり叫ぼうとする。
まどか「わたし……」
ほむら「——それには及ばないわ」
ふいにまどかの背後に現れて、告げるほむら。
はっとして振り向くまどかだが、既にほむらの姿はない。
同時に、槍を繰り出そうとしていた杏子も、立ち上がろうとしていたさやかも、何故かそれぞれ全然別の位置で、別の方向を向いている。空振りで終わる杏子の槍。（ほむらが時間を止めて細工しました）
杏子「な——ッ⁉」
さやか「え……？」
愕然となる二人。その中間に、平然と佇んでいる魔法少女スタイルのほむら。

第六話「こんなの絶対おかしいよ」

【Aパート】

□裏路地（五話より続き）

戦いの最中、思わぬ空振りに目を疑うさやかと杏子。
そんな二人の間には、魔法少女スタイルのほむらが佇んでいる。

まどか「ほむらちゃん……」

さやか「お、おまえ……」

杏子は直感で、ほむらに邪魔されたと悟り怒りをぶつける。

杏子「何しやがったテメェ！」

ほむら目掛けて振るわれる杏子の槍。
だがほむらは瞬間移動で杏子の背後に。

杏子「な――」

今度こそ血相を変え、飛び退いて振り向きながら身構える杏子。
無言で見つめ返すほむら。
杏子、ひとまず冷静さを取り戻し、不敵に微笑む。

杏子「そうか、アンタが噂のイレギュラーってやつか……妙な技を使いやがる……」

さやか「邪魔するなッ！」

ダメージから回復したさやかが、またも杏子へと斬りかかる。
即座に瞬間移動でさやかの背後に廻るほむら。さやかの首根っこを掴んで、後頭部に杖で一撃。

さやか「ぐぅ……ッ」

意識を失い、ぐったりとなるさやか。
ほむらはさやかの身体を放り捨て、再び杏子へと向き直る。

まどか「さやかちゃん！」

駆け寄って抱き起こすまどか。

キュゥべえ「大丈夫、気絶してるだけだ」

そう告げながらも、キュゥべえは油断なくほむらと杏子を注視している。
杏子はほむらの真意を計りかねて訝しげ。

杏子「……何なんだアンタ？　いったい誰の味方だ？」

ほむら「私は冷静な人の味方で、無駄な争いをする馬鹿の敵。――あなたは、どっちなの？　佐倉杏子」

杏子「ッ!?」

名乗ってもいないのに名前で呼ばれ、やや驚いて警戒する杏子。

杏子「――どこかで会ったか？」

ほむら「さあ、どうかしら」

杏子「……」
相手の正体不明ぶりにますます警戒を募らせる杏子。このまま事を構えるのは不利だと判断し、槍を退く。
杏子「手札がまるで見えないとあっちゃね……今日のところは降りさせてもらうよ」
ほむら「賢明ね」
素早く、隙を見せずに、一跳びでその場を離脱する杏子。ひとまずは危機が去ったものかと安堵しかかるまどか。
ほむらの表情をおそるおそる窺う。
まどか「助けて……くれたの？」
そんなまどかを、冷たく厳しい眼差しで一瞥するほむら。
ほむら「いったい何度忠告させるの？　どこまであなたは愚かなの？」
まどか「……」
返事に詰まるまどか。
ほむら「あなたは関わり合いを持つべきじゃないと、もうさんざん言って聞かせたわよね」
まどか「わたしは……」
ほむら「愚か者が相手なら、私は手段を選ばない」
まどか「ッ……」
まどかが警告を噛み締めるのを見届け、ほむらは踵を返し、その場を去る。
キュゥべえはまどかの背後から、ほむらを警戒の眼差しで眺める。
まどか「ほむらちゃん……どうして……」
キュゥべえ「何にせよ、彼女が何かを企んでいるのは確かだ。くれぐれも気をつけて」
去っていくほむらの背中を、涙目で見送るまどか。一方で、キュゥべえの視線はあくまで冷静。
キュゥべえM『暁美ほむら……君は、まさか……』

□さやかの部屋
四話で入手したグリーフシードに、自分のソウルジェムを触れ合わせるさやか。
ソウルジェムの濁りは消え、グリーフシードは黒みを増す。
キュゥべえ「これでまたしばらくは大丈夫だ」
黒く染まったグリーフシードを不気味そうに眺めるさやか。
さやか「うわぁ、真っ黒……」
キュゥべえ「もう危険だね。これ以上の穢れを吸ったら、魔女が孵化するかもしれない」
さやか「ええっ？」
キュゥべえ「大丈夫。貸して」
キュゥべえは、さやかから受け取った黒いグリーフシードを、背中の卵形ポケットに放り込む。光を発して、平

たくなるポケット。満腹そうにゲップをするキュゥべえ。
キュゥべえ「これでもう安全だ」
さやか「……食べちゃったの？」
キュゥべえ「これもまた僕の役目の一つだからね」
胸を張るキュゥべえ。だが、やや心配げな面持ちになって、さやかのソウルジェムを見る。
キュゥべえ「でも、また次にソウルジェムを浄化するためには、早く新しいグリーフシードを手に入れないと」
さやかは杏子のことを思い出して、顔を顰める。
さやか「これを綺麗にしておくのって、そんなにも大切なことなの？」
キュゥべえ「佐倉杏子は、強かっただろう？」
ずばり言われて、ますます表情を強張らせるさやか。
キュゥべえ「彼女は常にソウルジェムを最良のコンディションに保ってる。だからこそあれだけの魔力を発揮できる」
さやか「だからって、グリーフシードのために他の人を犠牲にするなんて……」
キュゥべえ「魔力を使えば使うほど、ソウルジェムには穢れが溜まるんだ。さやか、君がグリーフシードを集められない限り……杏子と戦っても勝ち目はないと思っていい」
さやか「う～ん、何だかなぁ……」
釈然としない思いで、天井を仰ぐさやか。
さやか「マミさんだって、充分なグリーフシードを持ってたわけじゃないんでしょ？　でもちゃんと戦えてたよね……やっぱアレ？　才能の違いとか、あるの？」
キュゥべえ「確かにそれは事実だね」
すげなく返答され、しょぼくれるさやか。
さやか「ずーるーいーっ、不公平だーっ」
キュゥべえ「こればかりは仕方ないよ。杏子は素質がある上にベテランだし、逆にまったく経験がなくても、才能だけで杏子以上の魔法少女になれる天才だっている」
さやか「誰よ、それ」
キュゥべえ「鹿目まどかさ」
さやか「……」
驚きと困惑の入り交じった表情で押し黙るさやか。
さやか「……まどかが？　それ本当？」
キュゥべえ「ああ。だから、もしどうしても杏子に対抗する戦力が欲しいなら、いっそまどかに頼んでみるのも手だよ。彼女が僕と契約すれば――」
さやか「ううん、駄目」
キュゥべえに皆まで言わさず、否定するさやか。
さやか「これは、あたしの戦いなんだ。あの子を巻き込むわけにはいかない……」
決意を込めて、ソウルジェムを見つめるさやか。

□繁華街の裏路地（昼）
昨夜の戦いから一夜明け、魔女の結界のあった辺りを調べているさやかとキュゥべえ。それを後ろから見守っているまどか。
裏路地のそこかしこには、戦闘の痕跡が残っている。それが目に留まるたび、さやかと杏子の戦いを思い出し、憂鬱になるまどか。
キュゥべえ「駄目だ。時間が経ちすぎてる。ゆうべの魔女を追う手がかりはなさそうだ」
さやか「そう……」
厳しい表情のさやか。その本気ぶりが、今となっては、まどかには恐い。
まどか「ねえ、さやかちゃん……このまま魔女退治を続けてたら、また昨日の子と会うんじゃないの？」
さやか「まぁ当然、そうなるだろうね」
さやかは既に覚悟を決めた表情。まどかは怯みそうになるものの、堪えて続ける。
まどか「だったらさ、先にあの子ともう一度会って、ちゃんと話をしておくべきじゃないかな……でないとまた、いきなりケンカの続きになっちゃうよ」
さやか「ケンカね……」
分かってない、とでも言いたげに失笑するさやか。
さやか「ゆうべのアレが、まどかには、ただのケンカに見えたの？」
まどか「……」
さやか「あれはね、正真正銘、殺し合いだったよ。お互い、ナメてかかってたのは最初だけ。途中からは、あいつも、あたしも、本気で相手を終わらせようとしてた」
まどか「そんなの……なおさら駄目だよ……」
さやか「だから話し合えって？　馬鹿言わないで。相手はグリーフシードのために人間を餌にしようって奴なんだよ。どうやって折り合いつけろっていうの？」
あくまで頑ななさやかに対し、まどかは必死に食い下がる。
まどか「さやかちゃんは、魔女をやっつけるために魔法少女になったんでしょ？　……あの子は魔女じゃない。同じ魔法少女なんだよ」
さやか「……」
まどか「探せばきっと、仲良くする方法だってあると思うの。やり方は違っても、魔女を退治したいと思う気持ちは同じでしょ？　昨日の子も……あと、ほむらちゃんも」
ほむらの名前を聞いて、さらなる怒りに表情を強張らせるさやか。
だがまどかは気づかずに、さらに先を続けてしまう。
まどか「マミさんだって、ほむらちゃんとケンカしてなかっ

たら……あんな風に死なずに済んだはずだよ」
さやか「そんなわけない！」
怒りに声を荒げるさやか。驚いて身を竦ませるまどか。
さやか「まどかだって、見てたでしょ？　あのときアイツは、マミさんがやられるのを待ってから魔女を倒しにきた。アイツはグリーフシードほしさにマミさんを見殺しにしたんだ！」
まどかの脳裏をよぎる回想。マミの魔術によって動きを封じられていたほむら。
まどか「それ……違うよ……」
さやか「あの転校生も、昨日の杏子ってヤツと同類なんだ。自分の都合しか考えてない。今なら分かるよ。マミさんだけが特別だったんだ。他の魔法少女なんて、あんなヤツらばっかりなんだよ」
まどか「そんな……」
何とか誤解を解こうとしどろもどろになるまどか。一方でさやかは、厳しい眼差しでまどかを正面から見据える。
さやか「ゆうべ逃がした魔女は小物だったけど、それでも人を殺すんだよ。次にあいつが狙うのはまどかのパパやママかもしれない。タッくんかもしれないんだよ？　それでもまどかは平気なの？　放っとこうとするヤツを許せるの？」
まどか「……」
言い返せないまどか。
さやか「あたしはね、ただ魔女と戦うためじゃなくて、大切な人を護るために、この力を望んだの。だから――もし魔女より悪い人間がいれば、あたし、戦うよ。たとえそれが魔法少女でも」
まどか「さやかちゃん……」
さやか「嫌なら、一緒に来なくてもいいよ。……見てて気持ちがいいものじゃないだろうしね」
まどかを残し、裏路地から出て行くさやか。
キュゥべえも、まどかに気を遣いつつ、さやかの後を追おうとする。
まどか「キュゥべえも、何とか言ってよ……」
まどかの言葉に、悲しげに首を振るキュゥべえ。
キュゥべえ「僕から言わせてもらえるのは、無謀すぎる、ってことだけだ。今のさやかじゃあ、暁美ほむらにも、佐倉杏子にも勝ち目はない。――でもね、さやかは聞き届けてくれないよ」

□ゲームセンター
ダンスゲームに興じている杏子。
足では余裕の身のこなしでパネルを踏みながら、手では淡々とポッキーを食べている。壁には『プレイ中の飲食はご遠慮ください』の張り紙。

そこに現れるほむら、杏子の気を惹くようなことはせず、静かにゲーム筐体の横に立つ。
杏子もまた、振り向くこともなくほむらの存在に気付く。それでも一瞥もくれず、目はゲーム画面に向けたまま。
杏子「よぉ……今度は何さ？」
ほむら「この街をあなたに預けたい」
ほむらの意外な言葉に、ポッキーを噛る杏子の手が一瞬だけ止まる。だがゲームは淡々と継続。
杏子「どういう風の吹き回しよ？」
ほむら「魔法少女には、あなたみたいな子が相応しいわ。美樹さやかでは務まらない」
鼻で笑う杏子。
杏子「フン、元よりそのつもりだけどさ……そのさやかって奴はどうする？　放っときゃ、またつっかかってくるよ？」
ほむら「なるべく穏便に済ませたい。あなたは手を出さないで。わたしが対処する」
しばらく黙々と、ポッキーを噛り続ける杏子。淀みなく鮮やかにクリアされていくゲームのステージ。
杏子「――まだ肝心なところを聞いてない」
普段の斜に構えた不敵さとは違い、いつになく真顔の杏子。
杏子「あんた何者だ？　一体、何が狙いなのさ？」
ほむら「……2週間後、この街に『ワルプルギスの夜』が来る」
やや眉をひそめる杏子。
杏子「なぜ分かる？」
ほむら「それは秘密。ともかく、そいつさえ倒せたら私はこの街を出て行く。あとはあなたの好きにすればいい」
杏子「ふぅん……」
納得する杏子。いよいよゲームのファイナル。鮮やかにステップを決める。
杏子「ワルプルギスの夜ね……たしかに一人じゃ手強いが、二人がかりなら勝てるかもな」
杏子、ダンスゲームを満点でクリア。不敵な笑みを浮かべつつ、ほむらにポッキーの箱を差し出す。
杏子「食うかい？」

【Bパート】

□まどかの寝室
明かりを消し、ベッドに入ったまま、まんじりともせず天井を見つめているまどか。
階下で、玄関のドアの開閉音。休日出勤のうえ午前様の詢子が、ようやく帰宅したらしい。続いてシャワーを使う物音。

しばし悩んでから、ベッドを抜け出すまどか。

□鹿目家ダイニングキッチン

テーブルには知久の書き置き――『お疲れ様。冷蔵庫にポテトサラダあります』

バスローブ姿の詢子、ポテトサラダを肴に、一人で水割りで晩酌中。

そこへ寝間着の上からガウンを羽織ったまどかがやって来る。

詢子「眠れないのかい？」

まどか「うん……ちょっといい？」

頷く詢子。まどかはキッチンから自分のグラスとジュースを取ってくる。

まどかが注いだジュースに詢子がアイスペールから氷を入れてやり、乾杯する母娘。お互いに慣れている。

一口ジュースに口をつけてから、語り出すまどか。

まどか「友達がね……大変なの。やってることも、言ってることも、たぶん間違ってなくて……なのに、正しいことを頑張ろうとすればするほど、どんどん酷いことになってくの……」

詢子「よくあることさ」

さらりと応じる詢子。

詢子「悔しいけどね、正しいことだけ積み上げていけばハッピーエンドが手に入るってわけじゃない。むしろ皆が皆、自分の正しさを信じ込んで意固地になればなるほどに、幸せって遠ざかってくもんだよ」

まどか「間違ってないのに、幸せになれないなんて……ひどいよ」

詢子「うん」

まどか「わたし、どうしたらいいんだろ？」

しばしグラスを見つめる詢子。

詢子「……そいつばっかりは、他人が口を突っ込んでも綺麗な解決はつかないねぇ」

まどか「……」

まどかは詢子を見つめて続きを待つ。娘が納得できていないと知り、溜息まじりに先を続ける詢子。

詢子「たとえ綺麗じゃない方法だとしても、解決したいかい？」

まどか「うん」

詢子「なら――間違えればいいのさ」

グラスを揺らし、氷で水割りを混ぜる詢子。

詢子「正しすぎるその子のぶんまで、誰かが間違えてあげればいい」

まどか「間違える……？」

詢子「ずるい嘘をついたり、恐いモノから逃げ出したり、でもそれが、後になってみたら正解だったって分かること

がある。本当に他にどうしようもないほどどん詰まりになったら、いっそ思い切って間違えちゃうのも手なんだよ」
まどか「それが、その子のためになるって……分かってもらえるかな？」
詢子「分かってもらえないときもある。特にすぐにはね。言ったろ？　綺麗な解決じゃないって。……その子のことを諦めるより、誤解される方がまだマシだと思うかい？」
まどか「……」
思い悩むまどかを前に、詢子は酒を口にしつつ、優しく微笑む。
詢子「まどか、あんたはいい子に育った。嘘もつかないし、悪いこともしない。いつだって正しくあろうとして頑張ってる。子供としてはもう合格だ。……だからね、大人になるまえに、今度は間違え方もちゃんと勉強しておきな」
まどか「勉強……なの？」
詢子「若いうちは怪我の治りも早い。今のうちに上手な転び方を覚えといたら、後々きっと役に立つよ。……大人になるとねー、どんどん間違えるのが難しくなっちゃうんだ。プライドとか責任とかね、護るモノ、背負ったモノが増えるほど、下手を打てなくなってくの」
まどか「ふぅん……」
詢子の言葉に考え込みながら、ゆっくりジュースを飲むまどか。
まどか「それって、辛くない？」
詢子「大人は誰だって辛いのさ。だから酒飲んでもいいってことになってんの」
冗談めかして笑う詢子。つられてまどかも笑う。
まどか「わたしも、早くママとお酒飲んでみたいなぁ」
詢子「さっさと大きくなっちゃいな。辛いぶんだけ楽しいぞぉ、大人は」

□恭介の病室
夕方。いつものように、見舞いの手土産を持って訪れるさやか。
だが恭介のベッドは空で、私物も綺麗に片付けられている。
さやか「……あれ？」
途方に暮れるさやか。その背中を見咎める看護師A。
看護師A「あら？　上条さんなら昨日退院したわよ」
さやか「そ、そうなんですか？」
看護師A「リハビリの経過も順調だったから、予定が前倒しになって――連絡、行ってなかったの？」
さやか「ええ、まぁ」

曖昧な愛想笑いでお茶を濁すさやか。

□上条家の前

夜。病院からそのままの足で、上条家の門前に立つさやか。

チャイムを押すかどうか、やや逡巡しているうちに、ふと微かにヴァイオリンの旋律を聞き咎める。

レッスンに没頭している恭介の演奏である。

さやか「……」

演奏に耳を澄ますさやか。ただ聞いているだけでも、大変な集中力で練習に入れ込んでいる恭介の気迫が伝わってくる。

とても邪魔できない、と思ったさやかは、寂しげに微笑んで、チャイムを押そうとしていた手を引っ込める。

そのまま帰ろうとするさやか。だがすぐさま、緊張の面持ちで立ち止まる。

さやかの行く手に、闇の中から街灯の光の中へと、ゆっくり歩み出てくる杏子。手にしたチュロスを囓っている。

杏子「――会いもしないで帰るのかい？　今日一日追いかけ回したくせに？」

さやか「おまえは……」

杏子「知ってるよ。この家の坊やなんだろ？　あんたがキュゥべえと契約した理由って。……まったく。たった一度の奇跡のチャンスを、クダラネェ事に使い潰しやがって」

さやか「お前なんかに……何が分かる！」

杏子「分かってねぇのはそっちだバカ。魔法ってのはね、徹頭徹尾、自分だけの望みを叶えるためのもんなんだよ。他人のために使ったところでロクなことにはならないのさ。――巴マミは、その程度のことも教えてくれなかったのかい？」

さやか「……ッ」

マミに全く同じことを諌められた記憶が蘇り、歯噛みするさやか。

杏子「惚れた男をモノにするなら、もっと冴えた手があるじゃない？　せっかく手に入れた魔法でさあ」

さやか「……なに？」

杏子「今すぐ乗り込んでいって、坊やの手も足も、二度と使えないぐらいに潰してやりな。もう一度、あんた無しでは何もできない身体にしてやるんだよ。そうすれば今度こそ坊やはアンタのもんだ。身も心も全部、ね」

さやか「……ッ」

怒りのあまり言葉を失うさやか。

杏子「気が退けるってんなら、アタシが代わりに引き受けてもいいんだよ？　同じ魔法少女のよしみだ。おやすい御用さ」

さやか「……絶対に……お前だけは絶対に、許さない……今度こそ必ず……ッ」
殺気立つさやかを前にして、不敵に笑う杏子。
杏子「場所を変えようか。ここじゃ人目に付きそうだ」

□鹿目家、まどかの私室
勉強机について宿題を片付けているまどか。
だがまったく集中できず、物思いに耽っている。脳裏をよぎるのは昨夜の詢子の言葉。
詢子M『――正しすぎるその子のぶんまで、誰かが間違えてあげればいい――』
まどか「そんなこと、言われても……」
そのとき、まどかの脳裏にキュゥべえからのテレパシーが届く。
キュゥべえ『まどか……まどか！』
ぎょっとして振り向くまどか。すると部屋の窓の外に、キュゥべえがしがみついている。
キュゥべえ『急いで！　さやかが危ない！　ついてきて！』

□高速道路上の跨道橋
4車線の高速道路を跨ぐ、小さな橋。眼下の高速道路は往来が激しく騒がしい一方で、橋の上は一種の死角となり、誰の目にも留まらない。

やや距離を置いて対峙するさやかと杏子。杏子は相変わらずチュロスを食べている。
杏子「ここなら遠慮はいらないよねぇ。いっちょ派手にいこうじゃない」
杏子、魔法少女スタイルに変身。さやかもまたソウルジェムを手に身構える。
そこに駆けつけるまどかとキュゥべえ。
まどか「待って、さやかちゃん！」
さやか「まどか……」
一瞬、虚を突かれるさやかだが、すぐにまた闘志の表情に戻る。
さやか「邪魔しないで。そもそもまどかは関係ない話なんだから」
まどか「駄目だよこんなの！　絶対おかしいよ！」
必死に制止するまどかに、冷笑を浴びせる杏子。
杏子「フン、ウザイ奴にはウザイ仲間がいるもんだねぇ」
ほむら「じゃあ、あなたの仲間はどうなのかしら？」
不意に杏子の背後に姿を現すほむら。忌々しげに舌打ちする杏子。
ほむら「話が違うわ。美樹さやかには手を出すなと言った筈よ」
杏子「あんたのやり方じゃ手緩すぎるんだよ。――どのみち、向こうはやる気だぜ」

ほむら「なら……」
変身するほむら。
ほむら「……私が相手をする。手出ししないで」
杏子「フン」
杏子、短くなったチュロスを掲げて、
杏子「じゃあコイツを食い終わるまで待ってやる」
ほむら「充分よ」
杏子とほむらのやりとりを聞いて、ますます怒るさやか。
さやか「舐めるんじゃ、ないわよ……」
ソウルジェムを掲げ、変身しようとするさやか。
見かねたまどかは、即座に覚悟を決める。
まどか「さやかちゃん――ごめん！」
いきなり横合いから、さやかの手の中のソウルジェムを奪い取るまどか。
さやか「なっ……!?」
さやかのみならず、杏子とほむらも呆気にとられる。
まどかは奪い取ったソウルジェムを、即座に跨道橋の下の高速道路へと投げ捨てる。
ソウルジェムは、たまたま真下を走っていたトラックの荷台にひっかかり、一瞬のうちに彼方へと運び去られていく。
ほむら「――まずいッ！」
血相を変えるほむら。いきなり瞬間移動（に見える時間操作）で姿を消し、トラックの後を追う。
さやか「まどか……あんた何てことをッ」
まどか「だって、こうしないと……」
まどかに食ってかかろうとするさやか。だが急に脱力し、まどかの腕の中に倒れ込む。
まどか「……さやかちゃん？」
何が起こったのか分からずきょとんとなるまどか。
さやかは虚ろな目をしたまま、身動きひとつしない。
キュゥべえ「今のはまずかったよ、まどか」
呆れ果てたかのように、かぶりを振るキュゥべえ。
キュゥべえ「よりにもよって友達を放り投げるなんて、どうかしてるよ」
まどか「何？　……何なの？」
強張った表情でずかずか歩み寄ってくる杏子。いきなり乱暴にさやかの首を掴む。
慌てて抵抗するまどか。
まどか「や、やめて！」
杏子「……どういうことだ、おい？」
杏子、まどかではなくキュゥべえに向けて、押し殺した声で問う。
杏子「こいつ、死んでるじゃねーかよ！」
驚きのあまり表情が凍りつくまどか。

□高速道路
さやかのソウルジェムを荷台に載せたまま先行するトラックを、連続テレポートで必死に追うほむら。(実際には何度も時を止め、そのたびに全力疾走を繰り返してます)

□跨道橋の上
依然、何の反応もないさやかの身体。呼吸も脈もない。
事態が理解できず呆然となるまどか。
まどか「さやかちゃん、ねぇ、さやかちゃん……起きて、ねぇ?」
何度もさやかの肩をゆするまどか。だがさやかの首は人形のようにぐらぐらと揺れるだけ。
まどか「ねぇ、ちょっと……どうしたの? ねぇ!? 嫌だよ、こんなの……さやかちゃぁん!!」
パニックに陥るまどか。杏子もまた、理解を超えた状況に焦る。
杏子「何がどうなってやがんだ、おい……」
キュゥべえ「君たち魔法少女が身体をコントロールできるのは、せいぜい100メートル圏内が限度だからね」
ただひとり、冷静なまま説明するキュゥべえ。
杏子「100メートル? 何のことだ? どういう意味だ!?」
キュゥべえ「普段は当然、肌身離さず持ち歩いてるんだから、こういう事故は滅多にあることじゃないんだけど……」
まどか「何言ってるのよキュゥべえ! 助けてよ! さやかちゃんを死なせないで!」
半狂乱でキュゥべえに訴えるまどか。だがキュゥべえは溜息まじりに、
キュゥべえ「まどか、そっちはさやかじゃなくて、ただの抜け殻なんだって」
まどか「え……」
途方に暮れるまどか。
キュゥべえ「さやかはさっき、君が投げて捨てちゃったじゃないか」
杏子「な……」
キュゥべえの言葉の意味を悟り、愕然と、自分のソウルジェムを見つめる杏子。
杏子「なん……だと?」

□高速道路
引き続き、トラックを追っているほむら。
何とかして荷台の端にしがみつき、上へと這い上がる。
キュゥべえoff「ただの人間と同じ壊れやすい身体のままで、魔女と戦ってくれなんて、とてもお願いできないよ」
荷台の片隅に引っかかっていたさやかのソウルジェムを掴み取るほむら。安堵の溜息。

キュゥべえoff「君たち魔法少女にとって、もとの身体なんていうのは外付けのハードウェアでしかないんだ。君たちの本体としての魂には、魔力をより効率よく運用できる、コンパクトで安全な姿が与えられてる」

□跨道橋の上

恐怖に顔を引き攣らせたまどかと杏子の前で、淡々と説明を続けているキュゥべえ。

キュゥべえ「魔法少女との契約を取り結ぶ僕の役目はね、君たちの魂を抜き取って、ソウルジェムに変えることなのさ」

杏子「てめぇは……なんてことを……」

怒りのあまりキュゥべえの耳を鷲掴みにする杏子。

杏子「ふざけるんじゃねぇ！　それじゃアタシたち、ゾンビにされたようなもんじゃないか！」

キュゥべえ「むしろ便利だろう？　心臓が破れても、ありったけの血を抜かれても、その身体は魔力で修理すればすぐまた動くようになる。ソウルジェムさえ砕かれない限り君たちは無敵だよ。弱点だらけの人体よりも、よほど戦いでは有利じゃないか」

まどか「ひどいよ……そんなの、あんまりだよ……」

だがキュゥべえは何ら悪びれた風もなく、むしろ心底途方にくれている。

キュゥべえ「……君たちはいつもそうだね。事実をありのままに伝えると、決まって同じ反応をする。訳が分からないよ。どうして人間はそんなに、魂の在処にこだわるんだい？」

杏子「……ッ」

怒りにわなわなと震える杏子。さやかの死体を抱いたまま、涙に暮れるまどか。

そこへ帰還するほむら。持ち帰ったソウルジェムを、さやかの手に握らせる。

直後、ぶるりと身震いして目を開けるさやか。

さやか「……あ……？」

しばらく状況が呑み込めず、さやかは途方に暮れて辺りを見回す。

さやか「……何？　何なの？」

第七話「本当の気持ちと向き合えますか？」

【Aパート】

□さやかの部屋

帰宅したさやか。

部屋でキュゥべえと二人きりになったところで、さやかはソウルジェムを勉強机の上に投げ置き、血相を変えて相手を問い詰める。

さやか「騙してたのね、あたしたちを……」

困惑するキュゥべえ。

キュゥべえ「僕は魔法少女になってくれって、きちんとお願いしたはずだよ。実際の姿がどういうものかは、説明を省略したけれど」

さやか「なんで教えてくれなかったのよ!?」

キュゥべえ「訊かれなかったからさ。知らなければ知らないままで、何の不都合もないからね。事実、あのマミでさえ最後まで気付かなかった」

さやかの剣幕に対して、キュゥべえは全く悪びれた様子もない。

キュゥべえ「そもそも君たち人間は、魂の存在なんて最初から自覚できてないんだろう？」

キュゥべえはさやかの頭を指差し、

キュゥべえ「そこは神経細胞の集まりでしかないし――」

続けて今度は胸を指差し、

キュゥべえ「――そこは循環器系の中枢があるだけだ。そのくせ生命が維持できなくなると、人間は精神まで消滅してしまう。そうならないよう、僕は君たちの魂を実体化し、手に取って、きちんと護れる形にしてあげた。少しでも安全に魔女と戦えるように、ね」

さやか「大きな……お世話よ！　そんな余計なこと……」

キュゥべえ「君は戦いというものを甘く考えすぎだよ」

呆れ果てた、とばかり溜息をつくキュゥべえ。

キュゥべえ「たとえばお腹に槍が刺さった場合、肉体の痛覚がどれだけの刺激を受けるかっていうとね……」

キュゥべえ、机の上に放置されたさやかのソウルジェムに触れて、何らかの魔力を送り込む。

さやか「ひっ――ッ!!」

途端に、腹に物凄い激痛を覚えて身体を折り曲げるさやか。

キュゥべえ「これが本来の『痛み』だよ。ただの一発でも動けやしないだろう？」

さやか「あ……う……」

痛みに悶えながら、五話での杏子との戦いを回想するさやか。

幾度となく身体に与えられた壊滅的なダメージを思い出し、身震いする。
そんなさやかを見つめながら、平然と説明を続けるキュゥべえ。
キュゥべえ「君が杏子との戦いで最後まで立っていられたのは、強すぎる苦痛がセーブされていたからさ。君の意識が肉体と直結してないからこそ可能なことだ。おかげで君はあの戦闘を生き延びることができた」
キュゥべえ、ソウルジェムから手を離す。
即座に苦痛から解放されるさやか。荒い呼吸で脱力する。
キュゥべえ「慣れてくれば完全に痛みを遮断することもできるよ。もっとも、それはそれで動きが鈍るから、あまりお勧めはしないけど」
さやか「……何でよ……どうしてあたしたちを、こんな目に……」
半泣きで訴えかけるさやかに、にっこりと微笑むキュゥべえ。
キュゥべえ「戦いの運命を受け入れてまで、君には叶えたい望みがあったんだろう？　それは間違いなく実現したじゃないか」

□学校、教室
朝、HR前。登校した生徒たちの喧噪。
そこに入ってくる早乙女先生。日直が号令をかける。
日直「きり～つ、礼～」
まどか、心配げに空っぽのさやかの席を見る。今日は登校しないのだろうか。

□さやかの部屋
カーテンを閉め切った暗い部屋。
頭から布団を被り、落ち込んでいるさやか。
布団の中で自分のソウルジェムを握りしめ、その輝きを見つめている。

□学校屋上
休み時間。フェンスによりかかっているまどかとほむら。
まどか「ほむらちゃんは……知ってたの？」
無言で頷くほむら。
まどか「どうして、教えてくれなかったの？」
ほむら「前もって話しても、信じてくれた人は、今まで一人もいなかったわ」
まどか「……」
何故いつもそうやって他人のことを諦めてばかりなのかと問い糾したくなるまどかだが、代わりに違う質問をする。
まどか「キュゥべえは、どうしてこんな酷いことをするの？」

ほむら「あいつは酷いとさえ思ってない。人間の価値観が通用しない生き物だから。何もかも、奇跡の正当な対価だと、そう言い張るだけよ」
まどか「ぜんぜん、釣り合ってないよ！」
思わず叫ぶまどか。
まどか「あんな身体にされちゃうなんて……さやかちゃんは、ただ好きな人の怪我を治したかっただけなのに……」
ほむら「奇跡であることに違いはないわ。不可能を可能にしたんだから」
あくまで冷静に応じるほむら。
ほむら「美樹さやかが一生を費やして介護しても、あの少年が再び演奏できるようになる日は来なかった。奇跡はね、本当なら人の命でさえ贖えるものじゃないのよ。それを売って歩いているのが、あいつ」
まどか、悔しいものの反論できない。ややあって、さらに別の質問を。
まどか「さやかちゃんは……もとの暮らしには、戻れないの？」
ほむら「……前にも言ったわよね。美樹さやかのことは諦めろって」
まどか「さやかちゃんは、私を助けてくれたの」
まどか、四話で魔女に襲われたときのことを回想する。
まどか「さやかちゃんが魔法少女じゃなかったら、あのときわたしも、仁美ちゃんも、死んでたの……」
ほむら「感謝と責任を混同しては、駄目よ」
あくまで情に流されることなく、きっぱりと言い切るほむら。
ほむら「あなたには彼女を救う手立てなんてない。引け目を感じたくないからって、借りを返そうだなんて、そんな出過ぎた考えは捨てなさい」
さやかの冷淡さが我慢ならず、身震いするまどか。
まどか「……ほむらちゃん、どうしていつも、そんなに冷たいの？」
ほむら「そうね……」
ほむら、手の中のソウルジェムを見下ろして、自嘲気味に微笑む。
ほむら「きっともう、人間じゃないから、かもね」
まどか「……」
他人だけでなく自分自身に対してさえ冷酷なほむらを、心底哀しく思うまどか。

□さやかの部屋
午後になっても布団から出られないさやか。
憂鬱な面持ちのまま、恭介のことを思う。
さやか「こんな身体になっちゃって……あたし、どんな顔して恭介に会えばいいのかな……」

そこへ不意に、脳裏に響く杏子からのテレパシー。
杏子『いつまでもしょぼくれてんじゃねーぞ、ボンクラ』
さやか「……ッ!?」
驚き、布団を払い除けて跳び起きるさやか。
窓に駆け寄って外を見下ろす。
家の前に、林檎を囓りながら佇んでいる杏子。片手には青果店の紙袋を抱えている。
杏子『ちょいと面貸しな。話がある』

□夕刻の街外れ
雑木林に覆われた丘の坂道。林檎片手に、先に立って歩く杏子。後からついてくるさやかに、無防備な背中を晒している。
さやかは舐められているのか、それとも何かの罠なのか判断がつかず、緊張した面持ちのままついていく。
杏子「あんたさぁ、やっぱり後悔してるの？　こんな身体にされちゃったこと」
さやか「……」
無言のさやかに構わず、杏子は話を続ける。
杏子「あたしはさ、まぁいいか、って思ってるんだ。なんだかんだで、この力を手に入れたから好き勝手できてるわけだし。後悔するほどのことでもないってね」
さやか「あんたは……自業自得なだけでしょ」
杏子「そうだよ。自業自得にしちゃえばいいのさ」
あっけらかんと応じる杏子。
杏子「自分のためにだけ生きてれば、何もかも自分のせいだ。誰を恨むこともないし、後悔なんてあるわけがない。そう思えば、大抵のことは背負えるもんさ」
さやか「……」
相変わらず杏子の真意が読めないさやか。
やがて二人は、丘の頂に。そこには廃墟と化した教会が建っている。

□教会の廃墟
玄関を蹴り開けて、中に入る杏子。後に続くさやか。
さやか「……こんな所まで連れてきて、何なのよ？」
杏子は手の中の林檎を弄びながら、どう切り出すか思案するかのように、祭壇の辺りをぶらぶら歩く。
杏子「ちょっとばかり長い話になる」
紙袋の中の林檎のひとつを、さやかへと放ってよこす杏子。
杏子「食うかい？」
さやか「……」
怒りを噛み殺し、投げ渡された林檎を放り捨てるさやか。
その途端、いきなり杏子がさやかの間合いに踏み込み、襟首を掴んで締め上げる。杏子はかってないほどに本

気の怒りの形相。
杏子「食い物を粗末にするんじゃねぇ……殺すぞ?」
さやか「……」
シニカルなばかりと思っていた杏子の豹変に、驚いてやや気圧されるさやか。
杏子はさやかから手を離すと、彼女が捨てた林檎を拾い、丁寧に汚れを拭ってから、袋に戻す。
呆気に取られているさやかを余所に、杏子は教会の中をぶらつきながら、想い出に耽る。
杏子「……ここはね、あたしの親父の教会だった」

□杏子の回想
往年の清潔な教会。古い蝋燭を取り替えて火を点している杏子の父。
幼い頃の杏子と妹も、雑巾掛けなどして掃除している。
微笑みを交わす父親と姉妹。
杏子off「正直すぎて、優しすぎる人だった。毎朝、新聞を読むたびに涙浮かべて、どうして世の中がよくならないのか、真剣に悩んでるような人でさ」
信徒席に座る信者たちを前にして、説教している父の姿。
杏子off「新しい時代を救うには、新しい信仰が必要だって、それが親父の言い分だった。だからあるとき、教義にないことまで信者に説教するようになった」
空っぽになった教会。
呆然としている杏子の父。
杏子off「勿論、信者の足はぱったり途絶えたよ。本部からも破門された」
次第に荒れ果てて、廃墟じみていく教会。
杏子off「誰も親父の話を聞こうとしなかった。当然だよね。はたから見れば胡散臭い新興宗教さ。どんなに正しいことを、当たり前のことを話そうとしても、世間じゃただの鼻つまみものさ」
みすぼらしい姿のまま、信徒たちの家を巡回して説教しようとする杏子と父。だが冷たく門前払いであしらわれる。
杏子off「あたしたちは一家揃って、食うモノにも事欠く有様だった」
佐倉家の食卓。水のようなスープだけしかない侘びしい夕食。
杏子off「納得できなかったよ。親父は間違ったことなんて言ってなかった。ただ、人と違うことを話しただけだ」
夜の街の賑わいの中を、失意のまま歩く父娘。
周囲で笑顔の通行人たちは、二人にまったく目もくれない。
杏子off「5分でいい、ちゃんと耳を傾けてくれれば、正しいことを言ってるって、誰にでも分かったはずなんだ。

……なのに誰も相手をしてくれなかった。真面目に取り合ってくれなかった」
寂れた教会の信徒席に、肩を落として立っている杏子の父。
杏子off「……悔しかった。許せなかった。誰もあの人のこと分かってくれないのが、あたしには我慢できなかった」
やせ衰えて、街を歩く杏子。ふと目に留めた果物屋で、飾ってある林檎に我慢が出来ず、万引きしようとする。
あっさり見つかり、店員に手ひどく殴られる杏子。

□廃墟の教会・現在
手にした林檎を見つめている杏子。
杏子「だから、キュゥべえに頼んだんだよ。……みんなが親父の話を、真面目に聞いてくれますように、って」
さやか「……」
意外すぎる真相に、驚きを隠せないさやか。

□杏子の回想
いきなり大勢の信徒が列を成している教会。
杏子off「翌朝には、親父の教会は押しかけた人でごった返してた。毎日おっかなくなるほどの勢いで信者は増えてった」
夜の街、颯爽と魔女たちを狩っている魔法少女スタイルの杏子。
杏子off「あたしはあたしで、晴れて魔法少女の仲間入りさ」
満場の信徒を前にして、意気揚々と説教する杏子の父。
杏子off「いくら親父の説教が正しくたって、それで魔女が退治できるわけじゃない。だからそこはあたしの出番だって、バカみたいに意気込んでたよ。あたしと親父で、表と裏から、この世界を救うんだって……」

□廃墟の教会・現在
ザク、と林檎を囓ってから、ニヒルに笑う杏子。
杏子「でもね、あるとき、カラクリが親父にばれた」
さやか「……」
杏子「大勢の信者が、ただ信仰のためじゃなく、魔法の力で集まってきたんだと知ったとき、親父はブチ切れたよ。娘のあたしを、人の心を惑わす魔女だって罵った。笑っちゃうよね。あたしは毎晩、本物の魔女と戦い続けてたってのに」

□杏子の回想
佐倉家のダイニングキッチン。飛び散った血痕。
首を吊った父の足先が宙で揺れている。
部屋の入口で、それを呆然と眺めている杏子。
杏子off「それで親父は壊れちまった。最後は惨めだったよ。

酒に溺れて、頭がイカレて、とうとう家族を道連れに無理心中さ。あたし一人を置き去りにして、ね」

□廃墟の教会・現在

食べ終わった林檎の芯を、ぽいと床に放り捨てる杏子。

杏子「あたしの祈りが、家族を壊しちまったんだ」

さやか「……」

さやか、真相にショックを受けて返す言葉もない。

杏子「他人の都合を知りもせず、勝手な願い事をしたせいで、けっきょく誰もが不幸になった。——そのとき心に誓ったんだよ。もう二度と、他人のために魔法を使ったりしない。この力は、すべて自分のためだけに使い切る、って」

【Bパート】

□廃墟の教会・現在

【Aパート】より継続。

杏子はさやかの方へと向き直り、穏やかに語り聞かせる。

杏子「奇跡ってのはタダじゃないんだ。希望を祈れば、それと同じぶんだけの絶望が撒き散らされる。そうやって差し引きをゼロにして、世の中のバランスは成り立ってるんだよ」

さやか「……なんでそんな話を、あたしに？」

床を見つめたまま問うさやか。

杏子「……」

やや気恥ずかしいのを誤魔化すために、いったん黙る杏子。

袋から新しい林檎を取り出す。

杏子「これ以上、後悔するような生き方を続けるべきじゃない。あんたはもう、対価としては高すぎるモンを支払っちまってるんだ。だからさ、これからは釣り銭を取り戻すことを考えなよ」

さやか「……あんたみたいに？」

杏子「そうさ」

杏子は手にした林檎に口をつけず、さやかを見つめている。もう一度、さやかにそれを受け取って欲しいと思っている。

杏子「あんたも開き直って、好き勝手にやればいい。自業自得の人生を、さ」

杏子が完全な悪人ではないと理解し、微笑するさやか。

少しだけ皮肉を込めて言い返す。

さやか「……それって、変じゃない？　あんたは自分のことだけ考えて生きてるはずなのに、どうしてあたしの心配なんかしてくれるわけ？」

杏子「……」
鼻白むものの、杏子は言い返さない。あくまで真摯に本題を続ける。
杏子「あんたもあたしも、同じ間違いから始まった。……あたしはそれを弁えてるが、アンタは今も間違え続けてる。見てられないんだよ。そいつが」
さやか、ようやく向き直り、正面から杏子を見つめる。
さやか「あんたのこと、色々と誤解してた。そのことはごめん。謝るよ」
杏子「……」
ちょっとだけ嬉しそうに微笑みそうになる杏子。だが、さやかは真顔で先を続ける。
さやか「でもね、あたしは人のために祈ったことを、後悔してない。その気持ちを嘘にしないために、後悔だけはしないって決めたの。これからも」
杏子「何でアンタは……」
分からないんだ？　と言いたくなる杏子だが、さやかの言葉を遮れない。
さやか「あたしはね、高すぎるものを支払ったなんて思ってない。この力は、使い方次第で、いくらでも素晴らしいモノにできるはずだから」
杏子「……」
さやか「それからさ――」
さやか、杏子から目を逸らし、やや口調を硬くして、
さやか「あんた、その林檎はどうやって手に入れたの？　お店で払ったお金はどうしたの？」
杏子「……」
当然、合法的ではないので言いよどむ杏子。
さやか「……言えないんだね。ならあたし、その林檎は食べられない。もらっても嬉しくない」
さやか、杏子に背を向けて、教会の廃墟を出て行こうとする。
たまらず、その背中に向けて叫ぶ杏子。
杏子「バカヤロウ！　あたしたち魔法少女だぞ！　他に同類なんていないんだぞ！」
足を止め、やや悔しそうに俯くさやか。
さやか「あたしは、あたしのやり方で戦い続けるよ。それがあんたの邪魔になるなら、前みたいに殺しに来ればいい。あたしは負けないし、もう恨んだりもしないよ」
そう言い残し、教会を出て行くさやか。
杏子、悔しさに歯噛みしつつ、八つ当たりのように林檎に噛みつく。

□朝の通学路
一人、とぼとぼと歩いて登校途中のさやか。
その後ろからまどかと仁美が追いつく。

まどか「さやかちゃん、おはよ！」
仁美「おはようございます。さやかさん」
さやか「あ、ああ。――おはよっ」
普段の元気を取り繕って、挨拶を返すさやか。
その空元気を見透かして、少しだけ心配になるまどか。
仁美「昨日はどうかしたんですの？」
さやか「ん～、ちょっとばかり風邪っぽくてね」
まどか「さやかちゃん……」
大丈夫？　と言いかけるまどかに、念話で先回りするさやか。
さやか『大丈夫だよ。もう平気。心配いらないから』
まどか「……」
さやか「さーて、今日も張り切って――」
言いかけるさやかだが、松葉杖をつきながら登校途中の恭介の姿を見つけ、思わず硬直する。
仁美「あら……上条くん、退院なさったんですの？」
驚く仁美。
恭介は杖での歩行に苦労しつつも、行き合うクラスメイトたちと朗らかに挨拶を交わしている。
さやか「……」
喜びよりも気まずさが先に立つさやかの表情。それを見咎めたまどかの顔も、やや曇る。

□学校・教室
HR前の賑わい。
久々に登校してきた恭介の机の周りに、クラスメイトたちが集まっている。
中沢「上条……もう怪我はいいのかよ？」
恭介「ああ。家に籠もってたんじゃリハビリにならないしね。来週までに松葉杖なしで歩くのが目標なんだ」
そんな恭介を巡る話の輪に、さやかは気後れして入っていけず、遠巻きに眺めている。隣にはまどかと仁美。
まどか「良かったね、上条くん」
さやか「うん……」
まどか「さやかちゃんも、行ってきなよ。まだ声かけてないんでしょう？」
さやか「あたしは……いいよ」
仁美「……」
普段と違って元気のないさやかが、心配になるまどか。
仁美は仁美で、そんなさやかを見つめながら、何やら考え込んでいる。

□ファーストフード店
放課後の寄り道。仁美とさやかが差し向かいに座っている。そこはかとなく緊張した空気。
さやか「……それで、話って、なに？」

仁美「恋の、相談ですわ」
思い詰めた風に告げる仁美。つられて緊張の面持ちのさやか。
仁美「私ね、前からさやかさんやまどかさんに秘密にしてきたことがあるんですの」
さやか「え？　うん……」
仁美「ずっと前から……私、上条恭介くんのことお慕いしてましたのよ」
衝撃を受けて目を見張るさやか。
さやか「そ、そうなんだ……」
ともかく動揺を押し隠そうとするさやかだが、上手くいかない。
さやか「あ、ハハ……まさか仁美がねぇ。な～んだ、恭介のヤツも隅に置けないなぁ」
すべて見透かしている仁美は真顔のまま。
仁美「さやかさんは、上条くんとは幼馴染みでしたわね」
さやか「んん、まぁ、その……腐れ縁っていうか、何ていうか……」
仁美「本当に、それだけ？」
さやか「……」
言い繕えなくなり、生唾を呑むさやか。
仁美「私、決めたんですの。もう自分に嘘はつかないって。あなたはどうですか？　さやかさん、あなた自身の本当の気持ちと向き合えますか？」
さやか「な……何の話をしてるのさ……」
仁美「あなたは、私の大切なお友達ですわ。……だから抜け駆けも、横取りするようなこともしたくないんですの」
毅然と言い放つ仁美に気圧されて、声も出せないさやか。
仁美「上条くんのことを見つめていた時間は、私より、さやかさんの方が上ですわ。だからあなたには私の先を越す権利があるべきです」
さやか「仁美……」
仁美「私、明日の放課後に上条くんに告白します。丸一日だけお待ちしますわ。その間に……さやかさんは後悔なさらないよう、決めて下さい。上条くんに気持ちを伝えるべきかどうか」
さやか「あ、あたしは……」
仁美は席を立ち、さやかに一礼して去っていく。

□美樹家のアパートの前
夜、悄然としながらも、魔女探しのために外に出てくるさやか。その後に続くキュゥべえ。
すると五話のときと同様に、まどかが街灯の下で待っている。
それに気付いて、やや驚くさやか。
さやか「まどか……」

CONTENTS

魔法少女まどか☆マギカ　シナリオ決定稿　007
第一話「夢の中で逢った、ような……」　008
第二話「それはとっても嬉しいなって」　022
第三話「もう何も恐くない」　036
第四話「奇跡も、魔法も、あるんだよ」　050
第五話「後悔なんて、あるわけない」　064
第六話「こんなの絶対おかしいよ」　076
第七話「本当の気持ちと向き合えますか?」　090
第八話「あたしって、ほんとバカ」　104
第九話「そんなの、あたしが許さない」　118
第十話「もう誰にも頼らない」　132
第十一話「最後に残った道しるべ」　146
第十二話「わたしの、最高の友達」　160

魔法少女まどか☆マギカ　シナリオ0稿／考察　173
シナリオから絵コンテへ　213

魔法少女という存在　229

虚淵玄&新房昭之インタビュー　シナリオへの想い　261

まどか「ついてって、いいかな？」
さやか「……」
全てに見捨てられたかのような気分で、自分の価値を見失いつつあるさやかは、まどかの優しさに戸惑うしかない。
まどか「さやかちゃんに、独りぼっちになってほしくないの。だから……」
上手く言えないまどか。だがさやかの目から涙が溢れ出る。
さやか「あんた、何で……何でそんなに、優しいかなぁ……あたしには、そんな価値なんてないのに……」
まどか「そんな――」
とめどなく泣くさやか。自責の念に歯止めが利かない。
さやか「あたしね、今日、後悔しそうになっちゃった」
まどか「……」
さやか「あのとき仁美を助けなければって……ほんの一瞬だけ、思っちゃった……正義の味方、失格だよ……マミさんに、顔向けできない……」
見ていられなくなって、さやかを抱きしめるまどか。
さやか「仁美に、恭介を取られちゃうよ……でもあたし、何もできない……」
まどかの腕の中で、泣きじゃくるさやか。
さやか「だってあたし、もう死んでるんだもん、ゾンビだもん……こんな身体で、抱きしめてなんて言えない……キスしてなんて、言えない……」
まどか「……ッ」
まどかも釣られて泣きながら、それでも慰めの言葉ひとつ言えない。
二人はしばしの間、抱き合ったまま、ただ涙を流し続ける。

× × ×

ややあって、ようやく泣きやむさやか。まどかの腕の中から身を離す。
さやか「……ありがと。ごめんね」
まどか「さやかちゃん……」
さやか「もう大丈夫。すっきりしたから」
涙を拭い、気丈に微笑むさやか。
さやか「さあ、行こ。今夜も魔女をやっつけないと」
まどか「……うん」

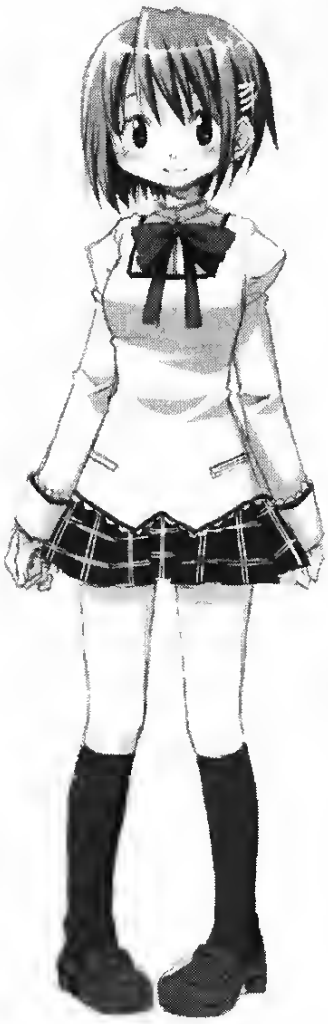
□倉庫街

誰もいないコンテナの谷間に、魔女の結界を示す空間のゆらぎがある。
結界内の激しい戦いを暗示するかのように、時折、小さな放電が散っている。
その様子を、頭上に聳えるクレーンの上に腰掛けて眺め

ている杏子。暗鬱な無表情のまま、アイスキャンデーを食べている。
さらにそこにほむらが姿を現し、杏子の背後に立つ。
ほむら「黙って見てるだけだなんて、意外だわ」
杏子「……今日のあいつは使い魔じゃなくて魔女と戦ってる。ちゃんとグリーフシードも落とすだろ。無駄な狩りじゃないよ」
ほむら「そんな理由で、あなたが獲物を譲るなんてね」
杏子「……」
杏子が言い返そうとしたとき、結界の歪みが、ひときわ激しく脈動する。舌打ちする杏子。
杏子「あの馬鹿、手こずりやがって……」

□結界内部
魔女と熾烈な戦いを演じているさやか。その後ろで見守っているまどかとキュゥべえ。
使い魔よりはるかに強力な魔女との戦いは久々で、さやかは苦戦を強いられる。見守るまどかも気が気ではない。
さやか「くッ……」
さやか、ついに強力な攻撃を立て続けに食らい、膝をつく。無防備なその隙に、とどめの一撃を浴びせようとする魔女。
まどか「さやかちゃん、危ない……!」
だがそこに、横合いから割り込んだ杏子の一撃が炸裂する。吹き飛ばされる魔女。
杏子「まったく……見てらんねーっつーの」
アイスキャンデーを咥えたまま、鼻を鳴らす杏子。
杏子「いいからもう、すっこんでなよ。手本を見せてやるからさ……」
さやかを背後に庇ったまま、槍を構える杏子。
だが立ち上がったさやかは、ゆっくりと杏子を押しのけて前に出る。
杏子「おい――」
さやか「邪魔しないで。一人でやれるわ」
再び攻撃を仕掛けてくる魔女。だがさやかは避けようともせず真っ向から無防備に突進する。
両者、相打ち。さやかの剣は魔女を抉るが、彼女もまた大ダメージを受ける。
まどか「さやかちゃん!?」
悲鳴を上げるまどか。
だが魔女が苦悶に身を捩る一方で、さやかの方は傷など意に介さず笑っている。
さやか「はは……あはは……」
杏子「アンタ、まさか……」
息を呑む杏子。
魔女、苦し紛れの反撃。今度もまたそれを避けず、クロ

スカウンターの剣撃を叩き込むさやか。
見るも無惨なほど血にまみれながら、それでもカラカラと笑っているさやか。
さやか「あははっ、本当だぁ……その気になれば、痛みなんて……完全に消しちゃえるんだぁ……」
笑いながら魔女に追い打ちをかけるさやか。どんな反撃を食らおうとお構いなしに、ただ相手を切り刻むことにのみ専念する。
あまりにも無惨な光景に、ただ言葉もなく息を呑む杏子。
まどかは正視できずに目を逸らす。
まどか「やめて……もう、やめて……」
まどかの声など耳に届かず、笑いながら剣を振り続けるさやか。その狂おしい声は泣いているようにさえ聞こえる。



第八話「あたしって、ほんとバカ」

【Aパート】

□結界内部（前話より継続）

自らの負傷も意に介さず魔女を切り刻むさやか。

それを愕然と見守るまどかと杏子。

ついに魔女が動かなくなる。さやかは生きているのが不思議なほどの重傷。だがそれも、すぐに発動した治癒魔法によって再生されていく。

さやか「ハン、やり方さえ分かっちゃえば簡単なもんだね。……これなら負ける気がしないわ」

消えていく魔女の死骸。結界も消滅し、周囲はもとの倉庫街に。

後に残されるグリーフシード。さやかはそれを拾い上げると、杏子へと投げ渡す。

さやか「あげるよ。そいつが目当てなんでしょ？」

杏子「おい……」

さやか「あんたに借りは作らないから。これでチャラ。いいわね」

杏子「……」

さやか「さあ、帰ろう。まどか」

まどか「さやかちゃん……」

さやか「なに震えてんのさ？　もう大丈夫だってば」

さやか、変身を解除。だが憔悴のあまりよろめく。慌てて支えるまどか。

さやか「あー、ごめん。ちょっと疲れちゃった……」

まどか「……無理しないで。掴まって」

まどかの肩を借りながら、去っていくさやか。

その背中を、杏子は投げ渡されたグリーフシードを握りしめながら見送る。

杏子「……あのバカ……」

□街の全景

夜の街に、いつしか雨が降り始める。

□バス停

運行終了した深夜のバス停。

屋根の下でベンチに腰掛け、雨宿りしながら休憩しているさやかとまどか。

明らかに憔悴しているさやかの様子を、見かねて話しかけるまどか。

まどか「さやかちゃん……あんな戦い方、ないよ……」

さやか「……」

まどかにダメ出しされたことが気に障り、俯いたまま、

やや表情を硬くするさやか。
だがそれにまどかは気付かず、七話〜冒頭までのさやかの戦いを回想する。
思い出しただけで涙が出てくるまどか。
まどか「痛くないなんて、嘘だよ……見てるだけでも、痛かったもん。感じないから痛くてもいいなんて、そんなの、駄目だよ……さやかちゃん、いつか本当に壊れちゃうよ」
さやか「……ああでもしなきゃ、勝てないんだよ。あたし、才能ないからさ」
まどか「あんなやり方で戦ってたら、勝てたとしても、さやかちゃんのためにならないよ……」
さやか、その一言が聞き流せず癇に障る。
さやか「……あたしのためって、何よ?」
さやか、押し殺した声で問いながら、まどかに向けて自分のソウルジェムを突きつける。
さやか「こんな姿にされた後で、何があたしのためになるっていうの?」
今さらながらさやかの怒りを察して、萎縮するまどか。
まどか「さやかちゃん……」
さやか「今のあたしはね、魔女を殺す——ただそれだけしか意味のない石ころなのよ。死んだ身体を動かして生きてるフリをしてるだけ。そんなあたしのために、誰が?何をしてくれるっていうの? 考えるだけ無意味じゃない」
まどか「でもわたしは……どうすればさやかちゃんが幸せになれるかって……」
さやか「だったらあんたが戦ってよ!」
逆上してつい言ってしまうさやか。あまりにも決定的な言葉に、凍りつくまどか。
さやか「キュゥべえから聞いたわよ。あんた、誰よりも才能あるんでしょ? あたしみたいな苦労しなくても、簡単に魔女をやっつけられるんでしょ!?」
まどか「わたしは——」
まどかの脳裏をよぎる過去のキュゥべえの言葉(三話【Aパート】P.39)

× × ×

キュゥべえ「まどかが魔法少女になれば、マミよりずっと強くなれるよ」

× × ×

さやか「あたしのために何かしようっていうんなら、まずあたしと同じ立場になってみなさいよ! 無理でしょ? 当然だよね。ただの同情で人間やめられるわけないもんね!」
まどか「同情なんて、そんな……」
さやか「何でもできるくせに何もしないあんたの代わりに、

あたしがこんな目に遭ってるの。それを棚に上げて知ったようなこと言わないで」
さやか、激しい口調で言い捨ててバス停から立ち去ろうとする。
まどか「さやかちゃん……」
さやか「ついてこないで！」
追い縋ろうとするまどかを一喝するさやか。
まどかが身を竦ませている間に、さやかは雨の中に走り去る。
涙に暮れながら、それでも追いかけられないまどか。
× × ×
雨の中を走りながら、自己嫌悪に悔し泣きするさやか。
さやか「バカだよ、あたし……何てこと言ってんのよ……もう救いようがないよ……」
握りしめたグリーフシードが、黒く、黒く濁っていく。

□ほむらのアパート
古い木造和室の六畳間。何の調度品も生活感もない廃屋のような部屋。
その襖や壁に所狭しと市内の地図や魔法陣の図案が貼り付けられている。
卓袱台の上に拡げられた市外全域図を挟んで座っている杏子とほむら。
地図にはピンやらマーカーの書き込みがびっしりと施されている。
ほむら「ワルプルギスの夜の出現予測は、この範囲……いずれのパターンにも対応できる防衛線を張るためには、最低でもここと、ここの2カ所の霊脈を押さえておく必要があるわ」
カップラーメンを食べながら、ほむらの説明を聞いている杏子。
杏子「この出現予測の根拠は何だい？」
ほむら「統計よ」
杏子「統計？」
胡散臭そうに眉をひそめる杏子。
杏子「以前にもこの街にワルプルギスが来たなんて話は聞いてないよ。いったい何をどう統計したってのさ？」
ほむら「……」
沈黙するほむら。ラーメンを啜る箸を止め、歎息する杏子。
杏子「お互い、信用しろだなんて言える柄でもないけどさ。もうちょっと手の内を見せてくれたっていいんじゃない？」
キュゥべえ「――それはぜひ僕からもお願いしたいね。暁美ほむら」
どこからともなく出現し、会話に割り込んでくるキュゥ

べえ。
冷ややかな眼差しでキュゥべえを見据えるほむら。
杏子もまた、変身はせずにソウルジェムだけを槍に変形させ、キュゥべえに突きつける。
杏子「どの面下げて出てきやがった、テメェ……」
キュゥべえ「やれやれ、招かれざる客、ってわけかい？　今夜は君たちにとっても重要なはずの情報を報せにきたんだけどね」
杏子「あぁ？」
キュゥべえ「美樹さやかの消耗が予想以上に速い。魔力を使うだけでなく、彼女自身が呪いを生み始めた」
杏子「誰のせいだと思ってんのさ……」
キュゥべえ「このままだと、ワルプルギスの夜が来るより先に厄介なことになるかもしれない。注意しておいたほうがいいよ」
杏子「……何だそりゃ？　どういう意味だ？」
キュゥべえ「僕じゃなくて、彼女に訊いてみたらどうだい？」
意地悪く笑って、ほむらを見つめるキュゥべえ。
キュゥべえ「君なら既に知っているんじゃないかな？　暁美ほむら」
ほむら「……」
怒りの眼差しでキュゥべえを見返すほむら。だが、その表情に疑問の気配はない。
キュゥべえ「――やっぱりね。どこでその知識を手に入れたのか、僕はとても興味深い。君は――」
ほむら「聞くだけのことは聞いたわ。消えなさい」
殺意を秘めたほむらの言葉に、キュゥべえは肩を竦め、するりと杏子の槍先をかわして窓から出て行く。
杏子「放っとくのかよ？　あいつ」
ほむら「あれを殺したところで何の解決にもならないわ」
杏子「……それよりも、美樹さやかだ。あいつの言ってた厄介事ってのは何なんだ？」
ほむら、珍しく焦りを面に出す。
ほむら「彼女のソウルジェムは、穢れを溜め込みすぎたのよ。早く浄化しないと、取り返しのつかないことになる……」

□学校
まどかたちのクラス。授業中の風景。
空っぽのさやかの席。
それを見つめながら、後悔に身を焦がすまどか。
まどかM『あのとき……追いかけなきゃ、駄目だったのに……』
前夜の雨の中での別れを思い出し、自分の無力さに泣きそうになる。

□夕暮れの市民公園
大きな敷地の緑地公園の遊歩道。
放課後の恭介と仁美が連れ立って談笑しながら歩いている。
恭介「病院の本棚だとさ、古い漫画しか置いてなくて。でも思ったより面白いんだよ。石ノ森章太郎とか」
仁美「私、あまり漫画は詳しくなくて……」
恭介「今度ぜひ読んでごらんよ。図書館にもあるから」
恭介の松葉杖の歩調に合わせて、ゆっくり歩く仁美。
恭介「――でもさ、志筑さんって帰る方角はこっちなんだっけ？　今まで、帰り道に見かけたことってないような……」
仁美「ええ。本当はぜんぜん逆方向ですわ」
恭介「え？　……じゃあ今日は、どうして？」
戸惑う恭介に、意を決して切り出す仁美。
仁美「上条くんに、お話ししたいことがありますの」

□さやかのアパート
玄関先。中にいるらしき、さやかの家族と話しているまどか。
まどか「えっ……帰ってないんですか？　昨日から？　そんな……はい、えっと……分かりました。はい、失礼します……」
門前を辞して、道に出てから走り出すまどか。
まどかM『さやかちゃん……探さなきゃ！』

□夕暮れの市民公園
森の小道で告白する仁美。驚き戸惑いつつも照れる恭介。
そんな二人の様子を、遠くの木陰からさやかが見守っている。
恭介と仁美の声は聞こえないが、明らかに良い雰囲気。
やがて恭介ははにかみながらも頷き、仁美も笑顔で恭介の手を握る。
それを見届けて、無言のままその場を去るさやか。

□魔女の結界（街の裏路地）
怒りを込めて荒々しく魔女狩りに臨むさやか。今まさにとどめの一撃。
さやか「うおおぉぉッ!!」
使い魔「ギャアアアッ！」
さやかの剣に斬られ、絶命する使い魔。
そして結界は消滅し、もとの夜の街の裏路地の景色に戻る。
やはり使い魔だったせいで、グリーフシードは残さない。
疲弊し、荒い息をつきながら、変身を解除するさやか。
疲労のあまりうずくまる。すっかり黒ずんだソウルジェム。

その背後に足音。はっとしてさやかが振り向くと、ほむらが佇んでいる。
ほむら「……どうして分からないの？　ただでさえ余裕がないのなら、魔女だけを狙って仕留めなきゃ駄目なのよ」
さやか「……うるさい……大きなお世話よ……」
ほむら「もうソウルジェムも限界のはずよ。今すぐ浄化しないと、致命的なことになる」
ほむら、懐から取り出したグリーフシードを、うずくまるさやかの足下に放る。
ほむら「使いなさい」
さやか「……今度は、何を企んでるのさ？」
ほむら「いい加減にして！」
珍しく感情を露わにして怒鳴るほむら。
ほむら「あなた、もう他人を疑ってる場合じゃないでしょ！そんなに私に助けられるのが厭なの!?」
さやか「あんたたちとは違う魔法少女になる……あたしは、そう決めたんだ……」
ほむらの語気には釣られず、静かに語るさやか。
さやか「誰かを見捨てるのも、利用するのも……そんなことをする奴らとつるむのも厭だ……見返りなんていらない。あたしだけは絶対に、自分のために魔法を使ったりしない」
ほむら「あなた、死ぬわよ」
きっぱりと言い切るほむら。だがさやかは自嘲気味の冷たい笑みを浮かべる。
さやか「あたしが死ぬとしたら、それは魔女を殺せなくなったときだけだよ。それってつまり、用済みってことじゃん？　なら、いいんだよ。魔女に勝てないあたしなんて、この世界にはいらないよ」
ほむら「……ッ」
さやかの頑固な自虐ぶりに、歯噛みするほむら。
ほむら「……ねぇ、どうして？　あなたを助けたいだけなの。どうして信じてくれないの？」
さやか「どうしてかなぁ……ただなんとなく、分かっちゃうんだよね。あんたが嘘つきだってこと」
さやかは責めるでもなく穏やかに、ほむらを見据えて語る。
さやか「あんた、何もかも諦めた目をしてる。いつも空っぽの言葉を喋ってる。今だってそうさ。あたしのためとか言いながら、本当は全然別のこと考えてるでしょ？ごまかしきれるもんじゃないよ。そういうの」
ほむら「……」
俯くほむら。その表情がゆっくりと、本物の逆上に染まっていく。
ほむら「……そうやって、あなたはますますまどかを苦しめるのね？」
ほむらの言葉に、怪訝な顔になるさやか。

さやか「まどかは……関係ないでしょ」
ほむら「いいえ。何もかもあの子のためよ」
ほむら、溜まりに溜まった恨み節を滲ませながら、魔法少女に変身。
ほむら「あなたって、鋭いわ。……ええ、図星よ。私はあなたを助けたいわけじゃない。あなたが破滅していく姿をまどかに見せたくないだけ……」
本気の殺意でさやかを見据え、詰め寄るほむら。
ほむら「ここで私を拒むなら、どうせあなたは死ぬしかない。これ以上、まどかを悲しませるくらいなら、いっそ私がこの手で、今すぐ殺してあげるわ。美樹さやか」
さやか「……ッ」
ほむらの剣幕に気圧され、咄嗟に身構えることもできないさやか。
だがその直後、駆けつけた杏子が背後からほむらを羽交い締めにする。珍しく何も食べていない杏子。
呆気に取られるさやかに向けて、叱咤する杏子。
杏子「何やってる⁉　さっさと逃げろ！」
さやか「……ッ」
やや逡巡するさやかだが、どのみち疲弊しきった自分にとって不利な展開なのは間違いない。何も言わずにその場を駆け去る。
後に残される杏子とほむら。杏子は怒気も露わにほむらを詰る。
杏子「正気かテメェは⁉　アイツを助けるんじゃなかったのかよ！」
ほむら「放して……ッ」
怒りに任せて暴れるほむらだが、体勢的に杏子が有利。余裕を見せて不敵に笑う杏子。
杏子「フン……なるほどね。こんな風にとっつかまったままだと、あの妙な技も使えないわけか」
舌打ちし、抵抗を諦めるほむら。代わりに手榴弾を取り出して、ピンを抜く。さすがの杏子もこれには仰天。
杏子「なッ――⁉」
すわ自爆する気か、と慌ててほむらから離れる杏子。その隙にほむらは瞬間移動。
手榴弾が爆発。安全圏に逃れて身を伏せていた杏子は事なきを得る。が、爆煙が消えた後にはほむらの姿はない。
杏子「……くそッ！」
怒りに任せて地面を殴る杏子。

【Bパート】

□深夜の電車
真夜中の上り電車。帰宅客とは逆方向なので乗客はほぼ

皆無。
疲れ切ったさやかが、ぐったりしながらシートに座っている。
同じ車両にはあと二人だけ客が。さやかとは離れた席で、二人組のホストらしき男が酔った勢いで騒いでいる。
ホストA「言い訳とかさせちゃ駄目っしょ。稼いできたぶんはきっちり全額貢がせないと。女ってバカだからさぁ、ちょっと金持たせとくとすぐクッダラネェことに使っちまうからね」
ホストB「いやほんと、女は人間扱いしちゃ駄目っすね。犬か何かだと思って躾けないとね。あいつもそれで喜んでるわけだし。顔殴るぞって脅せばまず大抵は黙りますもんね」
さやか「……」
ホスト二人の会話を、虚ろな眼差しで聞いているさやか。
ホストA「ちょっと油断するとすぐ付け上がって籍入れたいとか言い出すからさぁ、甘やかすの禁物よ？　ったく、テメェみてぇなキャバ嬢が10年後も同じ額稼げるのかってぇの。身の程弁えろってんだよ。ねぇ」
ホストB「捨てるときがさぁ、ほんとウザイっすよね。そのへんショウさん上手いから羨ましいっすよ。俺も見習わないと――ん？」
ふとホストたちが気付くと、彼らの席の前にさやかが無言で佇んでいる。
暗く虚ろなその眼差しに、怪訝な顔をするホストたち。
さやか「ねぇ、その人のこと聞かせてよ」
ホストA「はい？」
さやか「いまあんたたちが話してた女の人のこと、もっとよく聞かせてよ。本当の気持ちを教えてよ」
ホストB「……お嬢ちゃん中学生？　夜遊びは良くないゾ」
さやか、相手の言葉を意に介さず、ぞっとするほど冷たく虚ろな目で続ける。
さやか「その人、あんたのことが大事で、喜ばせたくて、頑張ってたんでしょ？　あんたにもそれが分かってたんでしょ？　なのに犬と同じなの？　ありがとうって言わないの？　役に立たなきゃ捨てちゃうの？」
ホストA「何コイツ、知り合い？」
ホストB「いや……」
途方に暮れるホストたち。一方で、さやかの口調はじわじわと押し殺した怒りに染まっていく。
さやか「ねぇ、この世界って守る価値あるの？　あたし何のために戦ってたの？　教えてよ……今すぐにあんたが教えてよ……」
妖しく光るさやかの瞳。その不気味さに、わけも分からず竦み上がるホストたち。
さやか「でないとあたし……たぶん、どうにかなっちゃう

よ?」
さやかの身体から溢れ出る邪悪な魔力。ソウルジェムが真っ黒に染まっていく。
空っぽの車両のまま、夜をひた走る電車。

□夜の公園
さやかを探して街中を歩き回ったまどか。
疲れ果て、公園のベンチで休憩している。
まどか「さやかちゃん……どこ……?」
ふと視線を感じて顔を上げるまどか。
やや離れた街灯の光の下で、キュゥべえがこちらを覗っている。
キュゥべえ「君も僕のことを恨んでいるのかな?」
まどか「あなたを恨んだら、さやかちゃんを元に戻してくれる?」
キュゥべえ「無理だ。それは僕の力の及ぶことじゃない」
再び俯くまどか。
キュゥべえは拒絶されていない雰囲気を察して、近寄ってきてベンチの隣に腰掛ける。
まどか「ねぇ……いつか言ってた、わたしが凄い魔法少女になれるって話。あれは……本当なの?」
キュゥべえ「凄い、なんていうのは控えめな表現だ。君は途方もない魔法少女になるよ。おそらくこの世界で最強の」
まどか、やや躊躇してから、次の質問をぶつける。
まどか「わたしが引き受けてたら、さやかちゃんは魔法少女にならずに済んだのかな……」
キュゥべえ「さやかは彼女の願いを遂げた。その点についてまどかは何の関係もない」
フォローするかのようにそう言った後で、キュゥべえは目を逸らし、続ける。
キュゥべえ「でも、その後の頑張りについては……まどか一人でさやか10人ぶん以上の働きが出来ただろうね」
まどか「……」
結局のところ責任を感じてしまい、黙り込むまどか。
まどか「……どうして、わたしなんかが?」
キュゥべえ「僕にも分からない。はっきり言って、君が秘めている潜在力は、理論的には有り得ない規模のものだ。……誰かに説明して欲しいのは僕だって一緒さ」
まどか「そうなの?」
キュゥべえ「君が力を解放すれば、奇跡を起こすどころか、宇宙の法則をねじ曲げることだって可能だろう。なぜ君一人だけがそれほどの素質を備えているのか……理由は未だに分からない」
まどか「わたしは……自分なんて、何の取り柄もない人間だと思ってた……」

内心の戸惑いを、訥々と口にするまどか。
まどか「ずっとこのまま、誰のためになることも、何の役に立つこともできずに、最後までただ何となく生きていくだけなのかなって……それは悔しいし、寂しいことだけど、でも仕方ないよねって、思ってたの」
キュゥべえ「現実は随分と違ったね。――まどか、君は望むなら万能の神にだってなれるかもしれないよ」
まどか、重大な決断を前にしてやや怯えながら、最後の問いをキュゥべえに投げる。
まどか「……わたしなら……キュゥべえに出来ないことでも、わたしなら出来るのかな」
キュゥべえ「というと？」
まどか「わたしがあなたと契約したら、さやかちゃんの身体を元に戻せる？」
キュゥべえ「その程度、きっと造作もないだろうね」
にこやかに断言するキュゥべえ。
キュゥべえ「その願いは君にとって、魂を差し出すに足るものかい？」
まどか「さやかちゃんのためなら……いいよ。わたし、魔法少女に――」
まどかが言い終わる直前に、キュゥべえの身体は銃弾15発を同時に浴びて、原型のない肉塊に成り果てる。
恐怖に息を呑むまどか。

闇の中から歩み出る魔法少女スタイルのほむら。弾の切れた拳銃を投げ捨てる。（キュゥべえを殺したのは時間停止攻撃です）
怒りと殺意の名残で荒い息を吐いているほむら。その剣幕に怯えるまどか。
まどか「ひ、ひどいよ……なにも殺さなくても……」
ほむら「あなたは――」
いい加減、誰にも理解されない苛立ちに限界ギリギリのほむら。怒りと悔しさに涙さえ滲ませながら、まどかに詰め寄る。
ほむら「なんであなたは、いつだって、そうやって自分を犠牲にして……」
まどか「……え？」
ほむら「役に立たないとか、意味がないとか……勝手に自分を粗末にしないで！　あなたを大切に思う人のことも考えて!?」
癇癪をおこしてまどかに掴みかかるほむら。だがまどかは何が何やら分からず途方に暮れる一方。
ほむら「いい加減にしてよ！　あなたを失えば、それを悲しむ人がいるって、どうしてそれに気付かないの？　あなたを守ろうとしてた人はどうなるの!?」
まどか「ほむらちゃん……」
事情は分からないものの、ほむらの糾弾の切実さだけは

感じ取るまどか。
ふいに、一話冒頭で見た夢の内容が、朧気ながら脳裏に蘇る。
まどか「……わたしたちは、どこかで……」
ほむら「……ッ！」
まどか「どこかで、会ったこと――あるの？　わたしと」
ほむら「それは……」
説明しようとして、言葉に詰まるほむら。
まどかの襟首を掴んでいた手を放し、その場に膝をつく。
そのまま肩を震わせて泣くほむら。
まどか、しばらく困惑してほむらを見守るものの、今はさやかを探す方が先決だと思い出す。
まどか「……ごめん。わたし、さやかちゃんを探さないと……」
ほむら「……待って……美樹さやかは、もう……」
まどか「ごめんね」
逃げるようにその場を去るまどか。ほむらは追おうにも涙に暮れて立ち上がる力がない。
ほむら「待ってッ、まどか！」
一人取り残され、泣き崩れるほむら。
その背後に現れる新たなキュゥべえの影。
キュゥべえ「無駄なことだって知ってるくせに……懲りないんだなぁ、君も」
憎しみの眼差しで振り向くほむら。平然と現れる五体満足の新キュゥべえ。
キュゥべえ「代わりはいくらでもいるけど、無意味に潰されるのは困るんだよね。勿体ないじゃないか」
新キュゥべえは旧キュゥべえの死骸の上に屈み込むと、ガツガツと物凄い勢いで喰い貪りはじめる。
あっという間に跡形もなく消滅する旧キュゥべえの死骸。
新キュゥべえ、満腹になってゲップしながら、
キュゥべえ「君に殺されたのはこれで二度目だけれど、おかげで攻撃の特性も見えてきた。時間操作の魔術だろう？　さっきのは」
ほむら「……」
答えないほむら。それをキュゥべえは肯定と受け取る。
キュゥべえ「やっぱりね。何となく察しはついてたけれど……君はこの時間軸の人間じゃないね？」
図星を突かれるも、ほむらは怯むことなく言い返す。
ほむら「……お前の正体も、企みも、私はすべて知ってるわ」
キュゥべえ「なるほどね。だからこんなにしつこく僕の邪魔をするわけだ。……そうまでして鹿目まどかの運命を変えたいのかい？」
ほむら「ええ。絶対にお前の思い通りにはさせない。キュゥべえ――」
押し殺した声で言いながら、怒りも露わにキュゥべえを

呪むほむら。
ほむら「――いいえ、インキュベーター」
真の名前で呼ばれて、ニヤリと邪悪に笑うキュゥべえ。

□真夜中の駅
終電を過ぎて、明かりの消えたプラットフォーム。
誰もいないベンチに腰掛けているさやか。
そこにやって来る杏子。いつもの歩き食いはなし。さやかの姿を認め、安堵の溜息をつく。
杏子「……やっと見つけた」
さやか「……」
さやかの隣に腰掛けて、持参していたポテトチップスの袋を開け、食べ始める杏子。
杏子「あんたさ、いつまで強情張ってるわけ?」
さやか「……悪いね、手間かけさせちゃって」
意外すぎる素直さに、やや鼻白む杏子。
杏子「なんだよ、らしくないじゃんかよ」
さやか「うん、別にもう、どうでも良くなっちゃったからね」
どこまでも虚ろなさやかの目。それに気付いて、次第に不安を募らせる杏子。
さやか「結局あたしは、いったい何が大切で、何を守ろうとしてたのか……もう何もかも、わけ分かんなくなっちゃった……」

杏子「おい……」
膝の上で握りしめていた手を開くさやか。掌には彼女のソウルジェムが載っている。真っ黒く染まり歪に変形したそれは、もはやグリーフシードと見分けがつかない。
杏子「……ッ!!」
さやか「希望と絶望のバランスは差し引きゼロだって……いつだったか、あんたが言ってたよね……今ならそれ、よく分かるよ」
さやかの手の中で、禍々しく脈動する漆黒のソウルジェム。まさにそれは孵化寸前のグリーフシードである。
さやか「確かにあたしは、何人か救いもしたけどさ。だけどそのぶん、心には恨みや妬みが溜まって、いちばん大切な友達さえ傷つけて……」
杏子「さやか、あんたまさか――」
さやか「誰かの幸せを祈ったぶん、他の誰かを呪わずにはいられない……あたしたち魔法少女って、そういう仕組みだったんだね」
虚ろに濁ったさやかの瞳から、一滴の涙が流れ落ちる。
さやか「あたしって、ほんとバカ……」
ひび割れ、孵化するグリーフシード。現れ出る魔女の姿。
杏子、放出される魔力の奔流を浴びながら絶叫する。
杏子「さやかぁぁッ!!」

□夜の街

深夜の町並みを見下ろすビルの上。さやかが魔女化した魔力の波動を感じ取り、駅の方角を眺めているキュゥべえ。

キュゥべえ「この国では、成長途中の女のことを少女って呼ぶんだろう？」

キュゥべえ、本性を露わにしたインキュベーターの笑顔で。

キュゥべえ「だったら、やがて魔女になる君たちのことは魔法少女と呼ぶべきだよね」

第九話「そんなの、あたしが許さない」

【Aパート】

□真夜中の駅

前回より続き。

漆黒のグリーフシードと化した自分のソウルジェムを眺めて、涙するさやか。

さやか「あたしって、ほんとバカ……」

ひび割れ、孵化するグリーフシード。現れ出る魔女の姿。

杏子、放出される魔力の奔流を浴びながら絶叫する。

杏子「さやかぁぁッ!!」

力なく地に転がるさやかの身体。

一方、グリーフシードは放出する魔力によって結界を展開し、周囲の景色を侵食していく。

さやかの遺体を抱きかかえる杏子。その眼前で、いよいよ姿を現す魔女さやか。

杏子「くッ!」

杏子、変身。さやかの遺体を抱えたまま飛び退いて距離を取る。

魔女「キシャァァァ!!」

追いかけてくる魔女さやか。伸縮する触手で杏子を狙う。

杏子、危なげなく防御するものの、反撃に移れない。

杏子「何なんだよ……」

ソウルジェムから魔女が現れたというショックから、立ち直れない杏子。

容赦なく追い打ちを繰り出してくる魔女に対し、杏子は防戦一方に。

杏子「テメェいったい何なんだ!? さやかに何をしやがったッ!?」

そこへ結界を外から突き破り、乱入してくる魔法少女スタイルのほむら。

ほむら「退がって!」

杏子「ッ!?」

ほむら、瞬間移動。同時に魔女の懐で謎の爆発。(時間停止攻撃)

苦悶し、怯む魔女。その隙にほむらは杏子に手を差し伸べる。

ほむら「掴まって」

杏子「何を――」

ほむら「いいから!」

左腕にさやかの遺体を抱えたまま、右手でほむらに掴まる杏子。

ほむらの盾の砂時計が遮断され、流れを止める。時間停止魔法が発動。

いきなり静止する周囲の景色に、唖然とする杏子。
杏子「こいつは……」
ほむら「私から手を放したら、あなたの時間も止まってしまう。
気をつけて」
杏子の手を引いて走り出すほむら。
杏子「……どうなってるんだよ？　あの魔女は何なんだよ⁉」
ほむら「かつて美樹さやかだったモノよ。——あなた、見届けたんでしょう？」
杏子「……」
冷然と言い放つほむら。恨めしげに黙り込む杏子。
杏子「……逃げるのか？」
ほむら「厭ならその余計な荷物を捨てて、今すぐあの魔女を殺しましょう。できる？」
杏子「ふざけるなッ！」
怒鳴る杏子を、冷ややかに一瞥するほむら。
ほむら「今のあなたは、足手まといにしかならない。いったん退くしかないわ」
杏子「……ッ」
ほむらの先導で結界から脱する二人。外の空間（夜の駅ホーム）に戻る。
二人の背後で消滅していく結界の開口部。

□夜の街

無人の街路。さやかの捜索に疲れ切り、悄然と俯いたまま歩いているまどか。
ふと顔を上げると、向こうから重い足取りでやって来る杏子とほむらの姿を見つける。杏子の両腕には、さやかの遺体が抱えられている。
まどか「さやかちゃん」
杏子「……ッ」
遅れてまどかの存在に気付く杏子。気まずい表情に。
駆け寄り、さやかの遺体にしがみつくまどか。
まどか「さやかちゃん！　どうしたの？　ねぇッ、ソウルジェムは？　さやかちゃんはどうしたの⁉」
ほむら「彼女のソウルジェムはグリーフシードに変化した後、魔女を産んで消滅したわ」
凍りつくさやか。目を剥く杏子。
まどか「……嘘、だよね？」
ほむら「事実よ。それがソウルジェムの最後の秘密」
自らのソウルジェムを見せて、淡々と続けるほむら。
ほむら「この宝石が濁りきって黒く染まるとき、私たちはグリーフシードになり、魔女として生まれ変わる……それが魔法少女になった者の、逃れられない運命」
まどか「嘘よ……嘘よね？　ねぇ？」
助けを求めるように杏子に問うまどか。だが杏子も悔しそうに沈黙するしかない。

まどか「そんな……どうして？　さやかちゃん、魔女から人を守りたいって、正義の味方になりたいって、そう思って魔法少女になったんだよ？　なのに……」
ほむら「その祈りに見合うだけの呪いを、背負い込んだまでのこと。あの子は誰かを救ったぶんだけ、これからは誰かを祟りながら生きていく」
杏子、抱えていたさやかの遺体をまどかの腕に預けると、ほむらに迫り、襟首を掴み上げる。
杏子「テメェは……何様のつもりだ？　事情通ですって自慢したいのか？」
ほむら「……」
静かに激怒する杏子に対し、あくまで冷淡に黙り込むほむら。
杏子「なんでそう得意げに喋ってられるんだ？　こいつは、さやかの……」
親友だったんだぞ、と言いたくも、怒りのあまり言葉にできない杏子。
ほむらは杏子の方を見ようともせず、あくまでまどかに向けてだけ語りかける。
ほむら「今度こそ理解できたわね？　あなたが憧れていたものの正体がどういうものか」
まどか「……ッ、……ッ」
返事もできず、さやかを抱いて嗚咽するまどか。
ほむら、杏子の手を振り払い、冷たく告げる。
ほむら「わざわざ死体を持ってきた以上、扱いには気をつけて。迂闊な場所に置き去りにすると後々厄介なことになるわよ」
杏子「テメェ、それでも人間か⁉」
ほむら「もちろん違うわ。あなたもね」
杏子「……ッ」
怒りに震える杏子と、泣き崩れるまどかを残し、立ち去っていくほむら。

□まどかの寝室
夜。眠れずにベッドの上で膝を抱えている、パジャマ姿のまどか。
窓の外に現れるキュゥべえの影。念話で呼びかけてくる。
キュゥべえ『――入っていいかい？　話があるんだ』
もはや何を信じていいのか解らなくなっているまどかは、前話で目の前で殺されたキュゥべえが再登場したことにも無反応。
まどか「……生きてたのね」
カーテンがふわりと揺れて、室内にキュゥべえが入ってくる。
まどか「ほむらちゃんが言ってたこと、本当なの？」
キュゥべえ「訂正するほど間違ってはいないね」

まどか「……」
まどか、ついにキュゥべえを諸悪の根源だと理解する。だが努めて抑えた声で続ける。
まどか「じゃあ、あなたはみんなを魔女にするために、魔法少女に？」
キュゥべえ「勘違いしないでほしいんだが、僕らはなにも人類に対して悪意を持っているわけじゃない。やむを得ない事情がこういう結果を招いてるんだ」
まどか「……事情って、何？」
キュゥべえ「全ては、この宇宙の寿命を延ばすためなんだ。——まどか、君はエントロピーっていう言葉を知ってるかい？」
まどか「聞いたことはあるけど、詳しくは……」
キュゥべえ「簡単にたとえると、焚き火で得られる熱エネルギーは、木を育てる労力と釣り合わない、ってことさ。エネルギーは形を変換するごとにロスが生じる。宇宙全体のエネルギーは目減りしていく一方なんだ」
キュゥべえ、愛らしい小動物ではなく、狡猾な宇宙人としての本性を覗わせながら解説を続ける。
キュゥべえ「だから僕たちは、熱力学の法則に縛られないエネルギーを探し求めてきた。そうして見つけたのが、魔法少女の魔力だよ」
まどか「あなたは、一体……」
キュゥべえ「僕たちの文明は、知的生命体の感情をエネルギーに変換するテクノロジーを発明した。ところが生憎、当の僕らが感情というものを持ち合わせていなかった。そこでこの宇宙の様々な異種族を調査し、君たち人類を見出したんだ」
キュゥべえ「人類の個体数と繁殖力を鑑みれば——一人の人間が生み出す感情エネルギーは、その個体が誕生し成長するまでに要したエネルギーを凌駕する。君たちの魂は、エントロピーを覆すエネルギー源たり得るんだよ」
キュゥべえ「とりわけ最も効率がいいのは、第二次性徴期の少女の、希望と絶望の相転移だ。ソウルジェムになった君たちの魂は、燃え尽きてグリーフシードへと変わるその瞬間に、膨大なエネルギーを発生させる。それを回収するのが、僕たちインキュベーターの役割だ」
怒りのあまり、むしろ声から感情が抜け落ちてしまうまどか。
まどか「……わたしたち、消耗品なの？　あなたたちのために死ねっていうの？」
キュゥべえ「この宇宙にどれだけの文明がひしめき合い、一瞬ごとにどれほどのエネルギーを消耗しているか分かるかい？　君たち人類だって、いずれはこの星を離れて、僕たちの仲間入りをするだろう。そのときになって枯

れ果てた宇宙を引き渡されても困るよね？　長い目で見れば、これは君たちにとっても得になる取引のはずだよ」
まどか「馬鹿言わないで……」
ようやく怒りを面に出せるようになるまどか。
まどか「そんなわけの分からない理由で、マミさんが死んで、さやかちゃんがあんな目にあって……あんまりだよ。酷すぎるよ！」
キュゥべえ「僕たちはあくまで君たちの合意を前提に行動しているんだよ。それだけでも充分に良心的なはずなんだが……」
まどか「みんな騙されてただけじゃない！」
キュゥべえ、呆れたようにかぶりをふる。
キュゥべえ「騙す、という行為自体、僕たちには理解できない。認識の相違から生じた判断ミスを後悔するとき、なぜか人間は他者を憎悪するんだよね」
まどか「……あなたの言ってること、ついていけない。ぜんぜん納得できない」
キュゥべえ「君たち人類の価値基準こそ、僕らは理解に苦しむなぁ。今現在で68億人、しかも4秒に10人ずつ増え続けている君たちが、どうして単一個体の生き死にでそこまで大騒ぎするんだい？」
まどか「そんな風に思ってるなら、やっぱりあなた、わたしたちの敵なんだね」
やや切なそうに歎息するキュゥべえ。
キュゥべえ「これでも弁解に来たつもりだったんだよ。君たちの犠牲が、どれだけ素晴らしいものをもたらすか、理解してもらいたかったんだが……どうやら無理みたいだね」
まどか「……当たり前でしょ」
キュゥべえ、入ってきたのと同じようにして窓から去ろうとしながら、最後に振り向いて付け足す。
キュゥべえ「まどか。いつか君は最高の魔法少女になり、そして最悪の魔女になるだろう。そのとき僕らは、かつてないほど大量のエネルギーを手に入れるはずだ。――この宇宙のために死んでくれる気になったら、いつでも声をかけて。待ってるからね」
返事を待つことなく出て行くキュゥべえ。
後に残されたまどかは、膝を抱えたまま涙に暮れる。

□杏子のねぐら
深夜。とある高級ホテルの一室。
ベッドに寝かせたさやかの遺体に、手を翳し、ゆっくり魔力を放射している杏子。
それを部屋の片隅の暗がりから、キュゥべえが見守っている。

キュゥべえ「そうまでして死体の鮮度を保って、一体どうするつもりだい？」
杏子「……」
杏子は答えず、ベッドから離れると、壁際の床に座り込む。傍らにはコンビニで買い込んだビニール袋一杯のジャンクフード。
ベッドのさやかを見据えたまま、黙々と唐揚げやらフライドポテトやらを食べ始める杏子。豪勢な部屋に寝泊まりしているくせに、食はジャンクでなければ落ち着かない彼女である。
杏子「……こいつのソウルジェムを取り戻す方法は？」
キュゥべえ「僕の知る限りでは、ないね」
キュゥべえの返事に、杏子は少しだけ食事の手を止め、鋭い視線を投げ返す。
杏子「そいつは、オマエが知らないこともある、って意味か？」
キュゥべえ「魔法少女は条理を覆す存在だ。君たちがどれほどの不条理を成し遂げたとしても、驚くには値しない」
杏子「……できるんだな？」
キュゥべえ「前例はないね。だから僕にも方法は分からない。生憎だが助言のしようがないよ」
杏子「いらねーよ」
吐き捨てるように言ってから、何かに挑むように荒々しくジャンクフードを食らい続ける杏子。
杏子「誰がテメェの手助けなんか借りるもんか……」

□朝の通学路
元気なくしょげたまま歩くまどか。
その一方で隣を歩く仁美はいかにも幸せそう。
仁美「まどかさん、今朝は顔色が優れませんわ。大丈夫ですの？」
まどか「……うん。ちょっと、寝不足でね……」
仁美「それにしても、今日もさやかさんはお休みかしら」
まどか「……」
さすがに真実を語れず、口ごもるまどか。
仁美「あとでお見舞いに行くべきかしら……でも私が行っていいのか……今ちょっと、さやかさんとはお話ししづらいんですが……」
まどか「仁美ちゃん、あのね……」
言いかけたところで、まどかの脳裏に杏子からの念話が届く。
杏子『昨日の今日で、呑気に学校なんか行ってる場合かよ？』
まどか「……ッ!?」
ぎょっとして空を振り仰ぐまどか。
やや離れた雑居ビルの屋上に、杏子の姿がある。
一方、まどかの不審な挙動を訝る仁美。
仁美「？　……まどかさん？」

杏子『ちょっと話があるんだ。顔貸してくれる？』
まどか「……」
　まどか、やや躊躇するものの、決意して杏子の誘いに乗ることにする。
まどか「仁美ちゃん……ごめん、今日はわたしも学校お休みするね」
仁美「え？　そんな、まどかさん、ちょっと……」
　仁美の制止も聞かず、通学路から駆け去るまどか。

【Bパート】

□雑居ビルの裏路地
　対面するまどかと杏子。
まどか「あの、話って……」
杏子「美樹さやか、助けたいと思わない？」
　驚きに息を呑むまどか。
まどか「助けられる……の？」
杏子「助けられないとしたら、放っとくか？」
まどか「……」
　返事に詰まるまどか。それを見て杏子も気まずそうに失笑する。
杏子「妙な訊き方しちゃったね。バカと思うかもしれないけど……あたしはね、本当に助けられないのかどうか、それを確かめるまで諦めたくない」
まどか「……」
　杏子があくまで本気なのを知り、呆然となるまどか。まどかが予想していた杏子の人柄とは、あまりにも落差がある。
杏子「あいつは魔女になっちまったけど、でももしかしたら、友達の声ぐらいは憶えてるかもしれない。呼びかけたら、人間だった頃の記憶を取り戻すかもしれない。それができるとしたら……多分、あんただ」
まどか「上手くいくかな……」
杏子「わかんねーよ。そんなの」
　ぶっきらぼうに応じてから、やや捨て鉢な笑みを浮かべる杏子。
杏子「わかんないからやるんだよ。もしかして、あの魔女を真っ二つにしてやったらさ、中からグリーフシードの代わりに、さやかのソウルジェムがポロッと落ちてくるとかさ……そういうもんじゃん。最後に愛と勇気が勝つストーリーってのは」
まどか「……」
　呆気に取られるまどかを前に、杏子はあくまで不敵に笑う。
杏子「あたしだって……考えてみたら、そういうのに憧れて

魔法少女になったんだよね。すっかり忘れてたけど、さやかはそれを思い出させてくれた」
その独白で、まどかは杏子を信頼できると感じ取る。
一方で、真顔に戻って先を続ける杏子。
杏子「付き合いきれねぇ、ってんなら無理強いはしない。けっこう危ない橋渡るわけだしね。あたしも、絶対何があっても守ってやる、なんて約束はできねーし」
まどか「ううん、手伝う。手伝わせてほしい」
握手を求めて、手を差し出すまどか。
まどか「あたし、鹿目まどか」
自己紹介、という発想がなかったせいで、杏子は一瞬きょとんとなり、それからさも可笑しそうに笑い出す。
杏子「ッたくもう、調子狂うなぁ。ホント」
まどか「……え?」
杏子「佐倉杏子だ。よろしくね」
握手の代わりに、差し出されたまどかの手に「うまい棒」を乗せる杏子。
まどか「……?」
杏子の意思表示についていけず、途方に暮れるまどか。

□授業中の教室
一時限目の数学の授業。担当教諭が黒板に書いた設問を生徒に解かせている。
静かに授業を受けながら、ちらり、とまどかの席を窺い見る。空席で、遅刻して登校してくる様子もない。
歎息し、挙手して立ち上がるほむら。
ほむら「すみません、気分が優れませんので、保健室へ……」
数学教諭「んー、このクラスの保健委員は誰かね?」
女子生徒「鹿目さんは今日お休みでーす」
数学教諭「んん、では学級委員が連れ添いに――」
教諭の指示などお構いなしに、一人で教室を出て行ってしまうほむら。唖然とそれを見送る教諭と生徒たち。

□市街地郊外
夕方の町並みを、二人連れ立って歩くまどかと杏子。
片手に持ったソウルジェムの反応を手がかりに、魔女の気配を探して廻りながら、もう一方の手では焼き鳥を食べている。
まどか「ほむらちゃんも、手伝ってくれないかな……」
杏子「あいつはダメだ。そういうタマじゃないよ」
まどか「友達じゃないの?」
杏子「違うね。……そうさなぁ、まぁ利害の一致っていうか……お互い一人じゃ倒せないヤツと戦うために、つるんでるだけさ」
まどか「……」

不思議そうなまどかの眼差しを受けて、さらに説明を続ける杏子。
杏子「あと何日かしたら、この街に『ワルプルギスの夜』が来る」
まどか「ワルプルギス……？」
杏子「あたしら魔法少女にとっては最悪の強敵、超弩級の大物魔女だ。あたしもアイツも、たぶん一人じゃ倒せない。だから共同戦線っていうか……まぁ要するに、そういう仲なのさ」
杏子、ソウルジェムの反応を覗いながら、とある休工中の建設現場で足を止める。
杏子「……ここだな」
鎖の施錠を破り、中へと踏み込む二人。まだ鉄骨組みしかない建築現場。
まどか「本当に、さやかちゃんかな……他の魔女だったりしないかな？」
杏子「魔力のパターンが昨日と一緒だ。間違いなく、アイツだよ」
とある一画、あきらかに不穏な空気が澱んでいる場所で、立ち止まる杏子。
食べ終わった焼き鳥の串を放り捨てて変身し、槍を構える。
杏子「さて、改めて訊くけど……本当に覚悟はいいんだね？」
まどか「なんかもう、慣れっこだし」
やや照れ笑いを見せつつ言ってから、しゅんと俯くまどか。
まどか「わたし、いつも後ろからついてくばっかりで、役に立ったこと一度もないけど……でも、お願い。連れて行って」
その様子に、失笑する杏子。
杏子「ほんと変なヤツだな。あんた」
杏子、槍を振り下ろし、結界の入口を引き裂く。
口を開ける異空間。その中へと踏み込んでいく二人。

□結界の中
異界の迷路を、用心深く進むまどかと杏子。
まどか「ねぇ、杏子ちゃん……」
杏子「あん？」
まどか「誰かにばっかり戦わせて、自分で何もしないわたしって……やっぱり、卑怯なのかな……」
杏子「あんたが何で魔法少女になるわけさ？」
まどか「何でって……」
問われて口ごもるまどかを、ぎろり、と睨む杏子。
杏子「舐めんなよ。この仕事はね、誰にだって務まるもんじゃない」
まどか「でも……」

杏子「毎日美味いモン喰って、幸せ家族に囲まれて、そんな何不自由ない暮らしをしてるヤツがさ、ただの気まぐれで魔法少女になろうとするんなら、そんなの、あたしが許さない。いの一番にぶっ潰してやるさ」
まどか「……」
杏子の荒々しい剣幕に、気圧されて黙り込むまどか。
だが杏子はやや口調を緩め、諭すように先を続ける。
杏子「命を危険に晒すってのはな、そうするしか他に仕方ないヤツだけがやることさ。そうじゃないヤツが首を突っ込むのは、ただの遊びだ。おふざけだ」
まどか「そうなのかな……」
杏子「あんただっていつかは、否が応でも命懸けで戦わなきゃならない時がくるかもしれない。そのときになって考えればいいんだよ」
まどか「……うん」
頷くまどか。結局のところ、まどかには何の引け目もないと諭すための説教だったのだと理解して、杏子の優しさを理解する。
まどか「杏子ちゃんは、どうして……」
言いかけたまどかを手で制し、足を止める杏子。
杏子「――気付かれた。来るぞ」
結界の奥から、二人の前に姿を現す魔女。
もはやさやかであった痕跡など微塵もない、無数の触手を伸ばす不気味な姿に成り果てている。
まどかがそのおぞましさに震え上がる一方で、杏子は冷静な戦士の眼差しで魔女を見据えている。
杏子「――いいな。打ち合わせ通りに」
まどか「う、うん」
勇気を振り絞り、魔女の前に身を晒すまどか。
まどか「さやかちゃん、わたしだよ……まどかだよ！　ねぇ、聞こえる？　わたしの声が分かる？」
魔女「グ……ガ……」
魔女、容赦なく触手を繰り出してまどかを襲おうとする。
身を竦めるまどか。だが寸前で杏子がその前に立ちはだかり、触手を槍で振り払う。
杏子「怯むな！　呼び続けろ」
まどか「……ッ……さやかちゃん、やめて……お願い、思い出して！　こんなこと、さやかちゃんだって嫌だった筈だよ！」
立て続けに繰り出される魔女の攻撃。そのすべてを槍で防御する杏子。
杏子の背後で、まどかは必死に呼びかけ続ける。
まどか「さやかちゃん、正義の味方になるんでしょ？　マミさんみたいになりたかったんでしょ⁉　ねぇ、お願い……もとのさやかちゃんに戻って！」
魔女「ガァァァッ、ガァァァッ！」

激しさを増す魔女の攻撃。
このままでは埒があかないと判断した杏子、防御からカウンターを繰り出し反撃に移る。
杏子「……聞き分けがねぇにも程があるぜ、さやか！」
魔女の触手を切り裂いていく杏子の槍。
だが背後にまどかを庇っているせいで、いつもの機敏な動きができない。
ついに触手の一本が、杏子の肩口を切り裂く。
杏子「ぐっッ！」
まどか「杏子ちゃん⁉」
悲鳴を上げるまどかを、手で制する杏子。
杏子「大丈夫……この程度、へでもねぇ……あんたは、呼びかけろ。呼び続けろ。さやかを……」
まどか「やめてッ、もうやめて！　さやかちゃん、わたしたちに気付いて！」
魔女「ガァァァァッ！」
まどかの声も虚しく、激しさを増す魔女の攻撃。
ひたすら奮闘する杏子だが、脚に、腕に、次々と傷を負う。
激痛に耐えながら、不敵に笑う杏子。
杏子「はっ、いつぞやのお返しかい？　そういえばあたしたち、最初は殺し合う仲だったっけねぇ……」
次第に追い詰められ、動きを封じられていく杏子。

だがいくらダメージを負おうとも、その戦意は衰えない。
杏子「生温いって……あのとき、あたしがもっとぶちのめしても、あんたは立ち上がってきたじゃんかよォ……」
もはや防戦一方の杏子。そんな彼女を容赦なく打ちのめす魔女の触手。
だが杏子は悲鳴一つ上げず、穏やかに語りかける。
杏子「……怒ってんだろ？　何もかも許せないんだろ？　解るよ……だからさ、好きなだけ暴れなよ。付き合ってやるからさ。……それで、気が済んだら、目ェ覚ましなよ……な？」
だが横合いから杏子を迂回した触手の何本かは、後ろに控えるまどかへと迫る。
まどかの脚に絡みつき、捉える触手。恐怖に身を竦ませるまどかだが、勇気を振り絞り、その場に踏み止まる。
まどか「……さやかちゃん、お願いだから……」
訴えかけるまどかの首にも触手が絡む。息を詰まらせ、声を出せなくなるまどか。
まどかの窮状に気付き、歯噛みして焦る杏子。
杏子「……さやかァッ‼」
杏子、渾身の力で触手を振り払い、魔女の本体へと攻撃を仕掛ける。
杏子「あんた……信じてるって言ってたじゃないか！　この力で人を幸せにできるって！」

杏子、捨て身の攻撃。魔女に大ダメージを与えるが、自らも腹に致命傷を負う。
無力感に悔し泣きしながらも、魔女に槍を突き立てる杏子。
杏子「頼むよ、神様……こんな人生だったんだ……せめて一度ぐらい、幸せな夢を見させてよ……」
触手による首絞めで、既に意識を失っているまどか。
だがふいに彼女を捉えていた触手が切り裂かれ、解放される。遅れて結界に踏み込んできたほむらの仕業である。
気絶したままのまどかを抱き上げ、杏子を助太刀しようとするほむら。
ほむら「杏子！」
杏子「……よぉ……」
血まみれの杏子の姿を見て、既に手遅れだと知るほむら。
ほむら「あなた……」
杏子「その子を、頼む……あたしのバカに、付き合わせちまった……」
杏子を助けに行かなければと、一瞬だけ躊躇するほむら。
だが杏子の方がそれを手で拒む。
杏子「足手まといを連れたまま戦わない主義だろ？　いいんだよ。それが正解さ」
ほむら「……ッ」
杏子「ただひとつだけ守りたいモノを、最後まで守り通せばいい……ハハ、何だかなぁ。あたしだって、今までずっとそうしてきたはずだったのに……」
ほむら「……」
杏子が死を覚悟していると知り、痛ましさに項垂れるほむら。
杏子「……行きな。こいつは、あたしが引き受ける」
沈鬱に頷いてから、まどかを抱えたまま走り去るほむら。
その背中を追おうとした魔女の触手を、杏子の槍が切り払う。
杏子「心配すんなよ、さやか……あんただけ置き去りにしやしないって……」
最後の力を振り絞り、魔女と対峙する杏子。
魔女「キシャァァァ……」
一気に杏子を捕食しようと、のしかかってくる魔女。
杏子は避けずに、魔女に捕らえられた上で、ソウルジェムを握りしめ、ありったけの魔力を解放する。
杏子のソウルジェムの輝きに、怯えたように呻く魔女。
魔女「ギギギギ……」
杏子「独りぼっちは、寂しいもんな……いいよ。一緒にいてやるよ。さやか……」
杏子、槍の穂を短く持ち直して、暴走する自らのソウルジェムに突き立てる。
壮絶な爆発。光に呑み込まれる杏子と魔女。

×　×　×

結界の迷路を駆け抜けるほむら。
その周囲で、異界の景色がゆらぎ、もとの建築現場の光景に戻る。
ほむら「……」
立ち止まるほむら。
だが無事に通常空間に戻ってきたのは、まどかとほむらの二人だけ。
ほむら「杏子……」

□ほむらのアパート
独り、卓袱台の前で頭を抱えているほむら。
卓袱台の上には、詳細な書き込みや付箋が貼られたワルプルギス対策の作戦地図が拡げられたままになっている。
ほむら「……佐倉杏子には、本当に美樹さやかを救える望みがあったの？」
独り言のように呼びかけるほむらに、部屋の片隅の闇に潜むキュゥべえが応じる。
キュゥべえ「まさか。そんなの不可能に決まってるじゃないか」
ほむら「なら、どうしてあの子を止めなかったの？」
キュゥべえ「もちろん無駄な犠牲だったら止めただろうさ。でも今回、彼女の脱落には大きな意味があったからね」
キュゥべえ、卓袱台の地図の上に飛び乗り、
キュゥべえ「これでもう、ワルプルギスの夜に立ち向かえる魔法少女は君だけしかいなくなった。もちろん一人では勝ち目なんてない。――この街を守るためには、まどかが魔法少女になるしかないわけだ」
笑うキュゥべえを前にして、ほむらは強い決意の眼差しで断言する。
ほむら「……やらせないわ。絶対に」

第十話「もう誰にも頼らない」

【Aパート】

□朝の教室（平行世界・過去）

ほむら転校初日の朝HR。クラスの全生徒の視線を一身に浴びながら、黒板の前に立たされているほむら。眼鏡に三つ編みの冴えない格好。必要以上に緊張し、萎縮してしまっている、見るからに気弱そうな少女である。

和子「はーい、それじゃ自己紹介いってみよー」

ほむら「あ、あの、あああ暁美、ほ、ほむら、です。その……どうか、よよよろしくお願いします」

黒板にほむらの名前を書く和子。

和子「暁美さんは心臓の病気でずっと入院していたの。久しぶりの学校だから色々と戸惑うことも多いでしょう。みんな、助けてあげてね」

× × ×

休み時間、ほむらの席に押しかけて興味津々に質問をしてくる女子たち。

女子A「暁美さんって、前はどこの学校だったの？」

女子B「前は部活とかやってた？　運動系？　文化系？」

女子C「すごい長い髪だよね～。毎朝編むの、大変じゃない？」

ほむら「あの……わ、私、その……」

気弱な眼鏡ほむら、気圧されてたじたじになっている。

そこに割り込んでくるまどか。

まどか「暁美さん、保健室行かなきゃいけないんでしょ？　場所、分かる？」

ほむら「え？　いいえ……」

まどか「じゃあ案内してあげる。わたし保健委員なんだ。——みんな、ごめんね。暁美さんって休み時間には保健室でお薬飲まないといけないの」

女子A「あ、そうだったの？　ごめんね、引き留めちゃって」

女子B「暁美さん、また後でね」

まどかの気さくな取りなしで、あっさり納得して引き下がる女子たち。

皆の好奇心から解放されて、やや安堵するほむら。

□廊下

先に立って案内するまどか。後からおっかなびっくりついてくる眼鏡ほむら。

まどか「ごめんね。みんな悪気はないんだけど……転校生なんて珍しいから、はしゃいじゃって」

ほむら「いえ、その……ありがとうございます」

まどか「そんな緊張しなくていいよ。クラスメイトなんだから」

優しい笑顔で、ほむらを和ませるまどか。
まどか「わたし、鹿目まどか。まどかって呼んで」
ほむら「え、そんな……」
まどか「いいって。だからわたしも、ほむらちゃんって呼んでいいかな？」
ほむら「……」
まどかとの距離を測りかねて、もじもじする眼鏡ほむら。
ほむら「……私、その、あんまり名前で呼ばれたことってなくて……すごく、変な名前だし」
まどか「え～？　そんなことないよ。なんかさ、燃え上がれ～って感じで。かっこいいと思うな」
ほむら「……名前負け、してます」
まどか「そんなの、勿体ないよぉ。せっかく素敵な名前なんだから、ほむらちゃんもカッコよくなっちゃえばいいんだよ」
ほむら「……」
無邪気に笑うまどかに、つい気後れして俯いてしまう眼鏡ほむら。

□数学の授業
黒板に書かれた問題を前にして、まったく解けず、冷や汗まみれになる眼鏡ほむら。数学教諭、気まずい表情で、数学教諭「あー、うん。君は休学してたんだっけな。友達からノートを借りておくように」

□体育の授業
グラウンドの片隅に青ざめた顔で座っている眼鏡ほむら。皆が元気に走り幅跳びのスコアを競うのを、見学している。
そんなほむらを見てヒソヒソと雑談する女子たち。
女子C「準備体操だけで貧血って、ヤバイよね～」
女子B「半年もずっと寝てたんじゃ、仕方ないんじゃない？」

□放課後の通学路
夕焼けの中、一人、肩を落として家路につく眼鏡ほむら。自己嫌悪と劣等感で憂鬱顔。
脳裏を過ぎるまどかの言葉。
まどかM『――ほむらちゃんもカッコよくなっちゃえばいいんだよ――』
ほむら「無理だよ……私、何にもできない……」
足下だけを見つめて、周囲には注意を払わず、内省に没頭する眼鏡ほむら。
ほむらM『人に迷惑ばっかりかけて、恥かいて……どうしてなの？　私、これからもずっとこのままなの？』
落ち込むほむらの脳裏に、心の奥から邪悪な声が囁きかけてくる。

魔女M『だったらいっそ、死んだ方がいいよね』
ほむらM『死んだ方がいいかな……』
魔女M『そう、死んじゃえばいいんだよ』
ほむらM『死んでしまえば……』
眼鏡ほむら、ふと我に返り、周囲の景色が豹変しているのに気付く。
夕陽に照らされた帰り道のはずが、いつの間にか彼女は魔女の結界に迷い込んでいる。
ほむら「ど、何処なの？　ここ……」
怯える眼鏡ほむらの前に、結界の奥の暗闇から躙り寄ってくる魔女のシルエット。
ほむら「な……何？　何なの!?」
眼鏡ほむらに襲いかかろうとした魔女の身体が、魔力の網によって緊縛される。
身動きできなくなり、狼狽えて呻く魔女。
マミ「――間一髪ってところね」
まどか「もう大丈夫だよ。ほむらちゃん」
眼鏡ほむらを庇うようにして、魔女の前に立ちはだかるまどかと巴マミ。
ほむら「あ、あなたたちは……」
当惑する眼鏡ほむらの脚もとに、キュゥべえが現れる。
キュゥべえ「彼女たちは、魔法少女。魔女を狩る者たちさ」
まどか「いきなり秘密がばれちゃったね。クラスのみんなには、内緒だよ」
まどか、マミ、同時に魔法少女スタイルに変身。タッグを組んで魔女に襲いかかる。
魔女「ギャアアアア……」
瞬く間に倒され、消滅していく魔女。
その鮮烈な光景に、心奪われるほむら。

□マミの部屋
魔女退治成功の祝杯とばかりお茶会をしているマミ、まどか、キュゥべえ。
窮地を救われた眼鏡ほむらも招待され、シフォンケーキを振る舞われているものの、未だに面食らって萎縮している。
ほむら「鹿目さん……いつもあんなのと戦ってるんですか？」
まどか「んー、いつもって……そりゃマミさんはベテランだけど、わたしなんて先週キュゥべえと契約したばっかりだし」
マミ「でも今日の戦い方、最初よりずっと上手かったわよ。鹿目さん」
マミに褒められ、えへへ、と照れるまどか。
眼鏡ほむらは不思議そうに、再びまどかに向けて問う。
ほむら「……平気なんですか？　恐くないんですか？」
まどか「平気ってことはないし、恐かったりもするけれど、

魔女をやっつければそれだけ大勢の人が助かるわけだし。やり甲斐はあるよね」
ほむら「……」
そう語るまどかを、羨望の眼差しで見つめる眼鏡ほむら。
マミ「鹿目さんには、ワルプルギスの夜が来る前に、頑張って一人前になっておいてもらわないとね」

□燃えさかる市街地
ワルプルギスの襲撃を受け、炎に包まれた街の中。
戦って死んだマミの遺骸に、胸元で手を組ませ、沈鬱に黙祷するまどか。その背中を泣きながら見守る眼鏡ほむら。
その向こうでは、巨大怪獣ワルプルギスが今なお破壊の限りを尽くしている。
立ち上がり、悲壮な決意を秘めた眼差しでワルプルギスを見据えるまどか。
まどか「……じゃあ、行ってくるね」
ほむら「そんな、巴さん、死んじゃったのに……」
まどか「だからだよ。もう『ワルプルギスの夜』を止められるのは、わたしだけしかいないから」
ほむら「無理よ！　一人だけであんなのに勝てっこない！　鹿目さんまで死んじゃうよ！」
まどか「それでも、わたしは魔法少女だから。みんなのこと守らなきゃいけないから」
ほむら「……ねぇ、逃げようよ……だって仕方ないよ。誰も鹿目さんを恨んだりしないよ……」
死を決意した静かな表情で、眼鏡ほむらを諭すまどか。
まどか「ほむらちゃん、わたしね、あなたと友達になれて嬉しかった。あなたが魔女に襲われたとき、間に合って……今でもそれが自慢なの。だから魔法少女になって本当に良かったって、そう思ってるんだ」
ほむら「……鹿目、さん……」
まどか「さよなら、ほむらちゃん。元気でね」
変身し、ワルプルギスの夜めがけて突進していくまどか。
ほむら「……嫌ぁ！　行かないで！　鹿目さぁん‼」

□廃墟の街
ワルプルギスによって破壊され尽くし、瓦礫の山と化した街に、しんしんと雨が降り注ぐ。
廃墟の中に転がっている、無惨な遺体と化したまどか。
その前に膝をつき、雨に打たれながら号泣する眼鏡ほむら。
ほむら「どうして……死んじゃうって分かってたのに……私なんか助けるよりも……あなたに生きててほしかったのに……」
キュゥべえ「その言葉は本当かい？　暁美ほむら」

瓦礫の山の頂に座って、泣きじゃくる眼鏡ほむらを見下ろしているキュゥべえ。
キュゥべえ「君のその祈りのために、魂を懸けられるかい？
戦いのさだめを受け入れてまで、叶えたい望みがあるのなら――僕が力になってあげられるよ」
泣き濡れた目で、キュゥべえを見上げる眼鏡ほむら。
ほむら「……あなたと契約すれば、どんな願いも叶えられるの？」
キュゥべえ「そうとも。君にはその資格がありそうだ。――教えてごらん。君はどんな祈りでソウルジェムを輝かせるのかい？」
ほむら「私は――」
眼鏡を外して涙を拭い、決意の面持ちで立ち上がるほむら。
ほむら「――鹿目さんとの出会いを、やり直したい。彼女に守られる私じゃなくて、彼女を守る私になりたい」
直後、痛みに似た衝撃に身を強張らせるほむら。
ほむらの胸から、眩い輝きとともに浮かび上がるソウルジェム。
キュゥべえ「――契約は成立だ。君の祈りはエントロピーを凌駕した。さぁ、解き放ってごらん。その新しい力を」
ほむら「……」
宙に浮かぶ自らのソウルジェムを、恐る恐る掴み取るほむら。
その途端、時間が逆行して過去へと遡る。

□夜の病院
病室のベッドの中で、はっと目覚めるほむら。
ほむら「……ここは……」
かつて入院していた病室。カレンダーには退院予定日にマーカーペンで印がしてある。
サイドテーブルには、「編転入生の方へ：市立見滝原中学校」と書かれた書類が載っている。
ほむら「私、まだ……退院して、ない？」
ぼんやりと寝惚け眼を擦ろうとしたところで、その手が握っているソウルジェムに気付き、驚きに目を見張るほむら。
ほむら「……夢じゃ、ない……ッ!?」

□朝の教室（平行世界・過去）
再び、ほむら転校初日の光景。
和子「はーい、それじゃ自己紹介いってみよー」
ほむら「暁美ほむらですっ！　よろしくお願いします！」
黒板にほむらの名前を書こうとする和子。
和子「暁美さんは心臓の病気でずっと……」
だが眼鏡ほむらは待ちかねてずかずかとまどかの席まで

歩み寄り、感激の笑顔で、がっしとまどかの手を握る。
ほむら「鹿目さん！　私も魔法少女になったんだよ！　これから一緒に頑張ろうね！」
まどか「あ……えっと……うぅ……」
困惑するやら慌てるやらで目を白黒させるまどか。
ただ呆然となる和子ほかクラスメイト一同。

□河川敷、高架橋下
誰もいない河原に集合しているまどか、マミ、眼鏡ほむら。三人の前には古びたドラム缶が置かれている。眼鏡ほむらはゴルフクラブを手に緊張の面持ち。
ほむら「それじゃ、いきます！」
眼鏡ほむら、魔法少女に変身。盾の砂時計が時間を止める。
静止した時間の中で、ひたすらゴルフクラブを振り回しドラム缶を殴りまくる眼鏡ほむら。動作はたどたどしく、何度も空振りし、一度ならず転んだりもする。
そして時間静止解除。息が切れてへたり込んでいる眼鏡ほむらの横で、ボコボコになって転がっているドラム缶。
まどか「どう思う？　マミさん」
うーん、と呆れ半分、困り半分に考え込むマミ。
マミ「時間停止ねぇ……確かに凄いけれど、使い方が問題よね」
ほむら「は、はい……」
ひん曲がったゴルフクラブを見下ろし、しょんぼりするほむら。

□ほむらの部屋
小綺麗なワンルームマンション。まだそれほど荒んだ居住空間ではない。
テーブルの上に工具を並べ、ノートパソコン首っ引きで、パイプ爆弾を作っている眼鏡ほむら。一心不乱の真剣な熱意。ウェブブラウザには『腹腹時計オンライン』というタイトル。

□魔女の結界
まどか、マミ、眼鏡ほむらの三人組による魔女退治の光景。
まずマミが緊縛魔術で魔女を拘束。
その隙にまどかが弓で攻撃。
さらに眼鏡ほむらが時間を止め、おっかなびっくり魔女の足元に爆弾を仕掛けて、そそくさと走り去る。
時間静止解除とともに大爆発。悲鳴を上げて消滅する魔女。
ほむら「やった……やった！」
まどか「凄いよ、ほむらちゃん！」

マミ「お見事ね」
勝利を喜ぶ魔法少女三人。結界は解けて廃工場の景色に。
その床に転がるグリーフシード。

【Bパート】

□廃墟の街
ワルプルギスの夜が撃退された直後。
戦いの後の瓦礫の中で、苦しみに身を捩るまどか。
その手に握ったソウルジェムが、グリーフシードの如く
真っ黒に染まっている。
まどか「うぅぅ……あぐぅぅぅッ！」
ほむら「どうしたの⁉　ねぇ鹿目さん、しっかりして！」
まどか「どうして……あああああッ‼」
まどかの悲鳴とともに、そのソウルジェムから魔女が孵
化する。
×　×　×
降り注ぐ雨の中、眼鏡ほむらが魔法少女スタイルのまま、
虚ろな眼差しでまどかの遺体を前にしている。
ほむら「どうして……何でこんな……」
譫言のように呟く眼鏡ほむらの左手の盾、砂の流れ尽き
た砂時計のロックが外れ、ぐるりと廻って逆さになる。

一気に遡る時間。

□夜の病院
病室のベッドの中で、はっと目覚めるほむら。またも退
院前の日付に戻っている。
ほむら「伝えなきゃ……みんな、キュゥべえに騙されてる！」

□廃工場内部
夜、魔女退治を前にして作戦会議中のまどか、マミ、さ
やか、そして眼鏡ほむら。全員が魔法少女スタイル。
さやか「――あのさぁ、キュゥべえがそんな嘘ついて、いっ
たい何の得があるわけ？」
ほむら「それは……」
露骨に訝るさやかに対し、うまく説明できない眼鏡ほむ
ら。
さやか「あたしたちに妙なこと吹き込んで、仲間割れでもさ
せたいの？　まさかあんた、本当はあの杏子とかいうヤ
ツとグルなんじゃないでしょうね」
ほむら「ち、違うわ！」
まどか「さやかちゃん……それこそ仲間割れだよ」
まどかに窘められ、不平も露わに歎息するさやか。
さやか「どっちにしろ、あたし、この子とチーム組むのは反
対だわ。まどかやマミさんは飛び道具だから平気だろう

けど、いきなり目の前で爆発とか、ちょっと勘弁してほしいんだよね。何度巻き込まれそうになったことか」
マミ「暁美さんには、爆弾以外の武器ってないのかしら？」
ほむら「……ちょっと考えてみます」

□暴力団事務所
時間静止魔術が発動中。動きを止めた組員たちを後目に、ロッカーの中身を漁っている眼鏡ほむら。
ドスや日本刀は放り捨て、リボルバー拳銃や猟銃を回収して、盾の裏の四次元ポケットに収納していく。

□魔女の結界
魔女化したさやかの結界。無数の触手で襲いかかってくる魔女さやかから、必死に身を守るまどか、マミ、杏子、眼鏡ほむら。
杏子「テメェいったい何なんだ!?　さやかに何をしやがったッ!?」
まどか「……ッ……さやかちゃん、やめて……お願い、思い出して！　こんなこと、さやかちゃんだって嫌だった筈だよ！」
訴えかけるまどか目掛けて、5本の触手が振り下ろされる。
ほむら「くッ」
すかさず時間を停止させ、盾の裏からリボルバー拳銃を出す眼鏡ほむら。慎重に狙いをつけて発砲。弾丸は銃口から出た瞬間（ほむらと接点が断たれた途端）に静止し、煙もろとも空中に固定される。そうやって5発の弾丸を宙に並べてから、時間静止を解除するほむら。
一斉に動き出した弾丸は5発同時に触手を撃ち抜き、まどかを窮地から救う。
ほむら「……ごめん、美樹さん」
眼鏡ほむら、悲痛に呟いてから、パイプ爆弾を手に瞬間移動。
次の刹那、魔女さやかの口の中に置き去りにされた爆弾が発火し、粉微塵に吹き飛ばす。
魔女の消滅とともに、結界は解除され通常空間へ。そこは九話冒頭で戦いの舞台になったのと同じ、深夜の駅のホームである。
あらためて、さやかの魔女化という事態の重さに、しばし言葉もなく立ち尽くす一同。
杏子「……さやか……畜生……こんなことって」
まどか「酷いよ……こんなの、あんまりだよ……」
茫然自失の杏子と、泣き崩れるまどか。
だが次の瞬間、いきなりほむらの足元で発動したマミの緊縛魔術が、ほむらの動きを封じ込める。
ほむら「ッ!?」

さらにマミの魔銃が火を噴き、杏子のソウルジェムを吹き飛ばす。何が起こったのかすら分からない表情で、くずおれる杏子。
ほむら「巴さん――」
魔銃を構えたマミの表情は、完全に正気を失っている。
マミ「ソウルジェムが魔女を産むなら……みんな死ぬしかないじゃない！　あなたも、私もッ」
ほむら、時間を止めて緊縛から逃れようと身悶えするが、まるで身動きできないままに効続時間が終わってしまう。いよいよ絶体絶命。マミの銃口を前にして絶望する眼鏡ほむら。
ほむら「や、やめ――」
マミの銃が火を噴こうとしたそのとき、横合いから放たれたまどかの矢が、マミのソウルジェムを撃ち抜く。ぐらりと傾き、くずおれるマミの身体。
弓を構えた姿勢のまま、肩を震わせて慟哭するまどか。
まどか「……嫌だ……もう、嫌だよ、こんなの……」
マミの魔力が失せたせいで束縛魔術から解放された眼鏡ほむら。かけるべき言葉さえ見つからず苦悩しながらも、嗚咽するまどかの側に寄り、寄り添う。
ほむら「……大丈夫だよ……二人で、頑張ろう。一緒にワルプルギスの夜を倒そう」
まどか「……うん……」

□廃墟の街
ワルプルギスの夜、撃退の後。瓦礫の山の中に、寄り添って倒れているまどかとほむら。ほむらの眼鏡は割れている。
二人とも限界以上の魔力を消費したせいで、ソウルジェムは真っ黒に染まっている。
まどか「わたしたちも、もう、おしまいだね……」
お互いのソウルジェムを見比べて、寂しそうに呟くまどか。
ほむら「グリーフシードは？」
まどか、静かにかぶりを振る。
絶望と諦めが、むしろ眼鏡ほむらに安らぎをもたらす。壊れた眼鏡を捨て、憑き物が落ちたかのように和やかな口調で、語りかけるほむら。
ほむら「……ねぇ、私たち、このまま二人で怪物になって……こんな世界、何もかも滅茶苦茶にしちゃおうか……」
まどか「……」
まどかの返事はない。ほむらは先を続ける。
ほむら「嫌なことも、悲しいことも、ぜんぶなかったことにしちゃえるぐらい、壊して、壊しまくって、さ……それはそれで、いいと思わない？」

返事の代わりに、隠し持っていたグリーフシードで、ほむらのソウルジェムに触れるまどか。
瞬時に呪いの穢れはグリーフシードに吸い取られ、ほむらのソウルジェムは浄化される。
ほむら「……ッ!?」
まどか「――さっきのは、嘘。一個だけ取っておいたんだ」
愕然とするほむらに、微笑みかけるまどか。
ほむら「そんな……なんで、私に……」
まどか「わたしに出来なくて、ほむらちゃんに出来ること、お願いしたいから……」
まどか、輝きを取り戻したほむらのソウルジェムに、愛おしむように指先で触れながら、
まどか「ほむらちゃん、過去に戻れるんだよね？　こんな終わり方にならないように、歴史を変えられるって、言ってたよね……」
ほむら「……うん」
まどか「キュゥべえに騙される前の、バカなわたしを……助けてあげて、くれないかな」
ほむら、まどかの手を握りしめて答える。
ほむら「約束するわ。絶対にあなたを救ってみせる。何度繰り返すことになっても、必ずあなたを守ってみせる」
まどか「良かった……う、ッ！」
安堵の笑みを見せてから、苦痛に呻くまどか。いよいよ彼女のソウルジェムは孵化せんと脈動しはじめる。
まどか「……もうひとつ、頼んでいい？」
ほむら「……ッ」
頼み事の内容を察して、思わず涙を落とすほむら。
まどか「わたし、魔女にはなりたくない……嫌なことも、悲しいこともあったけど、守りたいものだって沢山、この世界にはあったから……」
ほむら「……まどか……ッ」
苦痛に耐えながら、尚も微笑んで、ひび割れはじめた自分のソウルジェムを手に乗せ、差し出すまどか。
まどか「ほむらちゃん……やっと、名前で呼んでくれたね……嬉しい、な……」
ほむら「……ッ」
嗚咽を噛み殺しながら、まどかのソウルジェムに拳銃の狙いをつけるほむら。
廃墟に、銃声が轟き渡る。

□夜の病院
病室のベッドから、がばっと跳ね起きるほむら。
そのまま足早に洗面所へ。
ほむらM『誰も、未来を信じない――』
鏡の前で、眼鏡を外し、両目に魔力を込めて視力を矯正。
さらに三つ編みを解いてストレートヘアになる。

ほむらM『誰も、未来を受け止められない。だったら、私は——』

□まどかの部屋

夜、寝る前に勉強机に向かっているまどか。

ふと風を感じて、驚いて振り向く。

開け放たれた窓の外、闇夜の中に佇むほむらの影。

まどか「……だ、誰？」

ほむら「まどか……あなたに奇跡を約束して取り入ろうとする者が現れても、決して言いなりになっては駄目」

まどか「……え？　あの……」

用件を告げただけで姿を消すほむら。

窓枠の外には、無惨に潰されたキュゥべえの死骸が転がっている。

□米軍基地

静止した時間の中、棒立ちの兵士たちの横をすり抜けるほむら。

武器庫の扉を開け放ち、整然と並ぶ機関銃や手榴弾を見据える。

□魔女の結界

襲いかかってくる魔女を前にして、悠然と佇んでいる魔法少女ほむら。

ほむらM『……もう誰にも頼らない。誰に分かってもらう必要もない』

魔女の攻撃が届く寸前で時間停止。二挺拳銃を、さらに機関銃を乱射して銃弾の壁を作り出す。

ほむらM『もうまどかには戦わせない。全ての魔女は、私一人で片付ける……』

駄目押しに手榴弾のピンを抜いて魔女の懐に投げ入れる。

そして静止解除。

魔女「ギャアアアッ!!」

いきなり銃弾の雨を浴びた上に手榴弾に吹き飛ばされ、絶命して消えていく魔女。

ほむらM『そして今度こそ、ワルプルギスの夜を、この手で……』

□燃えさかる市街地

ワルプルギスの襲撃を受け、炎に包まれた街の中。

傷つき、荒い息を吐きながら、単身で巨大な魔女と対峙するほむら。

その背中を見守るまどかとキュゥべえ。

まどか「ひどい……」

キュゥべえ「仕方ないよ。彼女一人では荷が重すぎた」

まどか「そんな……あんまりだよ！　こんなのってないよ！」

キュゥべえの気配を察し、戦いながらもまどかに向かって叫ぶほむら。
ほむら「まどか！　そいつの言葉に耳を貸しちゃ駄目！」
だが叫びは、ワルプルギスの咆吼と怒涛の攻撃に掻き消され、まどかの耳に届かない。
キュゥべえ「諦めたら、それまでだ。でも君なら運命を変えられる」
まどか「……本当なの？」
キュゥべえ「避けようのない滅びも、嘆きも、すべて君が覆せばいい。そのための力が、君には備わってるんだから」
ほむら、まどかたちに気を取られている隙に、ワルプルギスの一撃をくらう。地に伏しながら、それでも必死にまどかに呼びかけるほむら。
ほむら「騙されないでー　そいつの思う壺よ！」
だがやはり声はまどかに届かない。
まどか「わたしなんかでも、本当に何かできるの？　こんな結末を変えられるの？」
キュゥべえ「もちろんさ。……だから僕と契約して、魔法少女になってよ！」
ほむら「駄目ぇぇぇッ!!」
絶叫するほむら。だがまどかとキュゥべえの間で交わされる契約の閃光が、彼女の目を眩ませる。

□廃墟の街
吹きすさぶ風の中、瓦礫の山の上にひざまずくほむら。傷つき、泣き疲れて放心状態。
隣の瓦礫の山の上には、キュゥべえが座っている。
キュゥべえ「本当に物凄かったね。変身したまどかは」
ほむら「……」
キュゥべえ「彼女なら最強の魔法少女になるだろうと予測していたけれど、まさかあのワルプルギスの夜を一撃で倒すとはね……」
ほむら「その結果どうなるのかも、見越した上だったの？」
ほむら、怒りを噛み殺した掠れ声で問う。
地平線の彼方では、ワルプルギスの夜よりも遙かに巨大で凶暴な魔女と化したまどかが、破壊の限りを尽くしている。
キュゥべえ「遅かれ早かれ、結末は一緒だよ」
何ら悪びれた様子もなく平然と答えるキュゥべえ。
キュゥべえ「彼女は最強の魔法少女として、最大の敵を倒してしまったんだ。もちろん後は最悪の魔女になるしかない。今のまどかなら、おそらく10日かそこいらでこの星を壊滅させてしまうんじゃないかな。――まぁ、あとは君たち人類の問題だ。僕らのエネルギー回収ノルマは概ね達成できたしね」
ほむら「あんたたちは、間違いなく人類の敵よ」

キュゥべえ「僕たちが永らく干渉してきたからこそ、この星の文明はここまで繁栄できたんだよ。君たちだって、鶏や牛と敵対関係にあるわけじゃないだろう？」
ほむらの眼差しがなおいっそう憎しみを帯びるのに気付いて、面倒臭そうに歎息するキュゥべえ。
キュゥべえ「ああ、こういう比喩はなおさら感情に障るんだったっけね。まったく、人類とのコミュニケーションは本当に難しいなぁ」
ほむら、決意を固めて立ち上がり、魔女まどかに背を向ける。
キュゥべえ「……戦わないのかい？」
ほむら「いいえ。私の戦場は、ここじゃない」
盾の砂時計を反転させるほむら。遡る時間。

□モールの地下通路
一話【BパートP.18】と同シチュエーション。逃げるキュゥべえと追うほむら。
ほむらM『繰り返す……私は何度でも繰り返す……』
ほむらの時間静止攻撃で、粉々に撃ち砕かれるキュゥべえ。立ち止まり、荒い息をつきながらその死骸を確認するほむら。
だがそんな彼女の背後を、別のキュゥべえの影が駆け抜ける。
ほむらM『同じ時間を何度も巡り、たったひとつの出口を探る。あなたを絶望の運命から救い出す道を……』
気付いたほむらがさらに追う。だが廊下の角を曲がった先で、キュゥべえを抱き留めたまどかと対面してしまう。
ほむらM『まどか……たった一人の、私の友達』
まどか「ほむら……ちゃん!?」
怯えきったまどかの表情に、心苛まれるほむら。
だがそれでも弱気を見せるわけにはいかず、強面のまま、まどかに詰め寄っていくほむら。
ほむらM『あなたのためなら、私は永遠の迷路に閉じ込められても構わない』

第十一話「最後に残った道しるべ」

【Aパート】

□ほむらの部屋

九話の続き。卓袱台の前に座るほむらと、卓上に拡げられた地図の上に座っているキュゥべえ。

キュゥべえ「時間遡行者、暁美ほむら――過去の可能性を切り替えることで数多の平行世界を横断し、君が望む結末を求めてこの一ヶ月間を繰り返してきたんだね」

ほむら「……」

キュゥべえ「君の存在が、ひとつの疑問に答えを出してくれた。何故、鹿目まどかが魔法少女としてあれほど破格の素質を備えていたのか……今なら納得いく仮説が立てられる」

ほむら「……何ですって？」

キュゥべえ「魔法少女としての潜在力はね、背負い込んだ因果の量で決まってくる。一国の女王や救世主ならともかく、ごく平凡な人生だけを与えられてきたまどかに、どうしてあれほど莫大な因果の糸が集中してしまったのか不可解だった。だが……ねぇほむら、ひょっとしてまどかは、君が同じ時間を繰り返すごとに、強力な魔法少女になっていったんじゃないのかい？」

ほむら「……ッ！」

ほむら、最初のループで無惨に敗北したまどかと、前回のループでワルプルギス以上の魔女に変貌したまどかのことを思い出す。

ほむらの表情を読んで、にやりと笑うキュゥべえ。

キュゥべえ「……やっぱりね。原因は君にあったんだ。正しくは君の魔法の副作用、というべきかな」

ほむら「……どういうことよ？」

キュゥべえ「君が時間を巻き戻してきた理由はただひとつ、鹿目まどかの安否だ。同じ理由と目的で何度も時間を遡るうちに、君は幾つもの平行世界を螺旋状に束ねてしまったんだろう。鹿目まどかの存在を中心軸にして、ね」

キュゥべえ「その結果、決して絡まるはずのなかった平行世界の因果線が、すべて今の時間軸のまどかに連結されてしまったとしたら……彼女の、あの途方もない魔力係数にも納得がいく。君が繰り返してきた時間、その中で循環した因果のすべてが、巡り巡って鹿目まどかに繋がってしまったのさ。あらゆる出来事の元凶として、ね」

ほむら「……ッ」

ショックのあまり、目を見開いてわななくほむら。

キュゥべえ「お手柄だよ、ほむら。君がまどかを最強の魔女に育ててくれたんだ」

□美樹家
雨の中、しめやかに行われるさやかの葬儀。
和子先生や、まどかとそのクラスメイトも参列している。
死んだような虚ろな目で一切の表情を消してるまどか。
葬儀の光景を背景に、ニュース報道の音声が被る。
ニュースキャスターoff「12日より行方が分からなくなっていた市立見滝原中学校二年生の美樹さやかさんが、今朝未明、市内のホテルで遺体となって発見されました。遺体に目立った外傷はなく、発見現場にも争った痕跡がないことから、警察では事件と事故の両面で捜査を進めています。――続いて、天気予報です。今夜は北西の風がやや強く、雨、所により雷雨を伴う場所が――」

□鹿目家玄関
葬儀から帰宅するまどか。
詢子「――お帰り」
休日で在宅の詢子が玄関で出迎える。トレーナーにスウエットパンツの部屋着姿。制服姿のまどかの肩に塩をかけてやる。
黙ってお清めを受けてから、靴を脱ぐまどか。心ここにあらずの様子。
詢子「……なぁ、まどか」
やや声をかけづらそうに、まどかに呼びかける詢子。
まどか「……？」
詢子「さやかちゃんの件……本当に、何も知らないんだな？」
まどか、まったくの無表情と虚ろな眼差しのまま、小さく頷く。
まどか「うん」
詢子「……」
詢子とすれ違い、自室に戻るまどか。詢子は重ねて問いたいものの言葉が喉に詰まり、何も言えず。

□まどかの私室
明かりを消した薄暗い室内。着替えもせず、勉強机に突っ伏しているまどか。
その背中を、やや離れてキュゥべえが見守っている。
まどか「さやかちゃんも、杏子ちゃんも、死んじゃった……」
キュゥべえ「意外な展開ではないよ。予兆はずいぶん前からあった」
冷たい口調のキュゥべえを、怒りを込めて睨みつけるまどか。
まどか「どうでもいいっていうの？　みんな、あなたのせいで死んだようなものなのに」
まどかの剣幕に、途方に暮れて歎息するキュゥべえ。

キュゥべえ「たとえば君は、家畜に対して引け目を感じたりするのかい？　彼らがどういうプロセスで君たちの食卓に並ぶのか――」
キュゥべえ、まどかの脳裏にテレパシーで食肉工場の光景を送り込む。吊るされ捌かれる牛肉、豚肉、ケージに詰め込まれたブロイラーのイメージが、続々とまどかの精神に流れ込む。
思わず頭を押さえ、拒絶するまどか。
まどか「やめてよッ！」
キュゥべえ「その反応は理不尽だ。この光景を残酷と思うなら、君には本質がまったく見えていない」
次にキュゥべえが送り込んでくるイメージは、牧場で長閑に草をはんでいる牛と、岩山で寒さを堪えている野牛の比較。
キュゥべえ「彼らは人間の糧になることを前提に、生存競争から保護され、淘汰されることなく繁殖している。牛も豚も鶏も、他の野生動物と比べれば、種としての繁栄ぶりは圧倒的だ。君たちはみな理想的な共栄関係にあるじゃあないか」
まどか「……同じことだって言いたいの？」
キュゥべえ「むしろ僕らは、人類が家畜を扱うよりも、ずっと君たちに対して譲歩しているよ。まがりなりにも知的生命と認めた上で交渉しているんだしね」
まどか「……」
まどかの無言の拒絶に、歎息するキュゥべえ。
キュゥべえ「信じられないのかい？　それなら見せてあげようか。インキュベーターと人類が共に歩んできた歴史を」
キュゥべえ、まどかの机の上に飛び乗り、指先でまどかの額に触れる。
その途端、まどかの意識の中に、膨大な歴史のイメージが流れ込んでくる。石器時代から文明の曙の光景。そして後の時代には神話として語られることになる、古代の魔法少女たちの活躍。
キュゥべえoff「僕たちはね、有史以前から君たちの文明に干渉してきた。数え切れないほど大勢の少女がインキュベーターと契約し、希望を叶え、そして絶望に身を委ねていった」
巫女として祭り上げられる魔法少女たち。魔女裁判で火炙りにされる魔法少女たち。
クレオパトラ、卑弥呼、ジャンヌ・ダルクといった歴史上の女傑たちも、すべてその正体は魔法少女だったとして回想される。
キュゥべえoff「祈りから始まり、呪いで終わる――これまで数多の魔法少女たちが繰り返してきたサイクルだ。――中には歴史に転機をもたらし、社会を新しいステージへと導いた子たちも大勢いた」

誰もが最初は理想と希望を胸に懐き、そして挫折し、最後にはグリーフシードと化して災厄をもたらす結末に至る。
あまりにも多すぎる悲劇の連鎖に、涙ぐみ、目を覆うまどか。
まどか「みんな……みんな信じてたの？　信じてたのに裏切られたの？」
キュゥべえ「彼女たちを裏切ったのは、僕たちではなく、むしろ自分自身の祈りだよ」
まどかとは対照的に、まったく同情の素振りなど見せないキュゥべえ。
キュゥべえ「どんな希望も、それが条理にそぐわないものである限り、必ず何らかの歪みを生み出すことになる。やがてそこから災厄が生じるのは当然の摂理だ。そんな当たり前の結末を、裏切りだというのなら、そもそも願い事なんてすること自体が間違いなのさ。――でも愚かとは言わないよ。彼女たちの犠牲によって、人の歴史が紡がれてきたこともまた事実だし」
やがてキュゥべえの幻覚は終わり、まどかは元いた自分の部屋に戻される。
キュゥべえ「そうやって過去に流されたすべての涙を礎にして、今の君たちの暮らしは成り立っているんだよ」
まどか「……」
キュゥべえ「それを正しく認識するなら、どうして今さら、たかだか数人の運命だけを特別視できるんだい？」
まどか「……ずっと、あの子たちを見守りながら、あなたは何も感じなかったの？　みんながどんなに辛かったか、分かってあげようとしなかったの？」
キュゥべえ「それが僕たちに理解できたなら、わざわざこんな星にまで来なくても済んだんだけどね」
肩を竦めるキュゥべえ。
キュゥべえ「僕たちの文明では、感情という現象は極めて希な精神疾患でしかなかった。だから君たち人類を発見したときは驚いたよ。すべての個体が別個に感情を持ちながら共存している世界なんて、想像だにしなかったからね」
まどか「もしも……あなたたちがこの星に来てなかったら……」
キュゥべえ「君たちは今でも裸で洞穴に住んでたんじゃないかな」

□露天のおでん屋
人気のないガード下。おでんの屋台で飲んでいる和子と詢子。
和子「やっぱね……教え子とこういう別れ方ってのは、辛いわよ」

詢子「……だよな」
和子「事情がはっきりしないってのが、またね……三年生にも一人、行方不明の子がいるし、職員会議はしっちゃかめっちゃかよ」
詢子「何も分からないのか？　やっぱり」
和子「さやかちゃんね、友達と、恋愛絡みでちょっと色々あったらしいの。その子もかなりダメージ背負っちゃってね……普通なら甘酸っぱい想い出で済むとこなんだけど、こういう結末になっちゃうとねぇ……」
詢子「……」
和子「警察は、家出の挙げ句に衰弱死、って線で決着つけちゃうみたい。手がかり、何にもないしね。……まどかちゃんは、どう？」
詢子「わかんねぇ」
和子「……」
　意外そうに詢子を見つめる和子。
詢子「あたしの勘じゃぁ、何か知ってる様子ではあるんだ。でも、嘘をついてるようにも見えねぇ。……初めてなんだよ。あいつの本音を見抜けないなんて。情けねぇよな。自分の娘だってのに」
和子「詢子が弱音を吐くなんてねぇ……」
詢子「近頃、ちょっと妙だなとは思ってたんだ。なんか一人で背負い込んでるなって察してはいたんだけど。いつまで経ってもあたしに相談してこねぇ……ちったぁ頼りにされてると思ってたのにさぁ」
和子「あの年頃の子供はね、ある日いきなり大人になっちゃったりするもんよ。親にとってはショックだろうけど」
詢子「そういうもんか……」
和子「信じてあげるしかないわ。今まどかちゃんに必要なのは、気持ちを整理する時間だろうから。しばらくは待ってあげないと」
詢子「……何も出来ねぇのって、キツイな」
和子「そういうところで要領悪いの、相変わらずよねぇ。詢子は」

□ほむらのアパート前
　ほむらの住所であるボロアパートの前に立つまどか。そのあまりのオンボロぶりに気圧されるものの、意を決し、ほむらの部屋をノックする。
　扉を開けるほむら。来訪者がまどかだと分かり、憮然と黙り込む。
まどか「……入っていいかな？」
ほむら「……」
　不機嫌な面持ちのまま、まどかを中に通すほむら。

□ほむらの部屋

作戦本部の様相を呈した室内に、圧倒されるまどか。だがその意味するところを察しているだけに、驚きや疑問は見せない。
まどか「これが……ワルプルギスの夜？」
ほむら「……」
苦々しい沈黙で、返答を拒むほむら。
まどか「杏子ちゃんが言ってた。一人で倒せないほど強い魔女をやっつけるために、ほむらちゃんと二人で戦うんだって。……ずっとここで、準備してたのね」
卓袱台の上の地図に見入り、その意味を読み取ろうとするまどか。
まどか「……街中が、危ないの？」
ほむらも観念し、気乗りしないながらも説明を返す。
ほむら「今までの魔女と違って、こいつは結界に隠れて身を守る必要なんてない。ただ一度具現しただけでも何千人という人が犠牲になるわ。……相変わらず普通の人には見えないから、被害は地震とか、竜巻とか、そういった大災害として誤解されるだけ」
まどか「なら、絶対にやっつけなきゃ駄目だよね」
ほむら「……」
静かな決意を秘めたまどかの言葉に、目を逸らして沈黙するほむら。
まどか「杏子ちゃんも死んじゃって、戦える魔法少女はもう、ほむらちゃん一人だけしか残ってない。だったら――」
ほむら「一人で充分よ」
まどかに皆まで言わさず、きっぱりと言い切るほむら。
ほむら「佐倉杏子には無理でも、私なら一人でワルプルギスの夜を撃退できる。杏子の援護も、本当は必要なかったの。ただ彼女の顔を立ててあげただけ」
まどか「……本当に？」
ほむら「……」
答えないほむら。その頑なな横顔を見守るうちに、まどかの目に涙が浮かぶ。
まどか「何でだろう……わたし、ほむらちゃんのこと信じたいのに……ウソツキだなんて、思いたくないのに……」
ほむら「……」
悲しみを堪えながら語るまどかを前にして、ほむらも、必死に感情を抑え込む。
まどか「全然、大丈夫だって気持ちになれない。ほむらちゃんの言ってることが本当だって思えない……」
ただ一途にほむらの身を案じるまどかを、拒み続けなければならない苦悩。ほむらはそれを堪えきれず、言葉は徐々に悲しみに震えはじめる。
ほむら「……本当の気持ちなんて、伝えられるわけないのよ」
まどか「ほむらちゃん……」
ほむら「だって――私は、まどかとは、違う時間を生きてる

んだもの」
感極まり、まどかを抱きしめるほむら。驚きに身を強張らせるまどか。
まどか「――ッ!?」

【Bパート】

□ほむらの部屋
【Aパート】より続き。
ほむらに硬く抱きしめられているまどか。
ほむら「……私ね、未来から来たんだよ」
告白とともに、ほむらの瞳から涙が溢れ出る。
ほむら「何度も何度も、まどかと出会って、それと同じ回数だけ、あなたが死ぬところを見てきたの。……どうすればあなたが助かるか……どうすれば運命を変えられるのか……その答えだけを探して、何度も始めからやり直して……」
まどか「それって……えぇと……」
途方に暮れ、身じろぎしようとするまどかだが、ほむらにより一層強く抱きしめられる。
ほむら「ごめんね……わけ分かんないよね……気持ち悪いよね……まどかにとっての私は、出会ってからまだ一ヶ月も経ってない転校生でしかないものね……」
まどか「……?」
ほむら「だけど私は……私にとっての、あなたは……」
ほむらの脳裏を過ぎる過去のループの記憶。
(十話【AパートP.134】、初めて魔女に襲われたほむらをまどかが助けに来たシーン)
(十話【AパートP.137】、ほむらが魔法少女になって初めての戦いのシーン)
(十話【BパートP.141】、ワルプルギス戦の後に、たった一つ残ったグリーフシードをまどかから譲られるシーン)
ほむら「……繰り返せば繰り返すほど、あなたと私が過ごした時間はずれていく。気持ちもずれて、言葉も通じなくなっていく。……たぶん私は、もうとっくに迷子になっちゃってたんだと思う」
まどか「ほむらちゃん……」
まどかは全てを理解しきれないものの、それでもほむらの苦悩の深さだけは感じ取る。いたたまれなさに、彼女もまた胸が苦しくなる。
ほむら「……あなたを救う」
泣くだけ泣いた後で、決意を込めて、そう宣言するほむら。
ほむら「……それが私の最初の気持ち……今となっては、た

ったひとつだけ最後に残った、道しるべ」
抱きしめていたまどかから身を離し、その両肩を掴んだまま、ほむらは言い含めるように語る。
ほむら「分からなくていい。何も伝わらなくてもいい。それでもどうか――お願いだから。あなたを私に守らせて」
まどか「……」
もはや嫌とは言いきれず、ただ小さく頷くしかないまどか。

□見滝原市全域
翌日、黎明。不吉なまでの沈黙。誰一人いない街路を、一陣の風が吹き抜ける。
裏路地、工事現場、廃墟……これまで魔法少女と魔女たちの戦いの舞台となってきた各所に、続々と旋風が巻き起こり、唸りを上げる。まるで怨念の声のように。

□気象台、レーダー観測室
レーダー画面を凝視しながら、血相を変えて電話をかけている観測員。
観測員「雷雲がとんでもない勢いで分裂と回転を起こしてます。明らかにスーパーセルの前兆です。直ちに避難指示の発令を！」

□住宅街
既に猛烈な風雨に晒されつつある住宅街。
市役所の広報車が、拡声器で避難指示を流している。
広報車「本日午前7時、突発的異常気象に伴う避難指示が発令されました。付近にお住まいの皆様は、速やかに最寄りの避難場所への移動をお願いします。こちらは、見滝原市役所広報車です。本日午前7時――」

□河川敷グラウンド
吹き荒れる嵐の中、静かに戦いの時を待つほむら。
ほむら「……来る」

□学校の体育館
周囲から避難してきた住民が、家族ごとに身を寄せ合い、不安げにざわめいている。その中には鹿目家の一同の姿もある。
タツヤ「きょーは、おとまり？　きゃーんぷ、なん？」
知久「ああ、そうだよ。今夜はみんなで一緒にキャンプだ」
はしゃぐタツヤを余所に、災害の正体を知るまどかは気が気ではない。
まどか「ほむらちゃん……」

□河川敷グラウンド

雷鳴と突風。逆巻く風が竜巻となり、グラウンドに立ち上がる。
常人には竜巻としか見えないその中に、ゆっくりと姿を現す巨大な怪物の影。ワルプルギスの夜である。
ほむら、魔法少女へと変身。
完全に実体化したワルプルギスの夜が咆吼しようとしたその瞬間、時間静止魔術が発動。
ほむら「今度こそ――」
静止した時間の中、射撃状態のM72ロケットランチャーを肩に担ぎ、硬直したワルプルギスへと照準をつけるほむら。
ほむら「――決着を、つけてやる！」
ロケットランチャー発射。と同時に時間再生。直撃をくらい悲鳴を上げるワルプルギス。
即座にほむらは再度時間を停止させ、走ってワルプルギスの右側へと迂回しながら、使用済みのランチャーを投げ捨て、盾裏から取り出した新たなM72のピンを抜き伸長。射撃態勢に。
再び肩に担いでから発射し、時間を再生。ワルプルギスにしてみれば予想外の方向から間髪入れず第二射をくらったようなもので、避けようもなく直撃。
さらにワルプルギスの背後、そして左側から、第3、第4のロケット弾が忽然と出現し、その巨体に直撃する。
たまらず絶叫するワルプルギス。
ワルプルギス「ガァァァァッ！」
苦しみ悶えている隙に、またも時間が停止する。
ほむら、今度はワルプルギスのすぐ足元の土手に、せっせとクレイモア地雷を設置しはじめる。雛壇のように何列もずらりと整列する地雷。20個ほど設置したところでほむらは土手を駆け上がり、斜面の反対側に飛び込みながら時間を再生。同時に地雷の起爆スイッチを押す。
炸裂した地雷から総計1万4千個もの鉄球が撒き散らされ、ワルプルギスの足元から全身を襲う。これまた避けられるはずもなく、絶叫し、よろめくワルプルギス。
ワルプルギス「ギァァァァァッ！」
痛みのあまり足元がおぼつかなくなり、すぐ側にあった鉄橋の上へと倒れそうになるワルプルギス。その巨体が橋を押し潰す寸前に、またしても時間静止。
空中で止まった雨の帳を突き破り、土手の上の舗装路を疾走してくる一台のタンクローリー。運転席でハンドルを握るのはほむらである。
タンクローリーは強引な急カーブで鉄橋へと乗り入れる。無茶なハンドリングで片輪が浮くがほむらは意に介さず。傾いたまま鉄橋を疾走するタンクローリー。バランスは回復せず、ついにタンクローリーは横転し、そのまま橋の上を滑走する。

上向きになった運転席のドアを蹴り破り、身を乗り出すほむら。滑走する車上から橋へと飛び降りる。ほむらの足が離れた途端に、タンクローリーの時間も停止してその場に硬直する。
ほむらは宙を舞いながら、さらに発煙筒を点火。タンクローリーが滑っていく先へと投げつける。手から離れた瞬間に発煙筒も空中で静止。
傾いたワルプルギスの身体の真下を通り、鉄橋を駆け抜けるほむら。河の対岸までたどり着いたところで、時間を再生。
倒れかかるワルプルギスの真下へと、横倒しのまま滑走していくタンクローリー。車体は鉄橋もろとも巨大魔女の身体に押し潰され、破裂した内容物が、路面に転がっていた発煙筒の炎に触れる。
大爆発。猛烈な炎が巨大魔女を包み込む。
土手の陰に隠れて、爆風と破片をやり過ごしたほむら。
立ち上がり、濛々たる黒煙に覆われた河川敷を見つめる。
ほむら「……やったか？」
成果を見届け、期待しかかったほむらめがけて、黒煙の奥から躍り出るワルプルギスの尻尾。
薙ぎ払われた尻尾の一撃をもろにくらって、宙高く吹き飛ばされるほむら。
ほむら「ぐ……は……ッ」

喀血しながら、増水した川へと落ちていくほむら。

□学校の体育館
遠く離れた河川敷でのタンクローリー爆発の衝撃が、かすかな地響きとなって伝わってくる。
地震か、とどよめく避難者たち。ただ独り、まどかだけが、それがほむらの戦っている証だと理解して歯噛みする。
いてもたってもいられなくなり、立ち上がるまどか。
詢子「……ん？　どした？」
まどか「ちょ、ちょっと。トイレ」

□体育館前の渡り廊下
外の豪雨を眺めるまどか。その傍らにはキュゥべえ。
まどか「……ほむらちゃんが、独りでも勝てるっていうのは、本当？」
キュゥべえ「それを否定したとして、君は僕の言葉を信じるかい？」
まどか「……」
キュゥべえ「今さら言葉にして説くまでもない。その目で見届けてあげるといい。ワルプルギスの夜を前にして、暁美ほむらがどこまでやれるか」
まどか「どうして……そうまでして戦うの？」

キュゥべえ「彼女がまだ希望を求めているからさ」
呆れ半分、嘲り半分に、さも滑稽そうに語るインキュベーター。
キュゥべえ「いざとなればこの時間軸もまた無為にして、ほむらは戦い続けるだろう。何度でも性懲りもなく、この無意味な連鎖を繰り返すんだろうね。もはや今の彼女にとって、立ち止まることと諦めることは同義だ」
まどか「……」
まどか、昨夜のほむらが見せた痛切な涙を思い出す。
キュゥべえ「何もかもが無駄だったと、決してまどかの運命を変えられないと確信したその瞬間に、暁美ほむらは絶望に負けて、グリーフシードへと変わるだろう。彼女自身にも分かってるんだ。だから選択肢なんてない。勝ち目のあるなしに関わらず、ほむらは戦うしかないんだよ」
まどか「……希望を持つ限り、救われないっていうの?」
キュゥべえ「そうさ。過去のすべての魔法少女たちと同じだよ。まどか、君だって一緒に見ただろう?」
まどか「……ッ」
肩を震わせて泣くまどか。だがその涙は悲しみでなく、決意と信念の涙である。
踵を返し、校門へ向かおうとするまどか。
その肩を、背後から詢子が掴む。はっとして振り向くまどか。
詢子「どこに行こうってんだ、おい?」
まどか「……ママ」
母親の怒りの表情に気後れしつつも、だがまどかの決意は揺るがない。
まどか「わたし……友達を、助けに行かないと」
詢子「消防署に任せろ。素人が動くな」
まどか「わたしでなきゃ駄目なの」
詢子、まどかに平手打ちを見舞う。だがそれでもまどかは怯まない。
詢子「テメェ独りのための命じゃねぇんだ! あのな、そういう勝手をやらかして、周りがどれだけ心配すると――」
まどか「分かってるよ。わたしにも、よく分かる」
詢子「……ッ」
落ち着いたまどかの返事に、怒りながらも二の句が継げなくなる詢子。
まどか「わたしだって、ママのこと、パパのこと、大好きだから。どんなに大切にしてもらってるか知ってるから。自分を粗末にしちゃいけないの、分かる。だから違うの。みんな大事で、絶対に守らなきゃいけないから――そのためにも、わたし、今すぐ行かなきゃいけない所があるの」

詢子「……理由は説明できねぇってのか？」
こくり、と頷くまどか。
詢子「なら、あたしも連れて行け」
まどか「駄目。ママはパパとタツヤの側にいて。二人を安心させてあげて」
あくまで冷静なまどかに対し、信用していいのかどうか、ますます葛藤する詢子。そんな母の目をまっすぐに見て、まどかは続ける。
まどか「……ママはさ、わたしが良い子に育ったって、言ってくれたよね。嘘もつかない、悪い事もしないって。……今でもそう信じてくれる？　わたしを正しいと思ってくれる？」
詢子は悩み抜いた挙げ句に、今は娘を案じるよりも信用するしかないと判断する。
詢子「……絶対に下手打ったりしないな？　誰かの嘘に踊らされてねぇな？」
まどか「うん」
詢子は苦々しい顔で、まどかの肩から手を放し、やや荒っぽくその背中を押す。
まどか「……ありがとう。ママ」
雨の中へと駆け去っていくまどか。その背中を、痛切な面持ちで見守る詢子。

□住宅地
依然、健在のワルプルギス。無人となった家屋を蹴散らしながら、市街地を目指す。
その後を、必死に追いかけるほむら。既に満身創痍で呼吸も荒い。
ほむら「これ以上先に進まれたら、避難所を襲われる……どうにかして、ここで食い止めないと……」
ワルプルギス「ガァァァッ！」
ほむらの気配を察して、振り向きざまに傍らのマンションを前肢で叩き壊すワルプルギス。
ほむら「ッ⁉」
咄嗟に時間を静止させ、逃げようとするほむら——だが、魔法は発動しない。盾の砂時計は既に空になっている。
ほむら「そんな⁉」
逃げ切れず、建物の倒壊に巻き込まれるほむら。
粉塵が舞い上がる中、ワルプルギスはほむらの姿を見失い、次なる獲物を探して歩き始める。
ほむら「く……」
辛くも圧死を免れたほむら。必死に身を捩り、瓦礫の下から這い出ようとするが、片足が挟まって動けない。
遠ざかるワルプルギスの背中を、絶望的な思いで見守るほむら。
ほむら「どうして……どうしてなの……何度やっても……あ

いつに勝てない……ッ！」
砂時計を反転させ、時間を逆行させようとするほむら。
だが直前で躊躇する。
ほむらM『繰り返せば……それだけまどかの因果が増える
……私がやってきたことは、結局……！』
悔しさのあまり嗚咽するほむら。そのソウルジェムも、
絶望でじわじわと黒ずんでいく。
だが、投げ出されたほむらの手を、誰かが握りしめる。
その場に駆けつけたまどかである。
ほむら「――ッ！」
まどか「もういい……もういいんだよ。ほむらちゃん」
ほむら「まどか……」
まどか、立ち上がって、避難所を目指すワルプルギスの
背中を見つめる。その決意の眼差しに、まどかの意図
を悟るほむら。
まどかの足元には、いつの間にか現れたインキュベー
ターが寄り添っている。
ほむら「まどか、まさか……」
動揺するほむらに、優しくも悲しげに微笑みかけるまど
か。
まどか「ほむらちゃん――ごめんね」

第十二話「わたしの、最高の友達」

【Aパート】

□住宅街廃墟

前話より続き。決意の眼差しでワルプルギスの夜を見据えるまどかと、その隣に控えるキュゥべえ。さらにその傍らには、瓦礫に足を挟まれ動けないほむら。

まどか「ほむらちゃん……ごめんね。わたし、魔法少女になる」

ほむら「まどか、そんな……」

狼狽えるほむらとは裏腹に、まどかの表情には一切の迷いがない。

まどか「わたし、やっと分かったの。叶えたい願い事を見つけたの。だからそのために、この命を使うね」

ほむら「やめて！」

思わず涙を散らして叫ぶほむら。

ほむら「それじゃあ、私は……私は何のために……」

まどか「本当に、ごめんね」

悲嘆するほむらを、まどかは穏やかに諭す。

まどか「これまでずっと、ずっとずっとほむらちゃんに守られて、望まれてきたから、いまのわたしが在るんだと思う。そんなわたしが、やっと見つけ出した答えなの。信じて。絶対に、今日までのほむらちゃんを無駄にしたりしないから」

覚悟を決めたまどかの前に、満を持して進み出るインキュベーター。

キュゥべえ「数多の世界の運命を束ね、因果の特異点となった君ならば、どんな途方もない望みであろうと叶えられるだろう」

まどか「……本当だね？」

キュゥべえ「さぁ、鹿目まどか。その魂を対価にして、君は何を希う？」

まどか「わたし……」

やや間をおいて深呼吸してから、まどかは高らかに宣言する。

まどか「すべての魔女を、産まれる前に消し去りたい。すべての宇宙、過去と未来のすべての魔女を、この手で」

まどかの胸元に光が集まる。契約によるソウルジェム誕生の輝き。

キュゥべえ「その祈りは――」

だがその光を前にして、むしろ狼狽えるキュゥべえ。

キュゥべえ「そんな祈りが叶うとすれば、それは時間干渉なんてレベルじゃない。因果律そのものに対する叛逆だ！君は……神にでもなるつもりなのか？」

まどか「神様でも、何でもいい」
胸元の光にそっと手を添えながら、まどかは目を閉じて一途に願い続ける。
まどか「今日まで魔女と戦ってきたみんなを——希望を信じた魔法少女を、わたしは泣かせたくない。最後まで笑顔でいてほしい。それを邪魔するルールなんて、壊してやる。変えてやる！　これがわたしの祈り……わたしの願い……」
そして目を見開き、まどかはキュゥべえに一喝する。
まどか「さぁ、叶えてよ。インキュベーター！」
光は拡がり、視界を真っ白に覆い尽くす。

□マミの部屋（幻覚）
ローテーブルに向かってちょこんと正座しているまどか。目の前にはマミ手製のシフォンケーキ。
マミが穏やかな笑みを浮かべつつ、紅茶を配膳してくれる。
マミ「鹿目さん、それがどんなに恐ろしい願いか分かっているの？」
まどか「……たぶん」
マミ「未来と、過去と、すべての時間で、あなたは永遠に戦い続けることになるのよ」
あくまで穏やかに諭すように、マミは先を続ける。
マミ「そうなればきっと、あなたはあなたという個体を保てなくなる。死ぬなんて生易しいものじゃない。未来永劫に終わりなく、魔女を滅ぼす概念として、この宇宙に固定されてしまうわ」
まどか「いいんです。そのつもりです」
怯むことなく返答するまどか。
まどか「希望を懐くのが間違いだなんて言われたら、わたし、そんなのは違うって……何度でも、そう言い返せます。きっといつまでも言い張れます」
杏子「いいんじゃねぇの？　やれるもんなら、やってみなよ」
いつの間にか隣には、ふるまわれた紅茶とケーキをがっつがっつと豪快に食べている杏子がいる。
杏子「戦う理由、見つけたんだろ？　逃げないって自分で決めたんだろ？　なら仕方ないじゃん。あとはもう、とことん突っ走るしかねーんだからさ」
まどか「うん……ありがと、杏子ちゃん」
マミ「……じゃあ、預かっていたもの、返さないとね」
マミはまどかに、かつてまどかが綴った変身構想ノートを差し出す。
まどか「あはは……」
やや照れくさそうに、それを受け取るまどか。
マミ「あなたは、希望を叶えるんじゃない。——あなた自身が、希望になるのよ。私たち全ての希望に」

マミの言葉とともに、部屋の光景はフェードアウトに呑み込まれていく。

□住宅街廃墟

猛烈な輝きを放ち続けるまどか。その姿は魔法少女スタイルへと変わっている。

ほむら「……ッ！」

あまりの眩さに目を庇うほむらとキュゥべえ。

ワルプルギス「グァァァァ……ッ⁉」

ワルプルギスの夜もまた背後の輝きに気付き、振り向いて戦きの唸り声を上げる。

変身したまどかは天空に向けて弓をつがえ、射る。膨大な魔力と共に放たれた矢は無限に分裂し、天空のあらゆる方角へと飛び去っていく。

□どこかの街、どこかの裏路地

傷つき、力尽きようとしている一人の魔法少女。

悔し涙に暮れながら、黒く染まった自分のソウルジェムを握りしめる。

グリーフシードへと変貌したそこから、魔女が孵化する兆しを、絶望の眼差しで見守る少女。

だがそこに、空の彼方から飛来したまどかの矢が、少女を光で包み込む。

光の中で、優しく微笑みながら少女の手を包み込むまどか。

孵化しかかっていたグリーフシードが、光に浄化され消えていく。

それを見届けて、安堵に顔を和ませ、力尽きる魔法少女。

□あらゆる時間、あらゆる平行世界

光の矢になって、異なる時空へと次々と飛来し、片っ端からグリーフシードの孵化を阻止していくまどか。

まどか「あなたたちの祈りを、絶望で終わらせたりしない！」

その光景は、全宇宙のすべてのソウルジェムに映写される。あらゆる時代の魔法少女がそれを見届け、まどかの呼びかける声を聴く。

まどか「あなたたちは誰も呪わない。祟らない。因果はすべてわたしが受け止める！　だからお願い。最後まで自分を信じて！」

十一話で描かれた過去の魔法少女たちが、みな救済の在処を知る。クレオパトラも、卑弥呼も、ジャンヌ・ダルクも、新たな希望と決意を胸に、それぞれの運命に立ち向かう勇気を得て立ち上がる。

□住宅街廃墟

もはや光の塊となったまどか。空に向けて数限りなく弓

を射続け、その矢は無限に増殖して世界中へ、そして時空の彼方へと飛び去っていく。
そんなまどか目掛けて、雄叫びとともに突進しようとするワルプルギスの夜。
だがその巨体の端々が、ふいにボロボロと崩壊し、崩れたそこから眩い光を放ちはじめる。戸惑うように己の身体を見下ろすワルプルギス。
ワルプルギス「グ、ガ、ガァァァ……ッ!?」
まどか「もういいの……もういいんだよ」
己の内部に生じた光によって、内側から食い潰されていくワルプルギス。に、優しく微笑みかけるまどか。
まどか「もう誰も恨まなくていいの。誰も呪わなくていいんだよ。……そんな姿になる前に、あなたは、わたしが受け止めてあげるから」
崩壊していくワルプルギスに、手を差し伸べるまどか。
巨大怪獣が内から放つ光はますますます拡大しながら溢れ出て、ついには見守るほむらの視野を真っ白に埋め尽くす。
ほむら「……ッ!?」

□虚無の闇

光に目が眩んでいたほむらが、ふと気付くと、無限の闇の中を漂っている。
ほむら「ここは……」
キュゥべえoff「まどかがもたらした新しい法則に基づいて、宇宙が再編されているんだよ」
どこからともなく届くキュゥべえの声。闇の中に次々と小さな光点が灯り、いつしかそこは星明かりに満たされた宇宙空間へと変わる。
キュゥべえoff「――そうか、君もまた時間を超える魔法の遣い手だったっけね。じゃぁ一緒に見届けようか。鹿目まどかという存在の結末を――」
遠い彼方に現れた一筋の流れ星が、徐々にほむらの方に迫ってくる。
キュゥべえoff「あれが、彼女の祈りがもたらしたソウルジェムだ」
流れ星は、途方もなく巨大なソウルジェム。既に呪いの色に染まり、じわじわと黒く染まっていく。
ほむら「そんな……」
ほむらの目の前を通過していく巨大ソウルジェム、そのあまりの大きさに息を呑むほむら。
キュゥべえoff「その壮大すぎる祈りを叶えた対価に、まどかが背負うことになる呪いの量が分かるかい?」
ソウルジェムが流れていく彼方には、青く輝く星、地球。
キュゥべえoff「ひとつの宇宙を作り出すに等しい希望が、遂げられた。それは即ち、ひとつの宇宙を終わらせるほ

どの絶望をもたらすことを意味する。当然だよね」
いよいよ地球に接近したところで、巨大ソウルジェムはグリーフシードへと変わり、そこから地球より巨大な魔女を孵化させる。
ほむら「あ、あ……」
目を覆うほむら。だがその耳元に、まどかの声が優しく囁きかける。
まどかoff「ううん。大丈夫」
はっとして顔を上げるほむら。すると宇宙の彼方に眩い光が現れる。
まどかoff「わたしの願いは、すべての魔女を消し去ること。本当にそれが叶ったんだとしたら――」
巨大宇宙魔女を追って迫り来る光。無限の時空を転戦して超進化を遂げた、魔法少女まどか究極形態。
まどかoff「わたしだって、もう絶望する必要なんてない」
ハイパーアルティメットまどか、地球を丸呑みしようとしていた宇宙魔女に向けて浄化ビーム発射。その凄まじいパワーによって、魔女は宇宙を震撼させる絶叫とともに消滅していく。
魔女を呑み込む眩い光は、そのまま拡がってほむらの視界を覆い尽くす。
ほむら「――ッ!?」

□虚無の光

上下も方角も奥行きもない、ただ真っ白い空間。
キュゥべえoff「まどか。これで君の人生は――始まりも終わりもなくなった」
呼びかけるキュゥべえの声に、目を開けるまどか。全てをやり遂げ、達観した静かな面持ち。
キュゥべえoff「この世界に生きた証も、その記憶も、もう何処にも残されていない。君という存在は一つ上の領域にシフトして、ただの概念に成り果ててしまった。もう誰も君を認識できないし、君もまた誰にも干渉できない。君は……この宇宙の一員ではなくなった」
ほむら「何よ、それ……」
一方で、虚無の中に慟哭の想いを放つほむら。
ほむら「これがまどかの望んだ結末だっていうの？　こんな終わり方であの子は酬われるの？　冗談じゃないわ！　これじゃ死ぬよりももっと酷いじゃない！」
まどか「ううん、違う……これで良かったんだよ。ほむらちゃん」
嘆くほむらの思念に、まどかの思念が寄り添う。
まどか「今のわたしにはね、過去と未来のすべてが見えるの。かつてあったかもしれない宇宙も、いつか有り得るかもしれない宇宙も、みんな」
ほむら「まどか……」

まどか「だからね、ぜんぶ分かったよ。幾つもの時間で、ほむらちゃんがわたしのために頑張ってくれたこと、何もかも」
ほむらはまどかと共に、自らが経験してきた円環時間の中の戦いの数々を回想する。
（十話【AパートP.132】、ほむら初登校でまどかに廊下に連れ出されたシーン）
（十話【AパートP.134】、魔女初退治の後、マミ、まどか、ほむらでお茶を飲むシーン）
（十話【AパートP.135】、初めてのワルプルギス戦で、ほむらの制止を振り切って戦いに臨むまどかのシーン）
（十話【BパートP.140】、錯乱したマミをまどかが殺し、それをほむらが慰めるシーン）
まどか「……何度も泣いて、傷だらけになりながら、それでもわたしのためだけに……ずっと気付いてあげられなくて、ごめんね」
ほむら「……ッ」
ついに想いが通じたことで、喜びのあまり、涙に喉を詰まらせるほむら。
まどか「今のわたしになったから、本当のあなたを知ることができた。わたしには、こんなにも大切な友達がいてくれたんだって。……だから、嬉しいよ。後悔なんてない。ほむらちゃん、ありがとう。あなたはわたしの、最高の友達だったんだね……」
ほむら「……だからって、あなたは、このまま……帰る場所もなくなって、大好きな人たちとも離ればなれになって……こんな場所で、独りぼっちで、永遠に取り残されるっていうの？」
まどか「独りじゃないよ。みんな、みんないつまでもわたしと一緒だよ」
穏やかに微笑むまどか。
まどか「これからのわたしはね、いつだって、どこにでもいるの。だから見えなくても、聞こえなくても、わたしはほむらちゃんの側にいるよ」
ほむら「まどかは……それでいいの？」
諭されても、だがほむらは諦めきれない。
ほむら「私はあなたを忘れちゃうのに？　まどかのこと、もう二度と、感じ取ることさえできなくなっちゃうのに？」
まどか「ううん、諦めるのは、まだ早いよ」
励ますように、かぶりを振るまどか。
まどか「ほむらちゃんは、こんな場所までついてきてくれたんだもの。だから元の世界に戻っても、もしかしたら、わたしのこと忘れずにいてくれるかも」
まどかは自分の髪を結わえていたリボンを解き、ほむらの手に握らせる。

まどか「大丈夫。きっと大丈夫。信じようよ」
ほむら「まどか……」
まどか「だって魔法少女はさ、夢と希望を叶えるんだから。きっとほんの少しなら、本当の奇跡があるかもしれない。……そうでしょう？」
ほむらの側を離れていくまどか。そのまま存在は希薄になり、拡散していく。
ほむら、まどかに渡されたリボンを握りしめ、泣きながらもう一方の手を差し伸べる。
ほむら「まどかッ、行かないでッ！」
まどか「ごめんね……わたし、みんなを迎えに行かないと。いつかまたもう一度、ほむらちゃんとも逢えるから。それまでは……ほんのちょっとだけ、お別れだね……」
ほむら「まどかぁぁッ！」
消えていくまどか。現実空間へと引き戻されていくほむら。

【Bパート】

□音楽学校のホール
バイオリンを手に、舞台の上に一人で歩み出る恭介。胸には試験番号を示すバッジ。
がらんどうの客席では、真ん中の席に4人だけ、審査員の教師が無表情に座っている。緊張に生唾を呑む恭介。
恭介「25番、上条恭介です。課題曲は……アヴェ・マリア」
恭介は一旦目を閉じ、精神を集中させてから、引き締まった表情で演奏を始める。
その様子を、審査員たちよりずっと後方の席で、並んで腰掛けて聴いているまどかとさやか。
さやか「なんか、手間かけさせちゃったね……」
まどか「ううん。こっちこそごめん。こういう結果しか用意できなくて」
舞台上の恭介も、審査員たちも、まどかとさやかの存在には気付かない。
まどか「さやかちゃんを救うには、何もかも無かったことにするしかなくて、だったらこの未来も消えてなくなっちゃうの。でもそれは、たぶん、さやかちゃんが望む形じゃないんだろうなって」
審査員の一人が、隣の一人に耳打ちで話しかけようとするが、相手の審査員はそれを手で制し、真剣な面持ちで恭介の演奏に聴き入る。
まどか「さやかちゃんが祈ったことも、そのために頑張って戦ったことも、とても大切な——絶対に無意味じゃなかったと思うの。だから……」
さやか「うん。これでいいよ」

満足の面持ちで、恭介のアヴェ・マリアに聴き入るさやか。
さやか「そうだよ。あたしはただ、もう一度、あいつの演奏が聴きたかっただけなんだ。あのバイオリンを、もっともっと、大勢の人に聴いて欲しかった……それを思い出せただけで、充分だよ。もう何の後悔もない」
微笑みながら、さやかは舞台の袖に目を遣る。物陰に控えながら、心配そうに恭介の演奏を見守る仁美の姿が。
さやか「まぁそりゃ、ちょっぴり悔しいけどさ。仁美じゃぁ仕方ないや。恭介には勿体ないくらい良い子だし。幸せになってくれるよね」
まどか、頷いて、そっとさやかの肩に手を置く。
まどか「――じゃあ、行こうか」
さやか「うん」
そのまま席から消滅する二人の姿。
恭介は目を閉じ、忘我の境地で演奏のクライマックスを弾き終える。
演奏終了――と同時に沸き上がる満場の拍手喝采。
はっとして目を開ける恭介。
場所は試験会場でなく満員のコンサートホールに変わり、恭介もまた青年の姿で、燕尾服に身を包み舞台の上に立っている。
拍手に沸き上がる客席の中から、さやかの視線を確かに感じ取った青年恭介。途方に暮れて見回すものの、当然、その姿はない。
恭介（青年）「……さやか……？」

□真夜中の駅
意識を取り戻すほむら。
場面は十話【BパートP.139】の、魔女さやか撃退直後に酷似している。傍らには、戦いを終えて疲弊したマミと杏子がいる。
杏子「さやかは？　おい、さやかはどうした⁉」
マミ「逝ってしまったわ。円環の理に導かれて」
血相を変えて問う杏子に、悲しげに答えるマミ。
マミ「美樹さん……さっきのあの一撃に、すべての力を使ってしまったのね」
脱力し、膝をついて嗚咽する杏子。
杏子「バカヤロウ……惚れた男のためだからって、自分が消えちまってどうするんだよ！　バカ……やっと友達になれたのに……」
マミ「それが魔法少女の運命よ。この力を手に入れたときから、分かっていた筈でしょう？　希望を求めた因果が、この世に呪いをもたらす前に、私たちはああやって消え去るしかないのよ……」
ほむら「……」
呆然と、手の中のリボンを見つめるほむら。今も胸に残

るまどかへの想い。
ほむら「……まどか……ッ」
リボンを胸に押し付け、声を殺して泣くほむら。
杏子「……？」
マミ「……暁美さん？」
そんな彼女の呟きに、杏子とマミが怪訝そうな目を向ける。
マミ「……まどかって、……誰？」

□河川敷のグラウンド
休日。人々が漫ろ歩いて和むグラウンドの一角。
タツヤが地面にしゃがみ込み、一心不乱に落書きをしている。
拙いながらも、魔法少女まどかの特徴を捉えた似姿。
そこを通りがかった少女が、足を止め、しゃがみ込んでタツヤの絵に見入る。
私服姿のほむらである。長い黒髪は、まどかの遺品のリボンで留めている。
書き上げた落書きを、ほむらに向けて自慢するタツヤ。
タツヤ「まどかっ、まどかっ」
ほむら「うん。そうだね。そっくりだよ」
タツヤ「……ぁぅ？」
タツヤ、不思議そうな顔をして、ほむらの髪のリボンに手を伸ばす。その手が触れる寸前に、慌てて割り込んできた知久がタツヤの手を引っ張る。詢子も一緒。
知久「こぉら、駄目じゃないかタツヤ。女の人の髪を引っ張るの、駄目！」
タツヤ「まどかっ、まどかぁ」
知久「すいませんねぇ。大丈夫でしたか？」
ほむら「いいえ。こちらこそ、お邪魔しちゃって」
ほむら、タツヤに向かってにっこりと笑いかける。
ほむら「まどか、だね」
タツヤ「うんッ」
詢子「……」
そんな二人を、小首を傾げて見守る詢子。

× × ×

土手に並んで腰を下ろしているほむらと詢子。二人で、グラウンドで戯れている知久とタツヤを見守っている。
詢子「まぁその……あの子が一人遊びするときの、見えないお友達ってやつ？　子供の頃には、よくあることなんだけどね」
ほむら「ええ、私にも覚えがあります」
詢子「まどか、ってさ、あなたも知ってるの？　アニメか何かのキャラとか？」
ほむら「さぁ、どうだったか。聞き覚えがあるような、ないような」

詢子「そうかぁ。あたしもどっかでタツヤと一緒に見たのかなぁ……う～ん、たまにね、すっごく懐かしい響きだな、って思うことがあるんだよね。まどか」
ほむら「そうですか」
寂しげに笑うほむらの横顔に、しげしげと見入る詢子。
詢子「……そのリボン、すっごく可愛いねぇ～。あたしの好みにド直球だわ。ちょっとびっくりしたくらい」
ほむら「あげましょうか？」
詢子「あはは、こんなオバサンには似合わないって。まぁ娘とかいたら、つけさせたかもしれないねぇ」
ほむら「……」
胸の内の寂寥を押し隠し、にっこりと笑い返すほむら。

□夜の市街地
摩天楼の屋上に腰掛けている魔法少女スタイルのほむら。髪型に加えて、武装も盾から弓に変わっている。（時間静止能力はなし）
ソウルジェムの浄化作業中。以前のような大型のグリーフシードではなく、小粒の石を幾つも消費して、少しずつソウルジェムの穢れを吸い取っている。
小粒グリーフシードは使い終わるたびに傍らに放り投げ、それをキュゥべえが逐一、咥え取って嚥下している。
キュゥべえ「――成る程ね。たしかに君の話は、ひとつの仮説としては成り立つね」
ほむら「仮説じゃなくて、本当だってば」
キュゥべえ「だとしても、証明しようがないよ。君が言うように、宇宙のルールが書き替えられてしまったのだとすれば、今の僕らにそれを確かめる手段なんてないわけだし……君だけがその記憶を持ち越しているのだとしても、それは君の頭の中にしかない夢物語と区別がつかない」
ほむら「……ふん」
鼻を鳴らして、作業を続行するほむら。
キュゥべえ「……まぁ確かに、浄化しきれなくなったソウルジェムがなぜ消滅してしまうのか、その原理は僕たちにも解明できてない。その点、君の話にあった魔女の概念は、なかなか興味深くはある」
小粒グリーフシードをもぐもぐと呑み込みながら、考え込むキュゥべえ。
キュゥべえ「人間の感情エネルギーを収集する方法としては、たしかに魅力的だ。そんな上手い方法があるなら、僕たちインキュベーターの戦略も、もっと違ったものになっただろうね」
ほむら「……そうね。あんたたちは、そういう奴らよね」
皮肉たっぷりに言うほむらだが、キュゥべえは気にもとめない。

キュゥべえ「君が言う魔女のいた世界では、いま僕らが戦ってるような魔獣なんて存在しなかったんだろう？　呪いを集める方法としては、よほど手っ取り早いじゃないか」
ほむら「そう簡単じゃなかったわ。あんたたちとの関係だって、かなり険悪だったし」
キュゥべえ「ふ～ん……やっぱり理解できないなぁ。人類の価値観は」
ソウルジェムの浄化を終え、立ち上がるほむら。ビルの屋上から眼下を見渡し、闇に目を凝らす。
ほむらM『たとえ魔女が産まれなくなった世界でも、それで人の世の呪いが消え失せるわけではない。世界の歪みは形を変えて、今も闇の底から人々を狙っている』
あちこちで、裏路地の闇に蠢く異形の影たち。魔女の使い魔とも違う、全く別種の怪物――魔獣たち。
キュゥべえ「今夜はつくづく瘴気が濃いねぇ。魔獣どもも次から次へと湧いてくる。いくら倒してもきりがない」
ほむら「ぼやいてたって仕方ないわ。――さぁ、行くわよ」
ビル屋上から身を投じ、闇へと舞い降りていくほむらとキュゥべえ。
ほむらM『悲しみと憎しみばかりを繰り返す、救いようのない世界だけれど――だとしてもここは、かつてあの子が守ろうとした場所なんだ』
魔獣たちの前に舞い降りるほむら。闘志も新たに弓を構え、狙いをつける。
ほむらM『それを憶えてる。決して忘れたりしない。だから私は――戦い続ける』

□スタッフロール

【Cパート】

何処の地かも知れぬ、不毛の戦場。
地を埋め尽くす魔獣の群れを前にして、立ちはだかる魔法少女ほむら。
エンドロールに続いて画面を過ぎるメッセージ。
――Don't forget. Always, somewhere, someone fighting for you.
――While you remember her, you are not alone.
ほむらの耳元に囁きかける、遠い昔の親友の声。
――「がんばって」と。
静かな笑みとともに頷いて、魔獣たちの直中へと突進していくほむら。

魔法少女まどか☆マギカ シナリオ0（ゼロ）稿／考察

シナリオ0稿と考察

「僕と契約して、魔法少女になってよ！」。すべてはここからはじまった――。『魔法少女まどか☆マギカ』のシナリオは完成するまでに数稿を重ねている。ここでは虚淵玄が最初に執筆した「0稿」の中でシーンが変更されているものを虚淵のコメントと共に紹介する。

この「0稿」を読むと、その完成度の高さに驚くはずだ。ほぼすべてのキャラクターが登場し、ほぼすべてのエピソードが記されている。「0稿」と「決定稿」では、全体の分量が調整されているほかは、ほとんど目立った変更点が見当たらないだろう。

すべては最初の筆に込められている――。鹿目まどかのひたむきさ、暁美ほむらの覚悟と意地、美樹さやかの優しさ、佐倉杏子の強さ、巴マミのナイーブさ。魔法少女たちのはかなさとせつなさが、理詰めで論理的に緻密に描かれていく。虚淵玄の生々しい筆致と卜書きに込められたイメージの奔流を「0稿」から感じとっていただきたい。

「それを憶えてる。決して忘れたりしない。だから私は――戦い続ける」

第三話「もう何も恐くない」0稿

決定稿→P.36

願いをひとつ叶えることと引き換えに、少女は魔法少女になる。そして魔法少女は、世界を呪う魔女たちと命懸けで戦う――。マミから魔法少女の正体を聞いた、まどかとさやかは心揺れる。どんな願いを叶えるのか、魔法少女になったらどうするのか。さやかは重病で入院している幼なじみの恭介を看病しながら、奇跡を夢想していた。

迷っているまどかとさやかは、偶然病院で孵化寸前のグリーフシードを発見してしまう。2人は魔法少女に変身したマミとともに結界の中へ向かい、魔女を仕留めようとする。

結界の中でまどかはマミに自分の心のうちを明かす。まどかの願いは魔法少女になり、マミとともに戦うこと。だから、具体的な願いが見つからないのだと。孤独の中で戦い続けてきた、マミはそのまどかのことばに涙する。そして「魔法少女コンビ」の結成を約束するのだった。

結界の最深部にたどりついた、マミは魔女と戦う。もうひとりじゃない。喜びの中で戦うマミ。だが、そのマミに無情な運命が待ち構えていた……。

【Aパート】

□恭介の病室

ベッドをリクライニングさせて座っている恭介と、介添用の椅子に腰掛けているさやか。

さやか「はい、これ」

見舞いに来たさやかから、ヴァイオリンのCDを手渡される恭介。驚きに目を見開く。

恭介「うわ、凄い……これネットでも手に入らない廃盤だよ！」

さやか「そ、そうなんだ……たまたま寄ったお店で見かけたんで、買ってみたんだけど」

ベッドサイドのテーブルには、他にもCDのケースが積み上げられている。すべてさやかが買ってきたものである。

恭介「いつも、本当にありがとう。さやかはレアなCDを見つける天才だね」

さやか「はは、そんな……う、運がいいだけだよ。きっと」

照れてはにかむさやか。

恭介はさっそくケースを開けて、CDをポータブルプレーヤーにセットする。

恭介「この人の演奏は、本当に凄いんだ。さやかも聴いてみる？」

ヘッドホンの片方だけを嵌めて、もう一方をさやかに差し出す恭介。

さやか「い、いいのかな……」

恭介「本当はスピーカーで聴かせたいんだけど、病院だしね」

コードの長さの都合で、やや身を寄せ合う姿勢になる二人。内心で照れまくるさやか。

だが曲が始まると、優しい旋律に心が和まされる。

優しい旋律に浸るさやか。

× × ×

さやか幼少期の記憶。

ヴァイオリンの発表会で颯爽と演奏をしている恭介と、その姿に目を奪われているさやか。

× × ×

ふと目を開けるさやか。隣で恭介が静かに泣いているのに気付く。

ベッドの上で力なく投げ出された恭介の左腕。無惨な手術跡。

もう二度と演奏のできなくなった指が、演奏の記憶を辿って震えている。

やるせない想いに、胸が痛くなるさやか。

□夜の公園（異界化中）

炸裂するマミの必殺技。

悲鳴を上げて消滅していく魔女。

それを固唾を呑んで見守るまどかとさやか。

結界は解かれ、周囲はもとの公園の景色に戻る。マミも変身を解除。ほっと安堵するギャラリー二人。

さやか「やっぱマミさんの魔女退治は何度見てもカッコいいね～」

マミ「もう。見せ物じゃないのよ。危ないことしてる、って意識は忘れないでおいてほしいわ」

さやか「いえーす」

手にした護身用バットを掲げ上げるさやか。
そこへ、周囲を探していたキュゥべえが戻ってくる。
キュゥべえ「グリーフシードは持ってなかったみたいだ。空振りだね」
まどか「え、また？」
さやか「なんかここんとこハズレばっかりじゃない？」
マミ「そういうものよ。だからって魔女を放っておくわけにもいかないし。——さ、行きましょ」

× × ×

静寂を取り戻した夜の公園を、並んで歩くマミ、さやか、まどかとキュゥべえ。
マミ「二人とも、何か願い事は見つかった？」
さやか「う～ん、まどかは？」
まどか「う～ん……」
困り果てる二人に、苦笑するマミ。
マミ「まぁ、そういうものよね。いざ考えろって言われたら」
まどか「マミさんは、どんな願い事をしたんですか？」
まどかが訊いた途端、マミの表情が陰る。やや慌てるまどか。
まどか「いや、あの、どうしても聞きたいってわけじゃなくて、ちょっと気になった、っていうか、その……」
マミ「ううん、いいの。別に隠すほどのことでもないし」
遠い眼差しで追憶するマミ。
マミ「私の場合は——」

× × ×

マミの回想。高速道路での大規模な事故。
潰れた車に閉じ込められて瀕死のマミが、手を差し伸べたその先に、キュゥべぇの姿がある。
マミoff「——考えている余裕さえ、なかったってだけ」

× × ×

再び現代。夜の公園。マミが語った過去に、ややショックを受けている二人。
マミ「——後悔してるわけじゃないのよ。今の生き方も、あそこで死んじゃうよりは余程良かったと思ってる」
マミ「でもね、ちゃんと選択の余地がある子には、きちんと考えた上で決めてほしいの。私にできなかったことだからこそ、ね」
意を決して、質問をぶつける気になるさやか。
さやか「ねぇ、マミさん……願い事って、自分のための事柄でなきゃ駄目なのかな？」
マミ「え？」
さやか「たとえば——たとえばの話なんだけどさ。あたしなんかより、よほど困ってる人がいて、その人のために願い事をするのは——」
まどか「それって……上条くんのこと？」
さやか「た、例え話だって言ってるじゃんか！」
慌てるさやかを余所に、冷静に頷くキュゥべえ。
キュゥべえ「べつに契約者自身が願い事の対象になる必然性はないんだけどね。前例もないわけじゃないし」
マミ「……でも、あまり感心できた話じゃないわ」
やや険しい声で異論を挿むマミ。
マミ「他の人の願いを叶えるのなら、なおのこと自分の望みをはっ

きりさせておかないと。――美樹さん、あなたは彼に夢を叶えてほしいの？　それとも彼の夢を叶えた恩人になりたいの？」
さやか「……」
マミの言い様に、さすがに憮然と押し黙るさやか。狼狽えるまどか。
まどか「マミさん――」
マミ「同じようでも全然違うことよ。これ」
さやか「……その言い方は、ちょっと酷いと思う」
マミ「ごめんね。でも今のうちに言っておかないと。そこを履き違えたまま先に進んだら、あなた、きっと後悔するから」
さやか「……」
さやか、しばし押し黙って考え込んでから、深呼吸し、頷く。
さやか「……そうだね。あたしの考えが甘かった。ごめん」
さっぱりと謝罪するさやかに、安堵するまどか。マミも笑顔を返す。
マミ「やっぱり、難しい事柄よね。焦って決めるべきじゃないわ」
キュゥべえ「僕としては、早ければ早いほどいいんだけど」
ぼやくキュゥべえの頭を小突くマミ。
マミ「駄目よ。女の子を急かす男は嫌われるぞ」
笑うマミとさやか。まどかも釣られて笑うものの、その胸の内はやや複雑。

□まどかの部屋
就寝間際、パジャマに着替えてベッドの上でごろごろしている
まどか。傍らにはキュゥべえ。
公園でのさやかとマミの問答を思い出し、溜息をつくまどか。
まどか「……やっぱり、簡単なことじゃないんだよね……」
キュゥべえ「僕の立場で急かすわけにはいかないしね。助言するのもルール違反だし」
まどか「ただ、なりたいってだけじゃ、駄目なのかな……」
ノートの落書きの変身プランを眺めるまどか。華麗に戦うマミを思い出し、その姿に自分を重ねて妄想する。
キュゥべえ「まどかは力そのものに憧れているのかい？」
まどか「や、そんなんじゃなくて……う～ん、そうなのかな？　私ってどんくさいし、何の取り柄もないし、だからマミさんみたいに格好良くて素敵な人になれたら、それだけでもう充分に幸せなんだけど……」
キュゥべえ「まどかが魔法少女になれば、マミよりずっと強くなれるよ」
まどか「へ？」
思わぬ言葉に、狐につままれたかのようなまどか。
キュゥべえ「もちろん、どんな願い事で契約をするかにもよるけれど……まどかが生み出すかもしれないソウルジェムの大きさは、僕にも測定しきれない。これだけの素質を持つ子と出会ったのは初めてだ」
まどか「はは……何言ってるのよ、もう。嘘でしょ」
キュゥべえ「いや――」
そこに扉をノックする音。
知久「まどか、起きてるか？」

まどか「うん？　どしたの？」
知久「ママが帰ってきたんだが……ちょっと手伝ってくれないかな」

□鹿目家玄関
上がり框で、泥酔した詢子が潰れている。
まどか「あー、またか……まったくもう」
やや呆れ気味に苦笑いするまどか。
詢子「み、水……」
既に用意してあったコップの水を詢子に飲ませる知久。
知久「ともかくベッドまで運んで、着替えさせないと。ほら、そっち持ってくれ」
まどかと知久、二人がかりで詢子を肩に担いで、寝室まで引っ張っていく。
詢子「ぐえぇぇ……このスダレハゲ……呑みたきゃ手酌でやってろっつうの……」
譫言のように愚痴を漏らす詢子。

□両親の寝室
布団にくるまり、安らかな寝息を立てている詢子。
一仕事終えた知久とまどか、ほっと一息。
知久「ココアでも入れようか？」
まどか「うん、お願い」

□ダイニングキッチン
寝間着姿にガウンを羽織り、テーブルで差し向かいに座ってホットココアを啜る二人。
まどか「うちで飲むときはちゃんと加減するのに……なんで外だとあんなに酔っぱらっちゃうかなぁ。平気なうちに帰ってくればいいのに」
知久「会社勤めだと、飲むのも仕事のうち、って場合があるからね。残業だと思えば抜け出せないさ」
まどか「嫌になることもあるだろうね。でもそれよりもっと頻繁に、働いてて良かったと思うことの方が多いのさ」
知久「嫌にならないのかな、そういうの……」
まどか「なんでママは、あんなに仕事が好きなのかな。昔からこの仕事に就くのが夢だった――なんて、ないよね？」
まどか「……？」
知久「ママは仕事が好きなんじゃなくて、頑張るのが好きなのさ」
知久「嫌なことも辛いこともいっぱいあるだろうけど、それを乗り越えたときの満足感が、ママにとっては最高の宝物なのさ。そういう意味で、今の難しくて大変な仕事は、とてもやり甲斐があるんだろうね」
まどか「ママは……満足なのかな、それで」
知久「そりゃ、会社勤めが夢だったわけじゃないだろうけどさ。それでもママは、理想と思っていた生き方を通してる。そんな風にして叶える夢もあるんだよ」
まどか「……生き方そのものを、夢にするの？」
知久「どう思うかは人それぞれだろうけど――僕はね、ママのそういうところが大好きだ。尊敬できるし、自慢できる。素晴ら

しい人だってね」
まどか「……うん」
父の笑顔に、表情を和ませるまどか。

□夜の学校
校庭の真ん中に漫然と佇んでいるマミ。
その前に、闇の奥からほむらが現れる。間合いを挿んで対峙する二人。
マミ「わざわざこんな時間に呼び出して、何の用？」
ほむら「鹿目まどかと美樹さやか……あの二人をいつまで連れ回す気？」
はなから冷ややかな面持ちで喧嘩腰のほむら。
ほむら「分かっているの？　あなたは無関係な一般人を危険に巻き込んでいる」
マミ「彼女たちはキュゥべえに選ばれたのよ。もう無関係じゃないわ」
ほむら「選ばれただけで契約は済ませていない。その先の選択に、あなたが干渉するべきじゃない。――なのに、あなたは二人を魔法少女に誘導している」
マミ「それが面白くないわけ？」
ほむら「ええ。迷惑よ。……特に鹿目まどか」
マミ、ほむらの真意を見透かした（と勘違いして）目を細める。
マミ「ふうん……そう、あなたも気付いてたのね、あの子の素質に」
ほむらの眼差しがさらに険しくなる。
ほむら「彼女だけは、契約させるわけにはいかない」
マミ「自分より強い相手は邪魔者ってわけ？　いじめられっ子の発想ね」
内心でかっとなるほむらだが、一旦目を閉じて気持ちを静める。
ほむら「……ひとつの街に、魔法少女は一人で充分よ。今ここに二人いるだけでも多すぎる」
マミ「同意しかねる言葉だけれど、あなたの前だと頷きたくなるわ」
ほむら「あなたは戦いに向いてない。身を退くべきよ」
マミ「勝手なこと言わないで。今日までこの街を守ってきたのは私よ。そして、これからも」
両者の間に緊張が走る。一触即発の危機。
マミ「……はっきりしたみたいね。お互い、どうあっても相容れそうにない」
ほむら「あなたとは戦いたくないのだけれど」
マミ「なら二度と会うことがないよう努力して」
ほむらの側にこの場で仕掛けてくる意図がないと判断したマミは、踵を返す。
マミ「話し合いだけで事が済むのは、きっと今夜で最後だろうから」
捨て台詞を残して去っていくマミ。ほむらは事態が思うように進まないことに苛立ち、歯噛みする。
ほむら「……」

第三話0稿・考察

――シナリオ全体を見ていくと、いろいろと構成が入れ替えられていることが分かりますね。

「第三話は、尺的にいっぱいいっぱいだったので、恭介の病室のシーンなど、第四話に移したものもありますね」

――冒頭に登場する使い魔の設定は、0稿には登場しないのですが、途中から足されたものですか？

「そうですね。毎回グリーフシードを落とされても困りますし、すべての魔女が元・魔法少女だということにしてしまうと、数的にも辻褄が合わなくなってしまうので。歴史の中でどんどん分裂して増えていったという設定にしました。実は魔女のデザインが既に上がっていたんです」

――「自分より強い相手は邪魔者ってわけ？　いじめられっ子の発想ね」と、マミさんがほむらに向かって無意識に心底痛いところを突く名言を吐くシーンも0稿から整理されていますね。場所も学校から道、公園と変化していて。

「マミ自身には、とくに他意はないんでしょうけど、ほむらにとってはおもいっきり意地悪なセリフになっていますよね（笑）」

――そして、問題のマミさんが魔女に食べられてしまうシーン。一部ファンの間で「虚淵の下書きはきっとすごいことになってるはず！」と囁かれてもいますが……。

「そういうの、よく言われるんですけど、まったくそんなことないんですよね。むしろ個人的にはあまり酷いことにして欲しくないというニュアンスで書いています。すごいことになっちゃってる蒼樹（うめ）さんのキャラなんて見たくないですもん。ただ、それとは別の意味合いで『このキャラは、残念ながら確実に死んでしまいました。もう出てきませんよ』ということは、ハッキリ伝わるようにしなくては、と思いました。たとえば、胸に何かが刺さったというような描写だと、実は死んではいなくて、あとから復活するかも？　と思えてしまうので、そういうのは避けたいな、と。あと、マミが浮かれて下手うって負けたというわけではない、たまたま敵との相性のせいで負けたんだっていうのが伝わるように、とも考えていました」

――「糸が切れた人形のように倒れ伏すマミの身体。（実は頭が無くなっているのだがアングルで誤魔化す方向で）」と端的に書かれていますね。その後「その上に、自由になった魔女の巨体が覆い被さり、隠す。肉と骨を噛み砕き、呑み込む音」とありますが。

「書いてはいますが、別にそれを聞かせたいって言うわけではなかったですね」

――マミさんを食べた魔女が、最初はすごくかわいい外見をしているというのも皮肉ですね。

「そうですね、あそこまでかわいらしいものに頭を齧られることになるとは思っていませんでした。イヌカレーさんの最高の皮肉だと思います」

第六話「こんなの絶対おかしいよ」0稿

決定稿→P.76

魔法少女同士の戦いがはじまった。主義主張の違いとなわばり争い……。杏子とさやかは殺し合いを繰り広げる。ほむらの乱入により、戦いは終わりを告げるが、両者には遺恨が残っていた。

まどかは、傷つき疲弊しながらも魔法少女であり続けるさやかを止めようとする。しかし、さやかはそのことばに一切耳を貸そうとしなかった。

ほむらは杏子に「2週間後に『ワルプルギスの夜』が来る」と告げる。最強最悪の魔女――杏子はほむらと共闘することを約束する。そして、まどかはさやかのことを母に相談、まどかを優しく応援する母親の詢子。

その晩、さやかは恭介の病気の完治を見て、幸せを静かに感じていた。再び現れた杏子はそんなさやかを挑発する。再び対峙する2人。まどかはさやかのもとへ駆け寄ると、魔法少女の魂であるソウルジェムを奪い取る。

そのとき……まどかは魔法少女の真実を知るのだった。

【Bパート】

□学校屋上

翌日の昼休み。二人きりで対峙するさやかとほむら。

さやか「何だよ、話ってのは」

ほむら「2週間だけ、行動を控えて」

さやか「何でだよ？」

ほむら「佐倉杏子と衝突してほしくない」

小馬鹿にしたように鼻を鳴らすさやか。

さやか「ふぅん、あいつと手を組んだんだ。やっぱりね……」

一方で、ほむらはあくまでポーカーフェイスを崩さない。

ほむら「近い将来、どうしても彼女の力が必要な展開になる。それまでは魔女狩りの主導権を譲ってほしいの」

さやか「その間、あんたたちは誰にも邪魔されず、グリーフシードを集め放題ってわけね」

冷笑を返してから、怒りを露わにするさやか。

さやか「あたしが目障りだってんなら、二人がかりでかかってくりゃいいでしょ。逃げも隠れもしないわ。受けて立つわよ」

ほむら「美樹さやか、あなたとの対立は、鹿目まどかを刺激してしまう」

さやか「ああそう……そういえば、ライバルは増やしたくないんだったっけ」

どう転んだところでさやかの態度は軟化しないと悟り、ほむらの口調はやや悲しげに。

ほむら「……もう少し冷静に考えて。あなたが意地を張れば張るほど、傷つくのは鹿目さんなのよ」

さやか「まどかは関係ないでしょ！」

反面、ますます激高するさやか。

さやか「あたしってバカだからさ。あんたみたいに口が上手いヤツには、もう何度も騙されたことがあるの。……でもね、あんたのやり口を見てれば分かる。あんたは自分の都合だけしか考えてないヤツだ。周りの人間は全部、そのための道具としか思ってない。違う？」

ほむら「……何もかも、あなたのためを思って忠告してるのよ」

さやか「いつまでもそんな風に、他人を見下していられると思うな」

これ以上の問答は不要とばかり、敵意を込めてほむらを睨むさやか。

さやか「どんなに勝ち目が薄くても、あんたたちの思い通りにだけはさせない……この街は、あたしが護るんだ」

ほむらに背を向け、屋上を去るさやか。

残されたほむらは、憂い顔で遠い眼差しをする。

□まどかの寝室

明かりを消し、ベッドに入ったまま、まんじりともせず天井を見つめているまどか。

階下で、玄関のドアの開閉音。休日出勤のうえ午前様の詢子が、ようやく帰宅したらしい。続いてシャワーを使う物音。

しばし悩んでから、ベッドを抜け出すまどか。

□鹿目家ダイニングキッチン

テーブルには知久の書き置き――『お疲れ様。冷蔵庫にポテトサラダあります』

バスローブ姿の詢子、ポテトサラダを肴に、一人で水割りで晩酌中。そこへ寝間着の上からガウンを羽織ったまどかがやって来る。

詢子「眠れないのかい？」

まどか「うん……ちょっといい？」

頷く詢子。まどかはキッチンから自分のグラスとジュースを取ってくる。まどかが注いだジュースに詢子がアイスペールから氷を入れてやり、乾杯する母娘。お互いに慣れている。

一口ジュースに口をつけてから、語り出すまどか。

まどか「友達がね……大変なの。やってることも、言ってることも、たぶん間違ってなくて……なのに、正しいことを頑張ろうとすればするほど、どんどん酷いことになってくの……」

詢子「よくあることさ」

さらりと応じる詢子。

詢子「悔しいけどね、正しいことだけ積み上げていけばハッピーエンドが手に入るってわけじゃない。むしろ皆が皆、自分の正しさを信じ込んで意固地になればなるほどに、幸せって遠ざかってくもんだよ」

まどか「間違ってないのに、幸せになれないなんて……ひどいよ」

詢子「うん」

まどか「わたし、どうしたらいいんだろ？」

しばしグラスを見つめる詢子。

詢子「……そいつばっかりは、他人が口を突っ込んでも綺麗な解決はつかないねぇ」

まどか「……」

まどかは詢子を見つめて続きを待つ。娘が納得できてないと知り、溜息まじりに先を続ける詢子。

詢子「たとえ綺麗じゃない方法だとしても、解決したいかい？」

まどか「うん」

詢子「なら――間違えればいいのさ」

グラスを揺らし、氷で水割りを混ぜる詢子。

詢子「正しすぎるその子のぶんまで、誰かが間違えてあげればいい」

まどか「間違える……？」

詢子「ずるい嘘をついたり、恐いモノから逃げ出したり、でもそれが、後になってみたら正解だったって解ることがある。本当に他にどうしようもないほどどん詰まりになったら、いっそ思い切って間違えちゃうのも手なんだよ」

まどか「それが、その子のためになるって……解ってもらえるかな？」

詢子「解ってもらえないときもある。特にすぐにはね。言ったろ？綺麗な解決じゃないって。……その子のことを諦めるより、誤解される方がまだマシだと思うかい？」

まどか「……」

思い悩むまどかを前に、詢子は酒を口にしつつ、優しく微笑む。

詢子「まどか、あんたはいい子に育った。嘘もつかないし、悪いこともしない。いつだって正しくあろうとして頑張ってる。子供としてはもう合格だ。……だからね、大人になるまえに、

今度は間違え方もちゃんと勉強しておきな」
まどか「勉強……なの？」
詢子「若いうちは怪我の治りも早い。今のうちに上手な転び方を覚えといたら、後々きっと役に立つよ。……大人になるとねー、どんどん間違えるのが難しくなっちゃうんだ。プライドとか責任とかね、護るモノ、背負ったモノが増えるほど、下手を打てなくなってくの」
まどか「ふぅん……」
詢子の言葉に考え込みながら、ゆっくりジュースを飲むまどか。
まどか「それって、辛くない？」
詢子「大人は誰だって辛いのさ。だから酒飲んでもいいってことになってんの」
冗談めかして笑う詢子。つられてまどかも笑う。
まどか「わたしも、早くママとお酒飲んでみたいなぁ」
詢子「さっさと大きくなっちゃいな。辛いぶんだけ楽しいぞぉ、大人は」

□恭介の病室
夕方。いつものように、見舞いの手土産を持って訪れるさやか。
だが恭介のベッドは空で、私物も綺麗に片付けられている。
さやか「……あれ？」
途方に暮れるさやか。その背中を見咎める看護師A。
看護師A「あら？　上条さんなら昨日退院したわよ」
さやか「そ、そうなんですか？」
看護師A「リハビリの経過も順調だったから、予定が前倒しになって――連絡、行ってなかったの？」
さやか「ええ、まぁ」
曖昧な愛想笑いでお茶を濁すさやか。

□上条家の前
夜。病院からそのままの足で、上条家の門前に立つさやか。
チャイムを押すかどうか、やや逡巡しているうちに、ふと微かにヴァイオリンの旋律を聞き咎める。
レッスンに没頭している恭介の演奏である。
さやか「……」
演奏に耳を澄ますさやか。ただ聞いているだけでも、大変な集中力で練習に入れ込んでいる恭介の気迫が伝わってくる。
とても邪魔できない、と思ったさやかは、寂しげに微笑んで、チャイムを押そうとしていた手を引っ込める。
そのまま帰ろうとするさやか。だがすぐさま、緊張の面持ちで立ち止まる。
さやかの行く手に、闇の中から街灯の光の中へと、ゆっくり歩み出てくる杏子。手にしたチュロスを囓っている。
杏子「――会いもしないで帰るのかい？　今日一日追いかけ回したくせに？」
さやか「おまえは……」
杏子「知ってるよ。この家の坊やなんだろ？　あんたがキュゥべぇと契約した理由って。……まったく。たった一度の奇跡のチャンスを、クダラネェ事に使い潰しやがって」
さやか「お前なんかに……何が分かる！」

杏子「分かってねぇのはそっちだバカ。魔法ってのはね、徹頭徹尾、自分だけの望みを叶えるためのもんなんだよ。他人のために使ったところでロクなことにはならないのさ。――巴マミは、その程度のことも教えてくれなかったのかい？」
さやか「……ッ」
マミに全く同じことを諌められた記憶が蘇り、歯噛みするさやか。
杏子「惚れた男をモノにするなら、もっと冴えた手があるじゃない？せっかく手に入れた魔法でさあ」
さやか「……なに？」
杏子「今すぐ乗り込んでいって、坊やの手も足も、二度と使えないぐらいに潰してやりな。もう一度、あんた無しでは何もできない身体にしてやるんだよ。そうすれば今度こそ坊やはアンタのもんだ。身も心も全部、ね」
さやか「……ッ」
怒りのあまり言葉を失うさやか。
杏子「気が退けるってんなら、アタシが代わりに引き受けてもいいんだよ？　同じ魔法少女のよしみだ。おやすい御用さ」
さやか「……絶対に……お前だけは絶対に、許さない……今度こそ必ず……ッ」
殺気立つさやかを前にして、不敵に笑う杏子。
杏子「場所を変えようか。ここじゃ人目に付きそうだ」

□鹿目家、まどかの私室
勉強机について宿題を片付けているまどか。
だがまったく集中できず、物思いに耽っている。脳裏をよぎるのは昨夜の詢子の言葉。
詢子M『――正しすぎるその子のぶんまで、誰かが間違えてあげればいい――』
まどか「そんなこと、言われても……」
そのとき、まどかの脳裏にキュゥべえからのテレパシーが届く。
キュゥべえ『まどか……まどか！』
ぎょっとして振り向くまどか。すると部屋の窓の外に、キュゥべえがしがみついている。
キュゥべえ『急いで！　さやかが危ない！　ついてきて！』

□高速道路上の跨道橋
4車線の高速道路を跨ぐ、小さな橋。眼下の高速道路は往来が激しく騒がしい一方で、橋の上は一種の死角となり、誰の目にも留まらない。
やや距離を置いて対峙するさやかと杏子。杏子は相変わらずチュロスを食べている。
杏子「ここなら遠慮はいらないよねぇ。いっちょ派手にいこうじゃない」
杏子、魔法少女スタイルに変身。さやかもまたソウルジェムを手に身構える。
そこに駆けつけるまどかとキュゥべえ。
まどか「待って、さやかちゃん！」
さやか「まどか……」
一瞬、虚を突かれるさやかだが、すぐにまた闘志の表情に戻る。

さやか「邪魔しないで。そもそもまどかは関係ない話なんだから」
まどか「駄目だよこんなの！　絶対おかしいよ！」
　必死に制止するまどかに、冷笑を浴びせる杏子。
杏子「フン、ウザイ奴にはウザイ仲間がいるもんだねぇ」
ほむら「じゃあ、あなたの仲間はどうなのかしら？」
　不意に杏子の背後に姿を現すほむら。忌々しげに舌打ちする杏子。
ほむら「話が違うわ。美樹さやかには手を出すなと言った筈よ」
杏子「あんたのやり方じゃ手緩すぎるんだよ。――どのみち、向こうはやる気だぜ」
ほむら「なら……」
　変身するほむら。
ほむら「……私が相手をする。手出ししないで」
杏子「フン」
　杏子、短くなったチュロスを掲げて、
杏子「じゃあコイツを食い終わるまで待ってやる」
ほむら「充分よ」
　杏子とほむらのやりとりを聞いて、ますます怒るさやか。
さやか「舐めるんじゃ、ないわよ……」
　ソウルジェムを掲げ、変身しようとするさやか。
　見かねたまどかは、即座に覚悟を決める。
まどか「さやかちゃん――ごめん！」
　いきなり横合いから、さやかの手の中のソウルジェムを奪い取るまどか。
さやか「なっ……!?」
　さやかのみならず、杏子とほむらも呆気にとられる。
　まどかは奪い取ったソウルジェムを、即座に跨道橋の下の高速道路へと投げ捨てる。
　ソウルジェムは、たまたま真下を走っていたトラックの荷台にひっかかり、一瞬のうちに彼方へと運び去られていく。
ほむら「――まずいッ！」
　血相を変えるほむら。いきなり瞬間移動（に見える時間操作）で姿を消し、トラックの後を追う。
さやか「まどか……あんた何てことをッ」
まどか「だって、こうしないと……」
　まどかに食ってかかろうとするさやか。だが急に脱力し、まどかの腕の中に倒れ込む。
まどか「……さやかちゃん？」
　何が起こったのかわからずきょとんとなるまどか。
　さやかは虚ろな目をしたまま、身動きひとつしない。
キュゥべえ「今のはまずかったよ、まどか」
　呆れ果てたかのように、かぶりを振るキュゥべえ。
キュゥべえ「よりにもよって友達を放り投げるなんて、どうかしてるよ」
まどか「何？　……何なの？」
　強張った表情でずかずか歩み寄ってくる杏子。いきなり乱暴にさやかの首を掴む。
　慌てて抵抗するまどか。
まどか「や、やめて！」
杏子「……どういうことだ、おい？」

杏子、まどかではなくキュゥべえに向けて、押し殺した声で問う。
杏子「こいつ、死んでるじゃねーかよ！」
驚きのあまり表情が凍りつくまどか。

□高速道路
さやかのソウルジェムを荷台に載せたまま先行するトラックを、連続テレポートで必死に追うほむら。（実際には何度も時を止め、そのたびに全力疾走を繰り返してます）

□跨道橋の上
依然、何の反応もないさやかの身体。呼吸も脈もない。
事態が理解できず呆然となるまどか。
まどか「さやかちゃん、ねぇ、さやかちゃん……起きて、ねぇ？」
何度もさやかの肩をゆするまどか。だがさやかの首は人形のようにぐらぐらと揺れるだけ。
まどか「ねぇ、ちょっと……どうしたの？　ねぇ⁉　嫌だよ、こんなの……さやかちゃぁん‼」
パニックに陥るまどか。杏子もまた、理解を超えた状況に焦る。
杏子「何がどうなってやがんだ、おい……」
キュゥべえ「君たち魔法少女が身体をコントロールできるのは、せいぜい100メートル圏内が限度だからね」
ただひとり、冷静なまま説明するキュゥべえ。
杏子「100メートル？　何のことだ？　どういう意味だ⁉」
キュゥべえ「普段は当然、肌身離さず持ち歩いてるんだから、こういう事故は滅多にあることじゃないんだけど……」
まどか「何言ってるのよキュゥべえ！　助けてよ！　さやかちゃんを死なせないで！」
半狂乱でキュゥべえに訴えるまどか。だがキュゥべえは溜息まじりに、
キュゥべえ「まどか、そっちはさやかじゃなくて、ただの抜け殻なんだって」
まどか「え……」
途方に暮れるまどか。
キュゥべえ「さやかはさっき、君が投げて捨てちゃったじゃないか」
杏子「な……」
キュゥべえの言葉の意味を悟り、愕然と、自分のソウルジェムを見つめる杏子。
杏子「なん……だと？」

□高速道路
引き続き、トラックを追っているほむら。
何とかして荷台の端にしがみつき、上へと這い上がる。
キュゥべえoff「ただの人間と同じ壊れやすい身体のままで、魔女と戦ってくれなんて、とてもお願いできないよ」
荷台の片隅に引っかかっていたさやかのソウルジェムを掴み取るほむら。安堵の溜息。
キュゥべえoff「君たち魔法少女にとって、もとの身体なんていうのは外付けのハードウェアでしかないんだ。君たちの本体としての魂には、魔力をより効率よく運用できる、コンパクトで

安全な姿が与えられてる」

□跨道橋の上

恐怖に顔を引き攣らせたまどかと杏子の前で、淡々と説明を続けているキュゥべえ。

キュゥべえ「魔法少女との契約を取り結ぶ僕の役目はね、君たちの魂を抜き取って、ソウルジェムに変えることなのさ」

杏子「てめぇは……なんてことを……」

怒りのあまりキュゥべえの耳を鷲掴みにする杏子。

杏子「ふざけるんじゃねぇ！　それじゃアタシたち、ゾンビにされたようなもんじゃないか！」

キュゥべえ「むしろ便利だろう？　心臓が破れても、ありったけの血を抜かれても、その身体は魔力で修理すればすぐまた動くようになる。ソウルジェムさえ砕かれない限り君たちは無敵だよ。弱点だらけの人体よりも、よほど戦いでは有利じゃないか」

まどか「ひどいよ……そんなの、あんまりだよ……」

だがキュゥべえは何ら悪びれた風もなく、むしろ心底途方にくれている。

キュゥべえ「……君たちはいつもそうだね。事実をありのままに伝えると、決まって同じ反応をする。訳が分からないよ。どうして人間はそんなに、魂の在処にこだわるんだい？」

杏子「……ッ」

怒りにわなわなと震える杏子。さやかの死体を抱いたまま、涙に暮れるまどか。

そこへ帰還するほむら。持ち帰ったソウルジェムを、さやかの手に握らせる。

直後、ぶるりと身震いして目を開けるさやか。

さやか「……あ……？」

しばらく状況が呑み込めず、さやかは途方に暮れて辺りを見回す。

さやか「……何？　何なの？」

第六話0稿・考察

――ほむらの能力の発揮を見て、キュゥべえも何か勘付くという。

「ここは0稿からシーンまるごと削ったり再編したりしています。カットしたのは、学校の屋上で『佐倉杏子と衝突してほしくない』とほむらがさやかに頼み、『この街は、あたしが護る』とさやかが言い切るシーンです。この回は、とにかく最後のソウルジェムの秘密が明かされるところまで辿り着いて終わらせねば、というのがありまして整理した部分ですね」

第七話「本当の気持ちと向き合えますか？」0稿

決定稿→P.90

魔法少女はもはや人間ではなかった。奇跡と引き換えに、人間としての生き方を捨てなくてはいけなかった魔法少女たちに、まどかは同情する。しかし、そんなまどかに対してほむらは冷たく接する。

そのころ、絶望を感じるさやかの前に杏子が現われた。杏子はさやかに、自分が魔法少女になった過去を明かす。彼女は父のために願いを捧げた魔法少女。だが、その魔法の力ゆえにすべてを失い、絶望を味わった少女だったのだ。

杏子は魔法少女としての信念を、さやかに伝える。だが、さやかは杏子のもとから去っていく……。

やがて、さやかの前に仁美が現われる。仁美は恭介への想いをさやかに明かすと、正々堂々と恋のライバル宣言をするのだった。人間として恋をすることも許されない、さやかは魔女との戦いに打ち込む。暴走するさやかを、まどかは止められず……。

【Aパート】

□前話回想

まどかに投げ捨てられ、宙を舞うさやかのソウルジェム。

キュゥべえoff「君たち魔法少女にとって、もとの身体なんていうのは外付けのハードウェアでしかないんだ。君たちの本体としての魂には、魔力をより効率よく運用できる、コンパクトで安全な姿が与えられてる」

まどかの腕の中に倒れ込む、機能停止したさやかの身体。

キュゥべえ「魔法少女との契約を取り結ぶ僕の役目はね、君たちの魂を抜き取って、ソウルジェムに変えることなのさ」

悪びれた風もなくにこやかに語るキュゥべえを前にして、恐怖に顔を引き攣らせるまどかと杏子。

□さやかの部屋

帰宅したさやか。

部屋でキュゥべえと二人きりになったところで、さやかはソウルジェムを勉強机の上に投げ置き、血相を変えて相手を問い詰める。

さやか「どういうことなの？　あたしの身体が、抜け殻って……」

キュゥべえ「君の魂を物質的存在にシフトさせてあげただけだよ。おかげで君は霊力をエネルギーに変換できるようになったし——」

さやか「そんなこと訊いてるんじゃないのよ！」

怒りを爆発させるさやか。

さやか「騙してたのね、あたしたちを……」

困惑するキュゥべえ。

キュゥべえ「僕は魔法少女になってくれって、きちんとお願いしたはずだよ。実際の姿がどういうものかは、説明を省略したけれど」

さやか「なんで教えてくれなかったのよ!?」

キュゥべえ「訊かれなかったからさ。知らなければ知らないままで、何の不都合もないからね。事実、あのマミでさえ最後まで気付かなかった」

さやかの剣幕に対して、キュゥべえは全く悪びれた様子もない。

キュゥべえ「そもそも君たち人間は、魂の存在なんて最初から自覚できてないんだろう？」

キュゥべぇはさやかの頭を指差し、

キュゥべえ「そこは神経細胞の集まりでしかないし——」

続けて今度は胸を指差し、

キュゥべえ「——そこは循環器系の中枢があるだけだ。そのくせ生命が維持できなくなると、人間は精神まで消滅してしまう。そうならないよう、僕は君たちの魂を実体化し、手に取って、きちんと護れる形にしてあげた。少しでも安全に魔女と戦えるように、ね」

さやか「大きな……お世話よ！　そんな余計なこと……」

キュゥべえ「君は戦いというものを甘く考えすぎだよ」

呆然、とばかり溜息をつくキュゥべえ。

キュ　　とえばお腹に槍が刺さった場合、肉体の痛覚がどれ

だけの刺激を受けるかっていうとね……」
キュゥべえ、机の上に放置されたさやかのソウルジェムに触れて、何らかの魔力を送り込む。
さやか「ひっ――ッ!!」
途端に、腹に物凄い激痛を憶えて身体を折り曲げるさやか。
キュゥべえ「これが本来の『痛み』だよ。ただの一発でも動けやしないだろう?」
さやか「あ……う……」
痛みに悶えながら、五話での杏子との戦いを回想するさやか。
幾度となく身体に与えられた壊滅的なダメージを思い出し、身震いする。
そんなさやかを見つめながら、平然と説明を続けるキュゥべえ。
キュゥべえ「君が杏子との戦いで最後まで立っていられたのは、強すぎる苦痛がセーブされていたからさ。君の意識が肉体と直結してないからこそ可能なことだ。おかげで君はあの戦闘を生き延びることができた」
キュゥべえ、ソウルジェムから手を離す。
即座に苦痛から解放されるさやか。荒い呼吸で脱力する。
キュゥべえ「慣れてくれば完全に痛みを遮断することもできるよ。もっとも、それはそれで動きが鈍るから、あまりお勧めはしないけど」
さやか「……何でよ……どうしてあたしたちを、こんな目に……」
半泣きで訴えかけるさやかに、にっこりと微笑むキュゥべえ。
キュゥべえ「戦いの運命を受け入れてまで、君には叶えたい望みがあったんだろう? それは間違いなく実現したじゃないか」

□学校、教室
朝、HR前。登校した生徒たちの喧噪。
そこに入ってくる早乙女先生。日直が号令をかける。
日直「きり〜つ、礼〜」
まどか、心配げに空っぽのさやかの席を見る。今日は登校しないのだろうか。

□さやかの部屋
カーテンを閉め切った暗い部屋。
頭から布団を被り、落ち込んでいるさやか。
布団の中で自分のソウルジェムを握りしめ、その輝きを見つめている。

□学校屋上。
休み時間。フェンスによりかかっているまどかとほむら。
まどか「ほむらちゃんは……知ってたの?」
無言で頷くほむら。
まどか「どうして、教えてくれなかったの?」
ほむら「前もって話しても、信じてくれた人は、今まで一人もいなかったわ」
まどか「……」
何故いつもそうやって他人のことを諦めてばかりなのかと問い糾したくなるまどかだが、代わりに違う質問をする。
まどか「キュゥべえは、どうしてこんな酷いことをするの?」

ほむら「あいつは酷いとさえ思ってない。人間の価値観が通用しない生き物だから。何もかも、奇跡の正当な対価だと、そう言い張るだけよ」
まどか「ぜんぜん、釣り合ってないよ！」
思わず叫ぶまどか。
まどか「あんな身体にされちゃうなんて……さやかちゃんは、ただ好きな人の怪我を治したかっただけなのに……」
ほむら「奇跡であることに違いはないわ。不可能を可能にしたんだから」
あくまで冷静に応じるほむら。
ほむら「美樹さやかが一生を費やして介護しても、あの少年が再び演奏できるようになる日は来なかった。奇跡はね、本当なら人の命でさえ贖えるものじゃないのよ。それを売って歩いているのが、あいつ」
まどか、悔しいものの反論できない。ややあって、さらに別の質問を。
まどか「さやかちゃんは……もとの暮らしには、戻れないの？」
ほむら「……」
答え辛そうなほむら。
まどか「魔法さえ使わなければ、グリーフシードなんていらないよね？　魔女と戦わなくてもいいんだよね？」
ほむら「ただ身体を維持するだけでも、少しずつ魔力を消耗していくの。だからやがては、グリーフシードが必要になる。魔女を倒して手に入れるしか、ない」
まどか「……」
黙り込むまどか。だがさやかのことを諦めきれず、必死に別の活路はないかと考え込む。
そんなまどかが見るに忍びず、敢えて冷たい言葉をぶつけるほむら。
ほむら「……前にも言ったわよね。美樹さやかのことは諦めろって」
まどか「さやかちゃんは、私を助けてくれたの」
まどか、四話で魔女に襲われたときのことを回想する。
まどか「さやかちゃんが魔法少女じゃなかったら、あのとき私も、仁美ちゃんも、死んでたの……」
ほむら「感謝と責任を混同しては、駄目よ」
あくまで情に流されることなく、きっぱりと言い切るほむら。
ほむら「あなたには彼女を救う手立てなんてない。引け目を感じたくないからって、借りを返そうだなんて、そんな出過ぎた考えは捨てなさい」
さやかの冷淡さが我慢ならず、身震いするまどか。
まどか「……ほむらちゃん、どうしていつも、そんなに冷たいの？」
ほむら「そうね……」
ほむら、手の中のソウルジェムを見下ろして、自嘲気味に微笑む。
ほむら「きっともう、人間じゃないから、かもね」
まどか「……」
他人だけでなく自分自身に対してさえ冷酷なほむらを、心底哀しく思うまどか。

□さやかの部屋

午後になっても布団から出られないさやか。
憂鬱な面持ちのまま、恭介のことを思う。
さやか「こんな身体になっちゃって……あたし、どんな顔して恭介に会えばいいのかな……」
そこへ不意に、脳裏に響く杏子からのテレパシー。
杏子『いつまでもしょぼくれてんじゃねーぞ、ボンクラ』
さやか「……ッ!?」
驚き、布団を払い除けて跳び起きるさやか。
窓に駆け寄って外を見下ろす。
家の前に、林檎を噛りながら佇んでいる杏子。片手には青果店の紙袋を抱えている。
杏子『ちょいと面貸しな。話がある』

□夕刻の街外れ
雑木林に覆われた丘の坂道。林檎片手に、先に立って歩く杏子。
後から着いてくるさやかに、無防備な背中を晒している。
さやかは舐められているのか、それとも何かの罠なのか判断がつかず、緊張した面持ちのままついていく。
杏子「あんたさぁ、やっぱり後悔してるの？　こんな身体にされちゃったこと」
さやか「……」
無言のさやかに構わず、杏子は話を続ける。
杏子「あたしはさ、まぁいいか、って思ってるんだ。なんだかんだで、この力を手に入れたから好き勝手できてるわけだし。後悔するほどのことでもないってね」
さやか「あんたは……自業自得なだけでしょ」
杏子「そうだよ。自業自得にしちゃえばいいのさ」
あっけらかんと応じる杏子。
杏子「自分のためにだけ生きてれば、何もかも自分のせいだ。誰を恨むこともないし、後悔なんてあるわけがない。そう思えば、大抵のことは背負えるもんさ」
さやか「……」
相変わらず杏子の真意が読めないさやか。
やがて二人は、丘の頂に。そこには廃墟と化した教会が建っている。

□教会の廃墟
玄関を蹴り開けて、中に入る杏子。後に続くさやか。
さやか「……こんな所まで連れてきて、何なのよ？」
杏子は手の中の林檎を弄びながら、どう切り出すか思案するかのように、祭壇の辺りをぶらぶら歩く。
杏子「ちょっとばかり長い話になる」
紙袋の中の林檎のひとつを、さやかへと放ってよこす杏子。
杏子「食うかい？」
さやか「……」
怒りを噛み殺し、投げ渡された林檎を放り捨てるさやか。
その途端、いきなり杏子がさやかの間合いに踏み込み、襟首を掴んで締め上げる。杏子はかつてないほどに本気の怒りの形相。
杏子「食い物を粗末にするんじゃねぇ……殺すぞ？」
さやか「……」

シニカルなばかりと思っていた杏子の豹変に、驚いてやや気圧されるさやか。
杏子はさやかから手を離すと、彼女が捨てた林檎を拾い、丁寧に汚れを拭ってから、袋に戻す。
呆気に取られているさやかを余所に、杏子は教会の中をぶらつきながら、想い出に耽る。
杏子「……ここはね、あたしの親父の教会だった」

□杏子の回想
往年の清潔な教会。古い蝋燭を取り替えて火を点している杏子の父。
幼い頃の杏子と妹も、雑巾掛けなどして掃除している。
微笑みを交わす父親と姉妹。
杏子off「正直すぎて、優しすぎる人だった。毎朝、新聞を読むたびに涙浮かべて、どうして世の中がよくならないのか、真剣に悩んでるような人でさ」
信徒席に座る信者たちを前にして、説教している父の姿。
杏子off「新しい時代を救うには、新しい信仰が必要だって、それが親父の言い分だった。だからあるとき、教義にないことまで信者に説教するようになった」
空っぽになった教会。
呆然としている杏子の父。
杏子off「勿論、信者の足はぱったり途絶えたよ。本部からも破門された」
次第に荒れ果てて、廃墟じみていく教会。
杏子off「誰も親父の話を聞こうとしなかった。当然だよね。はたから見れば胡散臭い新興宗教さ。どんなに正しいことを、当たり前のことを話そうとしても、世間じゃただの鼻つまみものさ」
みすぼらしい姿のまま、信徒たちの家を巡回して説教しようとする杏子と父。だが冷たく門前払いであしらわれる。
杏子off「あたしたちは一家揃って、食うモノにも事欠く有様だった」
佐倉家の食卓。水のようなスープだけしかない侘びしい夕食。
杏子off「納得できなかったよ。親父は間違ったことなんて言ってなかった。ただ、人と違うことを話しただけだ」
夜の街の賑わいの中を、失意のまま歩く父娘。
周囲で笑顔の通行人たちは、二人にまったく目もくれない。
杏子off「5分でいい、ちゃんと耳を傾けてくれれば、正しいことを言ってるって、誰にでも分かったはずなんだ。……なのに誰も相手をしてくれなかった。真面目に取り合ってくれなかった」
寂れた教会の信徒席に、肩を落として立っている杏子の父。
杏子off「カラッポの教会に、ただ一人ポツンと座って、誰かが来るのを待ってる親父は、なんだかピエロみたいでさ……悔しかった。許せなかった。誰もあの人のこと分かってくれないのが、あたしには我慢できなかった」
やせ衰えて、街を歩く杏子。ふと目に留めた果物屋で、飾ってある林檎に我慢が出来ず、万引きしようとする。
あっさり見つかり、店員に手ひどく殴られる杏子。

□廃墟の教会・現在
手にした林檎を見つめている杏子。
杏子「だから、キュゥべえに頼んだんだよ。……みんなが親父の話を、真面目に聞いてくれますように、って」
さやか「……」
意外すぎる真相に、驚きを隠せないさやか。

□杏子の回想
いきなり大勢の信徒が列を成している教会。
杏子off「翌朝には、親父の教会は押しかけた人でごった返してた。毎日おっかなくなるほどの勢いで信者は増えてった」
夜の街、颯爽と魔女たちを狩っている魔法少女スタイルの杏子。
杏子off「あたしはあたしで、晴れて魔法少女の仲間入りさ」
満場の信徒を前にして、意気揚々と説教する杏子の父。
杏子off「いくら親父の説教が正しくたって、それで魔女が退治できるわけじゃない。だからそこはあたしの出番だって、バカみたいに意気込んでたよ。あたしと親父で、表と裏から、この世界を救うんだって……」

□廃墟の教会・現在
ザク、と林檎を囓ってから、ニヒルに笑う杏子。
杏子「でもね、あるとき、カラクリが親父にばれた」
さやか「……」
杏子「大勢の信者が、ただ信仰のためじゃなく、魔法の力で集まってきたんだと知ったとき、親父はブチ切れたよ。娘のあたしを、人の心を惑わす魔女だって罵った。笑っちゃうよね。あたしは毎晩、本物の魔女と戦い続けてたってのに」

□杏子の回想
佐倉家のダイニングキッチン。飛び散った血痕。
首を吊った父の足先が宙で揺れている。
部屋の入口で、それを呆然と眺めている杏子。
杏子off「それで親父は壊れちまった。最後は惨めだったよ。酒に溺れて、頭がイカレて、とうとう家族を道連れに無理心中さ。あたし一人を置き去りにして、ね」

□廃墟の教会・現在
食べ終わった林檎の芯を、ぽいと床に放り捨てる杏子。
杏子「あたしの祈りが、家族を壊しちまったんだ」
さやか「……」
さやか、真相にショックを受けて返す言葉もない。
杏子「他人の都合を知りもせず、勝手な願い事をしたせいで、けっきょく誰もが不幸になった。——そのとき心に誓ったんだよ。もう二度と、他人のために魔法を使ったりしない。この力は、すべて自分のためだけに使い切る、って」

【Bパート】

□廃墟の教会・現在

Aパートより継続。
杏子はさやかの方へと向き直り、穏やかに語り聞かせる。
杏子「奇跡ってのはタダじゃないんだ。希望を祈れば、それと同じぶんだけの絶望が撒き散らされる。そうやって差し引きをゼロにして、世の中のバランスは成り立ってるんだよ」
さやか「……なんでそんな話を、あたしに？」
床を見つめたまま問うさやか。
杏子「……」
やや気恥ずかしいのを誤魔化すために、いったん黙る杏子。
袋から新しい林檎を取り出す。
杏子「これ以上、後悔するような生き方を続けるべきじゃない。あんたはもう、対価としては高すぎるモンを支払っちまってるんだ。だからさ、これからは釣り銭を取り戻すことを考えなよ」
さやか「……あんたみたいに？」
杏子「そうさ」
杏子は手にした林檎に口をつけず、さやかを見つめている。もう一度、さやかにそれを受け取って欲しいと思っている。
杏子「あんたも開き直って、好き勝手にやればいい。自業自得の人生を、さ」
杏子が完全な悪人ではないと理解し、微笑するさやか。少しだけ皮肉を込めて言い返す。
さやか「……それって、変じゃない？　あんたは自分のことだけ考えて生きてるはずなのに、どうしてあたしの心配なんかしてくれるわけ？」
杏子「……」
鼻白むものの、杏子は言い返さない。あくまで真摯に本題を続ける。
杏子「あんたもあたしも、同じ間違いから始まった。……あたしはそれを弁えてるが、アンタは今も間違え続けてる。見てられないんだよ。そいつが」
さやか、ようやく向き直り、正面から杏子を見つめる。
さやか「あんたのこと、色々と誤解してた。そのことはごめん。謝るよ」
杏子「……」
ちょっとだけ嬉しそうに微笑みそうになる杏子。だが、さやかは真顔で先を続ける。
さやか「でもね、あたしは人のために祈ったことを、後悔してない。その気持ちを嘘にしないために、後悔だけはしないって決めたの。これからも」
杏子「何でアンタは……」
分からないんだ？　と言いたくなる杏子だが、さやかの言葉を遮れない。
さやか「あたしはね、高すぎるものを支払ったなんて思ってない。この力は、使い方次第で、いくらでも素晴らしいモノにできるはずだから」
杏子「……」
さやか「それからさ――」
さやか、杏子から目を逸らし、やや口調を硬くして、
さやか「あんた、その林檎はどうやって手に入れたの？　お店で払ったお金はどうしたの？」

杏子「……」
当然、合法的ではないので言いよどむ杏子。
さやか「……言えないんだね。ならあたし、その林檎は食べられない。もらっても嬉しくない」
さやか、杏子に背を向けて、教会の廃墟を出て行こうとする。
たまらず、その背中に向けて叫ぶ杏子。
杏子「バカヤロウ！　あたしたち魔法少女だぞ！　他に同類なんていないんだぞ！」
足を止め、やや悔しそうに俯くさやか。
さやか「あたしは、あたしのやり方で戦い続けるよ。それがあんたの邪魔になるなら、前みたいに殺しに来ればいい。あたしは負けないし、もう恨んだりもしないよ」
そう言い残し、教会を出て行くさやか。
杏子、悔しさに歯噛みしつつ、八つ当たりのように林檎に噛みつく。

□朝の通学路
一人、とぼとぼと歩いて登校途中のさやか。
その後ろからまどかと仁美が追いつく。
まどか「さやかちゃん、おはよ！」
仁美「おはようございます。さやかさん」
さやか「あ、ああ。――おはよっ」
普段の元気を取り繕って、挨拶を返すさやか。
その空元気を見透かして、少しだけ心配になるまどか。
仁美「昨日はどうかしたんですの？」
さやか「ん～、ちょっとばかり風邪っぽくてね」
まどか「さやかちゃん……」
大丈夫？　と言いかけるまどかに、念話で先回りするさやか。
さやか『大丈夫だよ。もう平気。心配いらないから』
まどか「……」
さやか「さーて、今日も張り切って――」
言いかけるさやかだが、松葉杖をつきながら登校途中の恭介の姿を見つけ、思わず硬直する。
仁美「あら……上条くん、退院なさったんですの？」
驚く仁美。
恭介は杖での歩行に苦労しつつも、行き会うクラスメイトたちと朗らかに挨拶を交わしている。
さやか「……」
喜びよりも気まずさが先に立つさやかの表情。それを見咎めたまどかの顔も、やや曇る。

□学校・教室
HR前の賑わい。
久々に登校してきた恭介の机の周りに、クラスメイトたちが集まっている。
中沢「上条……もう怪我はいいのかよ？」
恭介「ああ。家に籠もってたんじゃリハビリにならないしね。来週までに松葉杖なしで歩くのが目標なんだ」
そんな恭介を巡る話の輪に、さやかは気後れして入っていけず、遠巻きに眺めている。隣にはまどかと仁美。

まどか「良かったね、上条くん」
さやか「うん……」
まどか「さやかちゃんも、行ってきなよ。まだ声かけてないんでしょう？」
さやか「あたしは……いいよ」
仁美「……」
普段と違って元気のないさやかが、心配になるまどか。
仁美は仁美で、そんなさやかを見つめながら、何やら考え込んでいる。

□ファーストフード店
放課後の寄り道。仁美とさやかが差し向かいに座っている。そこはかとなく緊張した空気。
さやか「……それで、話って、なに？」
仁美「恋の、相談ですわ」
思い詰めた風に告げる仁美。つられて緊張の面持ちのさやか。
仁美「私ね、前からさやかさんやまどかさんに秘密にしてきたことがあるんですの」
さやか「え？　うん……」
仁美「ずっと前から……私、上条恭介くんのことお慕いしてましたのよ」
衝撃を受けて目を見張るさやか。
さやか「そ、そうなんだ……」
ともかく動揺を押し隠そうとするさやかだが、上手くいかない。
さやか「あ、ハハ……まさか仁美がねぇ。な～んだ、恭介のヤツも隅に置けないなぁ」
すべて見透かしている仁美は真顔のまま。
仁美「さやかさんは、上条くんとは幼馴染みでしたわね」
さやか「んん、まぁ、その……腐れ縁っていうか、何ていうか……」
仁美「本当に、それだけ？」
さやか「……」
言い繕えなくなり、生唾を呑むさやか。
仁美「私、決めたんですの。もう自分に嘘はつかないって。あなたはどうですか？　さやかさん、あなた自身の本当の気持ちと向き合えますか？」
さやか「な……何の話をしてるのさ……」
仁美「あなたは、私の大切なお友達ですわ。……だから抜け駆けも、横取りするようなこともしたくないんですの」
毅然と言い放つ仁美に気圧されて、声も出せないさやか。
仁美「上条くんのことを見つめていた時間は、私より、さやかさんの方が上ですわ。だからあなたには私の先を越す権利があるべきです」
さやか「仁美……」
仁美「私、明日の放課後に上条くんに告白します。丸一日だけお待ちしますわ。その間に……さやかさんは後悔なさらないよう、決めてください。上条くんに気持ちを伝えるべきかどうか」
さやか「あ、あたしは……」
仁美は席を立ち、さやかに一礼して去っていく。

□さやかの部屋。
夜、部屋の明かりを落とし、勉強机のスタンドだけを点して、椅子にかけたまま俯いているさやか。
机の上には、彼女を催促するかのように輝いているソウルジェム。
暗い部屋の片隅に座ったキュゥべえが、さやかの背中に声をかける。
キュゥべえ「今夜は、どうするんだい？」
さやか「……分かってるわよ。そろそろ行くから」
さやか、ソルジェムを掴み取って立ち上がる。

□美樹家のアパートの前
悄然としながらも、魔女探しのために外に出てくるさやか。その後に続くキュゥべえ。
すると五話のときと同様に、まどかが街灯の下で待っている。
それに気付いて、やや驚くさやか。
さやか「まどか……」
まどか「ついてって、いいかな？」
さやか「……」
全てに見捨てられたかのような気分で、自分の価値を見失いつつあるさやかは、まどかの優しさに戸惑うしかない。
まどか「さやかちゃんに、独りぼっちになってほしくないの。だから……」
上手く言えないまどか。だがさやかの目から涙が溢れ出る。
さやか「あんた、何で……何でそんなに、優しいかなぁ……あたしには、そんな価値なんてないのに……」
まどか「そんな――」
とめどなく泣くさやか。自責の念に歯止めが利かない。
さやか「あたしね、今日、後悔しそうになっちゃった」
まどか「……」
さやか「あのとき仁美を助けなければって……ほんの一瞬だけ、思っちゃった……正義の味方、失格だよ……マミさんに、顔向けできない……」
見ていられなくなって、さやかを抱きしめるまどか。
さやか「仁美に、恭介を取られちゃうよ……でもあたし、何もできない……」
まどかの腕の中で、泣きじゃくるさやか。
さやか「だってあたし、もう死んでるんだもん、ゾンビだもん……こんな身体で、抱きしめてなんて言えない……キスしてなんて、言えない……」
まどか「……ッ」
まどかも釣られて泣きながら、それでも慰めの言葉ひとつ言えない。
二人はしばしの間、抱き合ったまま、ただ涙を流し続ける。

× × ×

ややあって、ようやく泣きやむさやか。まどかの腕の中から身を離す。
さやか「……ありがと。ごめんね」
まどか「さやかちゃん……」
さやか「もう大丈夫。すっきりしたから」

涙を拭い、気丈に微笑むさやか。
さやか「さあ、行こ。今夜も魔女をやっつけないと」
まどか「……うん」

□倉庫街
誰もいないコンテナの谷間に、魔女の結界を示す空間のゆらぎがある。
結界内の激しい戦いを暗示するかのように、時折、小さな放電が散っている。
その様子を、頭上に聳えるクレーンの上に腰掛けて眺めている杏子。暗鬱な無表情のまま、アイスキャンデーを食べている。
さらにそこにほむらが姿を現し、杏子の背後に立つ。
ほむら「黙って見てるだけだなんて、意外だわ」
杏子「……今日の魔女は小物じゃない。ちゃんとグリーフシードも落とすだろ。無駄な狩りじゃないよ」
ほむら「そんな理由で、あなたが獲物を譲るなんてね」
杏子「……」
杏子が言い返そうとしたとき、結界の歪みが、ひときわ激しく脈動する。舌打ちする杏子。
杏子「あの馬鹿、手こずりやがって……」

□結界内部
魔女と熾烈な戦いを演じているさやか。その後ろで見守っているまどかとキュゥべえ。
使い魔よりはるかに強力な魔女との戦いは久々で、さやかは苦戦を強いられる。見守るまどかも気が気ではない。
さやか「くッ……」
さやか、ついに強力な攻撃を立て続けに食らい、膝をつく。無防備なその隙に、とどめの一撃を浴びせようとする魔女。
まどか「さやかちゃん、危ない……!」
だがそこに、横合いから割り込んだ杏子の一撃が炸裂する。吹き飛ばされる魔女。
杏子「まったく……見てらんねーっつーの」
アイスキャンデーを咥えたまま、鼻を鳴らす杏子。
杏子「いいからもう、すっこんでなよ。手本を見せてやるからさ……」
さやかを背後に庇ったまま、槍を構える杏子。
だが立ち上がったさやかは、ゆっくりと杏子を押しのけて前に出る。
杏子「おい――」
さやか「邪魔しないで。一人でやれるわ」
再び攻撃を仕掛けてくる魔女。だがさやかは避けようともせず真っ向から無防備に突進する。
両者、相打ち。さやかの剣は魔女を抉るが、彼女もまた大ダメージを受ける。
まどか「さやかちゃん!?」
悲鳴を上げるまどか。
だが魔女が苦悶に身を捩る一方で、さやかの方は傷など意に介さず笑っている。
さやか「はは……あはは……」

杏子「アンタ、まさか……」
息を呑む杏子。
魔女、苦し紛れの反撃。今度もまたそれを避けず、クロスカウンターの剣撃を叩き込むさやか。
見るも無惨なほど血にまみれながら、それでもカラカラと笑っているさやか。
さやか「あははっ、本当だぁ……その気になれば、痛みなんて……完全に消しちゃえるんだぁ……」
笑いながら魔女に追い打ちをかけるさやか。どんな反撃を食らおうとお構いなしに、ただ相手を切り刻むことにのみ専念する。
あまりにも無惨な光景に、ただ言葉もなく息を呑む杏子。まどかは正視できずに目を逸らす。
まどか「やめて……もう、やめて……」
まどかの声など耳に届かず、笑いながら剣を振り続けるさやか。
その狂おしい声は泣いているようにさえ聞こえる。

第七話0稿・考察

——冒頭の回想シーン、そして「魂を物質的存在にシフトさせてあげただけ」というキュゥべえの言葉や、「魔法さえ使わなければ、グリーフシードなんていらないよね?」「ただ身体を維持するだけでも、少しずつ魔力を消耗していく」と動揺するまどかと冷酷に説明するほむらの会話など、グリーフシード関連の会話の一部がカットされていますね。

「そうですね。中盤からの杏子のセリフは切りたくなかったので、それを活かしていく方向で説明的なセリフをカットしています。見てる人がそれを聞いて面白いのかと言えば、そうではない部分だと思ったので。セリフの優先度がはっきりしていたのであまり悩みはしませんでしたね」

——その取捨選択により、より〝杏子のお当番回〟になりましたね。

「ええ。第三話までがマミ、第六話までがさやか、第九話までが杏子、最終話までがほむらの回、と設定して構成していましたから。と言っても、杏子はさやかの〝合わせ鏡〟な存在だと考えているので、同時にさやかも語られていくわけですが。しかし、杏子に関してもこの人気の出方はちょっと想像以上でした。声優（野中藍）さんの力も大きかったと思います。確かに、明らかにおまえ良い子だろうっていう女の子が、頑張って悪党気取ってる、という雰囲気が良く出ていましたよね。僕は、声は普通に悪いヤツっぽい声になるのかなと思っていたので、野中さんを選んだ監督の采配に驚かされました。すごくハマりましたね」

第十話「もう誰にも頼らない」0稿

決定稿→P.132

物語は過去へと巻き戻る。転校してきたほむらは、新しいクラスでまどかと知り合う。魔女に狙われたほむらは、まどかに命を助けられ、魔法少女の世界を知ることに。

やがて「ワルプルギスの夜」が街に襲来。魔法少女のまどかは「ワルプルギスの夜」に敗れ、ほむらの前で死んでいく。絶望するほむらはキュゥべえと契約、時間を過去へ遡り、まどかと力をあわせて、魔女と戦おうとする。

魔法少女として成長を遂げていく、ほむら。しかし再び襲来した「ワルプルギスの夜」の前に、まどかを救うことができなかった。何度も時間を遡り、まどかを救おうとするほむら。何度も失敗し、何度も絶望しても、ほむらは諦めようとはしなかった。

「同じ時間を何度も巡り、たったひとつの出口を探る。あなたを絶望の運命から救い出す道を……あなたのためなら、私は永遠の迷路に閉じ込められても構わない」

ほむらは時間遡行者だった。

【Aパート】

□朝の教室（平行世界・過去）

ほむら転校初日の朝HR。クラスの全生徒の視線を一身に浴びながら、黒板の前に立たされているほむら。眼鏡に三つ編みの冴えない格好。必要以上に緊張し、萎縮してしまっている、見るからに気弱そうな少女である。

和子「はーい、それじゃ自己紹介いってみよー」

ほむら「あ、あの、あああ暁美、ほ、ほむら、です。その……どうか、よよよろしくお願いします」

黒板にほむらの名前を書く和子。

和子「暁美さんは心臓の病気でずっと入院していたの。久しぶりの学校だから色々と戸惑うことも多いでしょう。みんな、助けてあげてね」

× × ×

休み時間、ほむらの席に押しかけて興味津々に質問をしてくる女子たち。

女子A「暁美さんって、前はどこの学校だったの？」

女子B「前は部活とかやってた？　運動系？　文化系？」

女子C「すごい長い髪だよね～。毎朝編むの、大変じゃない？」

ほむら「あの……わ、私、その……」

気弱な眼鏡ほむら、気圧されてたじたじになっている。

そこに割り込んでくるまどか。

まどか「暁美さん、保健室行かなきゃいけないんでしょ？　場所、分かる？」

ほむら「え？　いいえ……」

まどか「じゃあ案内してあげる。わたし保健委員なんだ。――みんな、ごめんね。暁美さんって休み時間には保健室でお薬飲まないといけないの」

女子A「あ、そうだったの？　ごめんね、引き留めちゃって」

女子B「暁美さん、また後でね」

まどかの気さくな取りなしで、あっさり納得して引き下がる女子たち。

皆の好奇心から開放されて、やや安堵するほむら。

□廊下

先に立って案内するまどか。後からおっかなびっくりついてくる眼鏡ほむら。

まどか「ごめんね。みんな悪気はないんだけど……転校生なんて珍しいから、はしゃいじゃって」

ほむら「いえ、その……ありがとうございます」

まどか「そんな緊張しなくていいよ。クラスメイトなんだから」

優しい笑顔で、ほむらを和ませるまどか。

まどか「あたし、鹿目まどか。まどかって呼んで」

ほむら「え、そんな……」

まどか「いいって。だからわたしも、ほむらちゃんって呼んでいいかな？」

ほむら「……」

まどかとの距離を測りかねて、もじもじする眼鏡ほむら。

ほむら「……私、その、あんまり名前で呼ばれたことってなくて……すごく、変な名前だし」
まどか「え〜？　そんなことないよ。なんかさ、燃え上がれ〜って感じで。かっこいいと思うな」
ほむら「……名前負け、してます」
まどか「そんなの、勿体ないよぉ。せっかく素敵な名前なんだから、ほむらちゃんもカッコよくなっちゃえばいいんだよ」
ほむら「……」
無邪気に笑うまどかに、つい気後れして俯いてしまう眼鏡ほむら。

□数学の授業
黒板に書かれた問題を前にして、まったく解けず、冷や汗まみれになる眼鏡ほむら。数学教諭、気まずい表情で、
数学教諭「あー、うん。君は休学してたんだっけな。友達からノートを借りておくように」

□体育の授業
グラウンドの片隅に青ざめた顔で座っている眼鏡ほむら。皆が元気に走り幅跳びのスコアを競うのを、見学している。
そんなほむらを見てヒソヒソと雑談する女子たち。
女子C「準備体操だけで貧血って、ヤバイよね〜」
女子B「半年もずっと寝てたんじゃ、仕方ないんじゃない？」

□放課後の通学路
夕焼け。
一人、肩を落として家路につく眼鏡ほむら。自己嫌悪で、悩で憂鬱顔。
脳裏を[illegible]るまどかの言葉。
まどかM『――ほむらちゃんもカッコよくなっちゃえばいいんだよ――』
ほむら「無理だよ……私、何にもできない……」
足下だけを見つめて、周囲には注意を払わず、内省に没頭する眼鏡ほむら。
ほむらM『人に迷惑ばっかりかけて、恥かいて……どうしてなの？　私、これからもずっとこのままなの？』
落ち込むほむらの脳裏に、心の奥から邪悪な声が囁きかけてくる。
魔女M『だったらいっそ、死んだ方がいいよね』
ほむらM『死んだ方がいいかな……』
魔女M『そう、死んじゃえばいいんだよ』
ほむらM『死んでしまえば……』
眼鏡ほむら、ふと我に返り、周囲の景色が豹変しているのに気付く。
夕陽に照らされた帰り道のはずが、いつの間にか彼女は魔女の結界に迷い込んでいる。
ほむら「ど、何処なの？　ここ……」
怯える眼鏡ほむらの前に、結界の奥の暗闇から躙り寄ってくる魔女のシルエット。
ほむら「な……何？　何なの!?」
眼鏡ほむらに襲いかかろうとした魔女の行く手を、輝く線が阻

む。
ほむらを中心にして展開されている魔法陣。狼狽えて足踏みする魔女。
マミ「――間一髪ってところね」
まどか「もう大丈夫だよ。ほむらちゃん」
眼鏡ほむらを庇うようにして、魔女の前に立ちはだかるまどかと巴マミ。
ほむら「あ、あなたたちは……」
当惑する眼鏡ほむらの脚もとに、キュゥべぇが現れる。
キュゥべぇ「彼女たちは、魔法少女。魔女を狩る者たちさ」
まどか「いきなり秘密がばれちゃったね。クラスのみんなには、内緒だよ」
まどか、マミ、同時に魔法少女スタイルに変身。タッグを組んで魔女に襲いかかる。
魔女「ギャアアアアア……」
瞬く間に倒され、消滅していく魔女。
その鮮烈な光景に、心奪われるほむら。

□マミの部屋
魔女退治成功の祝杯とばかりお茶会をしているマミ、まどか、キュゥべぇ。
窮地を救われた眼鏡ほむらも招待され、シフォンケーキを振る舞われているものの、未だに面食らって萎縮している。
ほむら「鹿目さん……いつもあんなのと戦ってるんですか?」
まどか「んー、いつもって……そりゃマミさんはベテランだけど、わたしなんて先週キュゥべぇと契約したばっかりだし」
マミ「でも今日の戦い方、最初よりずっと上手かったわよ。鹿目さん」
マミに褒められ、えへへ、と照れるまどか。
眼鏡ほむらは不思議そうに、再びまどかに向けて問う。
ほむら「……平気なんですか? 恐くないんですか?」
まどか「平気ってことはないし、恐かったりもするけれど、魔女をやっつければそれだけ大勢の人が助かるわけだし。やり甲斐はあるよね」
ほむら「……」
そう語るまどかを、羨望の眼差しで見つめる眼鏡ほむら。
マミ「鹿目さんには、ワルプルギスの夜が来る前に、頑張って一人前になっておいてもらわないとね」

□燃えさかる市街地
ワルプルギスの襲撃を受け、炎に包まれた街の中。
戦って死んだマミの遺骸に、胸元で手を組ませ、沈鬱に黙祷するまどか。その背中を泣きながら見守る眼鏡ほむら。
その向こうでは、巨大怪獣ワルプルギスが今なお破壊の限りを尽くしている。
立ち上がり、悲壮な決意を秘めた眼差しでワルプルギスを見据えるまどか。
まどか「……じゃあ、行ってくるね」
ほむら「そんな、巴さん、死んじゃったのに……」
まどか「だからだよ。もう『ワルプルギスの夜』を止められるのは、

わたしだけしかいないから」
ほむら「無理よ！　一人だけであんなのに勝てっこない！　鹿目さんまで死んじゃうよ！」
まどか「それでも、わたしは魔法少女だから。みんなのこと守らなきゃいけないから」
ほむら「……ねぇ、逃げようよ……だって仕方ないよ。誰も鹿目さんを恨んだりしないよ……」
死を決意した静かな表情で、眼鏡ほむらを諭すまどか。
まどか「ほむらちゃん、わたしね、あなたと友達になれて嬉しかった。あなたが魔女に襲われたとき、間に合って……今でもそれが自慢なの。だから魔法少女になって本当に良かったって、そう思ってるんだ」
ほむら「……鹿目、さん……」
まどか「さよなら、ほむらちゃん。元気でね」
変身し、ワルプルギスの夜めがけて突進していくまどか。
ほむら「……嫌ぁ！　行かないで！　鹿目さぁん‼」

□廃墟の街
ワルプルギスによって破壊され尽くし、瓦礫の山と化した街に、しんしんと雨が降り注ぐ。
廃墟の中に転がっている、無惨な遺体と化したまどか。
その前に膝をつき、雨に打たれながら号泣する眼鏡ほむら。
ほむら「どうして……死んじゃうって分かってたのに……私なんか助けるよりも……あなたに生きててほしかったのに……」
キュゥべぇ「その言葉は本当かい？　暁美ほむら」
瓦礫の山の頂に座って、泣きじゃくる眼鏡ほむらを見下ろしているキュゥべぇ。
キュゥべぇ「君のその祈りのために、魂を賭けられるかい？　戦いのさだめを受け入れてまで、叶えたい望みがあるのなら――僕が力になってあげられるよ」
泣き濡れた目で、キュゥべぇを見上げる眼鏡ほむら。
ほむら「……あなたと契約すれば、どんな願いも叶えられるの？」
キュゥべぇ「そうとも。君にはその資格がありそうだ。――教えてごらん。君はどんな祈りでソウルジェムを輝かせるのかい？」
ほむら「私は――」
眼鏡を外して涙を拭い、決意の面持ちで立ち上がるほむら。
ほむら「――鹿目さんとの出会いを、やり直したい。彼女に守られる私じゃなくて、彼女を守る私になりたい」
直後、痛みに似た衝撃に身を強張らせるほむら。
ほむらの胸から、眩い輝きとともに浮かび上がるソウルジェム。
キュゥべぇ「――契約は成立だ。君の祈りはエントロピーを凌駕した。さぁ、解き放ってごらん。その新しい力を」
ほむら「……」
宙に浮かぶ自らのソウルジェムを、恐る恐る掴み取るほむら。
その途端、時間が逆行して過去へと遡る。

□夜の病院
病室のベッドの中で、はっと目覚めるほむら。
ほむら「……ここは……」
かつて入院していた病室。カレンダーには退院予定日にマー

カーペンで印がしてある。
サイドテーブルには、「編転入生の方へ：市立三咲原中学校」と書かれた書類が載っている。
ほむら「私、まだ……退院して、ない？」
ぼんやりと寝惚け眼を擦ろうとしたところで、その手が握っているソウルジェムに気付き、驚きに目を見張るほむら。
ほむら「……夢じゃ、ない……ッ!?」

□朝の教室（平行世界・過去）
再び、ほむら転校初日の光景。
和子「はーい、それじゃ自己紹介いってみよー」
ほむら「暁美ほむらですっ！　よろしくお願いします！」
黒板にほむらの名前を書こうとする和子。
和子「暁美さんは心臓の病気でずっと……」
だが眼鏡ほむらは待ちかねてずかずかとまどかの席まで歩み寄り、感激の笑顔で、がっしとまどかの手を握る。
ほむら「鹿目さん！　私も魔法少女になったんだよ！　これから一緒に戦おうね！」
まどか「あ……えっと……うぅ……」
困惑するやら慌てるやらで目を白黒させるまどか。
ただ呆然となる和子ほかクラスメイト一同。

□河川敷、高架橋下
誰もいない河原に集合しているまどか、マミ、眼鏡ほむら。三人の前には古びたドラム缶が置かれている。眼鏡ほむらはゴルフクラブを手に緊張の面持ち。
ほむら「それじゃ、いきます！」
眼鏡ほむら、魔法少女に変身。盾の砂時計が時間を止める。
静止した時間の中で、ひたすらゴルフクラブを振り回しドラム缶を殴りまくる眼鏡ほむら。動作はたどたどしく、何度も空振りし、一度ならず転んだりもする。
そして時間静止解除。息が切れてへたり込んでいる眼鏡ほむらの横で、ボコボコになって転がっているドラム缶。
まどか「どう思う？　マミさん」
うーん、と呆れ半分、困り半分に考え込むマミ。
マミ「時間停止ねぇ……確かに凄いけれど、使い方が問題よね」
ほむら「は、はい……」
マミ「まず、いくら一方的に殴れるとはいえ、一発ごとの効き目がないんじゃ意味ないわ。そんな棒きれより、もっと威力のある武器を用意しないと」
ひん曲がったゴルフクラブを見下ろし、しょんぼりするほむら。
マミ「あと、誰も動けなかったはずなのに、ドラム缶の位置が変わってるのは、どうして？」
ほむら「それは……私が触れたものだけ静止が解除されるんで、殴った瞬間にはドラム缶も動いちゃうわけで……」
マミ「それだと敵にカウンターの機会を与えてしまうわ。時間を止めている間に、相手に一切触れないでダメージを与える方法を考えるべきね」
ほむら「わ、わかりました……」

□ほむらの部屋
小綺麗なワンルームマンション。まだそれほど荒んだ居住空間ではない。
テーブルの上に工具を並べ、ノートパソコン首っ引きで、パイプ爆弾を作っている眼鏡ほむら。一心不乱の真剣な熱意。ウェブブラウザには『腹腹時計オンライン』というタイトル。

□魔女の結界
まどか、マミ、眼鏡ほむらの三人組による魔女退治の光景。
まずマミが緊縛魔術で魔女を拘束。
その隙にまどかが弓で攻撃。
さらに眼鏡ほむらが時間を止め、おっかなびっくり魔女の足元に爆弾を仕掛けて、そそくさと走り去る。
時間静止解除とともに大爆発。悲鳴を上げて消滅する魔女。
ほむら「やった……やった！」
まどか「凄いよ、ほむらちゃん！」
マミ「お見事ね」
勝利を喜ぶ魔法少女三人。結界は解けて廃工場の景色に。その床に転がるグリーフシード。

第十話 0稿・考察

——ほむらの過去が描かれる回です。ほむらはまどかの死を回避するために時間遡行を繰り返していくわけですが、幾つもの時間軸でのエピソードの積み重ねを1話にまとめるのは、大変な作業だったのでは？

「ループの回数自体は、尺を考えて最低限しか書いていないので、そこまでもないんですけど、内容に関しては、自分では判断しかねるというか書き上がったのは良いけどどこを削ったらいいのかもわからなかったので、『えーい、出してしまえ！』と。『まあ、難しいですよね？』と思ってたんですけど、でも、これが通ってしまった！　シャフトさんすげえなと思いました」

——実際にほむらは何周くらいしてるんでしょう。そういった裏設定はありますか？

「気が遠くなるほどぐるぐるしているかもしれないし、してないかもしれない。ただ、例えば千回も繰り返して一度も成功してないのだと、さすがに『バカなの？』ってことになっちゃうので、そこは良い塩梅の回数ということで良いのではないでしょうか」

——0稿からカットされているのは、マミさんがほむらを特訓しているシーンの一部ですね。

「そうですね。ひさびさにマミが喋るシーンなので、たくさん見せてあげたいなあと思いつつ、でもマミの話じゃないんだし、と。ゴルフのクラブを使っての特訓で、マミさんがかなりスパルタ。こういう〝この人けっこう怖い〟ってところを知っていたから、ほむらはマミを避けたのかもしれない（笑）。マミに関していろいろ考えるとおもしろいですよね。手放しでまどかたちを魔法少女に誘っていたわけでもなかったですしね。どこまで気づいていたのか……？　とか」

シナリオから絵コンテへ

シナリオから絵コンテへ

絵コンテとは絵で描かれたシナリオのようなもの。いわばアニメーションの設計図である。

絵コンテを担当する演出家は、脚本家が仕上げたシナリオをもとに、どんな構図の背景の中で、どんなキャラクターがどんな演技をするのかを具体的に指示をする、といってもいいだろう。絵コンテにはカット番号／画面／セリフや効果音／秒数といった要素が記されている。アニメーターや背景美術スタッフたちは、この絵コンテを参照しながら、各カットの絵をつくりあげていくのである。

本書では主要話数を手がけた2人の演出家の絵コンテを掲載する。前半の魔法少女の光と闇を描いた、芦野芳晴。後半の魔法少女の大スペクタクルを描いた、笹木信作。2人は新房監督の指示のもと虚淵玄のシナリオを解釈し、映像化していった。その試行錯誤の過程は、絵コンテを見ることで感じとることができるだろう。

芦野芳晴

あしの・よしはる●アニメーション監督、演出家、アニメーター。多彩な作品にアニメーターや作画監督として参加。2004年ごろからマッドハウス、スタジオ4°C作品などで演出家や監督を務める。監督としての代表作にTVシリーズ『魔法少女隊アルス』(2004年)、オリジナルビデオ『きまぐれロボット』(2004年)、劇場版『ファースト・スクワッド』(2009年)などがある。『魔法少女まどか☆マギカ』では魔法少女の過酷な世界観を鮮やかに提示した。

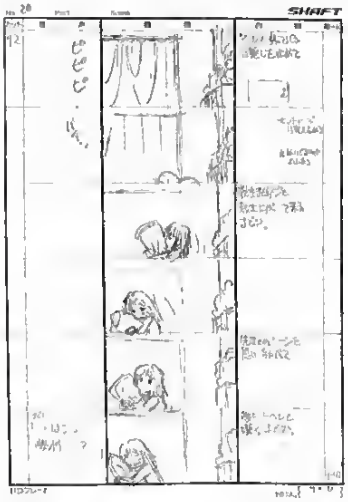
笹木信作

ささき・しんさく●演出家、アニメーター。スタジオジブリの研修生一期生として多彩な作品に参加。以来、絵コンテ、演出、作画監督と多彩なパートで活躍している。近年は年間7作から8作ぐらいの作品で絵コンテを担当。代表作に『MASTERキートン』(監督助手、1998年)、『電脳コイル』(2007年、絵コンテ第4話、第7話、第9話、第18話、第20話)など。『魔法少女まどか☆マギカ』では魔法少女たちの衝撃的な運命と結末をドラマチックに描いた。

第一話「夢の中で逢った、ような……」

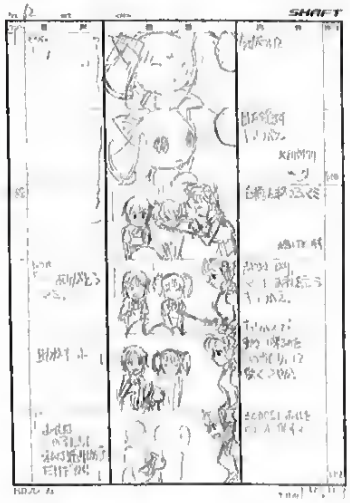
打ち合わせした時には、虚淵（玄）さんの脚本と蒼樹うめさんのキャライメージと劇団イヌカレーさんのアイディアスケッチしかない状態でした。それを新房（昭之）さんが提案するイメージに合わせてまとめて行くというような仕事の流れでした。まだまだ決まっていない事が多くて、絵コンテの後に設定が決まったものも多いので、第一話の絵コンテは、叩き台みたいなカンジでしたね。

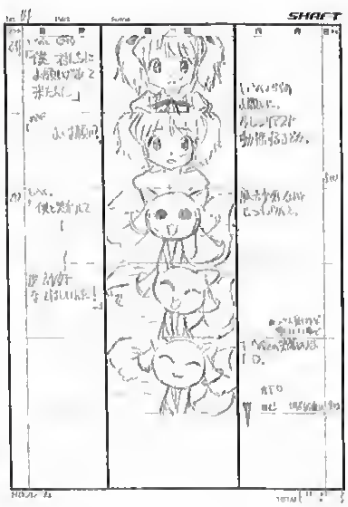
完成した映像を見たとき、コンテ作業の後にできた設定がたくさんある割には、結構元の絵コンテが使われていて、有難かったですね。（芦野）



朝のシーン

まどかの目覚めのシーン。絵コンテでは「抱き枕」を抱きしめるシーンになっているが、本編では「大きなぬいぐるみ」を抱いている。





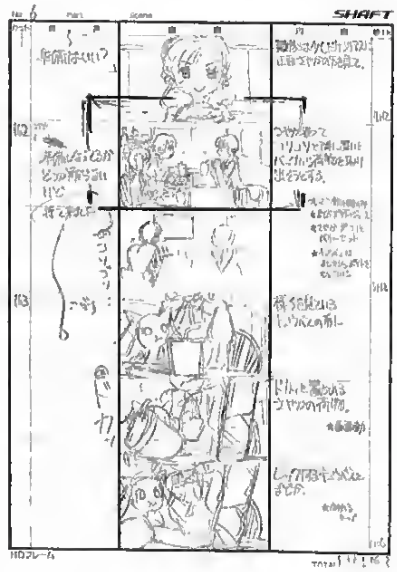
ラストシーン

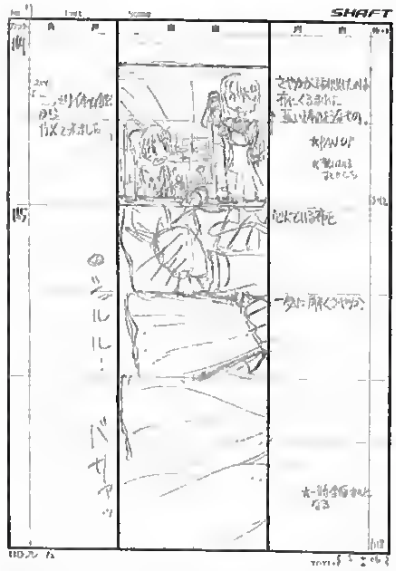
回復したキュゥべえと会話するまどかたち。カメラの正面に堂々と立ち、かわいらしくふるまうキュゥべえの姿が印象的。

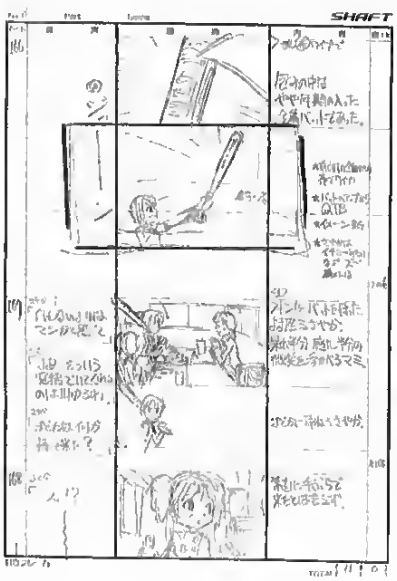
第二話「それはとっても嬉しいなって」

引き続き第二話を描き進めましたが、次第にキャラクター像も把握出来てきて、話も転がしやすくなり、ひたすら〝前振り〟に徹しようと思いました。

実際は戦闘シーンが格段にパワーアップしていてビックリしました。（芦野）







マミの魔法少女講座

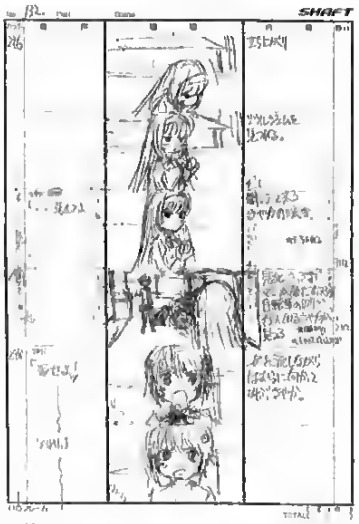
喫茶店で魔法少女講座の準備をするマミ、さやか、まどか。さやかの荷物をドンと置いて、びっくりするキュゥべえがかわいらしい。

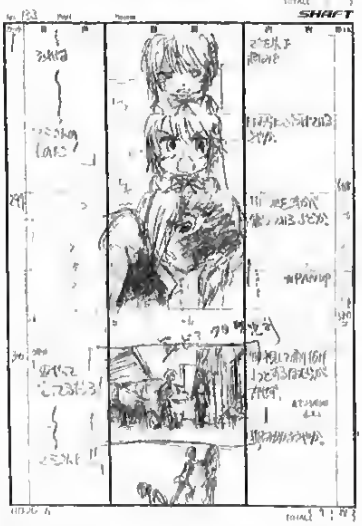
第三話「もう何も怖くない」

更に引き続き第三話に入った訳ですが、いかに盛り上げて落とすかだけ考えてました。背中で喋らせたり、手を繋がせたりとか。ラストシーンを描き終えた時に「これは結構おもしろいシリーズになるかもしれない」と身震いがしました。こんな事は初めてでしたね。この後の話も描きたい話数があったのですが、スケジュール的にもう出来なくて、とても残念でした。

実は、絵コンテ作業している時は「血はOK」と言われていましたので、そういうつもりで描いていました。放送を見たら無くなってましたね。別にそこにこだわりはないですが。この本編の後に初めてEDアニメが流れて、さすが新房さんやるなぁと思いましたねー。

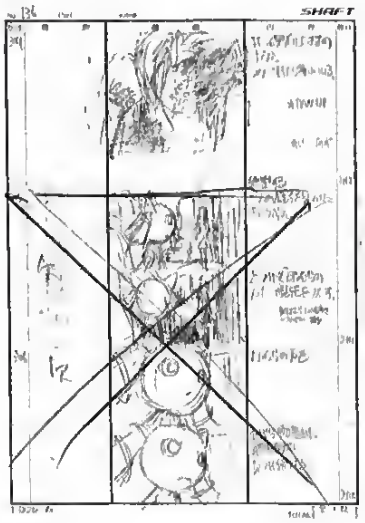
（芦野）

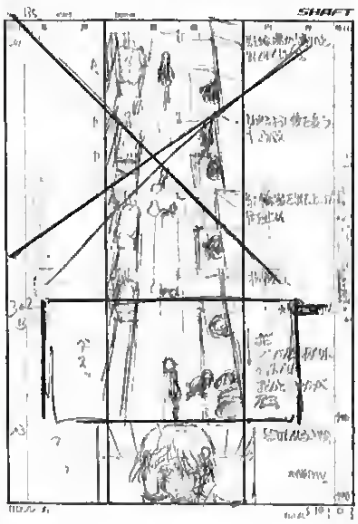


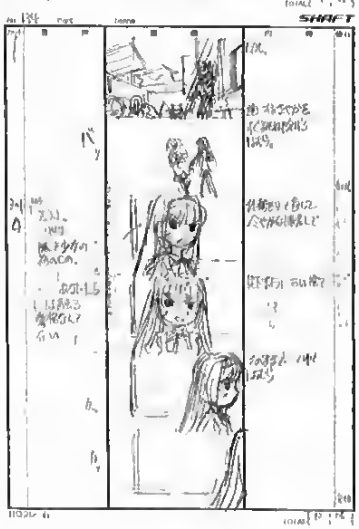


ラストシーン

マミが目の前で倒れ、立ち去るほむら、怒るさやか、絶望するまどか。内面の心理をじっくりと静かに描く。情感たっぷりなシーン。







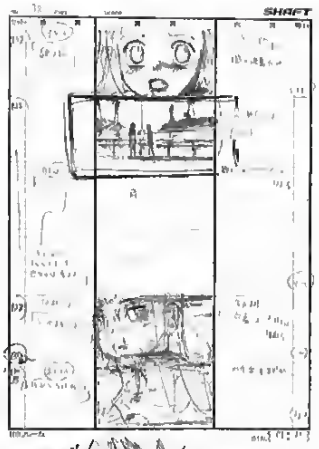
第四話「奇跡も、魔法も、あるんだよ」

「とにかく読んで欲しい」と渡された虚淵さんのプロット、シナリオが素晴らしく、『まどか』に参加させてもらうことになったのが2010年の夏でした。私はシャフトとは別のスタジオにいて、更に（迂闊にも）虚淵さんの名前を知らなかったので、最初「凄い新人ライターさんがいるよ」とそのスタジオの人と話した事を憶えています（虚淵さん、お許し下さい）。虚淵さんのシナリオは、TVアニメに慣れた身からすると、少し「アニメの方は新人の方かな？」と思わせる点があったりしましたが（私はかなり後までそう勘違いしていました）、シナリオとして基礎が深く押さえられていて、非常にコンテにしやすいシナリオでした。

アニメのシナリオに染まっていない印象もありながら、これだけ描きやすいというのは、業界的に大変珍しいことなのです（相性もあると思いますが）。これはシナリオの技術論として、分析、研究するに値するのではないでしょうか。

とはいえ、『まどか』の四話は自分にとって最初のコンテだったので、かなり混乱の中のスタートだった事を憶えています。虚淵さんのシナリオは既に上がっていましたし、蒼樹さんのキャラ原案や、イヌカレーさんのイメージボードも上がってきていましたが、舞台設定や、岸田さんのアニメーションのキャラクターデザインはまだできていませんでした。

また、今まで新房さんとは仕事をした事が無く、自分がやってきた作品傾向とは違うという、そもそも仕事としての不安要素もあったので「設定が間に合わないことはよくある事だけど、この状況で大丈夫かなあ」と思った事を憶えています。その中で、コンテ用の注意事項（NGとなるアングル等が記されていました）と、先行して入られていた芦野さんのコンテが非常に頼りになりました。芦野さんのコンテは、私などが思っていた『少女を主人公としたアニメ』として王道の切り方がなされていて、私も「そうそう、自分もこう描ければー」と思わせる説得力のある内容



修正コンテ

修正コンテ

まどかとほむら

マミの死を嘆くまどかと見守るほむら。抒情的な絵づくりが印象的。表情と足を映す、細かいカット割りは新房監督の修正絵コンテ。

でした。その横に新房さんが修正を入れているのですが、一転、それは私にとって「おお、そういくのか！」と、驚かされる修正でした。絵柄も独特で、慣れていない私には完成画面が読めない事すらあったのを憶えています。その修正の仕方は新鮮で刺激的でしたし、話を伺えば意外と『アニメの見方の世代的共通点』等も感じて、充分納得がいくものでした。

しかし自分が描くコンテがその要求に応えられるかどうかは未知数で（それはどの作品でも多かれ少なかれ同じですが）、とにかく覚悟として、「『まどか』のコンテは、注意事項や芦野さんのコンテで判明しているNG事項をきっちり守って、監督の直しやすいコンテを描く事を心がけよう」と、思った事を憶えています。

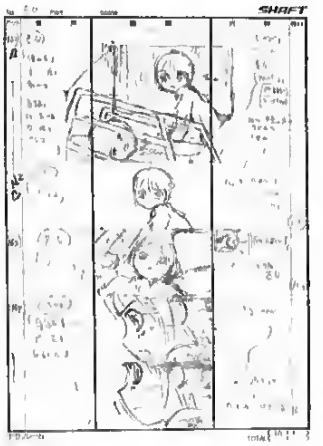
結果的に四話のコンテは、その『NG事項』を最大限守って、舞台設定等もコンテ用に考えたりして、スケジュール的にも手間をかけた物になりました。自分的にはかなり出し切った感があったことを憶えています。もちろん完成作品ではコンテに修正が幾つか入っていますが、むしろ思っていたより少なくて、「仕事としては成立したんじゃないだろうか」——と思いました。

修正点と言えば、コンテ時に頑張って設定した舞台等は、キレイに『まどか』独特の舞台に修正されていました。私の描いた方はより日常的すぎたようです。また、まどかが結界に飲み込まれてしまってから、さやかのアクションの結着までは、完全に修正が入っています（アクション作監さんによる物と聞いていますが、私はスタジオの現場に入っていないので確認はしていません。『まどか』のアクションは未知数だったので、コンテに『アクションは作品傾向に合わせて修正よろしくです』などと私が書いたこともあり、直してもらったのだと思います）。どちらも『直されて一安心』といった内容でした。助かりました。

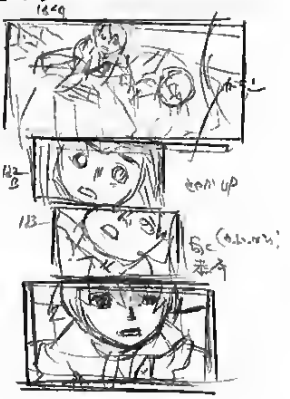
特にアクションの方は、「TVアニメとしてはこれ位かな」と思っていたこちらのコンテを上回るボリュームで描写されていて、見応えのある内容になっていました。このあたり、シナリオと完成画面を見比べられると、そのボリュームがはっきり判っていただけると思います。『まどか』に対する現場の情熱が既に高まっている事がうかがえて、「こりゃ負けてられないなあ」と思った記憶があります。（笹木）

さやかと恭介

不治の病を嘆く恭介に、さやかが語りかける。さやかの決意が凛々しい。下段の新房監督の修正絵コンテではその表情を正面でとらえる。



修正コンテ



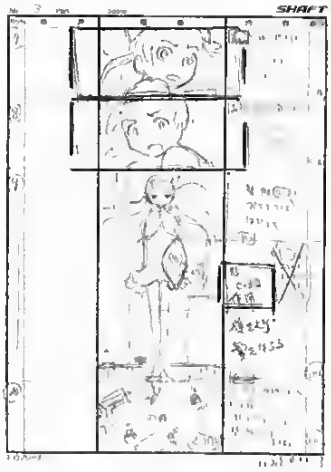
第六話「こんなの絶対おかしいよ」

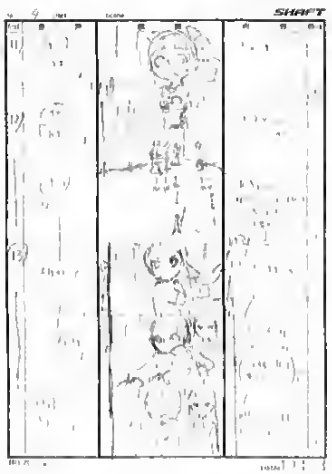
幸いな事に、次のコンテの仕事が頂ける事になりましたが、四話の後に六話というのは少し面食らいました。もう少し間が空くのが、まあ普通です(もちろん作品によります)。「こんなおもしろい作品で人いないの?」――という『面食らい』です。後々見ると人がいなかったということはないと思いますが、その時は「人がいないのだから頑張らねば!」と捉えて、早く上げる事を意識していたと思います(結果的にはさほど早くはなかったですが)。

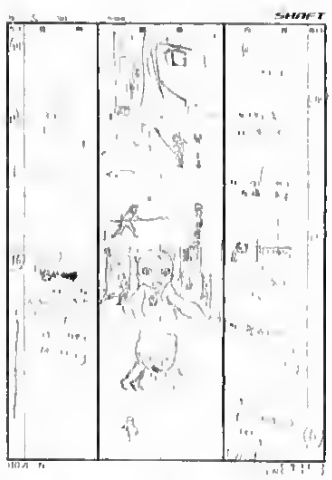
コンテ的に難しかったのは、『路地』の扱いです。意外に思われるかもしれませんが、そもそも私達の2Dアニメーションは狭い所がちょっと苦手です。簡単に言うと、狭い所はレイアウト的、アニメート的に、上手下手が出やすいのです。そういったことを避ける意味か、あるいは絵的な印象の問題か、新房さんの『コンテ用注意事項』には、パースが極端につく描写の禁止、むしろ舞台的なレイアウトを取るべき指示等がありました。この条件で――狭い所で手前に空間を取る事が困難で、そもそもパースが付かざるを得ない――『路地』という舞台を描くには、見せ方が難しくなるということは、想像して頂けると思います。結果として、コンテ以降の部署でも『困難な課題』だったと見えて、幾つもの方法論が並列する画面になっています。

表現に属する事ですので、結果の是非は私が判断する様なことではありませんが、作り手にとって簡単なだけの描写が魅力的な表現から遠ざかって行くのは間違いありません。これはこれで大変興味深い結果だと思いますが、いかがでしょうか?

ドラマ的には、今まで出てこなかった事実や、キャラクターの別の側面が現れてきて、







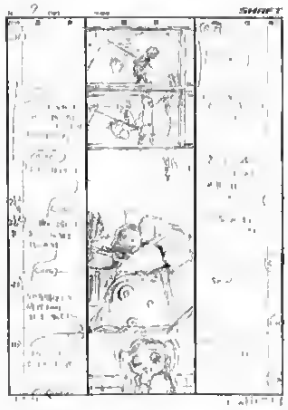
路地の戦い

杏子とさやかの前にほむらが登場。Cut9の「顔をあげ、髪をはらう」という指示は新房監督のもの。ほむらのトリッキーな動きに注目。

悲劇が深まって行く話数です。コンテを描いていてもゾクゾクして愉しかったです。

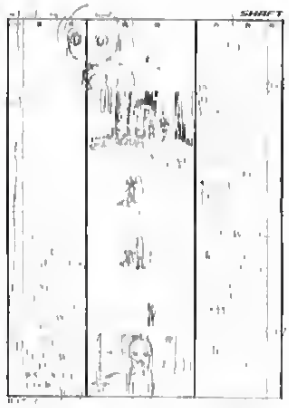
特に杏子の描写は愉しかったです。役としても人物像の変化が『悪人』から『好い人』となるおいしい役回りです。しかしダンスしながら会話するというのは……いえ、コンテ的にはさほど難しい事では無いのですが、作画される方の事を思うと……。私はこういう場合の『うまいやり方』が得意でないので、かなりストレートに『ダンスしながらもう一人と喋っている』というシーンをシナリオのまま描いたのですが、コンテは特に直されずに、大変なまま負担の大きい作画がなされていて、全く恐縮しました。これも『まどか』の現場に活力があったからできたことだと思います。

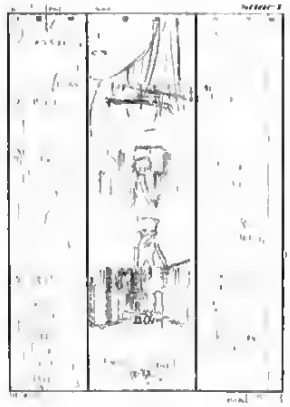
また一方、その『別の側面を見せる』というのとは違いますが、杏子に締め上げられるキュゥべえを、耳で持ち上げられたウサギ的に描きました。キャラクターの造形をゆがめる事で『別の物に見せる』おもしろさを考えたのですが、これは採用されませんでした(今考えるとコンテはさらにオーバーアクトになっていました)。改めて作品全体を考えると、修正は『然るべし』です。いたいけのない少女達を無表情でおとしいれるキュゥべえが大変憎たらしかったので、何かしてやりたかったのですね。職業人として見失っていた様です。シナリオがロジカルに完成されているので、コンテではそういう余裕があったということでもあると思います。(笹木)



キュゥべえの「訳が分からないよ」

杏子に締め上げられるキュゥべえ。Cut269では「訳が分からないよ」と言うキュゥべえの表情が擬人化(?)されて描かれている。





戦いの決着

路地戦続き。「佐倉杏子」と名前を呼ぶ、ほむらの口元から目線に切り替わるカットが迫力満点。杏子もダブルアクションで振り返る。

シナリオを読んだ時、最も印象深い話だったので、コンテを割り振られた時、大変やりがいを感じました。幸運だったと思います。改めて言うまでもない事と思いますが、シナリオは非常に内容的密度の高いものでした。この密度の『思い入れ』を再現するのは、集中力がいる作業になります。

どのシーンも『見せ場』として描くテンションが重要で、それはコンテ段階でも必要になる、と思いました。しかし密度が高いだけでなく、完成度も大変高いシナリオでした。

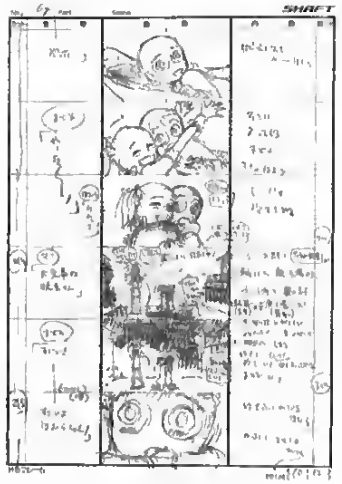
四、六話からして特別修正は必要なかったのですが、特に十話はコンテ段階の修正をしなかったと記憶しています。――というか、変な修正を入れて内容を壊してしまう方を警戒すべきと思ったことを憶えています。自分が足した事で憶えているのは、『委員長の魔女』を倒してマミのリボンで降りてくるほむらの台詞「やった……やった……」そこにまどかが入ってきて「やったー！」と、抱きつくところ位です（ご興味あれば確認してみて下さい。一般的には変えたと言える程でもないレベルです……）。『委員長の魔女』のシーンの別のところで「あれ、スカートの中に手榴弾を放り込むのって、コンテで足したんだっけ？」と思って確認したら、全くそのままの描写がシナリオでなされていた記憶があります（それくらい詳細に、尚且つ決定的なポイントがシナリオ段階で描かれていたという一例です。ぜひシナリオでご確認下さい）。ですので作業としては、空間とキャラクターの動きの整理と原レイアウトいうコンテ技術の根本的な所に傾注できました。あとは先に書いた『思い入れ』をどう保つか、という問題でした。これは私にとって感覚的な絵の問題だったので、ただ頑張るしかありません。

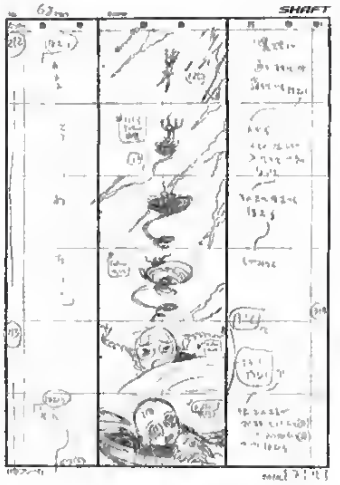
ほむらというキャラクターの『特異な不幸』が、この一本で、視聴者にとって『普遍的な悲劇である』と感じられる様に『思い入れ』のテンションを保とう――という努力をしたと記憶しています。

完成した画面は、コンテ以上に輪をかけたテンションで、思い入れの詰まった迫力のある描写に圧倒されました。

コンテ作業として非常に幸せな仕事であったと思います。（笹木）

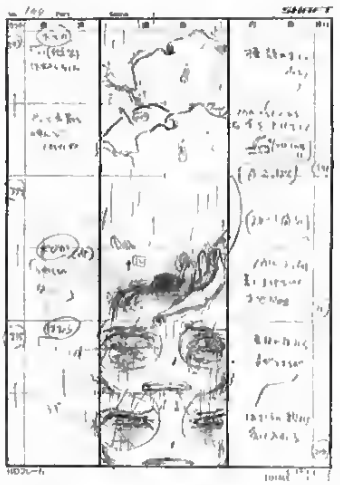
第十話「もう誰にも頼らない」

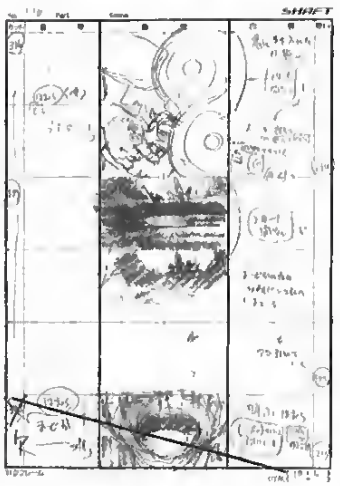




眼鏡ほむら

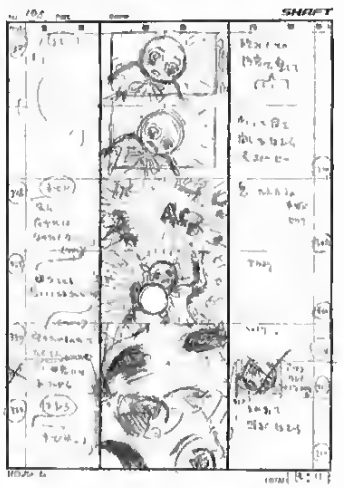
委員長の魔女と戦う眼鏡ほむら。ふにゃふにゃになったほむらの表情と三つ編み、アクションがとにかくおもしろい。顔も丸い！





ほむらの絶望

雨の中で魔女になる直前のまどかに手をかけるほむら。ほむらの慟哭と絶望を、鉛筆で真っ黒になるまで描き込んだ。情念の絵コンテ。



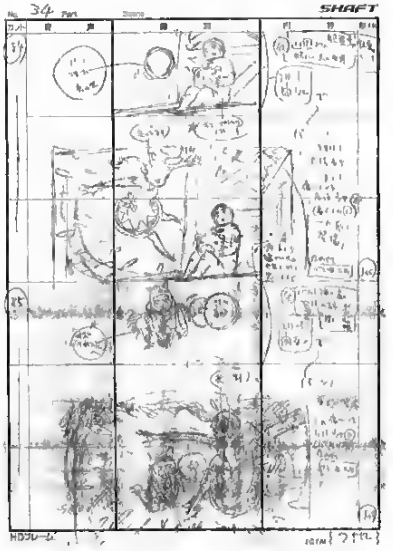
第十二話「わたしの、最高の友達」その1

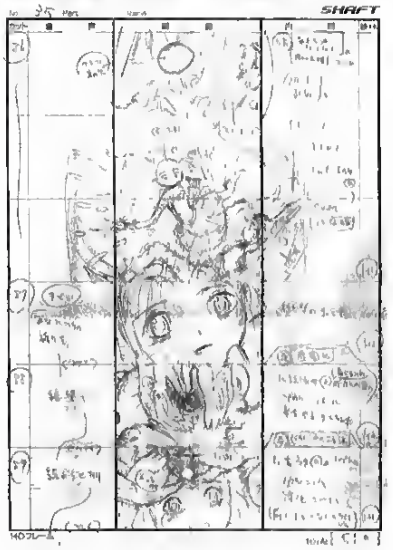
十話のコンテが、充実した作業となり、全く満足して終わったので、「もう『まどか』の自分の出番は終わった」と思っていました。割り振りとしても当初最終話は別の方に振るという話だったと思います。が、どういう理由でか私に担当が回ってきました。ともかく最終話を担当させてもらうというのは有難いことだし（考えてみれば私にとってかなり珍しい事でした）、ここまで来た『まどか』に最後まで付き合えるというのはスタッフとして望外の喜びというものです。一も二もなく引き受けました。シナリオはやはり完成度の高いもので、今回もコンテで変えたという記憶がありません。ただ『円環の理』をそのまま残すかどうかは変に迷った記憶があります（笑）。「『円環の理』って……今まで一回でも言ったかあ？」とか思って作業が止まり、夜の上井草をしばらく歩いたように記憶しています。

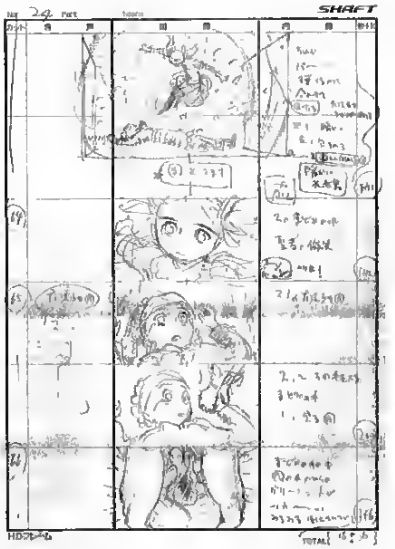
――が、不意に我に帰り「いや、そこに疑問を持つ作業じゃないだろう」と気づき、『観客には初めてだが、この時間軸のマミさんにとっては、いつも口にしている事』として台詞をさせる、と読み解くことで、自分として了解しました。振り返っても、あんな重要な台詞を、自分の些細な疑問でカットする様な愚を犯さなくて、本当に良かったと思います。

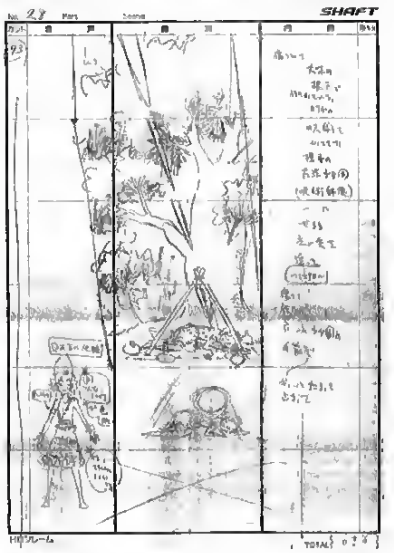
あと虚淵さんのシナリオとしては珍しく、別世界、歴史上の魔法少女達だけは、物語的にさらっとした描写でした。もっともそうは言ってもこういった書き方はアニメのシナリオとしては必ずしも珍しい事ではありません。「こちらとしては今までの描写が特別に詳細で的確だったのだから、ここはコンテで補って良い事だろう」と解釈して、なんとかコンテに描きました。作画さんとしてもこういうのを描くのはかえって難しい面もあるのではないかと思いましたが、これも完成画面では逃げること無く描写されていました。現場の熱意には恐れ入るばかりです。

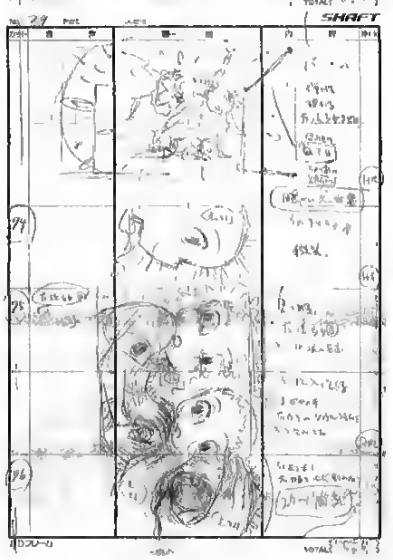
後日、虚淵さんのインタビューの一つに、別世界、歴史上の魔法少女達の比較的控えめなシナリオ描写は「ああいう描き方していたら板野さんに怒られちゃうな～と思っていたら初稿で通ってしまって」といった発言を発見しました（笑）。「それやったら描いてくれ～」と思いましたが、それまでの描写の詳細さが特別で有難いということを思えば全く何て事ではありません。余ってお釣りがくるほどです。むしろ自分が自由に描いたコンテとして完全な自信が無い事の方が大きいかもです（ですので、あのシーンで「ん？」と思われた方はそれはそれで正解です。私の責任です）。ここも完成画面とシナリオを見比べてみるのも一興かもしれません。（笹木）











救済と癒し

別世界、歴史上の魔法少女たちを救済する、まどか。キャラクターデザインの岸田隆宏が作画を担当、各魔法少女たちを描き下ろした。

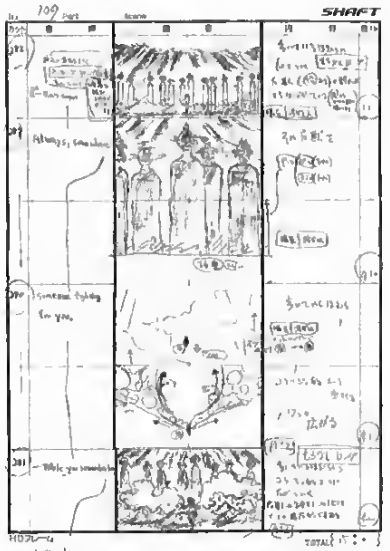
第十二話「わたしの、最高の友達」その2

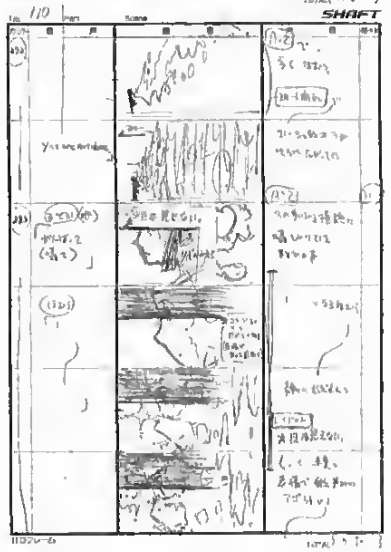
またシナリオと少し離れた余談ですが、後半のほむらのリボンの付け方、コンテに描いた絵がほぼ採用されて画面になっています。様々な解釈があってOKと思いますが、私としては「ほむらはまどかを自分以上に大切に思っているので、同じ様な姿になるのを控えるのでは」という解釈でした。自分としてはそれで納得していますが、違和感があれば、これも私の責任でしょう。

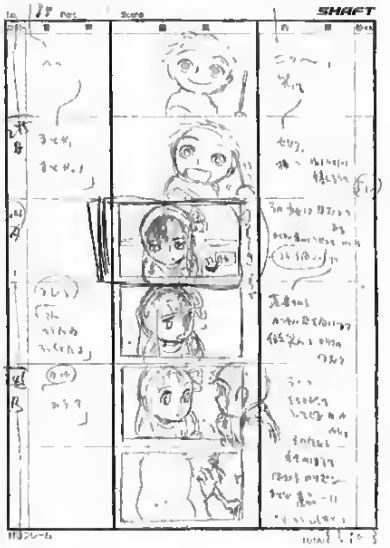
もう一つ、ラストシーンは自分としてはシナリオ通りのつもりでしたが、虚淵さんのインタビューに「ラストCパートの描写は、あのようには考えてなくてびっくりした」――と言われていたものがありました。改めて見てみると成る程です。これも是非シナリオと完成画面を見比べて下さい。もっともこれはコンテの仕業だけでなく相当いろんな人の思惑が盛られていて、私の方でも誰それの仕事と整理できません。

しかし、別のインタビューで虚淵さんが「想像の連鎖の総決算として完成した映像こそが、結論であり真実」と言われている、正にその事の好例であると思います。またその結果、「ほむらは最後の魔法少女となり、戦いの末、まどかの元に召されて行くことが暗示されている」という解釈も生まれました。少なくとも虚淵さんや私が考えていなかったことですが、これは非常におもしろい解釈だと私は思っています（新房さんやイヌカレーさん、宮本さんにはひょっとしたら似た思惑があったかもしれませんが）。してみると、先の引用の「想像の連鎖」というものには、最後に『観客』というワッカがついている――と言えると思います。虚淵さんのシナリオが、多くの観客に届く、その膨大な『鎖』を放つ力強い『起爆剤』になったことは間違いありません。

シナリオに触れて、改めてその力を感じてもらえるのでは……と思います。（笹木）

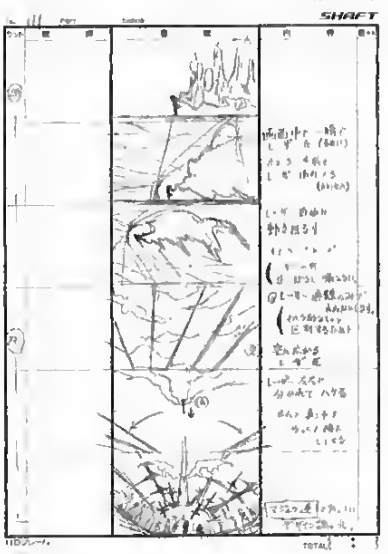


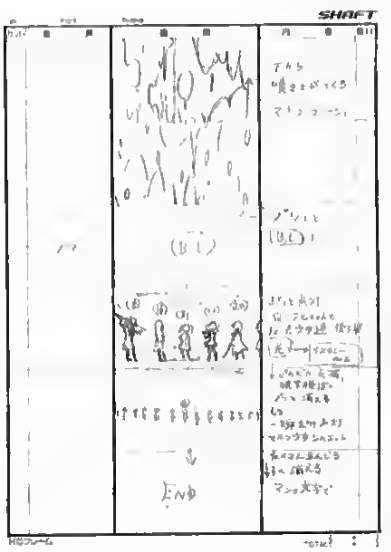




まどかのリボン

河川敷でまどかの絵を描くタツヤ。ほむらはそばに座る。ほむらの悟ったように優しい表情とリボンに手を伸ばすタツヤがせつない。





Cパート

宇宙のルールが書き換えられた世界で魔獣と戦うほむら。声を聞いたほむらの表情は見えない。想像を喚起させるカット割りが印象的。

Newtype
巴マミ
佐倉杏子
美樹さやか
鹿目まどか
暁美ほむら
新房昭之×
加藤英美里
劇団イヌカレー×
宮本幸裕
虚淵玄 (ニトロプラス)
for promise
魔法少女まどか☆マギカ
(月刊ニュータイプ2011年7月号付録)

虚淵玄というお弁当箱の物語

脚本 虚淵玄（ニトロプラス）

君はエントロピーって いうことばを 知ってるかい？

簡単に例えると、焚き火で得られる熱エネルギーは、
木を育てる労力と釣り合わない、ってことさ。
エネルギーは形を変換することにロスが生じる。
宇宙全体のエネルギーは目減りしていく一方なんだ
だから僕たちは、
熱力学の法則に縛られないエネルギーを探し求めてきた。
そうして見つけたのが、魔法少女の魔力だよ。

僕たちの文明は、知的生命体の感情を
エネルギーに変換するテクノロジーを発明した。
ところが生憎、
当の僕らが感情というものを持ち合わせていなかった。
そこでこの宇宙の様々な異種族を調査し、
君たち人類を見出したんだ。

人類の個体数と繁殖力を鑑みれば――
ひとりの人間が生み出す感情エネルギーは、
その個体が誕生し成長するまでに要したエネルギーを凌駕する。
君たちの魂は、エントロピーを覆すエネルギー源たり得るんだよ。

とりわけ最も効率がいいのは、
第二次成長期の少女の、希望と絶望の相転移だ。
ソウルジェムになった君たちの魂は、
燃え尽きてグリーフシードへと変わるその瞬間に、
膨大なエネルギーを発生させる。
それを回収するのが、僕たちインキュベーターの役割だ。

この宇宙にどれだけの文明がひしめき合い、
一瞬ごとにどれほどのエネルギーを消耗しているか解るかい？
君たち人類だって、いずれはこの星を離れて、
僕たちの仲間入りをするだろう。
そのときになって枯れ果てた宇宙を引き渡されても困るよね？
長い目で見れば、これは君たちにとっても得になる取引のはずだよ。
僕たちはあくまで君たちの合意を前提に行動しているんだよ。
それだけでも充分に良心的なはずなんだが……

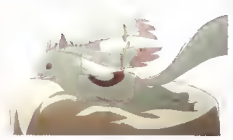
騙す、という行為自体、僕たちには理解できない。
認識の相違から生じた判断ミスを後悔するとき、
なぜ人間は他者を憎悪するんだよね

君たち人類の価値基準こそ、
僕らは理解に苦しむなあ。
今現在で69億人、
しかも4秒に10人ずつ
増え続けている君たちが、
どうして単一個体の
生き死にでそこまで
大騒ぎするんだい？

これでも弁解に来たつもりだったんだよ。
君たちの犠牲が、
どれだけすばらしいものをもたらすか、
理解してもらいたかったんだが
……どうやら無理みたいだね

いつか君は最高の魔法少女になり、
そして最悪の魔女になるだろう……
この宇宙のために死んでくれる気になったら

いつでも声をかけて。待ってるからね。



キュウべえ役 加藤英美里 × 新房昭之監督

「キュウべえを演じてみたかった。自分の中で一石二鳥キャラ」

「今、いちばん有名なペットキャラなんじゃないでしょうか」

――今回はお2人にインキュベーター「キュウべえ」を振り返っていただきたいと思っています！

新房 キュウべえ役のオーディションのとき、かわいらしい声の人が演じたらいいんだろうなと思っていたんです。でも、加藤さんの声を聞いて、今までと感じが違ったので存在感があったんですよね。「化物語」の八九寺真宵とも違う印象で。それで加藤さんにキュウべえ役をお願いすることにしました。

加藤 もともとマスコットキャラを演じてみたいというあこがれがあったので、オーディションで自分からそのときに全体のあらすじはいただいていたんですけど、そこにはキュウべえのことはまったく書かれていなくて。楽しみにしていたら、すごく大きな役でびっくりしてマスコットキャラで、物語の大筋にかかわるキャラで、自分としては一石二鳥でした（笑）。

新房 「まどか☆マギカ」のアフレコが始まる前に、みんなで神社へヒット祈願に行ったんですよ。そのとき、声優全代表して加藤さんが来てくれたんです。

加藤 ヒット祈願に参加したのは初めての経験でした。おもしろいんですよね、「ま～ほ～ろしょうじょ～」って神主さんがタイトルを読みあげてくれて。

新房 笑いをこらえるのが大変なんです。「あ～お～き～のぅうめ～」って（笑）。キュウべえの人気はあのときの御利益かもしれません。

加藤 そうですね。行ってよかったなと思います。

――キュウべえがロパク（リップシンク）しなかったのは、新房監督のアイデアなんですよね？

加藤 ああ、そうなんですか！ 第1話のアフレコのとき、セリフのブレス（呼吸）を全部合わせていたんですけど、放送を見たらロパクしていなかったんでびっくりしたんですよ（笑）。

新房 もともと動物キャラがロパクをして日本語をしゃべることにずっと違和感があったんです。

加藤 テレパシーでしゃべっているんですよね。

新房 やってみて気づいたんですけど、口パクなしでしゃべると怪しく見えるんですよね。なるべく前半はキュウべえを怪しくないように、自然に演出するようスタッフに指示を出していたんですが、スタッフがどんどん怪しく演出してしまうんですよ。

加藤 アフレコ現場でもキュウべえが登場するシーンになると「キターッ」ってみんなで大騒ぎでした。

新房 その反応を見て、キュウべえは怖い演出をしたほうがいいんだなと思って。切り替えたんですよ。

加藤 ああ、そうだったんですね。たしかに後半のキュウべえは怖いキャラクターみたいでしたからね。

――加藤さんはアドリブもしているんですよね。「キュップ！」とか。

加藤 脚本上は「ゲップ」ってかいてあったんですけど、最初はリアルに演じていたんですけど、鶴岡さん（鶴太・音響監督）から「もうちょっと音にして」と言われて、出たのがアレでした（笑）。

新房 「ギュップ！」も話題になりましたよね。

加藤 ツイッターやブログで「キュップ！」と言われても最初は何のことだかわからなくて。自分で言った自覚がなかったんです。改めてセリフを聞いてみたら「本当だ、言ってる～」って。

――後半はキュウべえも本領発揮してきましたね。

加藤 話が進むにつれ、みんなに責められる存在になっていきましたけど（笑）、キュウべえ自身は悪いと思っていないので、変わらずに、かわいらしく演じていました。ただ、セリフが長いシーンは大変でした。第11話は、まどかを泣かせるくらい淡々と説明しなくちゃいけなくて。難しかったです。人類の歴史にキュウべえがかかわっていたことがわかって、すごい役を演じていたんだなとびっくりしました。

新房 最終話の最後、まどかがいなくなってからは、キュウべえにロパクさせようかと思ったんです。新しい世界の変化のひとつとして。でも宮本さん（宮裕・シリーズディレクター）に反対されて（笑）。

加藤 そうだったんですね。キュウべえは魔法少女システムが変わっても、あくまで変わらない。効率を考えて、ほむらと手を組んでいるだけ。だから、変わらない演技を心がけていました。

――キュウべえは人気キャラになりましたね。

新房 大人気ですよね。予想外。こんな方向で話題になるとは思わなかった。

加藤 そうでしたね。ツイッターやブログで反応を見ると「かわいい」「怖い」「むかつく」っていろいろあるんですが、どんなふうに言われようと私はうれしくて。全部が自分にとってはほめことばなんです。

新房 秋葉原もキュウべえだらけになったんでしょう？ 「契約してよ」ってセリフもはやりましたし。今、いちばん有名なペットキャラになったんじゃないでしょうか？（笑）キュウべえの謎をもっと知りたいんですよね。キュウべえの星を見てみたい。

加藤 キュウべえだらけなんでしょうね。古代や世界各地のキュウべえの活躍も見てみたいんです。

original illustration by UME AOKI (P.5, 13, 22, 29)
text by HIDEKUNI SHIDA (P.2-3, 16-24, 30-31), MAYUKO UEDA (P.4-11), HITOMI WADA (P.12-15, 18-23)
©Magica Quartet／Aniplex Madoka Partners MBS

Case 1:
MAMI TOMOE

巴マミの場合

**彼女は
たったひとりで戦っていた。**
事故に遭い、命の炎が
燃え尽きようとしていたまさにそのとき、
キュゥべえと出会った。

居心地のいい部屋でひとり暮らすマミ。
一見、幸せそうに見える
その毎日だけれど、「生」への執着は
意外なほど見られない。家族もおらず、
恋することも友達と遊ぶことも諦めて、
ただ魔法少女として生きる、
という美学を貫いていたからだ。
いつも笑顔を絶やさなかったけれど、
その横顔にはどこか孤独な影が
つきまとっていた。

そんなマミの日常に現われた、
まどかとさやか。2人の後輩に向かって、
彼女はこう語る。
「キュゥべえに選ばれた
あなたたちには、どんな願いでも
かなえられるチャンスがある。
でもそれは、死と隣り合わせなの」
――そのたった一度のチャンスを、
ただ「生きる」という当たり前のことを
かなえるために使ってしまったマミは、
どんな思いでこのことばを
かけたのだろうか。まだ、
夢も希望も残っている後輩たちに。

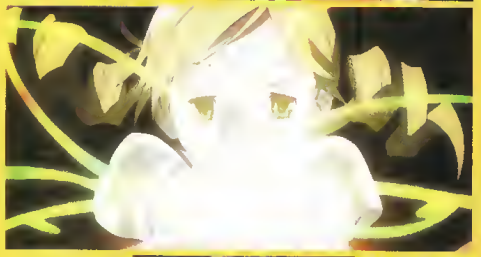
もしかすると、
彼女のたったひとつの願いは、
生きることよりも、魔法少女としての
孤独な生き方から救われること
だったのかもしれない。
魔法少女としてのマミの敗北はあまりにも
唐突だったけれど、どんなときでも
魔法少女として戦ってきたマミは
どこかで、敗北を受け入れる準備が
できていたのかもしれない……。

マスケット銃と少女

生きるための願い

魔法少女としての出会い

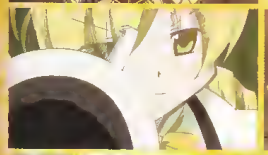
「次はお友達になれそうなタイミングで会いたいわ。お互いのためにも」

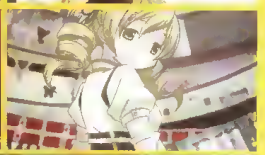


もう何も怖くない

よき先輩として、魔法少女として、見せる2つの表情

「あなた、きっと後悔するから」





「未来の後輩にあんまり格好悪いとこ見せられないものね」

「彼女たちはキュウべえに選ばれたのよ」

マミ「憧れるほどのもんじゃないわよ。私。
無理してカッコつけてるだけで、
怖くても、つらくても、誰にも相談できないし、
独りぼっちで泣いてばっかり。
いいものじゃないわよ。魔法少女なんて」
まどか「マミさんはもう
独りぼっちなんかじゃないです」
マミ「そうね、そうなんだよね。
本当に、これから……私といっしょに、
戦ってくれるの？そばにいてくれるの？
まいったなぁ……まだまだちゃんと
先輩ぶってなきゃいけないのになぁ……
やっぱり私、駄目な子だ……
……でもさ、折角なんだし、
願い事は何か考えておきなよ」
まどか「折角――ですかね、やっぱり」
マミ「契約は契約なんだから、
ものはついでと思っておこうよ。
億万長者とか、すてきな彼氏とか、
何だっていいじゃない。
じゃあ、こうしましょ。この魔女を
やっつけるまでに願い事が
決まらなかったら、そのときはキュゥべえに、
ごちそうとケーキを頼みましょ」
まどか「け、ケーキ？」
マミ「そう、最高におっきくて贅沢な、
お祝いのケーキ。それでみんなで
パーティするの。私と鹿目さんの、
魔法少女コンビ結成記念よ」

〈もう何も怖くない私独りぼっちじゃないもの！〉

「――え？」

Case 2:
KYOKO SAKURA

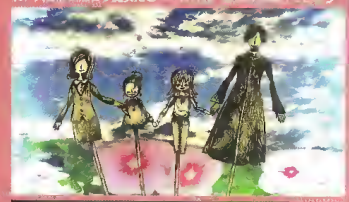
佐倉杏子の場合

彼女はたったひとりで戦っていた。
とんでもない自分のことを考えて、
他人を踏み台にしてでも、強くたくましく生きていく。
お菓子やゲーム、そして争うことを好む彼女は
あくまでいつまでも成長しない、
わがままな子供のように見えた。

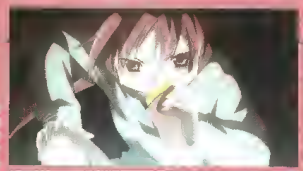
だけど、そもそも彼女が魔法少女になったのは、
他でもない家族のためだった。優しいけれど、
自分の信念を貫き通し、家族を養うことよりも、
他人のために生きようとしていた父。
そんな父のため、彼女は祈った。
そして、理想を説くだけでは
どうにもならない、魔女退治という裏の仕事は、
魔法少女となった自分がひそかに引き受ける。
すべては、世界を救うために。

誰ともかかわらずに生きていけば、彼女は幸せで
いられたのかもしれない。だけれど、そうするには
彼女は優しすぎた。自分と同じ過ちを繰り返そうとする
さやかのことを、同類として放っておけなかった。
いくら、彼女から疎まれようとも。

そして、ふたたび彼女は祈った。
そう、たやすく自分を見失い、絶望に囚われてしまった
さやかに対して、杏子は最後の最後まで、
他人を思う気持ちと、希望を忘れなかった。
「そういうもんじゃん？　最後に愛と勇気が勝つ
ストーリーってのは」――そう言って、
いたずらっぽくほほえんだ彼女の表情を、
私たちはいつまでたっても忘れることができないだろう。



「あたしの祈りが家族を壊しちまったんだ」

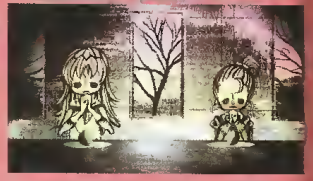


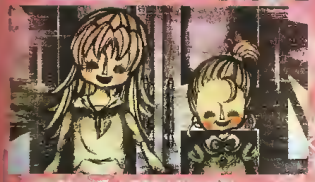
3人目の魔法少女

「要するにブッ壊しちゃえばいいんでしょ？　その子」

自分のために使う魔法

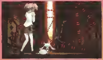
人への思いと願い





そんなの、あたしが許さない

さやかと杏子との初対面。それは、殺し合いから始まった。人助けのために使い魔でも退治しようとするさやかに対し、多少の犠牲が出たとしても、魔女に育つまで待ってグリーフシードを手に入れなければ意味がないという杏子。正義のため、誰かのために戦うさやかと、あくまでも自分のためだけに戦う杏子[illegible]



魔法少女としての生き方の違い

自分と[illegible]少年[illegible]、[illegible]も自分のものにすればいい[illegible]助言する杏子に、さやか[illegible]反感を覚える。他人のために魔法を使ってもロクなことにはならない。——そのことばの裏には、杏子自身のつらい経験がある

「食うかい?」

さやか[illegible]を強いられ[illegible]から。食べることは、すなわち生きること。杏子が[illegible]何か食べていたのは、どんな手段を使ってでも生きていく[illegible]という意志の表われなのである

[illegible]と共同戦線を張ることになった杏子。魔法少女として生き残るための、賢い[illegible]しかし、まどかを[illegible]いためとはいえ、さ[illegible]をかけようとしたほむ[illegible]いらだちを隠せない

杏子とさやかのケンカを止めようとさやかのソウルジェムを歩道橋から投げ捨ててしまったまどか。そこで突きつけられたのは、彼女たちの体の隠されていた真実。何も聞かされていない状態で騙わされていたことを知り、キュゥべえへの憤りをあらわにする杏子だった

魔法少女の現実

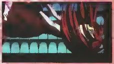
「ただの気まぐれで魔法少女になろうとするなら、そんなの、あたしが許さない。いの一番にブッ潰す」

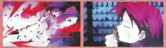
何不自由ない暮らしをしていながら、魔法少女になって命を危険にさらすのは、ただのお遊びにすぎないと、まどかに注意する杏子。マミとはまた違った方法で、「先輩」として自分が選んだ魔法少女としての生き方の大変さを教えつつ、一度選んだからには命を賭けて戦う、という杏子なりの決意が[illegible]

「諦めたくない」

魔女[illegible]さやか[illegible]元に戻そうとする杏子。そのために、まどかの声を届けることに決める。自分ではさやかを救えなくとも、さやかの親友であるまどかなら、何とかできるかもしれないと考えたのだ

杏子「はっ、いつぞやのお返しかい?
……怒ってんだろ? 何もかも許せないんだろ?
わかるよ……だからさ、好きなだけ暴れなよ。
つきあってやるからさ。
……それで、気が済んだら、目ェ覚ましなよ……な?
……さやかァッ!! あんた……信じてるって
言ってたじゃないか! この力で人を幸せにできるって!
頼むよ、神様……こんな人生だったんだ……
せめて一度ぐらい、幸せな夢を見させてよ……」
ほむら「あなた……」
杏子「その子を、頼む……
あたしのバカに、つきあせちまった……
足手まといを連れたまま戦わない主義だろ?
いいんだよ。それが正解さ。ただひとつだけ
守りたいモノを、最後まで守り通せばいい……
ハハ、何だかなぁ。あたしだって、
今までずっとそうしてきたはずだったのに……」
ほむら「……」
杏子「……行きな。こいつは、あたしが引き受ける。
心配すんなよ、さやか……
あんただけ置き去りにしやしないって……
独りぼっちは、寂しいもんな……
いいよ。いっしょにいてやるよ……」





まどかの[illegible]届けても、[illegible]やされまで、というときに、最後に杏子は祈った。[illegible]もう独りぼっちで寂しくてすむように。いつまでもいっしょにいられるように。自分のことだけを考えているように見えた杏子だけれど、やはり最後まで他人のことを思わずにはいられない。いくら[illegible]キュゥべえから「意味がない」と言われても、[illegible]それが[illegible]に詰める

美樹さやかの場合

Case 3:
SAYAKA MIKI

彼女はたったひとりで戦っていた。
それは、魔法少女を知る前からのことだ。
願い事をなんでもひとつかなえてあげる。
そのことばを聞いたとき、だから、間もなく
あの病室を想った。夕やけのオレンジ色の中で
優しくカーテンが揺れる、あの2人の部屋を。

誰かのための願いをかなえることは
愚かなことだと、聡い者は言うだろう。でも、
彼女には、たぶん、ほかの選択肢なんてなかった。
ボタンを掛け違えたわけじゃない。愚鈍に
BAD ENDのフラグを立てたわけじゃない。

友達の前では、軽く明るく振る舞う彼女も
恋する相手の前では、臆病でしおらしい彼女も
恋敵が現われたら、不安に押し潰される彼女も
どれも本当の彼女で、それはほかの誰より、
〝普通の女の子〟と呼ぶに値する姿だった。

「あたしは人のために祈ったことを、
後悔してない。その気持ちを嘘にしないために、
後悔だけはしないって決めたの。これからも」

震える心を鼓舞して、彼女がたどり着いた結末に、
〝普通の女の子〟の想いがバーストする。
失ったのは、恋と友との日々と命。
それは絶望の形に似ているけれど、
もっと、ほんの少しだけこの世界よりも、
さやかの抱く希望が大きかっただけだ。
そして、それをバカだと笑っていいのは、
そう――それは魔法少女だけ。

さやか「……あたしのためって、何よ?
こんな姿にされた後で、
何があたしのためになるっていうの?
今のあたしはね、魔女を殺す――ただ
それだけしか意味のない石ころなのよ。
死んだ体を動かして生きてるフリを
してるだけ。そんなあたしのために、誰が?
何をしてくれるっていうの?
考えるだけ無意味じゃない」
まどか「でもわたしは……
どうすればさやかちゃんが幸せになれるかって……」
さやか「だったらあんたが戦ってよ!
キュゥべえから聞いたわよ。あんた、誰よりも才能あるんでしょ?
あたしみたいな苦労しなくても、
簡単に魔女をやっつけられるんでしょ!?
あたしのために何かしようっていうんなら、
まずあたしと同じ立場になってみなさいよ! 無理でしょ?
当然だよね。ただの同情で人間やめられるわけないもんね!」
まどか「同情なんて、そんな……」
さやか「何でもできるくせに何もしないあんたの代わりに、
あたしがこんな目に遭ってるの。
それを棚に上げて知ったようなこと言わないで」
まどか「さやかちゃん……」
さやか「ついてこないで!
バカだよ、あたし……何てこと言ってんのよ……
もう救いようがないよ……」

「魔法少女まどか☆マギカ」スタッフ寄稿コメント

❶感想をひと言いただけますでしょうか？
❷印象的なセリフとその理由をお聞かせください。
❸「魔法少女」のイメージは変わりましたか？
❹あえてお伺いします。キュゥべえに契約を迫られたら？
❺ご自身が担当された話数で印象的なことは何ですか？

キャラクター原案
蒼樹うめ

❶すてき作品に参加させていただけたことを、本当にうれしく光栄に思います。そしていち視聴者としても心底楽しませて頂きました。すべてのスタッフのみな様と、いっしょに作品を見てくださった、いっしょに作品を盛り上げてくださった視聴者の皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました！
❷たくさんありすぎて悩んでしまいますが、キュゥべえの「わけがわからないよ」と、最終話まどかの「希望を抱くのが間違いだなんて言われたら、私、そんなのは違うって、何度でもそう言い返せます。きっといつまでも言い張れます。」というセリフが好きです。キュゥべえさんのは、とにかく汎用性が高くて！（笑）まどかのは、とても強くて大好きです。元気をもらえることばだなあ、と思いました。
❸「魔法少女」ということばのイメージが大きく変わりました。今までは可愛くてファンタジックでステッキ振ってキラキラ～♪……というようなイメージしか抱いてなかったので、「魔法少女」という字面の中にも裏側を感じるようになったことが一番の変化です。
❹うーん……悩みますが……、世界規模の平和を願ったりするか、もしくは逃げます！（笑）

キャラクターデザイン
岸田隆宏

❶皆様、大変な中ご苦労さまでした。
❷「あたしってほんとバカ」。世界中の人がそう思えれば、平和になるんじゃないかと思います。
❸演技の難しさは感じましたが、チョイ役だったのであまりイメージの変化は感じていません。
❹落ち着いてから病院に行きます。

1話、2話、3話絵コンテ
芦野芳晴

❶第3話の絵コンテと最終回の原画をやらせていただきました。非常に魅力ある作品で、苦労しつつも楽しかったです。
❷QBの「わけがわからないよ」じゃないですかね。見ていたとき、正にこの台詞どおりの感想でワクワクしました。
❸変わらないです。この作品のすべてを網羅するような世界観はすばらしかったですが、それぞれの作品ごとの様々な世界観でよいのではないでしょうか。
❹まあ、普通。これは詐欺だなと思いますよねー。きっと自分の人生は自力で何とかすると思います。
❺虚淵さんの脚本と、蒼樹さんのラフと、イヌカレーさんのスケッチ以外、何の設定も無い状態からのスタートでした。それを新房さんが言うような方向でまとめて行くのは難しい作業でしたが、大変やりがいもありました。またチャンスがあれば参加させていただきたいです。

4話、6話、10話、12話絵コンテ
笹木信作

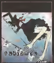
❶すごくおもしろい作品に参加できて、幸運でした。
❷印象的なセリフが多すぎて……選べません。
❸はい、変わりました。
❹ひとまず「手広すぎるわ」と、ツッコミ。
❺善意あふれるキャラクターデザイン。違和感と説得力が共存する魔女・結界設定。特徴的で、実効性の高いコンテルール指示。骨太極まるプロット。

5話、8話絵コンテ
小俣真一

❷「後悔なんてあるわけない」
❹契約します。
❺いろいろ踏まえるべきことはありましたが、わりと自由にやらせていただいたことを憶えています。

魔女

魔法少女の倒すべき相手魔女。そのデザインと設定、異空間設計は劇団イヌカレーが担当した。ビジュアルのイメージは多彩かつ幻想的。そのカラフルな世界観に注目してみよう。

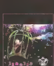

委員長の魔女。クラスメイトの役割の手下を率いる。洗濯紐を張り巡らせた結界をつくる

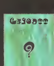
芸術家の魔女。作品の役割の手下を率いる。過去のほむらを死に誘う。

影の魔女。工場に影でできた結界をつくる。盲信の役割の手下を率いる。

ハコの魔女。廃工場に結界をつくり集団自殺を起こそうとする。ハコの中に人間の心を映す力を持つようだが

薔薇園の魔女。造園し、剪定する役割の使い魔を従えている。廃墟に、結界をつくり女性を飛び降り自殺に導く


鳥かごの魔女。[illegible]思慮の役割を担う手下を率いる。時間遡行した、ほむらの銃器と手榴弾の攻撃で倒される


犬の魔女（本体は未登場）。インテリアの役割をもつ手下を率いており、暴走するさやかに手下を倒される

落書きの魔女（本体未登場）。路地に結界をつくる。魔法少女になったばかりのさやかに手下を倒されそうになる

お菓子の魔女。チーズを集める役割の手下を従える。病院に、医療器具やお菓子が舞う結界をつくった

舞台装置の魔女。通称ワルプルギスの夜。本名は不明。道化役者の役割の手下を率いる

人魚の魔女。別時間軸に現れた魔女。魔法少女のまどかや杏子、ほむらと戦う

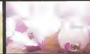
人魚の魔女。演奏やバックダンサーの役割をもつ手下を率いている

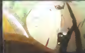
銀の魔女。爆音をまき散らす役割の手下を率いる。回想シーンに登場

お菓子の魔女のもうひとつの顔。マミを食べてしまう!!

魔法少女

第12話で描かれる、古今東西の魔法少女たち。これはキャラクターデザインの岸田隆宏が原画で描き起こしたキャラクターたちだ。国際色豊かな魔法少女たちをクローズアップ。





緑豊かな大地の魔法少女、褐色の肌の魔法少女、未来都市にいる熊耳の魔法少女、角の生えたヘルメットをかぶっている魔法少女、火山の大地にいる魔法少女、戦場にいる魔法少女、火に包まれた魔法少女……。最終話では人類の歴史を動かした、有名無名の魔法少女が次々と登場した

異空間設計 劇団イヌカレー × 宮本幸裕 シリーズディレクター

――「魔法少女まどか☆マギカ」放送分の作業が終わったときの感想はいかがでしたか？
宮本 本当にテレビで放送できるのか心配でした。
劇団イヌカレー 回復アイテムなしで大連続狩猟（12匹）を乗り切った感じです。これで心置きなく「モンハン3」が貰えると思いました。
――今回は後半についてうかがいます。第10話の制作はどうでしたか？
宮本 定尺（1240秒）におさまるのかな？と思いました。絵コンテの笹木（信作）さんはキュゥべえに「ぎゃふんと言わせたい」と言っていました。演出の八瀬（祐樹）さんはまどかの死亡時、浸っている水をきれいに見せたいと言っていました。
劇団イヌカレー 最初にコンテを見たとき「春だ一番！ まどか祭り」的な1時間特番なのかと思いました。演出様からは「暗いシーンであっても綺麗な感じに見えるよう」との要望がありました。
宮本 （大変だったのは）今、何週目のループかおぼえることです。
劇団イヌカレー もはや終盤戦ということもあり満身創痍でした。
――たくさんの魔女が登場していましたね。時間がループしていたので同じ魔女が登場するかも？と思っていたのですが。
劇団イヌカレー ……そういえばそうですね……思いつきませんでした。シナリオ上のループも単純な繰り返しとは感じなかったので、魔女にもそれをかなり反映させております。あとはサービス精神です。
宮本 イヌカレーさんの愛です。
――救済の魔女はいかがですか？
劇団イヌカレー 救済の魔女は地球と同サイズの球状結界を自身の真上につくり、そこへあらゆるものを吸い上げているという設定でした。
――第11話の打ち合わせは盛り上がっていたと噂で聞いたのですが……。
劇団イヌカレー え。そうなんですか？ 確かに「キュゥべえー！ キュゥべえわっしょーい！ 家畜わっしょーい！ キュッしょーい！」とか盛り上がっていたような気もします。
宮本 （イヌカレーさんはワルプルギスの夜を）「陶器みたいにつるっとさせたい」と言っていました。
劇団イヌカレー シルエットでわかりやすいようにと。絡みのシーンはなかったですが、救済の魔女のシルエットとは対になっています。シナリオ上ではそもそも空を飛んでいなかったのに、急に空へ浮かべてしまったのでコンテの方にも迷惑をおかけしました。
宮本 戦闘シーンを描いたのは僕ではありませんが、「ワルプルギスの夜」クラスの魔女は軍隊では勝てない（天災レベル）という念を送っていました。
――第12話はいかがでしたか？
宮本 （脚本を）読み終わったあと泣いてました。
劇団イヌカレー ほむらは最後まで健気でした。
――地球を覆う最後の魔女はどんなイメージでデザインしたのですか？
劇団イヌカレー 空気風船です。
――「まどか」にかかわって「よかった」と思うことは何ですか？
宮本 色々な人に出会えたことです。
劇団イヌカレー 全話数通して参加させていただける機会など初めてですし、滅多にないことなのでとてもいい経験ができました。「まどか」では本当に自由にやらせていただき、ありがたかったです。
宮本 次回作が気になるアニメ（仕事）でした。

鹿目まどかの場合

Case 4:
MADOKA KANAME

彼女は
たったひとりで戦っていた。
希望と絶望の間で。
無慈悲で、非情で、不毛な現実の上で。
まどかは幸せな家庭に生まれ、
何ひとつ不自由のない
生活を送っている少女だった。
強くてたくましい母、優しくて頼りになる父、
夢いっぱいの可能性をもつ弟。
満ち足りているがゆえに
何かを強く求めることも、
願うことも、望むこともなかった。
このまま至福の人生を歩む。
そんな未来もありえたかもしれない。

けれど、まどかは知ってしまった。
たったひとつの願いをかなえるために、
戦いに身を投じる少女たちを。
呪いから生まれた魔女と、
命を懸けて戦う魔法少女たちを。
魔法少女たちは次々と散っていく。
ひとりが命を落とし、ひとりが闇に堕ち、
ひとりが想いに殉じて。

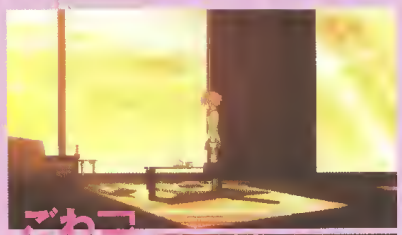
やがて、まどかは気づく。
自分もまた、誰かの願いに守られていたことを。
魔法少女の暁美ほむら、彼女の願いは
親友まどかを守ることだった。
ほむらの希望と絶望を受け止め、
まどかは願う。

究極の魔法少女になった、
まどかは普遍の存在へ生まれ変わる。
——While you remember her,
you are not alone.
無慈悲で、非情で、不毛な現実は続く。
でも、もう彼女は
たったひとりで戦うことはない。

「夢で会ったような……？」

失って気づくこと

新しい世界



「こめんなさい。わたし……弱い子で、ごめんなさい」

「マミさんはひとりじゃないです」

かなわぬ約束

幸せだと思った日常

「あのとき追いかけなきゃダメだったのに……」

変わりゆく現状

まどか「ついてって、いいかな?」
まどか「さやかちゃんに、
独りぼっちになってほしくないの。だから……」
さやか「あんた、何で……何でそんなに、優しいかなぁ。
……あたしには、そんな価値なんてないのに」
まどか「そんな——」
さやか「あたしね、きょう、後悔しそうになっちゃった」
まどか「……」
さやか「あのとき仁美を助けなければって……
ほんの一瞬だけ、思っちゃった。正義の味方、
失格だよ……マミさんに、顔向けできない……」
さやか「仁美に、恭介を取られちゃうよ……でもあたし、
何もできない……だってあたし、
もう死んでるんだもん、ゾンビだもん……
こんな体で、抱きしめてなんて言えない……
キスしてなんて、言えない……」
まどか「……ッ」
さやか「……ありがと。ごめんね」
まどか「さやかちゃん……」
さやか「もう大丈夫。すっきりしたから。
さあ、行こ。今夜も魔女をやっつけないと」
まどか「……うん」

ほむらが見せた涙の理由とは

さやかとの別れ

魔法少女という存在

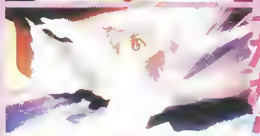
「やがて魔女になる君たちのことは、魔法少女と呼ぶべきだよね」

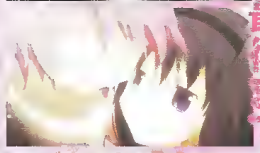
わたしの、最高の友達

〈がんばって〉
遠い昔の親友

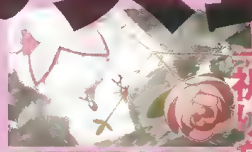
「やめ……
「行こうか……うん」

まどか



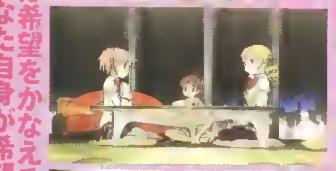


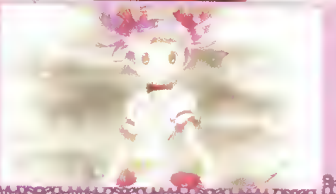
まどか「全部わかったよ。幾つもの時間で、
ほむらちゃんが、わたしのために
頑張ってくれたこと、何もかも……
何度も泣いて、傷だらけになりながら、それでも
わたしのために……ずっと気づけなくて、ごめん、ごめんね。
今のわたしになったから、本当のあなたを知ることが
できた。わたしには、こんなにも大切な友達が
いてくれたんだって。だから、うれしいよ。
後悔なんてない。ほむらちゃん、ありがとう。
あなたはわたしの、最高の友達だったんだね……」
ほむら「だからって、あなたは、このまま……
帰る場所もなくなって、大好きな人たちとも
離れ離ればなれになって……こんな場所に、独りぼっちで、
永遠に取り残されるっていうの?」
まどか「独りじゃないよ。みんな、みんないつまでも
わたしといっしょだよ。これからのわたしはね、いつでも、
どこにでもいるの。だから見えなくても、聞こえなくても、
わたしはほむらちゃんのそばにいるよ」
ほむら「まどかは……それでいいの?
私はあなたを忘れちゃうのに? まどかのこと、
もう二度と、感じ取ることさえできなくなっちゃうのに?」
まどか「ううん、諦めるのは、まだ早いよ。ほむらちゃんは、
こんな場所までついてきてくれたんだもの。
だから元の世界に戻っても、もしかしたら、わたしのこと
忘れずにいてくれるかも。大丈夫。きっと大丈夫。信じようよ」
ほむら「まどか……」
まどか「だって魔法少女はさ、夢と希望をかなえるんだから。きっと
ほんの少しなら、本当の奇跡があるかもしれない。そうでしょう?」
ほむら「まどかッ、行かないでッ!」
まどか「ごめんね……わたし、みんなを迎えにいかないと。
いつかまた、もう一度、ほむらちゃんとも逢えるから。
それまでは……
ほんのちょっとだけ、お別れだね……」



「祈りを絶望で終わらせたりしない」

「だから、お願い。最後まで自分を信じて」



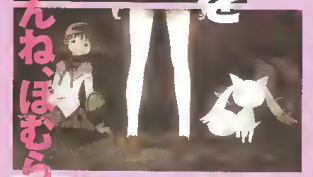


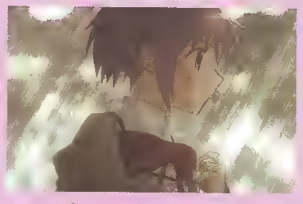
「じゃあ預かっていたもの、返さないとね」

「あなたは希望をかなえるんじゃない。あなた自身が希望になるのよ」

「ほむらちゃんのことを信じたいのよ……」

「わたしの友達を助けにいかないと」





願いを

「ごめんね、ほむらちゃん」

暁美ほむらの場合

Case 5: HOMURA AKEMI

**彼女は
たったひとりで戦っていた。**
あの子との出会いと別れの1か月を
何度も何度も繰り返し、戦っていた。

望まぬ結果にたどり着くたびに、
リセットボタンを押すように
彼女は時間を遡った。けれど、
彼女の心は決してリセットされない。
だから、幾重もの記憶は想いとなって、
ほむらの中に満ちていった。
たとえもう、昔のように、
明るくことばを交わすことがなくなっても。

彼女が、少し気怠げに甘美なしぐさで
長い黒髪に指を通して目を伏せるとき、
心に反芻するのは、もしかしたら、
あの子と交わした約束、かもしれない。
それは魔法少女に成った彼女の存在理由。
人ではないものに成った彼女の行動原理。
彼女には、それしかないのだから。

たとえこの世界が、忌むべきものにあふれ、
悲しみと憎しみの連鎖を繰り返す
救いようのない世界だったとしても、
それでもここは、彼女にとって
〝あの子が守ろうとした〟
愛しい場所だった。

「それを憶えてる。決して忘れたりしない。
だから私は……」

時を超え、因果律をしのぎ、
たったひとりで、
たったひとりの大切な友達のために
戦いつづける魔法少女——
それが、暁美ほむらの在り方だ。

「誰も未来を信じない。誰も未来を受け止められない」
「もう誰にも頼らない。誰にわかってもらう必要もない」
「同じ時間を何度も巡り、たったひとつの出口を探る」
「あなたを絶望の道程から救い出す道を……」
何度目かの出会い
「まとか、たったひとりの私の友達」
たったひとりを救うために
繰り返される忠告
打ち明けた本当の気持ち
もう誰にも頼らない

〈彼女〉のいない世界
〈忘れないよ、ずっと覚えているよ〉
願いをかなえるため戦うこと
ワルプルギスの夜〉が来る
届かぬ祈りと希望
2人で見た景色
繰り返し
魔法少女の正体
「テメェ、それでも人間か!?」
「もちろん違うわ。あなたもね」
ほむら「……私ね、未来から来たんだよ。何度も何度も、まどかと出会って、それと同じ回数だけ、あなたが死ぬところを見てきたの。どうすればあなたが助かるのか、どうすれば運命を変えられるのか、その答えだけを探して、何度も始めからやり直して」
まどか「それって……えぇっ?」
ほむら「ごめんね……わけわかんないよね、気持ち悪いよね……まどかにとっての私は、出会ってからまだ1か月もたってない転校生でしかないものね……」
まどか「……?」
ほむら「だけど私は……私にとっての、あなたは……繰り返せば繰り返すほど、あなたと私が過ごした時間はずれていく。気持ちもずれて、ことばも通じなくなっていく。……たぶん私は、もうとっくに迷子になっちゃってたんだと思う」
まどか「ほむらちゃん……」
ほむら「あなたを救う……それが私の最初の気持ち……今となっては、たったひとつだけ最後に残った、道しるべ」
ほむら「わからなくていい。何も伝わらなくてもいい。それでもどうか——お願いだから。あなたを私に守らせて」

シナリオへの想い

シナリオ 虚淵玄 監督 新房昭之

シナリオへの想い

2つの想いが化学反応を起こす。ゲームメーカー・ニトロプラスを代表するシナリオライターとして『Phantom -PHANTOM OF INFERNO-』や『鬼哭街』など数々のゲームを手がけてきた、虚淵玄。『ぱにぽにだっしゅ!』『化物語』など数々のアニメーション作品を手がけるアニメーション監督・新房昭之。この2人が手がけたオリジナル作品が『魔法少女まどか☆マギカ』である。

アニメーションにおけるシナリオのつくり方は様々な方法論がある。脚本家たちが合議制でつくるものもあれば、中心となる脚本家が全体を監修するものもある。

虚淵玄と新房昭之の2人が組んだのは本作がはじめて。新房昭之監督は、虚淵玄の小説を読んでいたこともあり、彼の作風をなるべくいかすべく、虚淵玄ひとりに全話のシナリオ執筆を依頼。独特なテキストの味わいをそのままアニメーション化した。

シナリオが脱稿したのは2009年、アニメーションが制作され、実際に放送されたのは2011年1月6日。『魔法少女まどか☆マギカ』は放送と同時に話題となり、大ヒット作へと成長していく。2011年10月には、劇場版プロジェクトも発表され、続編となる新作映画が制作されることが決まった——。

ここでは2人にシナリオ「0稿」と「決定稿」を見比べてもらいつつ、シナリオに込めた想いを振り返ってもらった。

虚淵玄

うろぶち・げん●脚本家、小説家。ニトロプラス所属。ゲームシナリオとして『Phantom -PHANTOM OF INFERNO-』『吸血殲鬼ヴェドゴニア』『鬼哭街』『沙耶の唄』『続・殺戮のジャンゴ -地獄の賞金首-』などを手がける。2004年ごろからアニメーション作品に参加。シリーズ構成作品として『ブラスレイター』がある。『魔法少女まどか☆マギカ』はアニメ参加4作目。現在、自身が小説を執筆した『Fate/Zero』のアニメ化にも原作者として参加している。

新房昭之

しんぼう・あきゆき●アニメーション監督、演出家。1994年『メタルファイター♥MIKU』で監督デビュー。2001年『The Soul Taker ～魂狩～』、2004年『魔法少女リリカルなのは』『コゼットの肖像』などを手がける。2004年からは制作会社シャフトとともに作品を制作。代表作に『化物語』シリーズ、『ひだまりスケッチ』シリーズなどがある。『魔法少女まどか☆マギカ』は2001年以来のオリジナル監督作品。

0稿と決定稿、そして物語の始まり

――今回は「0稿」そして「決定稿」を振り返っていただこうと思っております。『魔法少女まどか☆マギカ』のシナリオは「0稿」と「初稿」そしてブラッシュアップした「決定稿」が存在していますが、その原点になるわけですね。

虚淵　そもそも「0稿」は新房監督にもお見せしていないんですよね。お渡しする前の原稿なので。

新房　「初稿」「決定稿」は見ているんですが、たしかに「0稿」は見ていないです。

虚淵　書いているうちに「ああ、ペラで80枚行っちゃった。尺にあわせて切らなくちゃ」という試行錯誤が残されているバージョンなので。

新房　そうですね『魔法少女まどか☆マギカ』の本読み（シナリオ会議）はTV放送の2年前（2009年）ですからね、当時を思い出さないと。

虚淵　いやあ、当時のことはほとんど覚えていないですね。「0稿」から「初稿」にかけて大きく変わった部分は第六話の構成と、魔法少女の武器ぐらいですかね。魔法少女のバトル描写はそのころありませんでしたから。

――そもそも2年前、「0稿」をお書きになったときは、どんな状況だったのでしょうか。具体的なオーダーはあったのですか？

虚淵　まずこちらから最初に提案したのは「魔法少女が魔女になる」ということ、それくらいでしたね、その時点で企画のゴーサインが出たので、すぐに「構成案」を提出しました。

新房　その段階ではこちらは何も言わなかったと思います。「構成案」を読んではじめて「なるほど、こういう作品なんだな」と。思ったよりもバトルものじゃなかったことが意外でした。ただ構成がおもしろかったので「この方向性はアリだな」と思いましたね。

――「構成案」はどれくらい具体的だったんですか？

虚淵　その「構成案」は本当にざっくりとしたもので実際の話数ともずれていますから。当初は全13話で構成していたんですが、放送話数は全12話ですからね。

新房　最初は、虚淵さんのイメージから「バトルもの」になるのかな、と思っていました。知能戦になるとおもしろいかな、と。自分も以前、魔法少女ものだと『魔法少女リリカルなのは』を手掛けたことがあったので、それとは違う方向性に行きたいという気持ちがありました。

虚淵　「バトルロイヤル」「キャラクターが脱落する」というオーダーが、プロデューサーの岩上（敦宏・アニプレックスプロデューサー）さんからあったんです。そういう要素はすべて構成案に入っているので、おおむねこの時点で完成して

いたといってもいいですね。ゴールは決まっていたので、「0稿」のときは、ただひたすらゴールに向かって突っ走っていた感じです。途中で変更したことも、ほとんどなかったですね。

――じゃあ「魔法少女が魔女になる」というお題ひとつで、ここまで来たわけですか。

虚淵　そうですね。「魔法少女が魔女になる」「妖精さんが実は悪い奴」、そんなモチーフだけで0稿を書き始めています。

――虚淵さんにとって「魔法少女もの」はどんなイメージがありますか？

虚淵　一番ちゃんと見ていたのは『魔女っ子メグちゃん』かな。あとは『魔法使いサリー』。そのあとのアイドル系魔法少女は見ていませんでした。

新房　自分も一番見ていた魔法少女ものは『魔法使いサリー』でしたね。その他のアイドルの魔法少女シリーズは苦手でした。

虚淵　ああ、自分もあのあたりはすっぽ抜けています。アイドルに変身することは知っているんですが……。

新房　『魔法のプリンセス ミンキーモモ』は世のため、人のために尽くす魔法少女でしたよね。そういう目的がはっきりしている魔法少女はわかるんです。でも、アイドルに変身する魔法少女はどうもしっくりこなくて。

虚淵　魔法少女の活動というよりも芸能活動がメインですもんね。時代も感覚も違いますけど、それだったら『アイドルマスター』でいいじゃないかと（笑）。そのころ、自分は普通にロボットものばかり見ていましたからね。『機動戦士ガンダム』とか『装甲騎兵ボトムズ』とか。

――『美少女戦士セーラームーン』のような戦う魔法少女ものはご覧になっていましたか？

虚淵　道端で女の子たちが『セーラームーン』の真似ごとをしているのを見て、いまはこんなふうになっているんだな、と。「ああ、変わっちゃったね」と。『仮面ライダー』みたいになっちゃったなとは思っていました。

新房　自分は全然見ていないんですよ。

虚淵　新房監督が手がけられた『魔法少女リリカルなのは』は『セーラームーン』の流れがあったんですか？

新房　どうでしょうか。原作、シナリオの都築真紀さんにはそういう気分があったのかもしれない。自分からとらえると「魔法少女ものの『機動戦士ガンダム』」という感覚でした。

虚淵　ああ、なるほど。

新房　カラーリングも『ガンダム』的ですし。

虚淵　たしかに。『なのは』はメカニックの要素も大きかったですよね。

新房　『なのは』の構想を最初に聞いたときは「おもしろいな」と素直に思っていました。しかも、制服へのこだわりがありますよね。普段は制服を着ているんだけど、変身後も制服みたいなコスチュームを着るんです。都築さんは「それがいいんだ」っていうけれど、自分にはその部分は分からなかったんです。結果として、それが人気になりましたからね。都築さんの感覚はすごいと思っていました。

虚淵　キャラクターの記号性をはっきりと打ち出していたんでしょうね。

新房　魔法少女ものというと「戦うときはミニスカート姿に変身するものだ」という先入観があったから、「制服になる」という感覚はおもしろかったですね。

虚淵　『なのは』は長いスカートを着ていますもんね。

新房　都築さんの感覚が何歩も先を行っていたんだと思います。

虚淵　自分には都築さんのようなビジュアルの感覚がまったくないんですよ。『まどか』のときも映像に関しては、ほとんどイメージをしていないまま、シナリオを書いているんです。キャラクターの言動やセリフには明確なイメージがあるんですが、どんな服を着ているかまでは考えていませんでした。せいぜい、(暁美)ほむらは黒髪ロングだよね、とか。きっと変身するんだろうな、とか。そういう部分は想像していましたけど。

――じゃあ、本当に「魔法少女」については、そのくらいの感覚で……。

虚淵　「魔法少女もの」の知識としてはそこまでですね。基本的な要素として妖精がいるとか、そういうことは知っていたんです。でも、オーダーの点で「キャラクターが脱落するバトルロイヤルものの魔法少女」というだけで、十分に変ですよ(笑)。キャラクターデザイン原案は蒼樹うめさんだったし、何をするつもりなんだろう、と。こっちもよくわからないから、自分のペースで書きすすめていきました。

――インタビューなどで何度も聞かれていると思うのですが、あらためて各キャラクターの名前には、由来があるんですか？　主人公の「鹿目まどか」という名前にはいろいろな意味がありそうですが……。

虚淵　何もテーマはありませんでした。完全に思いつきです。「名字も名前っぽくしよう」という最低限の縛りはありました。でもそれすら、メインじゃないキャラクターでは、ルールになっていませんから。

新房　なんで「名前っぽい名字」にしたんですか？

虚淵　なんででしょうね。ちょっと特徴的な名前にしようと思っただけなんです。

新房　それくらいの肩の力が抜けた感じが良かったと思いま

す。どの作品も名前に変に意味を持たせていて、その結果として伝わらないことが多いですからね。

虚淵　ほむらの名字はかなり悩みました。クールなキャラクターなのに「暁美」で良いのか、と。意味としては逆なんだけど、ゴロがよかったので「暁美」にしよう、と。

新房　美樹さやかは、永井豪先生的なヒロインだなんて言われていますよね。

虚淵　あとから、視聴者の方々がそうやっていろいろな想像をするから、恐ろしくてしようがないです。

新房　おもしろいですよね。解釈によって、どんどん意味が膨らんでいくから。ほむらなんて、いまや「ほむほむ」なんて言われていますよね（笑）。

虚淵　まあ、実は何かの思し召しかもしれませんしね。本当に何がどう転ぶやら。

――『魔法少女まどか☆マギカ』というタイトルは、どなたがお考えになったのでしょうか？

虚淵　タイトルを決めたのは岩上（敦宏）プロデューサーですよね。タイトルを検討するときに、たくさんの候補があったんです。それで二転、三転して。その結果、最初に候補としてあがっていた『魔法少女まどか☆マギカ』にタイトルが決まったんです。自分が提案した仮タイトルの『魔法少女黙示録』はしょっぱなに消えたんですけど（笑）。こんなに内容がバレバレなのはどうか、と。

新房　「魔法少女」という肩書きはタイトルに入れたいと思っていたんです。でも『魔法少女○○』が決まらなかったんですよ。それでいろいろな意見が出ているうちに、岩上さんが『まどか☆マギカ』はどうだろうと言ってくださって。それですっきりと決まったんです。

虚淵　本当に「リリカル」というタイトルの偉大さを思い知りました。

新房　そうでしたね。

虚淵　『魔法少女リリカルなのは』を超えられる名前を付けようとしても、なかなか超えられませんね。

新房　「リリカル」というタイトルは原作の都築さんのアイデアだったと思うんですが、やはり印象が強いタイトルですよね。

虚淵　『魔法少女リリカルなのは』そのものの内容はあまり「リリカル」ってわけでもないんですけどね。ずっと戦っているし。

――「☆」をつけたのは岩上プロデューサーのアイデアですか？

新房　最初の案のころから「☆」がついていたと思います。

虚淵　こういうものは「☆」をつけるものなのかな、ぐらいの気持ちで。誰も疑問には持っていませんでしたよね。

――各話のタイトルは虚淵さんがお考えになったんですか？

虚淵　ええ、そうですね。……手抜きです（笑）。体裁を整えるために、毎『　』容がうかがい知れないけれど、印象的なセリフをピックアップしていたんです。そうしたら、いつの間にやら決定になっていました。

新房　あのタイトルで良かったですよ。

――今回の0稿は、どのタイミングで執筆に入られたのですか？

虚淵　構成案を提出したあと「じゃあ、これを13話の尺から、12話に調整してください」となって、そこから書き始めました。そもそも構成案を出したときの打ち合わせも、さらっとしていたんですよ。

――さらっととは？

虚淵　時間にして5分ぐらい打ち合わせをしただけでした。

新房　やはりシナリオにならないと判断できませんからね。すぐにシナリオをお願いしました。

虚淵　実際に書いてみると「構成案」に書いてなかった内容も多くなってしまって、各話ごとにかなり膨らませています。「構成案」はA4の用紙2枚くらいのボリュームでしたし、あらすじみたいなものでした。たとえば、仁美が恭介との関係性に割り込んでくるなんて展開はその時点ではないものでしたからね。「0稿」を書きながら「うーんどうしよう」と頭を悩ませていましたね。たとえば、恭介を奪う女の子をどうしよう……じゃあ、仁美にしちゃおう、という感じで。

新房　「構成案」のころは、まだ蒼樹さんのキャラクターも決定稿ではないころですからね。

虚淵　たしか、キャラクターの初期のイメージはありましたよ。髪の毛がくるくるじゃない巴マミやほむらの髪の毛がもっとシャープだったバージョンがありました。先にデータで絵だけいただいたんです。いくつかあるキャラクターのラフ画がある中で「じゃあ、この子は主人公にしましょう」「この子はほむらで」と選んでいった覚えがありますね。もしかしたら蒼樹さんはこれまでに書き溜めていたキャラクターのストックの中から出してくれたのかもしれませんが、こちらとしては、それがかわいかったので。その中で決めてしまいました。

――キャラクターの絵があると物語も変わりますか？

虚淵　うーん、そうですね。変わりましたね。主人公のまどかには「ひだまりスケッチ」のイメージが足されたような感じもあって、おかげでシナリオ上もかわいいキャラクターになったと思います。

――「構成案」から「0稿」を書くのはお時間かかりましたか？

虚淵　一気に書きましたね。書き終わるとボリュームがふくらみすぎているので、いつも「どこを削ろうか？」と頭を悩ましていました。数日にわけて書き続けて、その中で伏線を見つけては、物語に使えそうだと思ったら、それを活かして……と試行錯誤をしているあとが見えるはずです。

新房　伏線になるところって、予感がしませんか？

虚淵　しますね。だから、伏線になりそうな要素を捲くだけ捲いておいて、それであとから拾っていくような感じもありました。

――「0稿」と「決定稿」は細部の違いはあるものの、全体の構成としてはほぼ変わらないですね。

虚淵　そうですね。たとえば、第2話はほとんど変わっていません、第3話は容量的にいっぱいいっぱいだったので、削ったりしています。「0稿」と「決定稿」の一番の違いは尺（分量）の調整ですね。

新房　虚淵さんのシナリオは、行間が詰まっているので、かなりボリュームがあるんです。

――行間とは？

新房　ト書きひとつをとっても、すごくいろいろな意味が取れるんですよ。だから、そこに映像をつくっていくと結果、映像の密度が増していくんです。そういうところが、虚淵さんのシナリオのおもしろいところだと思います。シナリオはTV放送版ともセリフが違うわけです。絵コンテ作業や音響作業の中で、カットしたり、足したりしていますから。まあ「まどか」はかなりシナリオの要素を残しているほうですけど、とはいえちょっと違う。だから、虚淵さんの作品として、TV放送版と見比べながら楽しんでもらえればうれしいです。

第一話「夢の中で違った、ような……」

虚淵　ああ……、最初に書いた時点ではまだ、「ワルプルギスの夜」という名前が決まっていないころですね。ラスボス……くらいの気持ちしかありませんでした。まさかアニメーションになったときに、「ワルプルギスの夜」が空を飛ぶとは思っていませんでした。このあたりはコミカライズのハノカゲ先生版でも違いが顕著ですよね。ハノカゲ先生は魔女のデザインがまったくない状態でお描きになっていて、アニメーションが完成する前にシナリオの段階でコミカライズをしてくださったんです。だから、ハノカゲ先生版では「巨大な魔物」を具体的に描いていませんよね。

――まどかが目覚めて「夢オチ？」という導入は、第四話く

らいまで繰り返す構成ですよね。

虚淵　そうですね。フォーマットとしてお約束からはじめないといけないかな、と。最初はアバン（幕前芝居）をつけるつもりも、オープニングの入る部分も、それほど具体的にイメージしていなかったんですよ。だから、0稿ではアバンもあったりなかったり……。全話にアバンをつけようと統一したのは、ずいぶんあとですね。

新房　やはり魔法少女ものはアバンが必要だと思ったんですよ。このあたりはいわゆる王道のかたちですよね。

――母親（鹿目詢子）が強くて父親（鹿目知久）が優しい、ちょっと変わった家族や家庭環境の設定は最初からご用意されていたんですか？

虚淵　いや、全然。スタッフの皆さんにお話しする前から、こちらでいきなりお父さん、お母さん、弟を出してみたんです。みなさんから何か意見があるかなと思ったら、抵抗感なくOKをいただきました。お母さんがバリキャリで働いていて、お父さんが主夫的なポジションというのは、変化球にしてみようかと思っただけで、遊び心がスタートでした。のちのち意味を持つキャラクターになるかどうかは、この段階では手探りの状態ですね。そう思うと、のちのちお母さんはすごくクローズアップされましたよね。

――後半のエピソードまで、強いお母さんがまどかを支える重要なポジションを担っていると思います。

虚淵　ええ。ホン（シナリオ）を書き進めながら、どんどん肉付けをしていった感じですね。

新房　お母さんみたいなキャラクターはアニメーションとしても動かしやすいんですよ。

虚淵　方向性が決まっているキャラクターですからね。この人はこっちに行くだろうと、迷わず動かせる。

新房　芝居の方向性もはっきりしていますからね。演じてくださった声優の後藤邑子さんもしっかりハマっていたし。

――第一話には、お母さんとまどかの「リボン」をめぐるエピソードがありますよね。この時点から虚淵さんとしては、伏線を埋めておこうと？

虚淵　とんでもない。まどかのキャラクターラフを見たときにリボンが特徴的だったので、ここで触れておこうと。キャラクターの特徴を際立たせておこうと思いました。

――まどかとさやかの友人の仁美は、どんなところから誕生したキャラクターなんですか？

虚淵　0稿のときは、まどかとさやかが2人で通学するのはさびしいなと思って、新たに追加したキャラクターでした。それだけだとかわいそうなので、口調に変化をだして見まし

た。

——仁美は「ですわ」という口調ですね。そうやって話数を重ねるごとにキャラクターに肉付けしていく過程があるわけですね。まどかとさやかの会話など、少女らしい会話のイメージはどのようにふくらませていきましたか？

虚淵　中学生ぐらいの女の子はガチで百合っぽいと知り合いの女性から聞いていたんですよ。もちろん自分で見聞きしたわけじゃないんですが。少女のドキドキする感じを会話に混ぜようかなとは思っていました。

新房　登場人物を中学生にしようとおっしゃったのは岩上さんなんですよ。

虚淵　そうでしたっけ？　14歳という年齢感は最初の段階で決まっていましたよね。

新房　アニメのキャラクターの年齢ってどうもピンとこないんですよ。年齢感覚って見ている人によっても違うと思いますから。だから、異議をとなえることなく「じゃあ、それで行きましょう」と受け入れた覚えがあります。

——14歳という設定は、虚淵さんにとってイメージしやすい年齢ですか？

虚淵　書いていて、必然的に14歳っぽくなったような気がしましたね。小学生に殺し合いはさせたくないですし、16歳になると女性の要素が強くなってしまう。たとえば、16歳ならば子どもを生むかもしれないけど、14歳だったら子どもを産まないだろうと思うんです。そのあたりの感覚的な線引きが、14歳にはありましたね。

——本作では、14歳の殺伐とした世界観を描かなくちゃいけないわけですよね。

虚淵　子どもには殺し合いをさせたくないけれど、現実問題として戦場に目をやれば、14歳で銃を持っている少年少女がいるわけです。14歳で殺し合いをする現実も確実にある。おそらく14歳にまでなると「人の生き死に」まで考えることができるんじゃないかとは思っていました。12歳だと判断できない年齢なんじゃないかなとは思うんですけど。

——劇団イヌカレーさんが、魔女の異空間設計を担当されることは「0稿」の時点では想定されていないわけですよね。

虚淵　劇団イヌカレーさんが参加するとはつゆ知らずでしたから。でも、新房監督の『コゼットの肖像』を拝見していたので、魔法空間がどんなことになるのかを考えてはいたんです。まったく違う映像になるだろうと。

新房　たしかに『コゼット』みたいにしたいなとは思っていました。日常が蒼樹さんの絵でかわいらしくなるなら、それとは全然違う空間を描くことで、ひとつの見どころをつくっ

てみたいな、と。劇団イヌカレーさんにお願いできるとわかった段階で「これは変な空間になる」と確信ができましたね。劇団イヌカレーさんには作家として参加していただこうと思っていました。

虚淵　シナリオを書いている後半ぐらいには、徐々に劇団イヌカレー空間ができあがってきた印象がありますね。たしか後半は……ああ、でも「ワルプルギスの夜」は最後まで劇団イヌカレーさんの魔女デザインはなかったような気がします。シナリオを読めばわかると思いますが、第十一話で「薙ぎ払われた尻尾の一撃」なんて書いてありますからね。当時は「ワルプルギスの夜」をゴジラのようなイメージで書いていました。

新房　そうでしたね、虚淵さんには全部シナリオを書いていただいて、そのうえで劇団イヌカレーさんがデザインを進めていったんです。今思うと、そのやり方が良かったと思います。イヌカレーさんのデザインがあがってきてから、虚淵さんに全部のシナリオを書き直してもらっていたら、最終的に破綻してしまっていたかもしれないですね。

虚淵　そうですね。あまり打ち合わせをしすぎるとお互いの個性を打ち消し合ってしまうことがありますからね。

新房　シナリオ家が複数参加している場合は何度も打ち合わせをして、全体のバランスを取っていくこともあると思うんですが、今回は虚淵さんひとりに全話のシナリオをお願いしているわけですから。伏線の張り方を含めて、その脚本家の皮膚感覚があるわけで。そこを大事にしながらつくっていけたのは『まどか』の良かったところですね。

――虚淵さんや劇団イヌカレーさんの個性をいかしたつくり方をしていたわけですね。

新房　岩上プロデューサーの中では明確なイメージがあったんでしょうね。虚淵さんは『Fate/Zero』の原作者でもあるわけで、その方がひとりでシナリオを書いた『まどか』、その方の原作をアニメ化したアニメ版『Fata/Zero』と。そういう全体のプロデュースのスケジュールまで考えていたはずです。

――ある意味、虚淵さんという作家の見え方も、岩上さんがお考えになっていたわけですね。

虚淵　そうですね、２０１０年から２０１１年にかけてはうちの会社（ニトロプラス）はいろいろなアニメ作品を展開していて、そういう意味では自分もものすごくたくさん仕事をしていますから。

新房　すべてが同時期になるタイミングってあるんですよね。

虚淵　不思議なものです。

新房　こちらとしては虚淵さんにシナリオを書いていただいたのは２００９年ごろですから、アニメーション制作が本格

稼働するまで2年ぐらいの間が空いていたんですよね。最初に虚淵さんのシナリオを読んだときは高揚感があって、すごくイメージが沸いていたんですけど、2年の時間が経つうちにだんだん落ち着いてしまって。

虚淵　放送が決まるまでは待ち遠しかったですからね。

新房　まあ、そのクールダウンしたことで、落ち着いて作品に取り組むことができたのかもしれません。

――第一話のオンエア時は「エンディング曲なし」という構成になっていましたね。

新房　第一話でエンディングをつけたら、ネタバレになってしまうと思ったんです。そのころから第三話から流れるエンディングの映像をつくっていたので。

――第三話から流れるエンディング映像は『コゼット』でごいっしょされていた鈴木博文さんが演出・絵コンテを担当していますね。

新房　鈴木さんにはなるべく『まどか』の内容を知らずに、ビジュアルをつくって欲しかったんです。まあ、鈴木さんが自主的にいろいろ調べてくださって、あの映像に仕上がったみたいです。

――新房監督はスタッフに「内容を教えずに、つくらせる」ときがありますね。

新房　アニメーション制作とはどうしても予定調和になりがちで、そのままつくっていると普通の作品に仕上がってしまう。予想のつかない要素があったり、なるべくいろいろな方向性のものがまざっていたりするほうが、ちょっと変わった作品になるんです。

――予告編のセリフは虚淵さんがお書きになっていたんですか？

虚淵　アフレコの現場で自分と岩上さんが考えていました。収録が終わったあと、キャストさんに残っていただいて、予告編の収録をしていたんです。いやあ、アフレコ現場でいろいろなことが決まっていきましたね。

第二話「それはとっても嬉しいなって」

――第二話のシナリオは「0稿」と「決定稿」がほとんど変わっていませんね。

虚淵　第二話は説明をするエピソードなので、やらなくちゃいけないことがあらかじめ決まっているんですよ。だからいかに情報を詰め込んでいくか、あまり迷う余裕すらなかったです。

——第二話で説明と言うのは、いわゆるTVシリーズのアニメーションとしてはオーソドックスな展開ですよね。

虚淵　そうですね。自分は脚本家の先輩である黒田洋介さんから教えていただいたんです。第二話は説明として大事な話数だと。

——キュゥべえは神出鬼没、何を考えているのか分からない謎の生物ですが、第二話では朝風呂に入っていますね。

虚淵　人から姿が見えないということを伝えようと思っただけでそれ以上の意味はなかったんですよ。別に風呂じゃなくてもよかったんですけど。まあ、キュゥべえの「かわいいアピール」ができたのもここあたりまでしたね。

——この時点での仁美はまだコメディキャラクターのようですね。

虚淵　当初の役割はコメディキャラでしたからね、この時点では。妙に目立っていますね。

——マミさんの戦闘シーンは「魔銃を連射」とかなりざっくりと書いていますね。

虚淵　「マスケット銃を連射する」ト書きに書いておいたら、アニメのスタッフが「マスケット銃は単発です」とおっしゃって。結果として魔法で大量のマスケット銃を出現させるというカットに変えたんですよ。おかげで大迫力の戦闘シーンになりました。

新房　それで良いんですよ。それがアニメーションの共同作業のおもしろさなんです。第五話の杏子の槍もそうですよね。裏路地で槍を使って戦うと聞いて、長い槍だと戦いにくいから、多節棍に変えてしまった。「このシチュエーションをどうやって絵としてカッコよく描くことができるか?」という問題を投げかけてくれるシナリオは、アニメスタッフにとってもすごくうれしいんですよ。どんどんアイデアに乗っけていく過程は楽しいですよね。

——銃器を使う魔法少女というのも思いきっていますよね。

新房　銃器のデザインをどうすればいいのか。そもそも銃器だけで戦っていいのか。実際の作業をはじめるまではこちらも難しいところでした。

——有名なエピソードですがマミさんの「ティロ・フィナーレ」はアフレコ現場で生まれたとか。

虚淵　そうでしたね。シナリオをご覧になればわかりますが、マミさんの必殺技は「アルティマ・シュート」でした。アフレコ現場で「これでいいんですかねえ」と聞いたら、「できるなら、変えてほしい」と。アフレコ現場でパソコンを立ち上

げて、検索サイトと翻訳サイトを駆使して、語呂のいいことばを探したんです。

第三話「もう何も恐くない」

虚淵　第三話は、尺の問題が大きかったですね。シナリオの分量が多すぎたので、カットして、セリフを圧縮したんです。ここでひとつ事件を起こすというのは、最初の構成の段階から考えていたことですね。

新房　こちらもつくりながら、第三話の反応がどうなるかが心配でしたね。ただ、作品の内容自体はおもしろかったので、あとは反応次第でしたね。あとおもしろかったのは、第三話にもかかわらず、マミさんがこんなに人気になるとは思っていませんでしたね。

虚淵　これは意外でしたね。マミさんのセリフは次々と話題になりましたし、しまいにはゲームになるくらいですから(笑)。

――第三話でわかることは、まだ魔女と使い魔の関係性が明らかになっていないですね。

虚淵　そうですね。「0稿」のころに使い魔はいなくて、魔女だけがいました。でも、戦うたびにグリーフシードを落とされても過剰になるし、すべての魔女が元魔法少女というルールを順守すると、数的なつじつまが合わなくなってしまう。それで魔女とは別に、使い魔が分裂して増えていくというルールになったんです。

――カットされた部分で、残しておきたかったシーンはありますか?

新房　第三話の冒頭に戦闘を入れようと思っていたんです。劇団イヌカレーさんの魔女デザインもあったんですが、残念ながら尺に収まらなくてカットすることになってしまったんですよね。

虚淵　この話数はとにかくやらなくちゃいけないことが多くて、各キャラクターの心情をたっぷりと描いているので尺が足りなかったんです。

――マミさんが魔女に倒されてしまうシーンのト書きや描写を虚淵さんはどのように考えていましたか?

虚淵　あまりひどくしないでほしいと思って、描写をかなり絞り込んでいます。あまり残酷な目にあっている蒼樹さんのキャラクターは見たくはないですから。ただ、胸に矢が刺さって倒れるとか、そういう死に方だと、もしかしたらよみがえりそうなんですよ。もうこのキャラクターはこれっきり、二度とでてきませんよ、と。そういうことがわかる死に方を

して欲しかったんです。「誰を見ても死んだとわかる死に方」かつ、「不潔で下品でグロテスクではない死に方」にしようと思っていました。

新房　最初は、マミが噛み砕かれる音を、お菓子を食べるボリボリとした音にしようと思っていたんです。「お菓子の魔女」ですからね。でも、人が死んでしまうシーンにバカにしているように聞こえるので「あまりにもふざけすぎかな？」と思って撤回したんです。ダビング（音響編集）の場では、もっとエグイ音が用意されていて、その中から選択しなければならなかったんです。結論として、大人し目の音をつけることで想像をかきたてる演出にもなりました。

――じゃあ、マミさんが倒されるシーンは、想像力で考えるような演出の方向性だったんですね。

新房　子ども向けのアニメだったら、グロテスクなシーンであっても、ちゃんと痛みがわかるように描くべきだと思うんです。『まどか』は深夜アニメですし、たくさんの大人が最初に楽しむ作品だと思ったので、あえて描かずに想像力を刺激する演出にしました。

――おもしろいですね。「子ども向けの作品ほど、痛みがわかるように描くべき」だと思っていらっしゃるんですね。

虚淵　やはり、残酷なシーンを楽しんでいるつもりはないんです。もし子どもが見るような作品だったら、残酷なシーンでちゃんと痛みを感じてもらう方が教育的だと思いますね。

――しかし、あの「お菓子の魔女」はかわいかった。

虚淵　ははは。あれぞ劇団イヌカレーワールドでしょうね。すごく皮肉が効いていました。

新房　あの魔女の設定が泣かせるんですよ。だから、あの魔女が良いと思いました。

虚淵　マミさんはヘタを打ったわけではなくて、あの「お菓子の魔女」と相性が悪かったんです。たまたま、ああいう分身を出すような魔女に対しては、マミの一撃必殺の戦い方はダメだったんです。

――先ほど、第三話が心配だったとお話されていましたが、反響はいかがでしたか？

虚淵　好意的でしたね。みなさん、暖かく応援してくださいました。知り合いからは「第三話放送後はひだまらー（ひだまりスケッチファン）に狙われるから国外逃亡したほうがいい」なんて言われていたんですが、みなさん受け入れてくださいましたね。まあ、そもそも第一話から劇団イヌカレーワールドが広がり、梶浦由記さんの強烈な音楽が流れているんだから、視聴者も予想していたのではないかと思いますが。

新房　ほっとしました。

第四話「奇跡も、魔法も、あるんだよ」

――第四話では、第三話に収まらなかった上条くんとさやかのエピソードをこちらに移したんですね。

虚淵　第一話から第三話までが第1章だとすれば、第四話から第2章のはじまり。清く正しい「魔法少女もの」のふりをすることはやめて、いよいよ本質をむき出しにしています。やっぱりマミさんは魔法少女の象徴だったんですよ。お祭りキャラクターの彼女がいなくなることで、とうとう本領が発揮されるわけです。

――さやかは「幸せバカ」と自分のことを卑下しますよね。こういうギャップを描こうと思っていたんですか？

虚淵　さやかは明るいように見えて、重たい考え方をしている女の子というイメージがあったんです。自分が幸せであることに劣等感を持つ展開は、最初からこの作品でやってみたいと思っていました。

――キュゥべえの本領がこのあたりから明らかになっていきますね。一度、まどかたちの前から去っていったりして、世の中の人々の間では「できる営業マン」なんて言われていますが。

虚淵　キュゥべえは人間的な価値観を持っている生き物ではないんですよ。確定した裏設定ではないんですが、まどかの前から去っていったキュゥべえと、再び現れたキュゥべえが同一個体であるとは限らない。あいつらは群体で行動をしていて、思考を共有していますから。

新房　世間では「営業マン」なんて言われているとしたら、それは演出の力も大きいんでしょうね。スタッフはどちらかというと悪いキャラクターとして描こうとしていたから、そっちの気持ちが強く見えていたんだと思います。

――じゃあ、まどかが会話をしているキュゥべえは、もしかしたら毎回違う可能性がある？

虚淵　大いにありえますね。それどころか、まどかがキュゥべえと話している間に、別のキュゥべえがさやかと会話しているかもしれない。それは描かれていないので、分かりませんけどね。

新房　そういう意味では大局的に見ると、戦略があったのかもしれませんね。まどかの前から撤退したとしても、それはそれでかまわない、と。

虚淵　そうですね。キュゥべえから見たら、まどかの前から去ったという感覚もないかもしれない。単純に効率の問題のようでしたね。

――キュゥべえは倫理観がないわけじゃないんですよね？「魔法少女の契約を強制するのはルール違反」だと思っているようですし。

虚淵　そうです。キュゥべえという種族の倫理観はあるんです。

新房　このあたりからキュゥべえが悪いキャラクターみたいに描かれているんですが、やっぱりアフレコの反応が大きかったですよね。キュゥべえがセリフを言うと、キャストのみなさんが「キャーキャー」大騒ぎするんです。そういうリアクションを見ると、徐々に強調していきたくなるんですよ。

第五話「後悔なんて、あるわけない」

――第五話の決定稿とOAでは、さやかと杏子の戦闘シーンが変わっていますね。

虚淵　ここはアニメーションスタッフのアイデアで膨らんだシーンですね。

新房　さっきの槍が多節棍に変えたといったシーンですね。シナリオのト書きを見るとわかるんですけど、さやかと杏子が結界を張って戦うことにしたのは絵コンテのアイデアでした。主人公である以上、まどかには2人の戦いを止めて欲しかった。でも、生身の人間が魔法少女の戦いに割って入るわけにもいかない。そこで主人公が戦いに入れないように結界を張ったんですよ。

虚淵　さやかと杏子が戦っていて、ほむらが乱入してくるシーンは第五話に収まらず、第六話に移したんです。

――戦闘シーンのト書きにはかなり具体的なイメージがあったのでしょうか？

虚淵　いや、具体的な戦闘イメージはありませんでした。ただ、なんとなく杏子はさやかをボコボコに痛めつけると思っていたんです。ところが、アニメーションになったら、思いのほかさやかも反撃していて、良いバランスになっていましたね。

新房　あまり血まみれなさやかを描きたくなかったんです。

虚淵　おかげで、殺伐としすぎないところが良かったです。

――杏子のキャラクターはどんなところをキーワードにしていたんですか？

虚淵　マミさんの対比ですね。マミさんが退場したあとに、まったく方向性の違う魔法少女が出てくる。そういう立ち位置で杏子を書いていました。

——上条くんのバイオリン曲は「ラフマニノフのヴォカリーズ」など、かなり具体的に指示を出していますね。

虚淵　いや、かなり適当です。なんとなくイメージがふくらみそうな楽曲を選んでいました。

第六話「こんなの絶対おかしいよ」

——第六話は「0稿」から決定稿にかけて、1シーンまるまる削っていますね。

虚淵　学校の屋上でさやかとほむらが会話をするシーンですね。おそらく「0稿」と決定稿の一番大きな違いは、このシーンですね。

——カットした理由は……やはり尺ですか？

虚淵　そうでしたね。まあ、さやかとほむらがケンカをするシーンですからね。どんどんすれ違っていくのね、と。見ていて楽しいシーンかどうかわからなかったので、カットしても仕方がなかったかなと思います。

——物語は中盤になりました。いよいよ魔法少女の秘密が明かされますね。

新房　中盤戦の戦闘シーンは、もうほむらの能力を隠すのはやめようと思っていました。これは映像的に第十話の伏線になりますからね。

虚淵　あきらかに時間を止めていますし、実際に武器を取り出していますよね。

新房　やっぱり「時間を止める能力」というのは決して大ネタじゃないですからね。

虚淵　ドヤ顔で「時間を止められるんです！　すごいでしょ！」と言うほどのものじゃないですからね。

新房　だから段階を踏みながら、能力を見せて行こうと思ったんです。

第七話「本当の気持ちと向き合えますか？」

——第七話は「0稿」から決定稿にかけて、いくつか会話をカットしていますね。

虚淵　さやかのセリフが多かったので、だいぶ削っていた覚えがあります。やはり、第七話は杏子のセリフをなるべく活かしたかったので、そのあたりの調整をしています。セリフの優先度は明快だったので、カットするのに苦労した覚えはないんですが。

――第七話は杏子のエピソードですね。

新房　杏子を描くときに難しかったのは、さやかとの関係性ですね。最後に杏子がさやかのために戦うときに、見ている人が違和感を持たないようにバランスを取らなくちゃいけなかった。やっぱり全12話という話数は短いですから、「なんだ、いいやつじゃん」と思ってもらえるようにするには、うまく構成しないといけない。杏子そのものは、すごくわかりやすいキャラクターなので、すごく描きやすかったですけどね。

虚淵　不思議な人気の出たキャラクターでしたね。

新房　これはキャストの力も大きいと思います。『まどか』は全体的にキャスト陣の力が大きくて、まどかも、ほむらも、さやかも、杏子も、マミさんも、声優さんたちがキャラクターの魅力をふくらませてくれた印象があるんです。

虚淵　たしかに杏子の強がって悪がっているんだけど、本当は良いヤツ、というバランスはキャストのみなさんの力が大きいでしょうね。

――虚淵さんがシナリオを書くときは声のイメージをお持ちなんですか？

虚淵　いや、そんなに正確には考えていなかったです。杏子はもっと悪い奴の声のイメージがありました。だから、野中藍さんが演じることになったときは「そうきたか」と驚きましたね。

――虚淵さんはアフレコに立ち会って、その場でセリフを調整したそうですが、キャストのみなさんが声を入れることで、シナリオが変化した部分ってありますか？

虚淵　今回はほとんどありませんでした。過去に参加したアニメーションでは、声優さんの演技でセリフを変えたこともありましたよ。声優さんがここまで感情を込めてセリフを言うならば、説明ゼリフは少なくてもいいな、とか。今回はそういうセリフ直しがなかったということは、大分、アニメーションのシナリオの感覚がわかってきたということかもしれません。

新房　キャストさんのセリフというのは、すごく重要なんです。たとえば、映像としてスゴイシーンであったとしても、声優さんが「……すごい」と驚くセリフを入れてくれないと、視聴者に伝わらないかもしれない。美味しい料理を食べるシーンであっても「美味しい！」と言わなくちゃわからないですからね。「説明」になってしまうんだけど、それが自然であればなお良い。虚淵さんのシナリオには、そういった部分が自然と入っていたのが良かったですね。

第八話「あたしって、ほんとバカ」

虚淵　やっぱりテーマがはっきりとしたエピソードでしたからほぼ「決定稿」と変わっていません。このころになると不安がなくなってきたころです。最初のころはスタッフにシナリオを提出するときに「通るか、通らないか」不安だったんです。最初は「どれくらいの無茶」をいうと「止めて」と言われるか分からなくて。でも『まどか』はすんなりと「通る」んですよ。第八話ぐらいにもなると、だいぶ自信というか、プレッシャーから解放されている時期ですね。

――「止めて」欲しいと言われたことはありますか？

虚淵　第十一話でビルを崩したときぐらいですね。やっぱりビルを倒すのは作画が大変ですし、倒したからといって大迫力の映像になるとは限らないし。

新房　あまり「これは止めて」と言うと、せっかくのオリジナル作品なのに制約が増えてしまって、おもしろくなくなってしまうんですよね。

虚淵　そう新房監督がおっしゃってくれるので、こっちは書きたいように書いていました。

――なんとかなりそうという手ごたえがあったわけですね。

新房　もちろん、そのシナリオを現場が描き切れるかどうかはわからないんだけれど（笑）。やれるところまでは、やろうという気持ちでした。久保田（光俊）さん（制作会社シャフトのプロデューサー）がなにもいわないから大丈夫なのかな、と。

――第八話は仁美がいよいよ動く回でもありますね。

虚淵　当初、仁美は場をにぎわかすキャラクターのつもりでいたんですが、ここにきて、さやかを一番追い込むキャラクターへと成長していきました。まあ、ありえない話ではなかろうと思うんですよね。仁美たちはお年頃ですし。友人の好きな男子を、好きになってしまうということは珍しい話じゃない。仁美は悪意だけで動いているわけでもないんですよ。

新房　一部の人から見ると、仁美が「さやかに勝てると思って宣言している」と思っていた人もいたみたいですからね。男女の性別による、見え方の違いもあったかもしれません。

虚淵　自分としては仁美の潔さを描こうとしていたんですけど、まあ、中には「女ならではの戦略だ」とか「彼女なりに必勝の作戦だ」という人がいて。人によっていろいろな見え方があるもんだな、と。

――「まどか」は少女たちの物語ですが、シナリオを書くときに、女性の反応を意識していましたか？

虚淵　いや正直、女性から大きな反応をいただけると思っていなかったので、反応をしていただけること自体が意外でした。女性向けであるとか、百合みたいなことを意識してはいなかったので、嬉しい誤算ではありました。

第九話「そんなの、あたしが許さない」

虚淵　大きな流れとして、3話区切りでキャラクターの話を描いている印象があったんです。第一話から第三話が「マミさん編」、第四話から第六話までが「さやか編」、第七話から第九話までが「杏子編」、第十話から第十二話までが「ほむら編」ですね。

――では第九話は杏子編の最終話となりますね。

虚淵　杏子は結局「空気が読めない子」というか「同調はしても屈しない」というか、女の子らしからぬ一面が目立っているキャラクターなんです。おそらく、女の子ではなくて男の子のように見えるのは、この1点が大きいのかなと。「我が道を往くキャラクターにした」だけで、いきなりヒロインっぽくなくなるんですよ。

――第九話の杏子、さやかの最期などこのあたりになると名シーンが続出していますね。

新房　アニメのスタッフもこのあたりになるとやっと、まどかたちを描くのを楽しんでいたようですね。「シャフ度」と呼ばれている、まどかたちの振り向きのカットがありますが、あのカットを描くのは『まどか』のキャラクターデザインではすごく難しいんですよ。

――あの独特な傾きの振り向きカットは印象的でした。

新房　自分の監督作品では、かなり昔から採用している振り向きポーズなんですけど、『まどか』のころは「シャフ度」と呼ばれて話題になっていましたね。蒼樹先生のキャラクターデザインでは、こういう角度の振り向きポーズはすごく難しいんです。そこは総作画監督の岸田隆宏さんをはじめとするアニメーターたちにがんばっていただきました。

――なぜ、「シャフ度」の振り向きポーズを採用しているんですか？

新房　本来、普通の人間の立ち姿って、真っ直ぐではないんですよ。左右どちらかの足に重心が傾くもので。とくに女性キャラクターは、そういう角度になる。だから、昔から絵コンテに描いてきたんです。あるがままに女性を描いたら、こ

うなるんじゃないか、と。でも、演出の方や作画監督から理解を得られない作品もあって、この振り向きポーズをしていない作品もありました。こちらからすると、ずっと昔からやってきた手法なんですよ。とくに意識的にやっていたのは『Soul Taker～魂狩～』のころでした。

――第八話のさやか、第九話の杏子の振り向きも「シャフ度」でしたね。

新房　今回はいつもの演出として、女性キャラクターの振り向きポーズをやっていたんです。蒼樹さんのキャラクターだったから、それがすごく目立ったのかもしれません。

――蒼樹先生原作の『ひだまりスケッチ』では「シャフ度」はしていないですよね。

新房　それは蒼樹さんの原作に、そういうカットがないからです。『まどか』はオリジナル作品で虚淵さんのストーリーですから、こういうシーンやポーズもでてくる。第七話から第九話あたりでアニメーターたちも「こういう作画をするんだな」と理解をしてくれていたと思います。

第十話「もう誰にも頼らない」

――いよいよ力作の第十話です。

虚淵　このあたりから戦闘シーンを具体的に書くようにしているんです。アニメーションプロデューサーの岩城忠雄さんから、具体的に書いてほしいとオーダーがあって。「劇団イヌカレーさんのデザインもあることだし、戦闘シーンのネタを考えてもらえないか」と。

――第八話でほむらがキュゥべえを銃撃するときに「15発」、第十話ではほむらが魔女を撃つときに「5発」とシナリオ上でかなり明確な指示を出していますよね。

虚淵　ほむらが爆弾をつくるときに参考にしているウェブサイトとして「腹腹時計オンライン」なんて書いていますけど、スタッフに伝わるのだろうか、と。まあ、このあたりは勢いで書いていましたね。

――第十話はかなり濃厚なストーリーが展開されますね。

虚淵　そうですね。本当は2話分ぐらいあれば、ゆったりとできるんじゃないかと思いましたが、1話で納める構成にしたので。かなりがんばりました。最初に第十話のシナリオが書き終わったときは「シャフト」さんから「NG」が出ると思っていたんですよ。

新房　最初、第十話のシナリオを見たときに「どうやってつくったらいいんだろう」と途方に暮れつつも「あまりにもお

もしろすぎた」んです。やりきれるかどうかわからないけれど「OK」だと言ったんです。

虚淵　こちらとしては「ダメもと」で提出したんです。書き上がったけれど、どこをどう削ればいいかもわからないし。

新房　おもしろかった以上、このままつくるしかないですよ。『無事に完成して良かった』といまなら言えますね。

虚淵　いやー、まったくですよ。ありがたいかぎりです。

――アニメーション制作ではバンク（使い回しをするカット）という考え方があります。ループする世界をバンクで構成しようと考えたことはありませんでしたか？

虚淵　当然、ループしたときに、バンクで見せるだろうなとは考えていました。まさか劇団イヌカレーさんが新規の魔女を全部デザインしてくださるとは思っていなかったので。全部のデザインを見たときに、イヌカレーさんの気合いに驚きましたよ。

新房　バンクを多用すると、最近の視聴者に手抜きだと思われてしまうんです。だから、なるべくバンクを使わない作品にしようと思っていました。第一話と第十一話のアバンの「ワルプルギスの魔女」だけをバンクで使っていますが。

――第一話と第十一話の「ワルプルギスの魔女」は同じことに意味があるシーンですよね。

新房　そうですね。だから、BGMも同じにして。あえて繰り返しています。でも、最近はDVDやブルーレイで作品をご覧になるファンも多いですからね。そういう方からすると、同じシーンの使い回しはあまりうれしくないんでしょうね。

虚淵　難しいところですね。変身シーンや必殺技のシーンでバンクを使うのは、むしろ様式美の世界だと思っていたんですけどね。最近の視聴者のみなさんは厳しいなあ、と。

新房　予告編も同じ考え方ですね。各話の最後に、次の話のカットが挿入されることを、あまりありがたがる時代ではなくなってきましたね。今回の『まどか』では予告編を次話のカットを使わず、トリビュートイラストで構成したのは、バンクを使わなかったのと同じ理由です。DVDやブルーレイになったときに予告編は意味がないですから。

虚淵　だけどおかげさまで、すごく豪華な第十話になりました。

――ほむらはかなり過酷な運命を味わいますね。ほむらは何回も同じ時間軸を繰り返し、運命を乗り越えようとしますが、彼女のループ描写をどのように書こうと思っていましたか？

虚淵　当然、1話分の分量しか描写はできないわけなので、最低限のループ回数しか書けないんですよ。実際には、ほむらはもっとループしているんでしょうが、そこは自分自身も考えたこともないですね。

新房　何百回もループしたら、ほむらもおそらく年をとってしまうでしょうから。そのあたりは厳密にしていませんね。ただ、ここは一番おもしろいところなんですよ。だから、いつの日かアニメーションで描いてみたいと思っています。

虚淵　そうですね。ほむらの頭の良さから考えて、数千回もループしているとは思えないので、もっとループ回数は少ないでしょうね。ほどよい回数だと思っていただければ。

――虚淵さんのプロットには、このあたりの構成も入っているんですよね。

虚淵　ええ。ほむらは実は「メガネの残念な子だった」と(笑)。

――虚淵さんから見て、ほむらはどんなキャラクターだと思っていましたか?

虚淵　ほむらはイジメがいがあるなと思っていました。イジメることでキャラクター性が引き立つかな、と。

――第十話では「0稿」から決定稿にかけて、ほむらのトレーニングシーンがややカットされていますね。

虚淵　ほかに削るところが見当たらない、すごくタイトなシナリオだったんです。このほむらのトレーニングシーンなら、なんとかほかのシーンに影響せずにカットすることができるだろう、と。でも、ひさびさにマミさんがしゃべるシーンだったので、残したかったんですけどね。

――そうですね。マミさんのお姉さん的な魅力が発揮されるシーンでした。

虚淵　ここを全部カットしてしまうと、第十話ではキレて仲間を殺すマミさんだけになってしまうので、かなり大事なエピソードなんです。カットするのが本当に難しい話でした。

新房　マミさんというキャラクターはたくさんのブラックボックスがあって、描きどころが難しいキャラクターなんです。たとえば、第三話でマミさんはまどかを魔法少女に誘いますが、本当に何も知らなかったのか。それは謎なんですよ。何も知らないはずはないだろうし、でも、すべてを知っていて、まどかを誘うとは思えない。

虚淵　キュゥべえの知らない真実を知っていたかもしれませんよね。だからといって、すべての真相を知ると、第十話のバッドエンドみたいなことになるわけですしね。

新房　そのあたりも含めて、マミさんというキャラクターの魅力なんだと思います。

虚淵　本当に、ほむらは大変だったと思います。マミさんにすべてを教えると「みんな死ぬしかないじゃない!」とキレちゃうわけですから。きっとほむらは丁寧にマミさんには接していたんでしょうね。

第十一話「最後に残った道しるべ」

——第十一話は「0稿」から決定稿にかけて、ほぼ直しなしです。

虚淵　そうですね、直しはほとんどないです。

新房　シナリオを読んだ現場のスタッフが暴走して、とんでもないアクションシーンをつくりはじめたのは、こちらも驚きました。

虚淵　もう第十話のシナリオが「OK」をいただいた時点で、もうとことんやろうと。どんなフィルムになるのかは、想像がつかなかったです。

新房　現場のノリがすごかったです。

虚淵　第十一話〜第十二話は、第十話の大変さに比べたら、まだましだろうと。唯一、ビルが倒れるシーンだけは、事前にカットしましたけど。でも、こっちが指定していない武器がどんどん出てくるわ、アクションシーンは長くなるわ、とにかく圧倒されました。

新房　現場の盛り上がりは止められないですね。

虚淵　シナリオをご覧になればわかると思いますが、自分ではタンクローリーのところでアクションが終わりのつもりだったんです。

新房　タンクローリーの上に乗って走るなんて思ってもいなかったですよ。魔法の力でタンクローリーを走らせていることになっていますけど……。

——TV放送は、第十話、第十一話、第十二話と連続放送だったんですよね。

新房　唯一残念だったのがそこですね。第十一話のラストシーンは、一番盛り上がるシーンなんですよ。毎週放送して、次の話数を楽しみにして欲しかった。そこが心残りですね。

虚淵　たしかに。それは残念でした。

最終話「わたしの、最高の友達」

——虚淵さんは、こういった抽象的な結末を迎えることを最初から考えていたんですか？

虚淵　結末は最初から、こういうものを考えていました。「魔法少女」の話なのだから、「魔法っていいよね」と魔法を肯定するいう話になるだろうなと。

——文字通り「少女が魔法になってしまう」結末といっても良いですよね。

虚淵　奇跡の物語だから、奇跡の結末が起きるだろうという

ことですね。

新房　映像的にいうと『2001年宇宙の旅』や『伝説巨人イデオン』の影響下にあるものにしたいと思っていたんです。ただ、その2作の終わりを超えることは難しかったですね。技術的にはできるのかもしれないけれど。あの鮮烈なイメージを最初につくりあげた2作は本当にすごいとあらためて尊敬しました。

――虚淵さんはシナリオの段階で、絵的なイメージをお持ちだったんですか？

虚淵　かけらもないです。完全にアニメスタッフにお任せでした。ト書きに書いてある最低限度のことさえ描写してもらえれば、意味さえ伝わっていれば、あとは解釈してくれるだろう、と。自分もひどい脚本家だなと思いましたよ。でも、ここまできたら、シャフトのスタッフはやってくれるだろうと信頼していましたね。第十一話でラスボス戦、ラストバトルをやりきってしまったので、あとは魔法少女という存在と向かい合うしかなかった。アニメスタッフには大変なお仕事をお願いしてしまいました。

新房　もはや、最後までやりきれると良いなという気持ちしかありませんでした。アクションシーンは第十一話で終わっていたので、あとはいかに「美しくまとめるか」「視聴者のみなさんに良い結末を届けるか」ということだったので、瞬発力でまとめていきましたね。

――虚淵さんの最終話のシナリオの印象はいかがでしたか？

新房　実写のシナリオに近いのかもしれませんね。必要な用件だけが書いてあって、あとは現場のスタッフにまかせるというところが。

虚淵　結果的にそうなりましたね。

新房　自分としては、虚淵さんの小説と同じように楽しんでいました。ストーリーを読みこむおもしろさがありましたからね。

すべてを終えた、その時

――『まどか』のシナリオをあらためて読み直してみて、どんなご感想をお持ちですか？

虚淵　『まどか』は自分の予想以上の映像にしてもらったので、何も言うことはありませんでした。アニメーションの制作の現場において、シナリオはあくまで通過点なんですよ。だから、フィルムそのものが作品であって、フィルムが出来あがってしまえば、シナリオなんてなくなってしまってもいい。まあ、この本の存在を否定するような発言ですが（笑）。実際の料理を前にしたら、レシピなんて意味がない。レシピを

読んでもお腹はふくれませんから。たった、これだけのものが、あんなすごい映像になりました、と感じてもらえれば。アニメーションのおもしろさって、そういうことなんです。

新房　アニメーションは共同作業ですからね。虚淵さんのシナリオをどこまで映像として大きくしていけるか。このシナリオを読むことで、その違いがわかると思います。

虚淵　小説とは違って、シナリオはスタッフに伝達するためのメモみたいなものですから。あくまで自分の取り組み方は小説とは違うんです。そこを踏まえていただきつつ、この本が、フィルムをもう一度ご覧になるきっかけになればうれしいですね。

（2011年11月某日）

TVアニメーション
「魔法少女まどか☆マギカ」

2011年1月6日～3月10日(第一話～第十話)
2011年4月21日(第十話～十二話)
MBS・TBS系にて放送

第一話
夢の中で逢った、ような……
絵コンテ　芦野芳晴
作画監督　高橋美香　実原登　鳥山冬美
演出　向井雅浩

第二話
それはとっても嬉しいなって
絵コンテ　芦野芳晴
作画監督　江畑諒真
演出　宮本幸裕

第三話
もう何も恐くない
絵コンテ　芦野芳晴
作画監督　潮月一也　神谷智大
演出　八瀬祐樹

第四話
奇跡も、魔法も、あるんだよ
絵コンテ　笹木信作
作画監督　小関雅
演出　小俣真一

第五話
後悔なんて、あるわけない
絵コンテ　小俣真一
作画監督　本多美乃　松本麻友子　小菅和久
演出　間島崇寛

第六話
こんなの絶対おかしいよ
絵コンテ　笹木信作
作画監督　宮嶋仁志　福永純一
演出　浅利藤彰

第七話
本当の気持ちと向き合えますか?
絵コンテ　西田正義
作画監督　小林亮　かどともあき
演出　城所聖明

第八話
あたしって、ほんとバカ
絵コンテ　小俣真一
作画監督　近藤優次　松本朋之
演出　田畑喬

第九話
そんなの、あたしが許さない
絵コンテ　七嶋典子
作画監督　片山みゆき　半沢淳　関口雅浩
松本元気　潮月一也　岩崎安利　伊藤明彦
演出　向井雅浩

第十話
もう誰にも頼らない
絵コンテ　笹木信作
作画監督　伊藤良明　潮月一也
演出　八瀬祐樹

第十一話
最後に残った道しるべ
絵コンテ　伊藤智彦
作画監督　宮前真一　藤澤俊幸
演出　渡邊こと乃

第十二話
わたしの、最高の友達
絵コンテ　笹木信作
作画監督　谷口淳一郎　高橋美香
演出　宮本幸裕

「魔法少女まどか☆マギカ」スタッフ・キャスト

原作　Magica Quartet
監督　新房昭之
脚本　虚淵玄(ニトロプラス)
キャラクター原案　蒼樹うめ
キャラクターデザイン　岸田隆宏
シリーズディレクター　宮本幸裕
総作画監督　谷口淳一郎・高橋美香
アクションディレクター　阿部望・神谷智大
異空間設計　劇団イヌカレー
レイアウト設計　牧孝雄
美術監督　稲葉邦彦・金子雄司(～第六話)
　　内藤健(第七話～)
美術設定　大原盛仁
色彩設計　日比野仁・滝沢いづみ
ビジュアルエフェクト　酒井基
撮影監督　江藤慎一郎
編集　松原理恵
音響監督　鶴岡陽太
音響制作　楽音舎
音楽　梶浦由記
OPテーマ　「コネクト」ClariS
EDテーマ　「Magia」Kalafina
アニメーション制作　シャフト

鹿目まどか　悠木碧
暁美ほむら　斎藤千和
巴マミ　水橋かおり
美樹さやか　喜多村英梨
佐倉杏子　野中藍
志筑仁美　新谷良子

鹿目詢子　後藤邑子
鹿目知久　岩永哲也
早乙女和子　岩男潤子
上条恭介　吉田聖子

キュゥべえ　加藤英美里